ダイアン・フォーチュン作

タヴァナー博士の秘密

江口之隆訳

第一話　血淫症　三
第二話　盗まれた儀式書　三三
第三話　魔犬叫喚　六〇
第四話　走りまわる男　八八
第五話　牧神の娘　一一二
第六話　家主の話　一四八
第七話　ルネサンスの女　一八五
第八話　赤い花　二〇五
第九話　誘惑の海　二三七
第十話　反魂　二六三
第十一話　魔殿覆滅　二八八

第一話　血淫症

1

さて、私はこれから多くの実話を語ることになるのだが、はたしてタヴァナー博士がその主人公なのか、悪役なのか、いまだに決心がついていないのだから困りものだ。博士が私心なく理想に献身している件は疑いようのないところだが、その理想を実行する段になると、手口は実にあからさまになるのである。博士は法の抜け道など探さない。ただ無視するのみである。博士が症例を扱う手法は繊細を極めており、それ自体一種の実地教育とでもいえるのであるが、いよいよ応用となれば、その素晴らしい心理学的手法を用いて患者の魂をバラバラにしてしまう。それでいて、患者の治療に専念するとなれば、穏やかに秩序正しく善意をもって作業を遂行するのであった。

私とこの奇人の出会いかたは極めて単純なものであった。陸軍軍医連隊を除隊になったあと、私はとある医療機関紹介所に出向き、どこぞに空きはないか尋ねてみた。

私の台詞―「軍から離れたばかりで、神経がズタズタである。まともになるまで静かな場所で働きたい」

係官の台詞―「そりゃ、だれだってそうですぜ」

係官はふむふむとこっちを眺めていた。

「ここんとこ、うちのリストに載りっぱなしという場所があるんですけどね、一発いってみますか？いままで数人送りこんだけど、どれもつとまらずじまいで」

係官が医療王国の周旋屋なら、ハーレー街の医者連中は衛星国とでもいうしかない。ともあれ私はかのメディカル鳩小屋ともいうべき一角に送りこまれ、タヴァナー博士と出会った。彼が善人か悪人か、私にはわからない。ただ、これほど偉大な精神の持ち主に会ったことはかつてなかったと断言するだけである。

タヴァナーは細身長身という風采で、顔はまるで羊皮紙のようであった。何歳か知らないが、三十五から六十五の間であろう。一時間ほど会っているうちに、どっちにも見えた。彼は時間を無駄にせず、要点を切り出した。

「うちの療養院のために医療監督が欲しいのです」と博士。「陸軍においでになったのなら、ある程度の精神病の症例に通じてらっしゃると思っておりますよ。しかし、わたしの治療法は正統的なものとはずいぶんと異なるとお考えになるでしょうな。それが心配です。しかし、わたしは他人が失敗するとき、成功をおさめることもあります。それさえあれば、ローズ先生、実験を続ける大義名分もあろうというものじゃないですか。われらの同業者はたいていこれ以上の根拠を有しておらんですぞ」

この人物の冷笑的な物言いはかなり気に障った。しかし私には、現状に於いて心理的治療が厳密な科学ではないと断言はできなかった。すると私の心を読んだかのように、彼が言葉をついだ。

「わたしの興味の焦点は、正統的科学がいまだ探求する気もおこさない心理学的領域にあるのです。わたしとご一緒していただけるなら、先生は奇妙なものを目になさるでしょうが、当方の要求は単に開けた心と閉じた口だけですよ」

本能的なたじろぎはあったものの、私はこの件を了承した。彼には奇妙な魅力があったからだ。明らかな力量が感じられたし、野心的な研究も行おうとしているのであるから、疑心暗鬼ながらもついていってみようかという気にさせられたのだ。彼の異常なまでに刺激的な人格は、私の琴線に触れるところがあった。当面、実人生へのとっかかりを失った我が身にとって、恰好の刺激剤と思えたのである。

「荷造りに手間取らないのでしたら」と彼は言った、「わたしの車でうちまでお連れできますぞ。車庫までご一緒いただけるなら、まずお泊まりの場所にお送りしましょう。荷物をまとめて再び車に乗れば、日暮れ前にうちにつくでしょう」

私たちはかなりのスピードでポーツマスを下り、サースリーに到着した。すると驚いたことに、私の連れは右手に曲がりこんだのだ。大型乗用車にはかなりきつい道だったというのに、平気な顔で荒野の道を突っ切っていくのである。

「サースリーとは、もともとはトールのレイ、即ち雷の神の野原という意味なんですわ」と彼は言った。私たちの眼前には立ち枯れのヒースの野が広がっていた。「このあたりには古い信仰がまだ残っているのです」

「カトリックですか？」と私は尋ねた。

「カトリックなんぞは、先生、革新ですぞ。わたしは異教信仰のことを言っておったのです。このあたりの農夫たちはまだ古代儀式を断片的ながら保持しておるのです。幸運をもたらすとかなんとか、その手の迷信という形ですがね。本当の内的意味はわかっておらんのですよ」

彼はしばらく沈黙した。それから、やにわに私のほうを振り向くと、えらく強調して言ったものである。

「《知識》を持つ人間がその儀式を再構成するとなれば、どういうことが生じるか、お考えになられたことはおありですか？」

私としては考えたことはないと答えるしかなかった。正直なところ、私には太刀打ちのできない話題であった。しかし、彼が連れてきてくれたこの場所こそ、我が生涯のなかで訪れたもっとも非キリスト教的な場所であった。

しかし、彼の療養院が周囲の不毛な荒れ地と見事な対比をなしていたのは嬉しいかぎりであった。庭園は色彩に溢れ、蔦に覆われた屋敷はかなりくたびれているものの、外観同様に魅力溢れるものであった。私には、その様子がどことなく東洋を、またルネサンスを思わせたのであるが、しかし、形式上から見れば、共通点は豊かな配色と快適だけなのであった。

私はすぐに落ち着き、仕事にも慣れた。これがまた面白かった。前に書いたように、タヴァナーの仕事は通常の医学が終わった地点から始まるのである。私が手掛けた症例の中にも、普通の医師であれば癲狂院送りでけりをつける以外にないものも多かった。狂気としか思われないのである。しかしタヴァナーは一種独特の治療法を用いて魂とその薄暗い領域にある病根を明らかにし、患者の抱える悩みにまったく新しい光を当てていた。そして迫りくる邪悪な力から患者を救うこともしばしばであった。あの羊殺しの一件などは、タヴァナーの方法論を明らかにする好例であろう。

2

ある土砂降りの午後、療養院に近隣の人間が訪ねてきた。これは希有のことである。タヴァナーと彼のやり口は、かなり白眼視されていたからだ。訪問者である女性は、びしょ濡れのゴム引き合羽は脱いだものの、スカーフは緩めようとしなかった。さぞ暑いだろうに、この陽気のさなか、しっかりと首に巻いているのである。

「先生が心の病を専門としてらっしゃると承っております」とその女性は我が同僚に言った。「わたくしの悩みについてお聞きいただきたいのです」

タヴァナーは頷くと同時に、彼女の兆候に鋭く目を光らせていた。

「わたくしの友人に関することなのです—いえ、実のところ、フィアンセと呼んだほうがいいと思います。彼は婚約を解消しようと申しておりましたけど、わたくしはいやでした。気のない男を引き留めようというのではありません。あの人がいまでもわたくしのことを好いていてくれていると確信していますし、わたくしどもの間に、あの人が話してくれないなにかが起きたからだ、と思っているのです。

「正直に話してほしい、ともに悩みましょうと何度もせがんだのです。あの人がとても悩んでいるらしいことは、わたくしにはそれほどのものとは思えませんでした。でも、男の人は沽券だのなんだのと、強情を張るものでしょう？」彼女はほほ笑みながら私たちの顔を眺めた。女は自分の男のことをけっして大人とは思わないものである。恐らくその通りなのかもしれない。彼女は身を屈め、両手をしっかり握り締めた。「わたくしは謎の鍵が見つけたように思います。それがありうる話かどうか、お教えいただきたいのです」

「詳細をお聞かせ願えますか？」タヴァナーが言った。

彼女は要求されたところを明瞭かつ簡潔に語った。

「わたくしどもが婚約いたしましたのは、ドナルドが当地で訓練のために駐屯していたころです。もう五年近く前のことです。わたくしどもは大変うまくいっておりましたが、それはあの人が陸軍を除隊になるまでのことでした。わたくしども、みんな、あの人が変わったと気づきました。いつも通りにわたくしの家に来るには来るのですが、わたくしと二人きりになるのをいつも避けている模様なのです。昔はよく二人で荒野を散策したのに、最近はがんとしてそれを拒むようになりました。それから、なんの前触れもなく、手紙をよこしてきて、もう結婚できない、二度と会わないというのです。それに手紙に妙なことを書いていました。あの人が言うには、“ぼくが現れて、会ってくれと頼んでも、会わないようにしてくれ”と。

「家族はあの人がよその女に引っ掛かったと考えまして、わたくしを弄んだと怒り狂っておりましたが、わたくしはそれ以外になにかあると信じております。わたくしは手紙を出しました。でも返事は来ません。それでわたくしもすべて忘れようと決心しておりましたところ、あの人が突然現れたのです。ここで奇妙なことが起こりました。

「ある晩、うちで飼っている鶏たちが騒ぐ音がしました。狐が追い回しているのだと思いました。弟たちがゴルフクラブを手に外に出ていきまして、わたくしもあとに続きました。鶏小屋についてみると、数羽が喉を裂かれておりました。まるでドブネズミにやられたような傷でした。でも弟たちが発見したところ、鶏小屋の扉はむりやりこじあけられていたのです。これはドブネズミにはできません。ジプシーが鶏を盗もうとしていたのではと弟たちは言いまして、わたくしに家に戻るよう命じました。わたくしが潅木を抜けて戻っていると、誰かが突然わたくしの前に飛び出してきました。満月

に近かったですから、とても明るくて、それがドナルドだとはっきりわかりました。あの人が手を広げますので、わたくしも近寄りました。するとキスするかわりに、あの人は突然頭を下げまして―ご覧ください！」

彼女は首のスカーフを引きおろし、耳のすぐ下の皮膚についた青黒い半円形のあざを見せた。疑うべくもない人間の歯型である。

「頸静脈を狙ったと見える」タヴァナーが言った。「食い破られなくて良かったですな」

「わたくしは申しました、“ドナルド、なにする気？”と。その声でわれに帰ったらしく、あの人はわたくしを離しまして、薮のなかに駆け込んでいきました。弟たちがあとを追いましたが、つかまりませんでした。それ以来、わたくしどもはあの人を見ておりません」

「警察には通報なさったと思いますが？」とタヴァナー。

「父が通報いたしました。何者かが鶏を盗もうとした、でも正体はわからないと。おわかりいただけると存じますが、わたくしはドナルドを見たことを話しておりません」

「それで、あなたは荒野をひとりで歩きまわっていたということですか。彼が近くに潜んでいるかも知れないと思って」

彼女は頷いた。

「悪いことはいわない。それはおよしなさい、ミス・ウィンター。問題の人物は極めて危険な可能性が高い。特にあなたにとってはです。お宅まで車でお送りしましょう」

「あの人が発狂してしまったとお考えですか？　わたくしはまさにそう思っております。あの人も自分がおかしくなりつつあると思って、それで婚約を破棄したのでしょう。タヴァナー先生、あの人にしてあげられることはありましょうか？　ドナルドの場合は通常の発狂ではないように思うのです。うちには以前頭がおかしくなった女中がおりました。もうどこもおかしくなったのです。おわかりでしょう。でもドナルドは、あの人の一部分だけがおかしくなったみたいで、なんていうか、あの人の狂気は外側にあるみたいです。わたくしの言いたいことがおわかりでしょうか？」

「わたしにはですぞ、お嬢さん、あなたは心霊干渉の症例を実に明確に描写なさったように思えますな—まあ聖書の記された日々であれば、“悪魔憑き”と称された代物でしょう」とタヴァナー。

「あの人をお助けいただけるでしょうか？」娘は躍起になって尋ねた。

「彼をわたしのもとに連れてこられるなら、それはもう、いくらでもやれることはあるでしょう」

ハーレー街での次の診察日、到着してみるとドナルド・クレイギー大尉が予約していた。会ってみると、大尉は不思議な魅力を持つ人物であった—ひどく興奮しており、想像力豊かな芸術家タイプの

男である。普通のときに会えば恐らく愉快な男であろうが、診察室で机をはさんで会う分には、陰鬱な男でしかなかった。

「この件を洗いざらい吐き出したほうがいいと思うんですよ」と彼は言った。「鶏のことはベリルからお聞きになったと思いますが」

「あなたに噛みつかれかけたと言ってましたよ」

「ぼくが鶏を噛んだ話はしましたか？」

「いや」

「まあ、その、噛んだんですよ」

しばらく沈黙がその場を支配した。やがてタヴァナーが口を開いた。

「この問題が始まったのはいつからですか？」

「戦争神経症を患ってからです。塹壕からふっとばされましてね、それで心底震えあがっちまって。軽くすんだとは思ってたんですよ。入院十日だけでしたからね。でも、後遺症がこいつだと思います」

「きみは血を見るのが怖いタイプの人間かね？」

「特にそういうわけでもないです。そりゃ好きとは言えませんがね、我慢はできますよ。塹壕にいりゃ、慣れるしかないですよ。いつでも誰かが怪我してますしね」

「それに、死んでいる」とタヴァナーが口をはさんだ。

「そう、死んでます」と患者が言った。

「そこできみは血への渇望を抱くようになった」

「その通り」

「生焼けの肉とか、その類いかな？」

「いや、そんなんじゃ間に合わない。口にするのも恐ろしい話ですけどね、ぼくが気になるのは鮮血なんです。犠牲者の血管から噴き出す鮮血なんですよ」

「ああ！」とタヴァナーが言った。「それでこの件の色合いが変わってきたぞ」

「これより真っ暗になるとは思ってなかったんですが」

「逆ですな。いま語ってくれたことで、ずいぶんと見込みがでてきたと言えますぞ。きみのは、潜在意識の影響から生じる血への欲望というよりは、生命力への渇望というべきでしょう。これはまったくちがうですぞ」

クレイギーは素早く顔をあげた。「まさにそれです。これまでうまく口にできなかったんですが、先生、まさにおっしゃっていただいた」

わが同僚の明晰が患者に大いなる安心を与えたようであった。

「しばらくうちの療養院においでになって、わたしの個人監督下に入られるようお勧めします」とタヴァナーが言った。

「そうしたいですよ、本当に。でもそのまえにお知らせしておいたほうがいいことがあります。この件はぼくの性格に影響を及ぼしつつあるんです。最初それはぼくの外側にあったみたいなんですが、最近自分でもそれに応答しつつある。いや、進んで手助けしている。自分はやっかいに巻き込まれることなく、なんとかそいつの欲望をかなえさせてやろうとしているんです。そういうわけでウィンター家に行ったときに鶏小屋に入りこんだんですよ。抑制がきかなくなってベリルのところに行くのが怖かったんです。まあ、結局はそうなったんですから、たいして意味はなかったですね。本当のところを言えば、余計悪かったんじゃないかと思っています。あの衝動に負けて以来、“あれ”をずっと近く感じるようになりました。もう、こうなりゃ最善の手段は自分ごと破壊しちまうことでしょうが、それも解決にはならない。なんていうか―死んだあとで“あれ”と面を突き合わせるような気がして」

「療養院に来るにはなんの心配もいらんですぞ」とタヴァナーが行った。「わたしどもがお世話申しあげよう」

クレイギーが去ったあと、タヴァナーが私に言った。「ローズ先生、吸血鬼の話を聞いたことはおありか？」

「ええ、かなり」と私。「眠れないときはよく『ドラキュラ』を読んだものですがね」

「あれは」と博士は去り行く男のほうを顎で指した。「異常なほど見事な標本ですぞ」

「あんな胸がむかつくような患者をハインドヘッドまで連れていくつもりじゃないでしょうね」

「胸がむかついているわけじゃないですぞ、ローズ先生、あれは地下牢にとらわれた魂というべきでしょうな。魂自体もたいして感じのいい代物じゃないでしょうが、問題はその連れです。そいつを追い出してやれば、魂は自分できれいになるでしょう」

タヴァナーが「過ちは人の常」という金言に対して示す素晴らしい寛容と同情には、いつも驚かされたものである。

「人間性を観察すればするほど」と博士はかつて語ったことがある。「責める気が起きなくなるものだ。それがどれほど苦闘してきたか、わかるからだ。好きで過ちを犯す者はいない。二つの悪のうち、より邪悪でないほうを犯したと考えてやるべきだろう」

3

数日後、私は療養院の事務所に呼び出された。新患が来たので迎えて欲しいというのである。行ってみると、それはクレイギーであった。彼は玄関までは来るのだが、そこで足が止まってしまうのである。こういった状況下では、通例私がなすべきは権威的に叱りつけることなのだが、彼のまったく恥じ入る様子を目にすると、心を鬼にするのは無理だった。

「なんというか、自分が尻込みする馬に乗ってるみたいなんです」と彼は言った。「入りたいんですが、入れない」

私はタヴァナーを呼んだ。博士を見ると、患者も安心したようだった。

「ああ」と彼は言った。「これで自信がわきます。なんとか“あれ”を打ち負かせそうな気がする」そう言うと彼は身構えて、敷居をまたいだ。一旦なかに入ってしまうと、彼の心から重荷が降りたようであった。そして彼は療養院の日課にいそいそと従うようになった。ベリル・ウィンターは毎日といっていいくらいに顔を出し（家族には内緒）、クレイギーを元気づけていた。実際、彼は見る見るうちに回復していったのである。

ある朝、私が庭師と一緒に地所を散歩して、あれこれ改良点を相談していると、庭師が妙なことを言い出した。あとで思い出してみると、これは伏線だったのである。

「先生、もうドイツ軍の捕虜は送還されてもいいころじゃねえすか、ねえ？　ところが、まだうろついてやがる。昨晩、裏口のそばの小道ですれちがいやしたよ。あの汚い灰色軍服にもう一度お目にかかろうたぁ、夢にも思わなかった」

彼の反感には共感できるものがあった。彼自身、敵側の捕虜となったことがあり、そのときの記憶は決して忘れられないものだったのだ。

庭師の台詞はそのときこっきりで忘れていたのだが、数日後、患者の一人（婦人）がやってきて、こう言った。

「ローズ先生、除隊になった兵隊さんが職がなくて困ってるんですよ。なのにドイツの捕虜を庭番としてお雇いになるなんて、あんまりでしょう。先生はとほうもない非国民だと思います」

私としては、そんなことはないと婦人にうけあった。元捕虜の庭師の監督下では、ドイツ人は一日たりとも生存できないであろうと。

「でも先生、あたくし見ましたのよ。昨夜の門限のころ、温室の周囲に一人いましたわ」と彼女は言明した。「あの平たい帽子と灰色の軍服なら、だれだってそれとわかりますわよ」

私はこの件をタヴァナーに報告した。

「クレイギーに命令してくれ。いかなる理由があろうとも、日没後の外出を控えるように」と彼は言った。「それにミス・ウィンターにも、当面来ないほうがいいと」

二、三夜たって、私は食後に紙巻きをふかしながら敷地をうろついていて、潅木を急いで抜けていくクレイギーに会った。

「タヴァナー博士に追っ掛けられるぞ！」と私は彼の後ろから叫んだ。

「郵便を忘れたんですよ」と彼が答えた。「だから、郵便受けまで取りに行くんです」

翌晩もクレイギーが暗くなってから外に出ているのがわかった。私は説教してやった。

「いいかい、クレイギー」と私。「ここにいるのなら、規則は守ってもらおう。タヴァナー博士は、きみに日没後は室内にいるようにとおっしゃってる」

クレイギーは歯を剥き出して、犬のように唸ってきた。私は彼の腕をつかんで室内に連行し、タヴァナーに一件を報告した。

「化け物がふたたび彼に影響力を及ぼしだしたらしい」と博士。「単に隔離するだけでは、枯渇死させるのは無理と見える。別法を用いるしかないでしょう。今、クレイギーはどこにおりますかね」

「応接間でピアノを弾いてます」と私。

「なら、いまのうちに彼の部屋に行って、封印を解いておきますか」

階段の途中でタヴァナーはこう言った。「どうしてクレイギーが玄関のことろで駄々をこねたか、不思議に思わんでしたか？」

「別に注意も払わなかったです」と私。「精神病の分野ではよくあることでしょう」

「この屋敷にはですな、俗にいう“魔力”があるのですわ、ローズ先生。邪悪な霊体を排除する一種の心霊的ドームとでも言いますか、影響力の天蓋がかかっておるのです。クレイギーの憑きものは中に入ってこられなかったが、放置されるのはいやと見える。クレイギーを隔離しておけば、いずれそいつを枯渇死させられると考えておったのですが、なかなかどうして強力な支配力を持っておるらしいし、クレイギー自身がわざと協力しておるのだからお話しにならない。朱に交われば赤くなるですぞ、先生。あんな憑きものと交際して、自分が汚れないわけがない。ましてクレイギーは霊的に敏感なケルト人ときているのですわ」

部屋につくと、タヴァナーは窓に向かい、さんに指を置いて、なにかを拭い去るようなまねをした。

「これでよし」とタヴァナー。「これでやつは入ってこれるし、クレイギーを連れ出すこともできる。お手並み拝見だ」

扉のところで博士は立ち止まり、敷居の上に印を描いた。

「これは通過できないはずだ」と博士は言った。

事務室に戻ってみると、村の警官が面会を求めて待っていた。

「お宅の犬の動向に注意を払っていただければ、実に有り難いのですが」と警官が言った。「最近、この界隈で羊が殺される事件が多発しております。どんな動物の仕業かは判明しておりませんが、そいつの行動半径はここを中心として三マイル以内です」

「うちの犬はエアデールです」と私。「あれが下手人とは思えませんね。羊殺しをたしなむのはたいていコリーでしょう」

午後十一時消灯。われわれは患者を寝室に追い込んだ。タヴァナーの要請により、私は古服とゴム底テニス靴といういでたちに着替え、喫煙室にいる博士と合流した。この部屋はクレイギーの部屋の真下にある。われわれは明かりを消したまま、事件を待っていた。

「派手な立ち回りはご無用ですぞ、先生」とタヴァナーは言った。「ただ、追跡して、見届けていただきたい」

たいして待つ必要はなかった。十五分もたつと、蔦がガサガサいう音が聞こえてきて、クレイギーがぶらさがっていた。それから太いやつにつかまって体をゆらし、飛び下りた。彼が潅木のなかに消えていくと、私も部屋を抜け出し後を追った。

クレイギーはヒースの茂る道をフレンシャム方面へ犬のように駆けていった。

最初、私も走ったり、陰に身を潜めたり、いろいろと冒険まがいをやってみたが、すぐにこんな気配りは無用とわかった。クレイギーは自分のことだけで頭がいっぱいだったのである。私は彼に接近し、およそ六十ヤードの距離を保ったままついていった。

彼の歩調は振り子式といおうか、大股で緩急をつける走り方であり、どこかブラッドハウンドを思わせた。荒れ果てた土地が眼前に広がりはじめた。霧の帯がくぼみを満たし、ハインドヘッドの丘陵が星空を背景に浮かび上がっている。私は別に興奮していなかった。体格ではクレイギーにひけをとらないし、専門用語で“慰撫器”という道具で武装していたからである。これは長さ二フィートの鉛管を同寸のゴムパイプで包んだものである。一流の癲狂院では公式の備品とはされていないが、しばしば看護人のズボンのなかに発見される代物なのだ。

しかし、自分の相手がどういうやつかわかっていたなら、私も“慰撫器”なんぞにたいして信頼をおかなかっただろう。無知はしばしば勇気の代用品にもってこいである。

突如、前方のヒースの茂みから羊が一頭起き上がった。追跡劇が始まった。クレイギーが追っ掛ける。脅えた羊が逃げ回る。羊は短距離ならば驚くべき速力を出せるものだが、このかわいそうな毛むくじゃらの動物はやがて息を切らした。そこにクレイギーが走りより、周囲をぐるぐると回りながら、半径を縮めていった。羊はつまずき、ころび、膝をついた。クレイギーが襲いかかった。彼は羊の頭をつかむとのけぞらせ—そのとき月が雲に隠れたため、彼がナイフを使ったのかどうか、わからない。しかし闇のなかにほの光るものが見えた。闇のなかでもがくものと私のあいだを、なにやら半透明のものがすっと動いたものだ。月が雲間から覗くと、私にもはっきり見えた。それはドイツ陸軍の平たい帽子と灰色の軍服であった。

それを見たときの吐き気を覚えるほどの恐怖は筆舌に尽くしがたい。人間でないものが、一時的とはいいながら人間性を失ったものを手助けしているのである。

徐々に羊があがく力を失っていき、静かになった。クレイギーは背筋を伸ばし、立ち上がった。それからぴょんぴょん東のほうに跳ねていった。すぐ後ろには灰色の憑きものがくっついていた。

自分がどうして帰宅できたのか、いまでもわからない。なにがあっても後ろを振り返る気にはなれなかった。あれがすぐそばにいるような気がしたからだ。荒野を渡る風の息吹が自分の喉にかかる氷の指のように思われた。モミの木のしたを通れば、その枝が私につかみかかってくるような気がした。ヒースの茂みが盛り上がり、人の姿をとるような気がする。私は悪夢のなかを走っているみたいであった。いくら走ってもゴールがそれだけ遠ざかっていく。そのなかを必死で駆けるのである。

ついに私は月明かりに照らされた芝生に出た。家が見える。窓辺に立つ相手が誰だろうと構わずに、喫煙室に飛び込んだ。私はソファに身を投げ出し、顔を埋めた。

4

「ちっちっ」とタヴァナーが舌を鳴らした。「それほどひどいものとはね」

私は目撃したものを語ることすらできなかったが、博士はすべてを見通しているようだった。

「そのあと、クレイギーはどの方角に走りましたか？」博士が尋ねた。

「月の出の方角に」と私。

「それで、先生はフレンシャムに向かっておられた。となれば、彼はウィンター家に向かっていることになる。これはきわめて深刻ですぞ。後を追わねばなりますまい。もう遅いかもしれんが。わたしにご同道いただけますかな？」

博士がブランデーをグラス一杯ついでくれた。それからわれわれはガレージまで車を出しにいった。タヴァナーと一緒にいると心が安らいだ。博士が患者に与える安心感が理解できる。あの灰色の影の

正体が何物であろうとも、博士ならなんとかするだろう。この人物のそばにいれば安全だ。私はそう感じた。

ほどなくわれわれは目的地に近づきつつあった。

「ここらで車を降りたほうがいいでしょう」とタヴァナーが草の生えた脇道に入りながら言った。「できることなら、人を起こしたくないですからな」

われわれは露にしめった草の上を慎重に進み、ウィンター家の庭に隣接する厩舎に入った。柵で仕切られた向こう側は芝生の庭であり、ここからは家の正面を全部見渡せるし、その気になればテラスにすぐたどりつける。薔薇の蔓棚の影でわれわれは立ち止まった。月光に照らされ色を失った花々が、われわれの作業を嘲笑しているかのようだった。

われわれはしばらく待っていた。するとなにか動くものが自分の視界に入った。

背後にある牧場の向こうをなにかがゆっくり跳躍しながら移動している。それはなだらかな稜線をのぼり、家に向かってくる。やがてそれは左手の小さな雑木林に消えた。気のせいだったかもしれないが、そのすぐ後ろに一陣の霧が見えたように思えた。

われわれがその場にとどまっていると、ほどなく彼はふたたび回ってきた。しかし回転半径は小さくなっていた―明らかに家に接近しているのだ。三度目はすぐだった。彼はもはやわれわれとテラスのあいだにいた。

「急げ！　なんとか行く手をふさぐんだ！」タヴァナーがささやいた。「この次は蔦のところに来るぞ」

われわれは柵を乗り越え、芝生のうえを駆け出した。そのさなか、娘の姿が窓のひとつに現れた。ベリル・ウィンターであった。月光のなかはっきりと姿を現したタヴァナーが、人差し指をくちびるにあて、降りてこいと彼女に手招きした。

「かなり危ない真似をやりますぞ」と博士がささやいた。「しかし、あの娘さんは勇気がありそうだし、神経さえまいらなければ、なんとかあれを引き離せるだろう」

数秒後、彼女は裏口から抜け出し、寝巻にコートを羽織ったという姿でわれわれのもとに来た。

「非常に不快な仕事ですが、おやりになりますか？」とタヴァナーが彼女に尋ねた。「あなたが正気を保っておられるかぎり、お身の安全はわたしが保証いたしますが、取り乱したりすれば、非常に危ないのです」

「それはドナルドと関係があるのですか？」彼女が質問した。

「あります」とタヴァナーが答えた。「わたしは、彼にとり憑き、操ろうとしているものを除去できると思っていますよ」

「あたしもそれを見たんです」と彼女。「灰色の霧のかけらみたなもので、あの人の後ろに漂っているのです。それがもう、恐ろしい顔をしています。昨晩、それが窓のところにきました。顔だけなんです。ドナルドは家の回りをずっと走り回っていました」

「あなたはどうされました？」タヴァナーが尋ねた。

「別段、なにも。誰かに見られたら、あの人はきっと癲狂院に送られてしまうと思ったのです。そしたら、もう二度と回復の見込みはないでしょう」

タヴァナーは頷いた。

「まったき愛は恐怖に打ち勝つ」と博士は言った。「あなたは必要とされていることを実行できるでしょう」

博士はミス・ウィンターを月明かりのテラスに立たせた。

「クレイギーがあなたを見たら」とタヴァナー。「すぐに家の角を曲がって庭に逃げなさい。わたしとローズ先生がそこで待機しているから」

テラスから裏庭に続く狭い戸口があり、タヴァナーの命令で私がその陰に潜むことになった。

「やつが通りすぎようとしたら、羽交い締めをかけて、命がけで押さえ込んでいただきたい」と博士は言った。「ただし、なにがあっても噛みつかれないように。伝染しますからな」

各々部署につくかつかないうちに、跳ねる足音がふたたび聞こえてきた。今度はテラスを走っている。明らかに彼はミス・ウィンターの姿を目撃したらしい。忍び足が砂利を走る荒っぽい摩擦音と化し、娘が素早く裏庭に抜けてきて、タヴァナーの背後に隠れたからだ。彼女のすぐうしろにクレイギーが迫っていた。もう一ヤードでつかまっていただろう。しかし私はやつの両肘をとらえ、動きをとめてやった。しばらくわれわれは夜露に濡れた敷石の上を転げまわったが、私は昔取った杵柄とばかり、レスリングのフルネルソンをがっちりかけてやった。完全に決まったので、やつはもう動けなかった。

「さて」とタヴァナー。「クレイギーは先生が押さえてくだされば、こちらはもう一方の相手をしましょうか。だが、まずやるべきは、あれをクレイギーから引き離すことだ。さもないと、あれはふたたび彼のもとに舞い戻ってしまい、結果として彼はショック死するかもしれない。さて、ミス・ウィンター、出番ですぞ。お覚悟はよろしいか？」

「必要なことはなんでもいたします」と彼女が返答した。

タヴァナーは携帯用道具箱からメスを取り出すと、彼女の首の皮膚、耳の真下の箇所を少し切開した。血が一滴、月光のなかで黒ずむようにゆっくりと滲みでた。

「これが餌でして」と博士。「さあ、クレイギーに近づいて、化け物をおびき出しなさい。あとをついてこさせ、開けた場所まで引きずりだすのだ」

彼女が私たちのほうに接近してくると、クレイギーは私の腕のなかで野獣のようにもがきはじめた。するとなにか灰色の影のようなものが壁の暗がりから流れ出てきて、私の肘のあたりでしばらく漂っていた。ミス・ウィンターはさらに近づき、ほとんどそのなかに踏み込むところであった。

「近寄りすぎてはいかん」とタヴァナーが叫ぶと、彼女は立ち止まった。

そのとき、灰色の姿は決心したようだった。それはクレイギーからきれいに離れ、彼女のほうに進みでた。彼女はタヴァナーのほうに退いた。すると《憑きもの》は月光のなかに現れた。いまやはっきりと見えた。平たい帽子、革長靴。その高い顴骨と細い目が示すところ、生まれはヨーロッパの東南のはずれ、いまだ奇怪な種族が文明を拒み、奇怪な信仰を保っているあの場所である。

影のごとき姿は前方に漂いはじめ、娘を追って庭を横切った。それがクレイギーからおよそ二十ヤードほど離れたとき、タヴァナーが素早くその背後に回り、退路を断った。すぐにそれは振り向き、タヴァナーの存在を意識すると、いわば陣取り遊びがはじまった。タヴァナーはまえもって用意していた霊的な刺付き柵にそれを追い込もうとしていた。私には見えなかったが、霊力の柵は憑きものに

は明瞭に知覚できるようであった。あちらこちらと憑きものは逃亡を試みたが、タヴァナーがつねに先回りして行く手を阻み、とどめを刺すべく不可視の三角形の一角に追い込んでいった。

ついにゲームは終わった。タヴァナーが前方に跳躍した。《合図》と《音》があった。灰色の姿はこまのように回転をはじめた。その速度はどんどん上がり、最後には輪郭すら渦巻く霧のなかに消滅した。そしてそれは破砕された。憑きものの姿を構築していた分子が虚空に四散し、高速のために聞き取れぬほどの悲鳴を発しつつ、魂は定められた場所に赴いたのであった。

そのとき、なにかが立ちのぼったように思えた。庭は無限の恐怖をたたえた冷たい地獄から普段の暗い庭に変わり、樹木は脅かす触手たることを止め、壁のくぼみはもはや待ち伏せの暗窟ではなかった。それで私にもわかった。あの灰色の影は二度とふたたび暗黒から這いだして恐ろしい狩りをすることはないであろうと。

私はクレイギーを解放した。彼は足元にどさりと崩れおちた。ミス・ウィンターは父親を起こしに家に入り、タヴァナーと私は失神した男をなかに担ぎこんだ。

家族に対してタヴァナーがどれほど巧みな嘘をついたのか、私にはわからない。しかし数カ月後、われわれのもとに届けられたものは、ありきたりのウェディング・ケーキひとかけではなく、まるまるずっしりのフルサイズであった。花嫁からのメッセージでは、これを事務所の戸棚にしまっておく

ようにとのことであった。この戸棚が、奇人タヴァナーがわれわれに押しつける夜食の保管庫であることを、どうして彼女が知っていたのか、これまた謎であった。

こういった夜食のとき、私はクレイギーと憑きものの怪事件についてタヴァナーに質問してみた。長らく私はこの件に触れることができなかった—あの羊殺しの恐怖は思い出したくもなかったのだ。

「吸血鬼の話はご存じでしょうが」とタヴァナー。「あれが典型だったのですぞ。ここ百年ほど、ヨーロッパ、つまり西ヨーロッパではほとんど症例がなかったのですが、戦争のためにまた流行りだして、以来かなりの数の症例報告があります。

「最初のころは—つまり、どこぞの変質者が負傷兵を襲っている現場を押さえられたとき、軍はそいつを後方に送って銃殺にしたのですな。これは吸血鬼退治としては不十分な方法でしてね、もう一段手間をかけて死体を焼却しなけりゃいかん。これこそは古き良き日々の黒魔術師処理法なんですわ。それからわれわれの文明開化の時代になり、吸血行為は犯罪ではなく病気であるとの結論が出て、このおぞましい妄想に囚われた不幸な個人を癲狂院にぶちこむようになりました。入院してしまえば、お好みの滋養分の供給がカットされるわけだから、たいして長生きはできんです。しかしここに他の要因がからんでいることに気がつく者はまったくいなかった—本当に治療すべきは死者と生者のおぞましい関係だったのですわ」

「いったい、なんの話なんですか？」私は尋ねた。

「知っての通り、われわれには二個の物理的体がある」とタヴァナーが言った。「濃密な物質的肉体、これはみんなよく知っておりますね。そして微細なエーテル体。エーテル体は濃密体のなかに宿っており、生命力の媒体となっている。お偉い科学者先生がたも、ここらの機能を本気で調べれば、いろいろと謎が説き明かされるでしょうに、惜しいことだ。人間が死亡すると、魂を宿したエーテル体が近所を三日ほどさまよいますな。あるいは肉体の腐敗分解が始まるまでです。それから魂がエーテル体から引き出されて、今度はエーテル体が死ぬ番です。かくして人間は死後存在の第一局面、俗にいう煉獄的なものに入るわけです。

「さて、エーテル体というやつは、生気の供給を続ければ、ほぼ無限にもつものですが、なにせ食物を消化してエネルギーに変換する胃腸がない。そこで他人にたかるわけです。行き着く果ては霊的寄生虫、これがつまりわれわれの言う吸血鬼ですわ。

「東ヨーロッパのほうでは、黒魔術の実践知識が豊富に伝わっておるのですよ。さて、この種の知識を有する個人が射殺されたとしましょう。彼は三日後、エーテル体が死んでしまえば、生前の所業の清算に直面しなければならないことを知っている。自分のやったことを思えば、まあ直面したくないわけです。そこで彼はまだ肉体を有している誰かの潜在意識と関係を持とうとする。これは、そういう恰好の相手が見つかればという条件次第ですがね。非常に積極的な性格の人間は役に立たない。消極的なタイプ、いわば低級な霊媒タイプを見つける必要があるのです。だから訓練不足の霊媒行為は危ないのですわ。さて、たとえば戦争神経症のために、一時的にそういった消極的精神状態になる場合もあります。するとですぞ、今われわれが問題にしている魂が、本来ならばずっと高級な魂に影

響力を持ち得るケースも出てくるのです。つまり、クレイギーがそのケースでしょう。ろくでもないやつが、クレイギーを自己充足の手段として使っていたのですわ」

「しかし、その化け物はどうしてクレイギーだけにしておかなかったんでしょう？　どうしてまた他人を襲ったのですか？」

「そりゃ、クレイギーだけを吸っていれば、一週間ももたないからですよ。クレイギーが死んでしまえば、やつは新たに乗り物をさがさなければならない。しかも補充なしで。それよりか、クレイギーを通じて餌を漁るほうがずっと気がきいている。クレイギーに他人を襲わせ、獲物はこっちがいただくという寸法ですな。だからクレイギーは血の渇望ではなくて、生気の渇望を覚えていたわけです。犠牲者の鮮血というものは、生気を吸収する手段ではありますがね」

「すると、われわれ全員が見たあのドイツ兵は―？」

「つまり死に方の足りない死体だったのですよ」

（終）

第二話　盗まれた儀式書

季節の変わり目、ある一定の時刻になると、タヴァナーは自己催眠をかけるのが年中行事だった。博士はこの作業を《潜在意識行》と呼んでおり、精神集中という手段を通じて、注意の焦点を外界から思念界へと移すのだと言い張っていた。こうして到達したさまざまな意識レヴェルや、その場での作業のことを、博士は眠ったまま何時間も語るのである。おかげで私も、この異常な実験のさなかで博士がどのレヴェルを通過しているのか、識別できるようになった。

毎晩私は同僚の無意識の肉体のそばで見張りをつとめていた。博士の肉体は横になったまま時折ピクピク震え、彼のものでない思考が受動神経に影響を及ぼしている。多くの人々がテレパシー的手段で意志伝達を行っているが、この力がこれほど広範囲に作用するなど、タヴァナー博士の肉体受信機を見るまで、私には想像もつかなかった。

ある晩、博士がコーヒーを飲んでいるとき（この術を行ったあと、博士はつねに骨の髄まで凍えているから、私がコーヒーを入れてやるのである）、彼はこう言った。「ローズ先生、実に奇妙なことがありましてね」

私はなんのことか尋ねた。

「はっきりしたことはわからないが」と博士。「どうも腑に落ちないことが起きておるのですよ。それで調査を手伝っていただきたい」

私は助力を約束し、問題の性質を質問した。

「うちに来ていただいたとき、お話ししたように」と博士。「わたしはとある魔術結社の一員です。しかしその件にはそれ以上触れませんでした。触れてはいけないという誓いがありますのでね。しかし、共同作業となれば話は別でしょう。わたしは自分の裁量である程度ご説明申し上げたく思うのですわ。

「ご存じのように、われわれは作業に於いて儀式を使用しております。先生がお考えになるほど無意味なものではありませんぞ。儀式というものは精神に多大な影響を与えるものです。感受性の高い人間ならだれでも、魔術儀式が行われる際に発せられる振動を感知できます。たとえば、わたしはちょっと心のなかに耳をすますだけで、ラサのロッジがおぞましい儀式をやっているかどうか、すぐに判断できますわ。

「たったいま潜在意識にもぐっておったとき、わたしはうちの《団》の儀式が行われている模様を耳にしました。しかし、そのやりかたがなんというか、うちの《団》のいかなるロッジでもやらないような代物なんですな。子供が一本指でチャイコフスキーを弾いているみたいといいましょうか。まあ、わたしの推測するところ、免許を持たぬ何者かが問題の儀式を入手して、実験しておるのでしょう」

「だれかが誓いを破って、秘密を漏洩したんですね」と私。

「明らかにそれですな」とタヴァナー。「そうそうあることではないが、皆無というわけでもないのです。もしあの儀式が《黒魔団》の手に落ちようものなら、やつらは利用法を知っておりますから、これは問題ですぞ。ああいった古い儀式には大変な力があります。われわれが参入させた選ばれた少数者の手にあるうちは安全ですが、あのろくでもない連中の手に渡れば、これはことですよ」

「では、追跡するんですね」と私。

「いかにも」とタヴァナー。「しかし言うは安しですな。まったく手掛かりがないのです。できることといえば、ロッジに回状をまわして、書庫から儀式文書がなくなっていないか確かめることくらいでしょう。ともかくも、それで捜査範囲が狭まりますわ」

タヴァナーが郵便を使ったのか、それとも独自の通信手段に訴えたのか、私にはわからない。しかし数日で博士は必要な情報を得ていたのである。各ロッジが大事な儀式が紛失したことはないそうだが、本部の記録を調べているうちに、はるか中世にフィレンツェのロッジで儀式書が盗まれたことがあると判明した。盗んだのは書庫の管理人であり、それをメディチ家に売り飛ばした（と信じられている）。いずれにせよ、十五世紀後半にフィレンツェでこの儀式が行われていたという。フィレンツェに仏軍が侵入し、メディチ家が蔵書もろとも四散したあと、問題の儀式書がどうなったのか、誰も知らないらしい。おそらく焼失したものと信じられて今に至ったのだという。しかし、幾世紀も過ぎてのち、誰かがその驚異の力を目覚めさせつつあるのだ。

数日後、私たちがハーレー街を通っていたとき、タヴァナーがメリルボーン・レーンへ寄り道してもいいかと言った。古本屋に顔を出したいという。問題の古本屋はウィーダの駄作や月遅れの宗教雑誌が雑然と並べられたむさ苦しい場所であった。しかし、店番の小僧があわてて店主を呼びにいったところを見ると、タヴァナーはここの上得意客らしい。彼のような人種がこんな店を贔屓にしていようとは、正直いって驚かされた。

現れいでた店主ときた日には、店以上の珍物だった。信じられないほど埃まみれ、フロック・コートも髭も顔も灰緑一色であるが、口の聞き方は教養人のそれである。そしてタヴァナーが対等に話しかけているにもかかわらず、店主は目上に対するときの口調で答えていた。

「お願いしておいた広告になにか返事はありましたかね？」とタヴァナーが眼前の中間色の人物に尋ねた。

「まだありません。しかし、お知らせできることはございます—あの文書をお求めになりたい方は、あなたさまだけではない模様です」

「というと、誰が—？」

「ウィリアムスなる人物ですが」

「それだけじゃわからんね」

「消印はチェルシーでございました」と老古書店主が意味深な顔つきで答えた。

「なるほど！」と私の雇用主が答えた。「もしあの文書が市場に出ることがあれば、金に糸目はつけないよ。なんとしても手にいれてくれたまえ」

「どうやらちょっと騒ぎが起こりそうですぞ」とタヴァナーが店主の深々としたお辞儀に送り出されながら私に言った。「チェルシーの《黒魔団》も、わたし同様あの儀式を聞きつけていたんですな。それであれこれ走りまわりだしたらしい」

「では、現在その儀式を押さえているのは、チェルシーの連中ではないと」

「そう思われます」とタヴァナー、「あの連中なら、もっとましにやるでしょう。道徳に関していろいろ言われている連中ですが、けっして馬鹿じゃないし、自分たちのやってることくらいわかる連中ですよ。そう、あの儀式を入手したのは、頭の足りないオカルトマニアかグループでしょうな。儀式だということはわかる程度の知識しか持ち合わせず、なにが起きるかやってみようと遊んでおるのですよ。おそらく、本当になにか起きたなら、当人が一番驚愕するでしょう。

「儀式がこういった馬鹿どもの手にあるうちは、わたしも心配することはないのです。しかし、それが真の利用法と悪用法を知っている連中の手に落ちようものなら、その結末は先生の想像をはるかに越える大惨事ですぞ。そんな事態になろうものなら、文明の方向すら影響を受けるとまで言ってもいいくらいですわ」

タヴァナーが大いに動揺しているのは私にもわかった。博士は混雑した道路にかまわず突っ込んでいき、一直線に医院へ向かっていった。

「あの文書を手にいれられるのなら、いくら金をかけてもかまわない。売らないというのなら、盗むことさえ厭わないですぞ。しかし、どうやって所在を突きとめればよいやら」

私たちはふたたび診察室にたどりついた。タヴァナーは大股で部屋をうろうろしていた。ほどなく彼は電話を取り、ハインドヘッドの療養院を呼び出すと、婦長の中年婦人に今夜はロンドン泊になると告げた。タヴァナーのロンドン本部であるハーレー街の診察室には寝具の用意がなかったから、おそらく徹夜だなと私は考えていた。

私はこのころになると、この種の夜勤にはかなり慣れていた。私の役目はタヴァナーの空っぽの肉体を見張ることである。その間に博士の魂は外宇宙の暗黒を飛翔し、不思議な冒険をしたり、仲間と話し合ったりする—やはりタヴァナー同様、肉体を離れて星の旅をすることができる人間や、あるいは数世紀も前に死去しながら、いまだ人類の福祉に手を貸している者たちと意見交換するのである。

私たちはソーホーの外れの裏通りにある小さなレストランで食事をした。ここの給仕頭は食事の間をぬってタヴァナーと形而上学をイタリア語で論じあうのである。それからハーレー街に戻り、大都会が寝静まるまで待機する。夜の静寂とともに私たちの作業に適した時刻が到来する。タヴァナーがころやよしと見たのは真夜中過ぎであった。彼は巨大な診察用長椅子に身を横たえ、私は彼の足元に陣取った。

数分で博士は眠ったが、そのまま観察していると、寝息が変化していった。やがて睡眠からトランスへと移行していく。博士の前世の断片的記憶を示す言葉が数語つぶやかれ、続いてシュウシュウという低音が次段階への移行を示した。いまや博士が、オカルティストたちがテレパシーによって相互意志伝達を行う意識周波数帯域に到達したことがわかる。それはまさに無線を“傍受”しているようなものだった。深夜、ロッジがロッジを呼び出し、受動的脳髄が波動を拾っては声に変換してタヴァナーがしゃべるのである。

しかし、錯綜した通信は文章の中途でカットされてしまった。これは今夜のタヴァナーが用がある帯域ではなかったのだ。ふたたびシュウシュウという音が発せられ、博士はさらに深い催眠状態へ沈んでいった。室内は死んだように静まりかえった。やがてタヴァナーのものでない声が静寂を破った。

「《記録》帯域」とその声が言った。それで私にもタヴァナーの意図がわかった。人類そのものの潜在意識を調べることで、儀式文書の行方を突き止めようなどという途方もない計画を、タヴァナー以外の誰が思いつくというのだ。個人のあらゆる思想と行動の記憶はその潜在意識に蓄積されている—ここまでは一般の心理学者も同意するところであるが、タヴァナーはさらに進んで、その記録が《自然》の精神にも蓄積されるという見解を採る。そして博士が読み取ろうとしているのはこの記録だったのである。

文章、数字、人名などが断片的に無意識の博士の口をついてでた。やがて彼は目標に焦点をはっきり合わせた。

「イル・チンクェチェント、フィレンツェ、イタリア、ピエロ・デラ・コスタ」という低音の声が響いた。それから電話の呼び出し音とチェロの中間音のような長いヴィブラート音が続き、声が変わった。

「英国、ロンドン、一八九八年、十一月十四日、二時四十五分」

しばらく沈黙があったが、すぐにタヴァナーの声が割って入った。

「ピエロ・デラ・コスタを頼む。一八九八年十一月十四日二時四十五分出生」

沈黙。それからタヴァナーの声がふたたび電話でもかけているみたいに聞こえてきた。「もしもし！ もしもし！ もしもし！」。明らかに彼は応答を得たらしい。口調が変わったのである。「そう、こちら7＝4」

ここで彼の声は尋常ならざる威厳を帯び、命令調になった。

「兄弟よ、汝に託されし儀式は何処にありや？」

どういう答えがあったのか、私にはわからなかった。しかし若干の沈黙ののち、タヴァナーが再び口を開いた。「兄弟よ、汝贖罪をなすべし、儀式をもとの場所に返すべし」。それから博士は寝返りをうち、トランスから通常睡眠へ移行し、覚醒に向かった。

眩惑と悪寒を覚えつつ博士は意識を回復した。私は魔法罎からホットコーヒー（この種の残業の必需品）をついでやった。私がトランス時の出来事をもう一度語ってやると、博士は湯気立つコーヒーをすすりながら満足げに頷いた。

「ピエロ・デラ・コスタがどうやって任務を達成するか、興味がありますな」と博士が言った。「現在の人格はおそらくなにを要求されているか、かけらもわからないだろうが、突出する潜在意識にやたらとせっつかれることになるんだから」

「どうやって儀式文書の位置を突きとめるんでしょうね？」と私が聞いた。「先生ができないということを、どうしてそいつができるんですか？」

「わたしがうまくいかなかったのは、ただの一度も問題の文書と接触がなかったからですわ。それが盗まれたころ、わたしは転生していなかったし、また民族記憶を利用しようとしても、民族がちがうのだから利用できるわけがない。とにかく、とっかかりがなければお話しにならんでしょう。いかに魔術といえども、杖を振ればどうにかなるってものでもないのですぞ」

「現在のピエロはどうするんでしょうか？」私は尋ねた。

「現在のピエロはなにもしないでしょうな」とタヴァナー。「どうしていいかもわからんのですから。しかし彼の潜在意識は修行を積んだ魔術師のものですから、わたしが与えた刺激で動きはじめる

のです。おそらく儀式文書がメディチ家に渡されたころまでさかのぼり、それから民族記憶を、つまり《自然》の潜在意識をさまよいながら歴史を下ってくるでしょう」

「それで、彼はどうやって文書を取り戻すのでしょう？」

「潜在意識が獲物の位置を突きとめたなら、顕在意識のほうに衝動を伝えて肉体に文書奪還を命じるわけです。ゆえに現在の若者のほうはきわめて当惑しつつも、自分が厄介な状況に追い込まれたことを知るでしょうな」

「彼が文書を見つけたとしますよ。すると彼はその使用法がわかるのですか？」

「“ひとたび参入者となれば、つねに参入者”という格言があります。困難や危機に直面するたびに、秘儀参入者は師を頼むものです。青年は魂のどこかで緊急連絡信号を発信し、元来の《団》に連れもどされるわけですわ。遅かれ早かれ彼は《兄弟》の一人と遭遇する。その《兄弟》が彼をどうすればよいか知っておるという具合ですな」

ようやく夜仕事も終わり、やれやれとばかりに私はソファに寝そべり、掃除婦が現れるまで数時間眠るつもりだった。しかしタヴァナーにとっては、“潜在意識行”は常に強壮剤の効果があるらしく、いつもながらに元気一杯で、ロンドン橋まで日の出を見にいくと宣言して出ていった。幸い私はその場に放置された。

博士は時間きっかりに戻ってきて、私を朝食に連れ出した。そこでわかったことだが、博士はあらゆる新聞を朝刊から夕刊まで配達するよう手配をしていた。一日中印刷物が次々に届けられては捨てられていった。タヴァナーが捜していたものは、儀式を取り戻そうというピエロ・デラ・コスタの動きだったからである。

「彼が最初にやることは、まずもってなんらかの盲目的かつ病的な衝動行為でしょうな」とタヴァナー。「そのために、おそらく彼は警察のお世話になるでしょう。かくして善良なる《兄弟》が救援に駆けつけるという次第。しかし、それでも役には立つのですぞ。いわば、彼は猟犬よろしく儀式文書の在りかを“ポイント”するのですわ」

翌朝、私たちの情報収集は報われた。セント・ジョンズ・ウッドから尋常ならざる強盗未遂事件が報告されたのである。品行方正で知られていた若い銀行員が、ジョセフ・コーツ氏宅に侵入をはかったのである。それも勝手口階段から食堂の窓によじのぼり、窓ガラスを蹴飛ばして破るという粗雑な手口を用いたのであり、犯行現場は表通りから丸見えであった。物音で目を覚ましたコーツ氏は棍棒を手に降りてきたが、武器は不要であったと判明した。強盗未遂犯人はただおどおどしており、この騒動で駆けつけた警官によっておとなしく署に連行されるだけであった。彼は犯行動機を説明できないという。

タヴァナーは直ちに電話をかけ、この事件が刑事法廷で審理される時間を聞き出した。それから私たちは冒険に乗り出したのである。私たちは傍聴席にすわり、妻を打擲した男や泥酔者が次々に審理されるさまを眺めていた。退屈した私は、他の傍聴人を眺めだした。

私たちからそう遠くないところに、周囲の薄汚い傍聴人たちとはまったくちがった人種の女性がすわっていた。蒼白の卵形の顔は、まわりの不揃いなコクニー面とは違う人種のように思われる。その女性はイタリアのフレスコ画から抜け出した中世の聖女のようであり、これで錦織りの長衣が加われば もう完璧であった。

「あの女を見てごらんなさい」とタヴァナーが私の耳元でささやいた。「ピエロ・デラ・コスタが金でころんだ理由がわかりますな」

ありきたりの粗暴犯が片付けられたあと、まったく違うタイプの未決囚が被告席に立った。緊張そのものといった風の、なかなか垢抜けた青年である。こんなところに来たことははじめてらしく、驚愕したまま視線が定まらないのだが、傍聴席にオリーブ色の頬をした聖女を見つけると、なにやら安心したようであった。

青年は判事の質問に正確すぎるほど答えていった。姓名、ピーター・ロブソン。職業、銀行員。彼は逮捕にあたった警官やコーツ氏の証言を熱心に聞いていた。そして判事から説明を求められると、説明できないと言うのである。自分はかつてロンドンのあの一画に足を踏みいれたこともなく、そこに行く動機もなく、どうして窓から侵入を図ったかもわからないという。

判事は当初この事件を寛大に取り扱う方針のようであったが、かくもしつこく供述を拒否する被告に接して、なにか裏があると見たらしく、かなり厳しい質問を飛ばしはじめた。どうやら被告に不利な法廷展開になると思われたたとき、それまで名刺のうらに短文を書いていたタヴァナーが、廷丁を呼んでそれを判事のもとに届けさせた。判事はそれを読んでから、名刺の表を見た。タヴァナーの学位とハーレー街という住所は判事を納得させるに十分であった。

「私の理解するところ」と判事は被告に語りかけた。「きみには事件に説明をつけられる友人がいる。その人物は喜んできみの保証人になるそうだ」

被告の顔は一見に値した。彼は知った顔をさがそうときょろきょろ見回していた。そして恰幅のよいタヴァナーが証人席に姿を表したとき、被告の当惑ぶりは滑稽ですらあった。しかし、驚愕しながらも、青年の目のなかに突如不思議なきらめきが生じた。潜在意識からの閃光が彼に到達したのである。彼は口をとじ、なりゆきを見守っていた。

私の同僚は身元を明らかにした。姓名ジョン・リチャード・タヴァナー、医博、哲博、理博、文修、法学士。自分は被告の遠縁にあたる者であるが、彼は二重人格として知られる特異な疾病を患っているのだと博士は語った。この疾病ゆえに被告は強盗事件を引き起こしたのであると自分は確信している。いわば他の人格に責任があると博士は陳述した。

いかにも、わたくしタヴァナーは青年の身元保証をする準備がある。そう博士が語ると、判事はことのなりゆきに安堵したと見え、被告人に召喚時の出頭義務を告知した。タヴァナーの登場から十分

とたたないうちに、私たちは裁判所の玄関にいた。ここで私たちはフィレンツェの聖女の出迎えを受けた。

「いやもう、どちらさまか存じませんし」と青年が言った。「またどうしてお助けいただいたのかちっともわかりませんが、とにかくありがとうございました。そうそう、ぼくの婚約者のミス・フェナーを紹介させてください。彼女もお礼を申し上げたいと」

タヴァナーは娘と握手した。

「お二人ともこの一件で頭が一杯で、ろくに朝食もとっておられないのではないですか？」と博士が言った。二人は食べてないと頷いた。

「では」と博士。「ご両人、わたしの朝食の賓客となっていただきましょう」

私たちは全員一台のタクシーに乗り込み、形而上学的給仕頭がいるレストランへ向かった。席につくやピーター・ロブソンがタヴァナーに話しかけた。

「ちょっといいですか、先生」とロブソン。「先生が示してくださったご厚意には大変感謝しておりますが、ぼくとしてはその理由も知りたくてたまらないのです」

「白昼夢をごらんになったことはおありですかな？」とタヴァナーがはぐらかすような質問をした。ロブソンは当惑して博士を見つめた。しかしよこにいた娘が突然口を開いた。

「あたし、おっしゃることはよくわかります。ピーター、おぼえてる？　子供のころ、よく物語をつくって遊んだじゃない。ほら、あたしたちが秘密結社の一員で、その本部が森の木陰にあるって話。仲間うちの合図を行うだけで、みんなあたしたちがメンバーだってわかって、怖がるの。いつだったか、いたずらしたので皿洗い部屋に閉じ込められたことがあったでしょ。あのとき、あなたは言ったわ。この合図をすれば、おまわりさんが入ってきて、お父さんにあたしたちを解放するよう命令するんだって。なぜってあたしが聞いたら、あなたは答えたわ。あたしたちはとても強大な友愛団に所属しているんだから、こんな皿洗い部屋に閉じ込められていいわけがないって。まさにそれが起きたのよ。あなたの空想が現実になったのだわ。でも、これは一体どういうことなんでしょう？」

「いや、まさにどういうことですかな？」とタヴァナーが言った。それから青年のほうを向くと、「夢をよく見られるたちですか？」と尋ねた。

「いつもというわけじゃありませんが」と青年が返答した。「しかし、一昨晩、それは妙な夢を見ましたよ。あとから考えてみれば、正夢としかいいようがないですね。お前は罪を犯したと誰かから責められる夢を見たんです。目が覚めてからもいやな気分でした」

「夢とは奇妙なものでしてね」とタヴァナー。「白昼夢も夜の夢もともに奇妙です。どちらのほうがより奇妙かは、わたしにはわかりません。ときにミスター・ロブソン、魂の不滅を信じておられますか？」

「もちろんです」

「となれば、その永遠の生命が両方向に延びていると思われたことは？」

「つまり」とロブソンが息をこらしながら言った。「あれが想像力の産物ではなかったとおっしゃるのですか―あれが、その、記憶だと？」

「同じ夢を見た他人がおるのですよ」とタヴァナー。「わたしもその一人です」。それから彼は幅のないテーブルに身を乗り出し、若者の両眼を覗きこんだ。

「こう仮定しましょう。あなたが想像されたような組織が実際に存在するとします。子供のころでさえ、大通りに出てその《合図》をなせば、誰かが確実に応答してくれたはずだったとします。

「あなたに窓ガラスを破らせた衝動が、ただの盲目的な本能ではなく、あなたの所属する《団》からの命令を実行するための試みであったとします。もしわたしがそのような話をしたら、あなたは信じますか？」

「信じると思いますね」と対面の青年が言った。「ともかく、それが本当でないにしても、そうあってもらいたいと願いますよ。いままで聞いたどんな話よりも魅力的に思えますから」

「もしこの件をもっと掘り下げるお気持ちがあるのでしたら」とタヴァナー。「今宵、ハーレー街のうちにおいでになられませんか？　そうすれば、ゆっくり話し合えますぞ」

ロブソンは飛びついてきた。自分の白昼夢が現実になろうというとき、それを追わない男がいるはずがない。

私たちは新しい友人たちと別れたあと、タクシーでセント・ジョンズ・ウッドに向かい、窓を修理中のある家の前で降りた。タヴァナーが執事に名刺を渡すと、われわれは一室に通された。そこは巨大な青銅仏やエジプト墳墓から発掘された彫像やワットの絵で飾られた部屋であった。数分後にコーツ氏が現れた。

「ああ、タヴァナー博士でらっしゃいますね」と彼は言った。「昨晩うちに押し入ったお若いご親戚の件でいらっしゃったものと推察申しあげますが」

「いや、まさにそれです、ミスター・コーツ」と私の連れが返答した。「親族になりかわりまして、深くお詫び申し上げようとまかりこしました」

「いやいや、どうぞお気になさらんでください」と家の主人が言った。「お気の毒に、精神障害とうかがっております」

「一時的な偏執狂です」とタヴァナーが氏の発言を訂正した。それから室内を見回すと「蔵書を拝見させていただきますに、わたしと同じ趣味をお持ちのようで。つまり、古代神秘宗教ですな。わたしもエジプト学者のはしくれを自認しておるのですよ」

コーツはこの餌に飛びついた。

「先般、実におもしろい文書を入手したのです」とわれらの新しい知人が言った。「ぜひお見せしたい。きっと興味をお持ちになるでしょう」

彼はポケットから鍵束を取り出すと、その一つを机の引き出しの鍵穴に差し込んだ。驚いたことに、鍵は手ごたえなく穴に入っていった。引き出しを開けてみると、旋錠がこじあけられていることがわかった。あわてて引き出しのなかまで手を突っ込んでみると、空っぽであった！　コーツはタヴァナーと私を眺め、ふたたび驚きの表情を見せた。

「今朝、裁判所に行ったときはここにあったんですよ」とコーツ。「こりゃいったいどういうことなんだろう？　家に押し入ってきた男はなにも盗もうとしなかったし、かと思えば別のやつが侵入してきて、金目のものはほっといて、わたし以外にゃ用がないものを盗んでいくなんて！」

「とおっしゃると、盗まれた文書は特に価値があるものじゃなかったのですか？」とタヴァナー。

「半クラウンで買ったものです」とコーツ。

「となると、損害が少なくて良かったじゃないですか」とタヴァナーが言った。

「これにはまいりましたね、ローズ先生」とタヴァナーが待たせておいたタクシーに再乗車しながら言った。「チェルシー《黒魔団》の誰かが、今朝コーツが裁判所に行くのを知ってて、あの文書を盗みだしたんですぞ」

「次はどういう手を？」と私は尋ねた。

「ロブソンを押さえましょう。こっちは彼を通じてしか作業はできんのです」

私は新しい状況にどう対処するつもりか、博士に尋ねた。

「もう一度ロブソンに文書を追いかけさせますか？」と私。

「それしかないようですな」と博士。

「ロブソンは泥棒稼業で目が出るとは思えませんが」

「わたしもそう思いますよ」とタヴァナーが同意した。「どうやらピエロ・デラ・コスタに頼まざるを得ませんな」

ロブソンはハーレー街で私たちと落ち合った。博士は彼を夕食に連れ出した。

夕食後、私たちは診察室に戻った。タヴァナーは全員に葉巻をくばり、愛想のよい接待役に徹した。博士ほどの話術を持ち合わせた人物を私は知らない。彼はみごとに座持ちをやってのけた。

ほどなく話題はフィレンツェとメディチ家の隆盛の日々に移っていった。そして博士は当時の隠秘学研究者であったピエロ・デラ・コスタの話をはじめた。ピエロはフィレンツェ宮廷の貴婦人たちに媚薬を調合していたのだという。博士は見てきたように生き生きと話をしていた。すると私は気がついた。ロブソンの注意力が散漫になり、周囲を忘れて自分の連想に没頭しているようであった。どうやら青年はあのトランス状態に滑り落ちているらしい。博士相手の経験を積んでいたおかげで、私にもそれが見てとれたのである。

それでもタヴァナーは話しつづけ、意識を失った若者に中世フィレンツェ人の来歴を語っていた――彼が文書保管庫の責任者となったときの話、賄賂を受け取った話、恋する女の歓心を買おうとして背任行為に及んだ話。それから話も終わりに近づくと、博士の口調が変わり、無意識の若者を名指しで呼んだ。

「ピエロ・デラ・コスタよ」と博士。「どうしてそんな真似をした？」

「誘惑されたのだ」と青年は私が知らない声で答えた。それは低音の落ち着いた威厳ある大人の声であり、感情を押さえきれずに震えていた。

「後悔しているか？」とタヴァナーが尋ねた。

「している」と青年のものでない声が答えた。「わたしは《彼の君》に頼んで、盗んだものを取り返す許可を貰っている」

「汝の要請は受諾された」とタヴァナー。「汝なすべきことをなせ、されば《彼の君》の祝福が汝の上にあろう」

ゆっくりと青年は寝返りをうち、身を起こした。しかし私は一瞥するだけでこれが別人だとわかったのである。青年の青い瞳からうかがえる人物は、成熟した強力な性格を持つ決意に満ちた大人であった。

「われはゆく」と彼が言った。「われが盗みしものを奪還せん。われに段取りを授けよ」

私たち、つまり彼とタヴァナーと私の三名は車庫に行って自動車を出した。「どちらに行きたい？」と博士が尋ねた。若者は南西の方角を指さした。そこでタヴァナーは自動車をマーブル・アーチのほうへ走らせた。ロブソンでない男の案内で、私たちはパーク・レーンを南下し、最終的にヴィクトリア駅裏手のごちゃごちゃした小路に出た。ここから私たちは東に転進した。テート美術館の裏にくると、青年が車から降りた。

「ここからは」と彼、「ひとりでゆく」。そういうと彼は脇道に消えていった。

私たちは三十分ほど待機していた。タヴァナーはエンジンを停めなかった。「ここから素早く脱出しなければならないこともある」と彼は言っていた。こりゃ屋外で徹夜かなと私が思いはじめたとき、街路を疾駆する足音が聞こえてきたかと思うと、ロブソンが車に飛び込んできた。そのすぐ背後から

足音が追ってきたところをみると、エンジンを停めなかったタヴァナーの深謀遠慮は正しかったのである。

「ローズ先生、急いで」とタヴァナーは叫んだ。「バックに敷物をたらすんです」。私は言われた通りに行動し、うまいことナンバープレートを隠蔽した。追跡者たちの第一陣が角を曲がりこんできたとき、巨大な自動車は発進した。私たちは脱出に成功した。

ハインドヘッドへの途中、だれも口をきかなかった。

私たちはできるだけ静かに寝静まった療養院に入った。タヴァナーが事務所の電灯をつけたとき、ロブソンが奇妙な革装丁の書物を手にしているのが見えた。しかし私たちは事務所でぐずぐずしていられなかった。タヴァナーの案内で私たちは寝静まった家を忍び足で歩き、とある扉の前に通された。私の知るところ、これを開けると、地下室に通じる階段があるはずだ。

「ローズ先生もご一緒に」とタヴァナーが言った。「ことの発端をご存じでらっしゃるから、結末もご覧にいれましょう。ともに危険を犯してくださったわけですからな。無論先生は《われらのひとり》ではらっしゃらないが、口がお堅い点はわたしも信用しておりますよ」

私たちは石製の螺旋階段をおり、敷石の通路を進んだ。やがて一枚の扉の前に出ると、タヴァナーがそれを開け、私たちをワイン貯蔵室に入れた。暗いなか、前方に一点の炎が風に揺らいでいる。タヴァナーが電灯をつけた。するとあろうことか、私たちは礼拝堂のなかにいたのだ。背の高い彫刻椅

子が三方の壁にくりぬかれており、残る壁面には祭壇があった。闇のなかに見えた揺らぐ炎は頭上からさがるランプの浮き芯の炎であった。これこそは、とある偉大な《象徴》の中心点であった。

タヴァナーは青銅製の吊し香炉に香を焚き、それを振り子のようにゆらした。ロブソンには異端審問官が着るような黒い長衣を渡し、博士自身も同じものを着込んだ。かくしてフード姿の二人は礼拝堂の床をはさんで対面する形となった。タヴァナーは明らかに祈祷とおぼしきものを唱えはじめた。その内容は私にはわからなかった。口頭のラテン語にはついていけない。続いて問答形式の連祷が始まり、ロンドンの銀行員にすぎないロブソンが、巨大な建造物内で声を響かせることに慣れた人物のように、低音で朗々と応答していた。それから彼は立ち上がり、プロの聖職者のような威厳に満ちた足取りで祭壇に歩を進め、手にしていたぼろぼろのかびくさい文書を祭壇上に安置した。彼はひざまづいた。彼の前に立つ黒い影がどんな赦免を与えたのか、私にはわからない。しかし彼が立ち上がるさまは、大いなる重荷をようやく肩から降ろした人物のようであった。

それからようやくタヴァナーが英語でしゃべった。「危急存亡の際は―」博士の低音の声が部屋中に響き渡った。「この《合図》をなせ」。それで私にもわかった。信頼を裏切った男が償いをなし、ふたたび古巣の《団》に迎えられたのである。

私たちは上の世界に戻った。するとロブソンでない男が私たちに別れを告げた。「わたしは身を隠す必要がある」と彼は言った。

「まさにその通り」とタヴァナー。「ほとぼりが冷めるまで英国を離れたほうがいいだろう。ローズ先生、よろしければ彼をサウサンプトンまで車で送ってやっていただけませんか。わたしには他に仕事があるのです」

リップフックに通じる長い坂道を下っていくとき、私は助手席にすわる男を観察した。どんな錬金術を使ったかしらないが、タヴァナーは長らく眠っていたピエロ・デラ・コスタの魂を呼び覚まし、ピーター・ロブソンという現在の人格に重ね合わせたのである。ランプから光が放たれるように、彼から力が放たれていた。容貌すらどこか変化していたようだった。口元には深い皺が刻まれ、以前はどこか頼りなかった顎の線がくっきりしていた。空色の瞳は落ち窪みながらも鋼の輝きをたたえており、剣士のそれのごとく落ち着きはらっていた。

私たちがサウサンプトンの浮き桟橋に到着したのは、朝六時を少しまわったところであった。港町は不夜城であるから、すでに人で賑わっている。タヴァナーが与えた指示では、私たちは誰も知らないような宿屋で朝食を食べなければいけないという。私たちは道を尋ねながら目的地へ向かった。ついてみると、それはおよそ飾り気のないドックゲート脇の居酒屋であり、給仕の小僧がトルコ織りのカーテンを開けたばかりであった。私たちはなかに入った。

すぐにわかったが、この小さな酒場では、よそ者は歓迎されないのである。誰も注文を聞きにこなかった。どうしようかと私たちが迷っていると、木製の階段を踏みしめる重い足音が響いてきて、体格のいい男がカウンターにやってきた。袖口に刺繍された四本金筋から判断するに、船長とおぼしき

人物である。この男は近づいてきながら私たちを眺めていた。実際、私たちはこの場所でめいっぱい浮きあがっていたのである。

私はこの男の目に気をとられてしまった。それは鋭い遠くを見るまなざしであり、海の男に特有のものであったが、他にも妙な点がある。焦点を人の背後一ヤードに合わせて、見るともなく見るという術を備えているのだ。これはタヴァナーがオーラの色を見ようとするときにやる方法である。あらゆる生物から発せられるあの不思議な放散は、見る目を持つ者には内的状態を明確に示すものなのだ。

この男は私の連れに興味を持ち、灰色の瞳で青い瞳を覗きこんでいた。それから、なにやら両者のあいだで合図でも交わされたらしく、この船乗りが私たちの席に加わってきた。

「おれのお袋を知ってるね」と彼は自己紹介風に言った。ロブソンは知ってると答えていたが、二人が初対面であったことは誓ってもいい。それから私たち三人は朝食をとるべく奥の部屋に入った。私たちの新たなる知己が大声で叫ぶと、すぐに料理が持ちこまれた。

船乗りは前置きなしで私たちの用件を尋ねてきた。するとロブソンも前置きなしで返答するのであった。

「できるかぎり早く国から出たい」と彼は言った。私たちの新たなる友人はそれを日常茶飯事のことと思っているようであった。しかし、荷物なしの人間がこんなふうに出国することのどこが日常茶飯事なのであろうか。

「おれは九時に出港する。ゴールド・コースト経由でロアンゴーまで向かう予定だ。うちの船じゃキュナード汽船なみとはいかないが、それでよければ歓迎しよう。ただし、その服じゃ人目につくだけだ。それは避けたいだろう」

男はドアの隙間から顔を突き出して台所のほうに怒鳴った。すると直ちに白顎髭をはやした猪首短躯の男が現れた。両者のあいだで会談が持たれ、猪首のほうも手を貸すにやぶさかでない様子であった。あっという間に安物のサージの吊しと船員帽が届けられた。これが給仕の正装なのだと船乗りが請け合った。この触れ込みでピーター・ロブソンは船員と化すことになったのである。

謎めいた一団がかくも歓迎してくれた居酒屋を後にして、私たちはドックに向かった。そして人気のない路線区や陸揚げ基地や空き地を横ぎり、友人の船に到着した。それは船腹の錆びた貨物船であり、上半分は白く塗られていたが、それでも汚いの一語であった。

船長室に通されると、そこは薄汚い外観とは見事な対比をなしていた。大型のデスクにはフリーアーム式のランプが据え付けられており、アルブレヒト・デューラーの『祈り』の習作も掛けてあれば、なかなかの書棚も設けてある。また、煙草の匂いが染み込んでいるなかに、香が常時焚かれていることを示す芳香が漂っていた。私は書名を点検した。人物を知るにはこれがなによりである。ブラヴァッキーの『イシス顕現』とベルクソンの『創造的進化』がなかよく並んでおり、またエリファス・レヴィの『魔術の歴史』二巻本もあった。

ハインドヘッドに車で戻る途中、私はあれこれ考えていた。私がこれまで出会ったさまざまな人々の、さまざまな人生の不思議な側面は、一体なにを意味しているのだろう。

しかし、私はこれでもかとばかりに《団》の広範囲にわたる連絡網の一例を見せてもらうことになった。タヴァナーの要請で私は帰港したあの船長と会い、ロブソンの消息を聞き出すことになった。しかし消息はわからないと言われた。船長は若者をアフリカ西沿岸のどこぞの僻地に降ろしていた。ロブソンは灼熱の太陽の下、埠頭に立って《合図》をした。するとポルトガルの賤民とおぼしき人物が彼の肩をぽんとたたき、二人はそのまま人込みにまぎれていったという。私は異国の地にひとり放置された世間知らずの若者の身を案じ、その旨を船長に言ってみた。

「心配ご無用」と船長は言った。「あの《合図》さえあればアフリカを横断して戻ってこれる」

この件をタヴァナーに語ったとき、私は彼に言った。「どうして先生と船長とロブソンが親戚なんですか？　どうみたって真っ赤な嘘じゃないですか」

「嘘じゃありませんぞ。真実なんですな、これが」とタヴァナー。「我が《母》、我が《兄弟》となれば、《団》とその参入者に決まっておりましょうが」

第三話　魔犬叫喚

「どうですか？」と聴診を終えると私の患者が聞いてきた。「一生無理はできないんですか？」

「心臓が本来の調子ではないようですね」と私は答えた。「しかし、注意すれば一生もつはずですよ。ただ、不必要な運動は避けてください」

男は奇妙な苦笑を浮かべた。「運動のほうが要求してきたとすれば？」

「そのような可能性を最小のものとするよう、生活設計していただきたいですね」

タヴァナーの声が部屋の向こうから聞こえてきた。「ローズ先生、肉体の検査を終えられたのなら、こちらに回してください。心のほうをやりますから」

「ぼくは思うんですが」と私たちの患者が言った。「肉体と心は親密にかかわっていますね。先生は肉体を安静にしておけとおっしゃいますが」—彼は私のほうを見た—「心のほうがわざと肉体にショックを与えるとしたら、ぼくはどうすればいいんですか？」そう言うと彼はわが同僚のほうを向いた。

「それはわたしの出番ですぞ」とタヴァナー。「ローズ先生は目標をおっしゃったわけでして、わたしは手段をお教えしましょう。どうぞこちらへ。さあ、兆候をお話しいただきたい」

「妄想なんです」と彼はシャツのボタンをとめながら言った。「恐ろしい顔をした黒犬が隅から飛び出してきて、ぼくを追いかけまわす、いや、追いかけまわそうとするんです。まだお犬様の御意にそって逃げたことはないんです。心臓に無理はさせられませんから。でも、いつか逃げだすんじゃないかと思うんですよ。そしたらコテンキューでしょう」

タヴァナーは私のほうに視線で問いかけてきた。私は頷いた。この男性は長距離を走ったり全力疾走すれば、おそらく命がないだろう。

「あなたがご覧になる犬はどんな種類ですか」と博士が尋ねた。

「特にこれといったやつじゃないです。ただの普通の犬ですよ。足が四本、しっぽが一本、マスチフくらいの大きさですが、体つきはちがいます」

「どういうふうに現れるんですか？」

「説明しづらいですね。これといった決まりはないみたいなんです。でも、たいてい日が沈んでから出てきます。ぼくが日没後に外にいたとするでしょう。振り返ってみると、やつが後ろで前足をガ

リガリやってるのが見えるんです。黄昏時に部屋のなかで椅子にすわっているとすれば、やつが家具のあいだにすわりこんで、機会を狙ってるのが見えます」

「なんの機会ですか？」

「喉に食いつこうという機会ですよ」

「どうして不意を襲わないんでしょうね？」

「それがぼくにもわからないんです。あいつもずいぶんとチャンスを逸していると思うんですよ。いつだって、ぼくが気づくまで待ってるんです」

「で、あなたが気づかれると、そいつはどうします？」

「振り向いて顔を合わせると、すぐに迫ってくるんですよ！　ぼくが歩いていたら、あいつは歩調を速めて追いつこうとするし、部屋のなかだったら、家具を盾にして忍びよろうとするんです。ねえ、先生、あいつはぼくの想像力の産物かもしれませんが、実際見てると、それは怖いものですよ」

彼は口をつぐみ、額の汗を拭った。

こういったお化け騒ぎは、どんな人間にも気持ちのよい妄想ではないが、心臓に問題のあるわれらの患者のような人間にとっては、きわめて危険である。

「その怪物に対して、どのような防御をなさっておいでですか？」とタヴァナーが尋ねた。

「そいつにこう言ってやるんですよ、“お前は本物じゃないんだ、ただのろくでもない悪夢なんだ、おれはお前なんかにやられないぞ”と」

「それは最高の防御法ですぞ」とタヴァナー。「しかし、あなたはそいつが本物であるかのように話しかけておられますね」

「やれやれ、たしかにその通りです！」と私たちの患者が考えながら言った。「これは気がつかなかったな。前はそんなことはなかったんですよ。当然ながらあの犬は本物じゃない、自分の脳が生んだ幻影だと思っていたんです。でも、最近ちょっと疑問が生じてきてたんです。結局、あれが本物だとしたら、本当にぼくを襲う力を持っているとしたらって。つまるところ、あの犬がまったく無害なわけじゃないかもしれないと、心の底で思ってたんですねえ」

「あなたが動転して逃げ出しでもしたら、そいつは実際きわめて危険なものになるでしょうな。正気を保っておられるかぎり、害はないと思いますよ」

「その通りでしょう。しかし、正気を保っていられなくなる一線というものもありますよ。想像してください。毎晩毎晩、眠ったと思ったら、そいつが部屋にいると知って目が覚めて、カーテンの隙間から鼻面突き出してるのが見えるんですよ。そこで腹を決めて、そいつを追い出し、また目を閉じますよね。でも、眠くなったかなと思って、最後の安全確認でちらりと目を開けると、なにか黒いも

のが消えかけた暖炉の光を遮ったりする。こうなりゃ眠れない。でも、起きてもいられない。それが想像力の産物だとじゅうじゅう承知していても、毎晩毎晩この調子じゃ、くたばっちまいますよ」

「毎晩定期的に出るのですか？」

「ほぼ、まちがいなく。でも、完全に規則正しくってわけじゃないです。よくぞおっしゃってくださいました。あいつはなぜか金曜の夜は解放してくれるんですよ。もしそうでなかったら、ぼくはとっくの昔にいかれちまったでしょうね。金曜日になると、ぼくはそいつに言うんです。“よーし、この野郎、お前の安息日が来たぞ”。そしてぼくは八時に就寝して、ぐっすり十二時間は眠ります」

「ハインドヘッドにあるうちの療養院においでになれば、おそらくその化け物を追い払って、毎晩安眠をお約束できるでしょう」とタヴァナーが言った。「しかし、わたしたちが本当に知りたいところは―」博士はほんのかすかながら口ごもった、「あなたの妄想がどうして犬の形をとるのか、なぜに昔懐かしい緋色の蛇かなんかではないのかということです」

「蛇だったらいいんですけどねえ」と患者が言った。「蛇だったら、こっちも飲み過ぎだと悟って、水割りだけにしておきますよ。でも、あの忍び足の黒犬じゃあ―」彼は肩をすぼめ、執事に案内されて退出した。

「さて、ローズ先生、どう思われますか？」扉が閉まると博士が尋ねてきた。

「額面通りに受け取れば」と私、「よくある妄想の一例みたいですね。しかし先生が扱われる奇妙な症例をずいぶん拝見させていただきましたから、精神の内部機構だけで話がつくとは思わなくなりましたよ。あれが思念投射の一例である可能性を考慮なさいますか？」

「いい線いってらっしゃる」とタヴァナーが肯定的に頷いた。「はじめてうちに来られたときなら、先生もためらうとこなく精神の病気すべてに陳腐な決まり文句を当てはめて、けりをつけられたことでしょう。しかし今となれば、天と地のあいだに医学部では習わなかったことがたくさんあるとお悟りになられた。いや、めでたい、めでたい。

「先生も思念投射と思われたのですな？　わたしもそう考えたい気分です。単なる妄想の場合、患者はそれをいばったり、あるいは心霊現象だと説明にかかったりするものです。しかし心霊現象の場合は、患者は申し訳なさそうに語り、妄想だと説明しようとするものですわ。しかし、その怪物は、どうして襲って片をつけようとしないのか、なんで定休日があるんでしょうか、労働基準法でも気にしておるのですかね。

「金曜日、金曜日か」と博士はつぶやいていた。「金曜日ってのは、いったいどういうわけなんだ」

タヴァナーは突然デスクをばんとたたいた。

「金曜日は《黒魔団》の集会日だ。どうやらわたしたちは、あいつらとまたぞろ出くわしたようですぞ。ちょっと痛い目を見せてやらねばなりますまい。だれだか知りませんが《黒魔団》で魔術を修

行したやつが、この魔犬を操っておるのですよ。マーチンが金曜日の晩ぐっすり眠れるのは、そのころ暗殺者が自分の《団》の集会に出ていて、個人的作業にかかれないからでしょう」

「暗殺者ですって？」と私。

「その通り。あんな化け物をマーチンのような心臓を持った人間に送りつけるやつは、マーチンが遅かれ早かれ死んでしまうことを願っておるのです。人気がない場所で化け物を見てしまったマーチンが、パニックを起こして走りだしてしまえば、どうなります？」

「半マイルももたないでしょうね」と私。「それからあとは知りません」

「これは明らかに精神的暗殺事件ですよ。修行を積んだオカルティストである何者かが、黒犬という思念形態を作り出したのです。しかもそいつはマーチンとかなり接触があるはずです。思念投射という形で化け物を送りつけるには、まったくの無関係では不可能ですからね。そういうわけで、マーチンは、他人が視覚化している思念像を見ている、いや見ていると思っておるのです。

「思念像そのものは、恐怖という点をのぞけば、無害でしょう。しかしマーチンが正気を失い、肉体を用いる防御手段に走ったとすれば、その結果として心臓麻痺でしょう。彼はその場に崩れ落ち、しかも死因は自然そのもの、他殺の証拠はまったくない。ローズ先生、いつかわたしたちの手で《黒魔団》を襲撃してやりましょう。あの連中はいささか知りすぎています。セシル・ホテルのマーチンに電話をかけてください。今晩わたしたちを一緒に車で行こうと誘うのです」

「この件をどう処理するつもりですか？」と私。

「ハインドヘッドの家は霊的ドームに覆われておりますから、マーチンをなかに入れてしまえば、もう化け物は襲ってこられないでしょう。それから送り主を突き止めて、手に負える相手ならそれっきりにしてやりますわ。化け物を分解してもむだでしょう。別のを作るだけでしょうから。こちらが押さえるべきは犬の飼い主です。

「ただし、こちらも慎重に動く必要があります。マーチンに危険を悟らせてはなりません。彼を護っている壁のひとつは、あれが本物でないという信念なのですよ。それを台なしにするような言動には気をつけてください。しかし、われわれもやっかいですな。あれこれ質問すると疑惑を招きますからね。それとなく事実関係を聞き出すしかないでしょう」

ハインドヘッドに車で向かう途中、タヴァナーはかつてないことをやらかした。患者にオカルト理論を開陳したのである。一件が落着したあとでなら、患者の恐怖心を取り除いてやるために、現象の背後にある法則を説明してやることもあったが、のっけからくるのは初めてであった。

私は驚きながら聞いていたが、やがてタヴァナーの狙いが読めてきた。博士はマーティン自身がオカルティズムの知識を有しているかどうか知りたかったのだ。また、知識があった場合、その手の話を他人にしていたかどうかが問題であったのだ。

博士の策略は直ちに実を結んだ。マーティンもまたこの手のことに興味があったのである。しかし彼の実践知識は皆無であった。それは私ですら見てとれた。

「先生はモーティマーのやつにお会いになるべきですよ」と彼は言った。「とてもおもしろい男です。ぼくたちは、よく夜中までこの手の話をぶっ続けで話し合ったもんです」

「お友だちにお会いできれば光栄ですね」とタヴァナー。「日曜日にうちまでお越しいただけるよう、お話しいただけませんか。わたしはいつでもこの方面に詳しい方からお話をうかがいたいのです」

「いや、その—ここんところ、やつとは会ってないのです」とマーティンは言い、物思いに耽ったまま黙り込んでしまった。もはやタヴァナーがいかに話しかけようともむだであった。明らかにつらい話題に触れてしまったのである。タヴァナーがこの件を記憶にメモしているのは私にもわかった。

到着するや、タヴァナーはまっすぐ書斎に向かい、金庫を開くとカード式検索箱を取り出した。

「マッケン、マサース、メイトランド、モンタギュー、モーティマー」博士はカードをめくりながらつぶやいていた。「アントニー・ウィリアム・モーティマー。一九一二年十月《黒頭巾団》参入。一九一五年五月センティネル就任。一九一六年三月スパイ容疑で逮捕。母親の遺言状作成をめぐって不適当な影響力を行使して告発される。（容疑明白なるも物証なし）。《破壊神セト団》のグランドマスター。ノック、二、三、二、合言葉“ジャッカル”。

「モーティマー氏に関しては、これで十分ですな。敬遠するにしかずの御仁のようだ。となると、今度はマーティンがなにをやらかしてモーティマーを怒らせたかが謎ですな」

マーティンに直接尋ねるわけにもいかないので、当面彼を観察していたのだが、ほどなく私はあることに気がついた。彼は毎日郵便物の到来を鬼のように見張っていたのである。配達の時刻になると、広間をうろうろし、自分宛の手紙があれば、それを必死につかみとり、すぐにがっかりして意気消沈するのである。どんな手紙を待っていたのかしらないが、それは配達されなかったのである。しかし、配達されないという事実に驚いている節がないのである。私としては、彼がもしかしたらとはかない希望を抱いているのだと結論を出した。

それからある日、彼はもはや我慢できなくなった。私が郵便物をほどいて、きみ宛のものはないと告げること二十回目になったとき、マーティンはぶつぶつ言い出した。「ローズ先生、“ほとぼりがさめる”というのは本当だと信じてらっしゃいますか？」

「それは人それぞれさ」と私。「しかしぼくの見てきたところ、誰かと仲たがいした場合、しばらく離れていると、相手の欠点を大目に見るようになりがちだね」

「いや、喧嘩じゃなくて、恋愛の場合なんですけど」彼はなかば躍起に、なかば恥ずかしそうに話を続けた。

「遠く離れてしまえば、恋は終わると誰かが言ってるよ」と私。「人間の精神は大変な適応性を有しているから、最愛の人間がいなくなっても、結局はなんとなく慣れてしまうものさ」

「ぼくもそう思います」とマーティンが言った。そして彼は部屋の片すみで煙草に慰めを見いだしていた。

「つまり、この件には女がからんでいるわけだ」私がこの会話を報告すると、タヴァナーが言った。「その女性に会ってみたいものですな。わたしはモーティマーと張り合ってみようと思っておるのです。やつが黒の思念像を送りつけているのなら、わたしが白の思念像でがどれだけやれるか、興味がありましてね」

タヴァナーは無言暗示の術を使う気でいるのだ—私はそう推測した。この術に関して、博士は達人の上をいく存在であった。

あきらかにタヴァナーの魔術は即効性のものであった。数日後、私が渡した手紙が、マーティンの顔を喜びにほてらせたのである。彼はいそいそと自室に引きこもった。三十分後、彼は私のもとにやってきて、こう言った。

「ローズ先生、明日の昼食時、ここに二人ほど招いてよろしいでしょうか？」

私はかまわんよと言ってやった。見ると彼の顔は待ちかねた手紙の到来のためか、まったく表情がちがっていた。このときなら、彼は百四十四頭の黒犬を相手にしても平気だったであろう。

翌日、マーティンが二人の女性を案内しながら敷地を回っていた。ほどなく食堂で紹介された。ミセス・ハラムとミス・ハラム、母娘であるという。娘のほうはなにか悩みを抱えているふうであった。変に落ち着きがなく、また上の空なのである。しかしマーティンのほうは第七天に昇りきっていた。喜びを隠そうとすらしない人間というものは、なかば滑稽ですらある。私は笑いを押し殺しながらこの小喜劇を眺めていたが、それは唐突に悲劇と化したのであった。

娘が手袋をはずしたとき、左薬指に指輪が見えたのである。どうみてもエンゲージ・リングであった。私はマーティンのほうをちらりと見た。彼の視線も指輪に集中していた。数秒で彼はくずれてしまった。楽しい昼食会はおしゃかになった。彼はなんとか接待役をつとめようとしていたが、その努力のさまは見るも哀れである。私としては、食事が終わったのでほうほうの体で逃げ出すことにした。

しかし逃げ出すことは許されなかったのである。部屋を出ようとしたとき、タヴァナーが私の腕をつかんでテラスのほうに引っ張っていった。

「先生、つきあってください」とタヴァナー。「私はハラム家の人たちを友だちになりたいのですよ。なにか手掛かりが得られるかもしれませんぞ」

マーティンが母親のほうと話しこんでいたため、私たちはなんなく娘をあいだに挟んで庭の散策に出ることができた。彼女はこの組み合わせを歓迎しているようであり、私たちはすぐにその理由を知ることとなった。

「タヴァナー先生」と彼女が話しはじめた。「あたくしのことで相談に乗っていただけますでしょうか？」

「よろこんで、ミス・ハラム」と博士は答えた。「なにをお聞きになりたいのでしょうか？」

「あたくし、あることで大変当惑しております。好きでもない相手と恋に落ちるなんて、有り得るでしょうか？」

「大いに可能ですね」とタヴァナー。「しかし、あまり歓迎できる事態ではないでしょう」

「あたくし、ある男性と婚約しております」と彼女はエンゲージ・リングを指から出し入れしながら言った。「あの人がいないとき、あたしは気が狂うほどあの人を愛しています。でも、あの人が現れると、もう怖くて、嫌でたまらないんです。でも離れてしまうと、あの人が恋しくなります。そのくせ一緒にいると、すべてが間違いで恐ろしくなるんです。自分でもうまく言えないんですけど、わかっていただけるでしょうか？」

「どういうきっかけで婚約なさったのですか？」とタヴァナー。

「よくあるパターンです。彼のことはビリーと同じくらい昔から知っていました」（ビリーとはマーティンのことである。私たちのすぐ前を母親と一緒に歩いていた）

「なにか不当な圧力でもかけられたのですか？」とタヴァナー。

「いいえ、それはないと思います。彼はあたくしに結婚してほしいと言いました。あたくしは同意しました」

「プロポーズされたら受け入れようという気持ちになられたのは、いつくらいからでしたか？」

「わからないんです。そんなこと考えてもいませんでした。実のところ、この婚約にはみんなびっくりしましたけど、一番びっくりしたのはあたくしでした。三週間前まで、彼はそういう対象ではなかったんです。でも突然、自分はあの人と結婚したいんだって思うようになりました。突然の衝動っていうんでしょうか、でもその気持ちはとても強くてはっきりしてました。あたくしにはそれしかないと思いました」

「それで、後悔してらっしゃらない？」

「後悔してなんかいなかったんですけど―今日、この食堂にすわっていると、突然トニーのところに戻らずにすめばどんなにいいだろうという気分になりました」

タヴァナーは私のほうを見て、「この家の心霊的絶縁効果も役に立つでしょうが」と言った。それから博士は娘のほうをふたたび向いた。「モーティマー氏の強力な個性がお嬢さんの決心に影響を与えておられるとお考えになられますか？」

私は内心タヴァナーのあてずっぽうを楽しんでいた。そして娘は喜々として罠にはまってきたのである。

「ええ、もう」と彼女。「あたくし、いつもそういった衝動を受けるんです。ここに参りましたのも、そういった衝動のためだったのです」

「となれば」とタヴァナー。「お教えしたほうがよろしいでしょう。お嬢さんがモーティマーと婚約なさったのが衝動のなせるわざであったように、ここにいらしたのはわたしが放った衝動のためだったのですぞ」

娘は驚愕して博士をまじまじと眺めていた。

「お嬢さんの存在を知りまして、お会いしたくなりました。現在、わたしの治療下にある魂がひとつありまして、ほら、あそこに。お嬢さんなら彼の幸福に一役買っていただけると思いました」

「あたくしも、きっと」と娘が前を行くマーティンの広い背中を見つめながら言った。無論彼は気がついていない。しかし娘の声にひそむ真心と熱意は、彼女の本当の心が誰に向かっているかを明らかにしていた。

「他人と連絡を取りたいとき、電報を打つ人がおりますが、わたしはちがいます。私は思念を送るのですよ。相手が従ってくれると確信しておりますからね。電報は無視される場合もありますが、思念となれば話はちがいます。相手は自分の意志で行動していると信じているからです。もちろん、自分が暗示を受けていると悟らせるわけにはいきません。さもないと相手はおそらく背を向けて、まったく正反対のことをするからです」

ミス・ハラムはただただ驚いていた。「そんなことが可能なのですか？」と彼女は叫んだ。「とても信じられません」

「道のわきに赤いゼラニウムの鉢がありますでしょう？　いまからお母様に動いてもらい、あれを摘んでいただきましょう。ご覧あれ」

私たちはタヴァナーが意志を集中しているあいだ、なにも知らない婦人を眺めていた。するとたしかに、鉢植えに近づくと、母親はわきに踏み出し、赤い花をひとつ摘んだのである。

「うちのゼラニウムになにをなさるのですか？」とタヴァナーが声をかけた。

「これは粗相をいたしまして」と母親が返答した。「ちょっと魔がさしましたんでございます」

「思念というものは、全部が全部、それを生む頭のなかにおさまっているわけではないのですよ」とタヴァナー。「私たちは常時お互いに無意識の暗示をかけあっていて、知らず知らずのうちに精神に影響を与えあっておるのです。この思念の力を理解している人間が、慎重に使用法の訓練を積んだとすれば、やれないことはほとんどないでしょうな」

散歩を続けるうちに、私たちはふたたびテラスに出た。そこでタヴァナーは失礼して事務所のほうに引き上げたので、私もあとについていった。博士は金庫を開いてカード式検索箱をテーブル上に置いていた。

「さてと、ローズ先生、どう思われました？」

「マーティンとモーティマーで、同じ女の奪い合いでしょう」と私。「そしてモーティマーは、先生が患者に用いておられる手法を、自分の個人目的に用いているんですね」

「まさに」とタヴァナー。「黒魔術と白魔術の差異を示す恰好の実例でしょう。わたしたちは共に人間精神を研究し、自然の秘められた力を研究しております。わたしは知識を治療に使い、モーティマーは破壊に使っているのですわ」

「タヴァナー先生」と私は博士の顔を見つめながら言った。「先生は、どうして偉大な知識をご自分のために使わずにいられるのですか？」

「いろいろとありましてね」と博士が答えた。「まず、わたし同様、この道の教えを受ける人間は慎重に選ばれた人間だからです。いやまあ、そうあるべきなんですがね。次に、わたしはある組織の人間です。その組織では、授けた訓練を悪用する者がいれば、確実かつ厳正に処罰するのですよ。また、わたしは自分がなにをやっているか知っているから、自分に託された力を悪用しようとは思わんのです。宇宙には直線運動など存在しません。万物は曲線を描いて運動するのです。ですから、自分の心から発されたものが心に戻ってくるのは、単なる時間の問題なんですわ。遅かれ早かれマーティンを襲っている犬も、飼い主のもとに戻ることになるでしょう」

マーティンは夕食を欠席した。そこでタヴァナーはすぐさま彼の所在を尋ねまわった。

「あの人なら、お客さんをヘーゼルミア行きのバスに乗せるって、十字路のほうまで送っていきましたよ」と教えてくれる者がいた。だがタヴァナーはまったく納得していない様子で、腕時計を見ていた。

「まだ数時間は明るいな」と博士は言った。「ローズ先生、もしマーティンが日没までに戻ってこなかったら、教えてください」

その日は灰色の夕暮れとなり、いまにも嵐となりそうで、闇の到来は早かった。八時を少し回ったころ、私は書斎にいるタヴァナーのもとへ行き、こう言った。「先生、マーティンはまだ戻ってません」

「となれば探しにいくしかないですぞ」と博士。

私たちは他の患者の手前もあり、窓から抜け出して潅木のあいだをガサゴソ進み、すぐに荒野に出た。

「せめてどの方角から来るのかわかれば」とタヴァナー。「道が錯綜しているから、これと決めつけることもできない。高い所に昇って、双眼鏡で探しましょう」

私たちは風で折れたブナの木に覆われた斜面を上った。タヴァナーが双眼鏡で荒野の道をひとつひとつ確認していった。一マイルほど彼方で、こちらに向かってくる人影が見えたが、遠すぎて人物までは判明しなかった。

「おそらくマーティンでしょう」と博士が言った。「しかしはっきりとはいえませんな。ここで待って様子を見たほうがいいでしょう。下に降りると見失いますからね。この双眼鏡をお願いしましょう。先生のほうが目が良いですから。しかし、どうして今宵はこうも素早く暗くなるんでしょうね。頭に来ますな。だいたいなら、あと三十分は明るいはずでしょうが」

冷たい風がわきあがり、薄着の私たちはぶるぶる震えた。帽子もなく、ただの背広だけで出てきたからである。分厚い灰色の雲が西空に立ち塞がり、樹木は不安げに呻き声をあげていた。荒野の男はかなりの速度でわき目もふらずに移動していた。ぽつんと見える男の姿を別にすれば、広大な灰色の不整地はまったく空っぽであった。

突如、大股の歩調が途絶えた。男は肩越しに背後を振り返り、立ち止まり、それから歩調を速めた。それから再度振り返ると、唐突に駆け足になった。数ヤード走ると、再びペースを落として歩きはじめ、しっかりした足取りになった。なんとしても振り返りはしないという覚悟が見てとれた。

私は双眼鏡をタヴァナーに渡した。

「間違いなくマーティンですな」と博士。「しかも、犬を見てしまったらしい」

彼がどの道を歩いてくるのか判明したので、私たちは丘から降りて速足で迎えに行った。四分の一マイルほど進んだところで前方の闇のなかから叫び声が響きわたった。迫りくる死に脅えた獣が放つ鋭い無意味な悲鳴であった。

タヴァナーが人間のものとは思われないほどの声量でおーいと怒鳴った。私たちは必死で草をかきわけ、丘をのぼり、くだった。荒野を悪戦苦闘しながら動く人影が目に入った。私たちの白いワイシャツが宵闇のなかでもはっきりと見えたのであろう。それは私たちのほうに向かってきた。死の魔犬から必死で逃れてくるマーティンであった。

私は素早くタヴァナーの前にでて、追われる男をがっしり腕に抱きとめた。狭い道だったから、正面衝突も同然だった。彼の脇腹でおもちゃのエンジンのような心臓が不整動悸を打っているのが感じとれた。私は彼を地面に仰向けに横たえた。タヴァナーが携帯用薬箱を手にやってきた。とりあえずの手当しかできなかった。

ぎりぎりで間に合ったといえる。あと数ヤード走っていれば、彼は倒れていただろう。私は背筋をのばして周囲の暗闇をのぞきこんだ。ありがたいことに、私は霊視力など授かっていないから、その場から消えようとしている何物かを見ることはなかった。なにかが動いていったことは私にもわかった。数百ヤードほど離れた場所で草をはんでいた羊の群れが、なにかを通過させるように道を開いたからである。

私たちはマーティンを家に連れ戻し、徹夜で看病した。酷使された心臓は瀬戸際にあった。私たちはずたずたになった神経を休息させるため、投薬するしかなかった。

真夜中ちょっとすぎ、タヴァナーは窓のところに行き、外を眺めた。

「ローズ先生、ちょっとこちらへ」と博士が言った。「なにか見えますか？」

なにも見えないと私は答えた。

「見えるのであれば、先生にとっても結構な経験になるのですが」とタヴァナーが答えた。「先生は病んだ心が生み出す思念像というものを、それが実質を伴っていないがゆえに、あまりたいしたものではないとお考えになりがちのようですな。では、患者の視点から幻覚を見ていただきましょうか」

博士は私の額を奇妙な弱強のあるリズムでとんとんと叩きはじめた。数分たつと、私はなにか、くしゃみでも押さえているかのような感覚が、鼻から頭蓋骨内部へ動いていくように感じた。すると外側の暗闇のなかにかすかな光が見えるようになった。それは窓の外側に広がる灰色の被膜であり、その向こうには死の魔犬がいた！

影のような姿が闇のなかから現れ、窓に向かって跳躍しては、灰色の被膜に頭をぶつけて、撥ね返されているのである。そいつはふたたび体勢を立て直し、飛び掛かるが、また弾かれる。かっと開かれた顎から吠える声が聞こえてくるようであり、両眼はこの世のものでない光に輝いている。それは動物特有の緑の眼光ではなく、われわれの五感を越えた領域をさまよう凍えた惑星の紫灰色であった。

「マーティンはあれを毎晩見ておったのです」とタヴァナーが言った。「ただ、彼の場合、あれが室内におったのですわ。なんでしたらあれの侵入を阻んでいる心霊バリヤーを外して、なかに入れてみましょうか」

私は首を横に振り、悪夢の光景に背を向けた。タヴァナーは素早く私の額に触れ、なにかつかみとるような動作をした。

「先生は運がよろしいのですよ」とタヴァナー。「しかし、お忘れなく。患者の幻覚というものは、先生が今ごらんになった犬と同じくらい、現実味があるということを」

翌日の午後、事務所で仕事をしていると、私は呼び出された。女性が広間で待っていて、面会を希望しているという。行ってみると、それはミス・ハラムであった。どうして急に現れたのであろうか？

「執事の方が教えてくださいました。ミスター・マーティンは面会謝絶だそうですね。でも、あたくし、タヴァナー先生に少しお時間をいただきたくて」

彼女を事務所に連れていったが、博士は彼女を見ても驚いたふうがなかった。

「では、指輪をお返しになられたのですな」とタヴァナーが言った。

「はい」と彼女。「でも、どうしておわかりなんです？　今度はどんな魔法をお使いになったのでしょうか？」

「いやいや魔法なんぞではありませんよ、ミス・ハラム。このあいだのはただの常識でした。お嬢さんはなにかに脅えておられた。きょうびの文明社会では、なかなかどうして人は気安く脅えはしないものです。ですから、なにか尋常ならざることが起きておると推測つかまつったわけです。お嬢さんが危険な男とつきあっておられることは知っております。ですから、その方向で考えました。お嬢さんがなさったことで、その男を怒らせたことがあるとすれば、それはなにか？　お嬢さんはここに

おいでになり、男の影響から離れて、以前好ましく思っておられた男性と過ごされた。おそらくお嬢さんは心変わりを経験された。わたしはそこらへんをはっきり知りたくて、推測でしかなかったところを、事実のごとく申し上げたわけです。お嬢さんはわたしがなにもかも知っているとお考えになり、否定すらされなかった。おかげでわたしは欲しい情報を得られたのです」

「まあ、タヴァナー先生」と驚き顔の彼女が言った。「お聞きになられていたら、お答えしましたものを、どうしてそのような手間をおかけになったのです？」

「それはですな、疑うことを知らない人間を扱う方法があるということを、お嬢さんご自身の目で見ていただきたかったからです」と博士。「さて、どうしてここにおいでになられたか、お話しください」

「昨晩、家に戻りましたとき、もうトニー・モーティマーとは結婚できないとわかりました」と彼女は言った。「それで今朝、その旨の手紙を書きました。彼はすっ飛んできて、あたくしに会いたいと言いました。あたくしは拒みました。会えばまた彼の意のままになってしまうとわかっていたからです。すると彼はメッセージをよこしてきて、話をするまで帰らないと言ってきました。それであたくしはパニックを起こしました。むりやりあがってこられては困りますので、あたくしは裏口から抜けだして、汽車でこちらまでまいりました。どういうわけか、先生ならあたくしが置かれた状況を理解なさっていただけて、お助けいただけると思ったからです。もちろん、あの人といえども、あたくしの頭にピストルを突きつけて、むりやり結婚させることはできません。それはわかっておりますが、

あの人はあたくしに大変な影響力を持っていますから、あたくしは自分の意に反してあの人と結婚させられてしまうかもしれません」

「そうですな」とタヴァナー。「われわれはアントニー・モーティマー師匠に対して思い切った手に出る必要があるようですね」

タヴァナーは彼女を二階に連れていき、マーティンと対面させた。二人はまる一分ものあいだ、黙ったまま見つめあっていた。それから彼女を婦長の手に預けた。

その晩、夕食が終わりかけたころ、私は呼び出された。とある紳士が秘書（私のことである）に会いたいという。はて誰だろうと広間に行ってみると、奇妙な目付きをした、背の高い黒髪の男性が私を出迎えた。

「呼び出したのはミス・ハラムなんですが」と彼は言った。

「ミス・ハラム？」私はそらとぼけて繰り返した。

「そう、そうですよ」と彼はどこか驚いたように言った。「ここではないのですか？」

「婦長に問い合わせてみましょう」と私は答えた。

私は食堂に戻り、タヴァナーの耳元でつぶやいた。「モーティマーが来てます」

博士は眉を上げた。「私が事務室で会おう」

私たちはその場に向かったが、客を入れる前に、タヴァナーがデスク上の読書灯の位置を変えた。博士自身の姿が闇にすっぽり隠れてしまい、実質的に見えなくなるようにしたのである。

それからモーティマーが通された。彼は格式ばった態度を保っていた。「私はミス・ハラムのご母堂になりかわり、令嬢の身柄を引き取りに参上した者である」と彼はほざいた。「私が到着した旨を令嬢に通知いただければ有り難い」

「ミス・ハラムは今宵は戻られませんよ。その旨を母上に電報で伝えてあります」

「ミス・ハラムの計画を聞いているのではない。私がここにいて、会いたいと言っていることを、彼女に知らせる気があるのかどうか、質問しているのだ。そちらに異論があるとは思わないが」

「ありますな」とタヴァナーが言った。「大いに異論がありますぞ」

「ミス・ハラムが私に会うのを拒んでいたのか？」

「それは聞いていない」

「それならば、いかなる権限をもってこのような態度に出るのだ」

「この権限によって」とタヴァナーは言い、左手で奇妙な合図をした。その人差し指には実に不思議な細工が施された指輪が嵌められていた。あんな細工は私も見たことがない。

モーティマーは飛び上がった。タヴァナーがピストルを突きつけたとしても、ここまで驚きはしなかったであろう。彼はデスクに身を乗り出し、影になった人物を確かめようとしていた。それから視線が指輪に移った。

「7＝4！」と彼は喘ぐように言い、一歩あとずさった。それから振り向くと、ドアのほうにこそこそ逃げていくと、ちょっとないような悪意と恐怖に満ちた一瞥を肩越しに投げた。彼はまちがいなく歯を剥き出し、唸っていた。

「兄弟モーティマー」とタヴァナーが言った。「犬は今宵、犬小屋に帰るぞ」

「さあローズ先生、二階の窓から見物としゃれようじゃないですか。あいつが本当にいくかどうか」とタヴァナーが言葉をついだ。

二階から、先程の客人がサースリーに出る砂だらけの道を進んでいくのが見えた。驚いたことに、彼は真っすぐ歩かずに、振り返って後ろを見ていた。

「戻ってくる気ですかね」と私が怪訝に思って言った。

「そうじゃありますまい」とタヴァナー。「さあ、見物ですぞ。なにやらはじまりそうだ」

モーティマーはふたたび立ち止まり、なにかに驚いたように周囲を見渡した。それから彼は格闘を始めた。なんだかわからないが、とにかく彼を襲撃しているものは、飛び掛かっているらしい。彼はそれを胸元から払いのけようとしていたからだ。続いてそれは彼の周囲を走りまわっていた。彼がゆっくりと体の向きを変えて、それに立ち向かおうとしていたからである。彼は一歩一歩道を進んでいき、やがて宵闇に呑まれていった。

「犬とはけなげなものですな。ご主人様を家まで送っておりますよ」とタヴァナーが言った。

翌朝、変死体がブラムショット近くで発見されたとの一報が入った。心臓麻痺による行き倒れであろうと考えられているそうだ。死体にはなんら外傷がなかったからである。

「六マイルですぞ！」とタヴァナーが言った。「いや、よく走ったものですな」

第四話　走りまわる男

タヴァナーが扱った症例のなかでも、特に忘れられないものとなると、これは飛行機乗りのブラックであろう。尋常の医師ならばブラックを癲狂院送りにしてけりをつけたであろうが、タヴァナーはある理論に基づいて二名の人間の正気をつなぎとめ、両者を救ったのである。

五月初旬のハーレー街の診察室、私は患者を診察するタヴァナーのわきでメモをとっていた。数名のヒステリー患者やノイローゼを専門医に回したところで、まったく違うタイプの人物が通されてきた。その男は健康そのものに見え、顔はアウトドアに親しんでいるかのように日焼けしており、およそ神経症という風情はなかった。しかし、その目を見ると、どこか普通でないのである。目の色がおかしい。心を病む者にありがちな脅えはないが、なんというか、獲物を狙う猟犬としか言いようがない代物だったのだ。

「頭が変になっちまいそうなんすよ」と外来患者が切り出した。

「どういうお悩みですかな？」とタヴァナーが質問した。

「仕事にならない。じっとしてられない。車で田舎をとことんぶっ飛ばす以外、なんにもできないんすよ。この免許、見てください」彼は裏面に山ほど書き込みがある免許証を見せた。「こんどつかまっちまえば、免停どころか、取り消しだ。ブタ箱にでもぶちこまれりゃ、罎のなかのコガネムシですぜ。頭ぶつけてくたばるしかねえすよ。動きまわってないと、気が狂いそうなんす。スピード出してるときぐらいっすね、落ち着けるのは。どこかに行ってるって思うと、安心できるんす。走って、走って、とことんくたばるまで走って、それから手近なパブに転がりこんで、寝る。でも、それが良くねえんですよ、夢見るだけでしょ。しかも夢がますます現実味を帯びてきやがって、それで目が覚めりゃ、いよいよ気が狂ったように走り続けるんです」

「ご職業は？」とタヴァナー。

「自動車競争と飛行機」

「もしかしたら、あのアーノルド・ブラック？」とタヴァナーが尋ねた。

「おれです」と患者が言った。「やれやれ、まだ自分の名前くらいは覚えてるぜ」

「最近、衝突事故を起こされたでしょう？」と博士。

「それで始まったんすよ」とブラックが言った。「それまでは大丈夫だったんだから。頭をボカリとぶつけちまったんだ、きっと。三日ほど意識がなくて、気がついたらこの有り様っすよ。ずっと変なんす」

私としては、タヴァナーがこの患者を断るのではないかと思っていた。通常の脳髄損傷などに彼は興味がないのだ。しかし、博士はこう質問した。「どうしてわたしのもとにおいでになった？」

「もうとことんヤバイんすよ」とブラック。「二、三のお医者にかかったんすけどね、どいつもこいつもボケナスで。実は一番トンチキなヤカン頭のところに行ってきたばかりなんす」彼は著名な医師の名前を出した。「一カ月入院して滋養を取れなんてぬかしやがった。それで道をうろうろしていたら、お宅の看板が目に入ったんすよ。こりゃ良さそうだってんで参上したんすけどね。いけねえすか？　おれみたいなのを商売にしてるんじゃねえの？　こちらはどの筋で？　ガキ向けっすか？　それとも老いぼれ専科？」

「そういった偶然でいらしたのなら、おそらくわたしの筋でしょうな」とタヴァナー。「さあ、あなたのお体の話をうかがいましょう。体の調子はいかがですか？」

「わかんないす」と患者。「全身トンマそのものって感じ」

「それこそは」とタヴァナー。「しばしば叡知の初期症状ですな」

ブラックは私たちに半分背を向けた。無理やり出していた元気がすっと消えてしまった。長いあいだ沈黙が続き、それから彼がボソボソとつぶやいた。

「恋に落ちてるみたいな気分なんです」

「それで、派手にひじ鉄をくらった？」とタヴァナーが水を向けてみた。

「いや、そうじゃない」と患者が言った。「恋なんかしてないですよ。ただ、そんな気分なんす。女なんかいないっす—ともかく、自分じゃそう思ってるというか—それでも、恋してる—怖いくらい—つまり、いない女に恋してるんす。遊びじゃないっすよ。まじ、もうこれくらいないってくらいにまじっす。誰か見つけて、そっちからも同じくらいに恋してもらわねえと、気が狂っちまう。どこかにだれかがいるにちがいないって感じてて、彼女が突然現れると思うんす。現れてもらわなきゃ、こまるんす」彼は口元を荒々しく引き締めた。「それで走りまわってるんすよ。次の角を曲がりゃ女が見つかるって気がするんで」

男の顔は震えていた。彼の両手が汗に濡れているのがわかった。

「お探しの女性の面影を、心に浮かべておられますか？」タヴァナーが質問した。

「はっきりとはしてないす」とブラック。「ただ、彼女の感じってだけっす。でも、会えばわかる。

それはいえる。そんな女がいるでしょうかねえ？　会える可能性はあるっすか？」彼は子供のような病的しつこさで私たちに訴えた。

「その女性が現在肉体を有しているかどうか、いまのところはなんとも申しあげられませんな」とタヴァナー。「しかし、その女性が存在していることは疑念の余地がないでしょう。さて、お話しください。この感覚を最初に得たのはいつですか？」

「最初にくすぐられたのは」とブラックが説明をはじめた。「入院騒ぎになった垂直降下のときっす。どんどん低くなっていって、速度もどんどん増して、こりゃぶつかるぞと思ったとき、なにか感じたんす。見たとは言えねえすけど、両眼を感じたっていうか、とにかく、そんな感じっす。わかってもらえっかな？　そいでもって、三日間生き死にしてから蘇ったら、恋に落ちてたわけで」

「それに関して、夢を見ますか？」とタヴァナーの質問。

「あれこれ見るっすよ。別段悪夢ってわけじゃない」

「その夢になんらかの共通性を発見されましたか？」

「よーし、おいでなすった。あるんすよ、それが。いつだって、ギラギラ太陽輝くなかで起きるんす。東洋的とはいえねえすけど、そんな感じ」

タヴァナーは患者のまえに水彩挿絵入りのエジプト旅行案内書を広げた。

「こんな感じですか？」と博士。

「わお！」とブラックが叫んだ。「これ、これ、これっす！」彼は挿絵を一生懸命見つめていた。しかし突然本を脇にどけた。「見てられない」と彼は言った。「見てると―その―」彼は自分のみぞおちに手をあてながら、比喩をさがしていた。「なんていうか、はらわたが落ちるみたいな感じがして」

タヴァナーは患者にもう二、三質問をした。それからさらに症状に変化が見られたらすぐに報告するよう指示を与えて、彼を帰した。いまの時点では治療が不可能だからというのが博士の言い分であった。私の経験からいうと、これは症例の心霊的検査を行うための時間が必要だという意味である。これこそはタヴァナーの得意技である。博士は訓練された直感を用いて患者の精神を探査するのであり、それは他の同業者が顕微鏡を用いて肉体組織を検査することと変わりがなかった。

時は金曜の午後であり、ブラックは最後の患者であったから、彼さえ帰ってしまえば、私は自由の身である。そこで私はハーレー街を歩きながら、週末をどう過ごそうかと思案していた。当てにしていた招待が没になってしまっていたのである。診療所の裏小路を近道していたとき、ブラックが車庫から車を出しているところに行きあわせた。彼も私に気づき、友人としての挨拶をしてよこした。

「よかったら、一発お楽しみのドライブとしゃれませんか？　いまから追っ掛けをやるんすよ。一緒にまだ見ぬ美女を狩り出すってのはどうすか？」

軽い口調でしゃべってはいたが、私は彼の魂の姿を目にしていたし、なにが起きているかも知っていた。私が申し出を受けたところ、彼は非常に喜んでいた。ブラックのおかげで友人があけてくれた穴も埋められたし、さらに私は彼と行動をともにすれば診察十回分以上の情報を得られるだろうと思ったのだ。

あのドライブは生涯忘れないだろう。彼は市内でこそ普通の運転をしていたが、郊外に出て宵闇迫りだすと、一変したのだ。彼は道路沿いの避難帯に車を寄せてはエンジンを停める。春の夕暮れの静寂のなか、私たちは耳をすます。それからブラックが運転席に立ち上がり、奇妙な叫び声をあげるのだ。鳥を呼ぶような、三節の短調の音である。

「いったいなにをしてるんだい？」私は尋ねた。

「わかんねえすよ」と彼は言った。「彼女が気づくかもしれない。ほんとのとこはわかんねえっす。とにかく、やんないよりはましでしょ」

彼は車を再発進させた。どうやら探求の旅が本気で始まったらしい。暮れゆく薄闇のなか、車は爆走していく。速度計の針がぐんぐん回っていく。両脇の生け垣が灰色のぶれと化していく。町も村も轟音をたてながら過ぎ去り、住人たちは幸運にも車を避けてくれた。車は急勾配を一気にのぼり、谷を飛礫のように下っていく。ほどなく丘陵の頂を走り抜け、英仏海峡の風が顔に当たりだす。ブラックは垂直に切りたった岬を走り、急ブレーキをかけた。ボンネットは遊歩道の柵に鼻面を突っ込んで

いる。その先は海であった。この車を制止させられるものは海以外にない、と私は確信した。ブラックはしばらく波打ち際を見つめていた。それから首を横に振った。

「また見失っちまった」と彼は言った。そして車をバックさせて舗道からはずした。「だが、今夜はいつになく彼女に接近できたぜ」

私たちは某ホテルで一泊した。翌日ブラックが私を送ってくれた。夕暮れ前についてほしいと私はさんざん言い張った。彼の夢の探求につきあうのはもうまっぴらだったからである。

帰還するや私はタヴァナーに自分の経験を報告した。

「これは興味ある症例ですな」と博士は言った。「それに、これはわたしの転生理論にもってこいの実例となってくれそうだ」

魂は現在までに多数の転生をへてきており、過去世の経験が現在の人格を形成する—これがタヴァナーの信念であった。現状に於いてなんら適当な原因が見つからない精神状態に直面した場合、過去世を調べるのが博士の習慣であった。調査法は実に不可思議なものであり、博士はその達人であった。タヴァナーとつきあいはじめて日が浅いころ、私はこういった過去世の記録は幻想にすぎないとおもっていた。しかしタヴァナーがこの理論に基づいて、個人の行動を予言するだけでなく、個人が身を置くことになる状況まで予言するのを目のあたりにしてからは、私も考えを改めた。輪廻転生という

古代東洋の不可思議な理論のなかに、われわれは人生の奇妙きてれつな謎に対する回答の鍵を多数見いだせるだろう。

「ブラックが前世のなんらかの影響を感じていると考えてるんですね」私は尋ねた。「そんなところでしょうな」とタヴァナー。「おそらく、きりもみ垂直降下が催眠的影響を与えたのですよ。それで前世の映像が蓄えられている記憶中枢の一部に入り込んだのですわ」

「彼はなんらかの鮮烈な過去体験を現世でやりなおしているんじゃないですかね」と私は言ってみた。

「それはちがうと思われますな」とタヴァナー。「もし二人の人間がお互いに強烈な感情を抱いたとします。それは愛でも憎しみでもいい。そうなると、この感情が両者を結びつける傾向があるわけです。もしこの結びつきが転生を繰り返すたびに更新されたなら、それはもう強力なものとなりますぞ。ブラックはあきらかにその種の結びつきを作っており、その牽引力を感じておるのです。通常、この種の記憶は静かに眠っており、相手が現れたときにだけ発動するのです。そういうわけで、われわれはこの世の秩序を台なしにする異常な愛憎を目撃できるのですわ。ブラックは垂直降下による催眠効果のために記憶を回復させてしまった。残るのは、どうやって問題を解決するかだけですわ」

「相手の女がこの世にいないとしたら？」

「そうなると、実にややこしいことになるでしょう」とタヴァナー。

「この世にいた場合は？」

「これまた、ややこしくなるでしょうな。前世に端を発するこの種の牽引力はとどまるところを知らんのです。ブラックは女を得るために車を暴走させ、十戒だろうが国法だろうが当て逃げするでしょう。落っこちるまで突っ走りますぞ」

「このあいだの夜は断崖ぎりぎりで停止しましたけどね」と私。

「そのとおり。そしていつかは停車もしないでしょう。問題は、異常な状態下にあるブラックが、この女の存在を感じていながら、場所を突き止められないことにあるのです。彼にとってみれば、女が全方向から同時にやってくるように思えるのでしょう。ローズ先生、これはわたしたちも行動に注意しなければなりませんぞ。まず、この女がこの世にいるかどうかを知る必要があります。それから、彼女の現在の身分を知る必要もある。皿洗い女かもしれないし、王女様かもしれないでしょうが。ブラックの祖母といってもいいくらいの年かもしれないし、いまだにおしめをつけてるかもしれない。ブラックにとっては、それは問題ではないかもしれませんがね。また、彼女がすでに結婚していたら、どうなります？　万が一、深窓の令嬢だったら、最悪でしょうが。あんな男を上流階級の家庭に放りこんだら、わたしたちはどえらい騒ぎに巻き込まれますぞ」

翌朝、タヴァナーは神変不可思議の術を用いて女の所在を突き止めたと私に通知してきた。彼女はこの世にいて、現在二十三才だという。

「さて、あとは様子見ですな」と博士。「遅かれ早かれブラックの途方もない欲求が二人を結びつけるでしょう。女のほうは牽引力を意識しているでしょうか、そこらが興味の対象ですわ」

数週間後、ティンドール夫人という女性が娘のエレインを連れてタヴァナーに診てもらいにきた。娘が妄想を患いはじめたという。部屋のなかに男がいると言い張って家中をたたき起こしたことが数回。誰かがあたしを呼んでいると想像し、夜に徘徊することもあったという。暗くなってから長いあいだ散歩をして、家から何マイルも離れた場所で疲れはて、なんらかの輸送機関を通じてしか帰宅できなかったこともあったらしい。

「記憶の欠落はないんですね」とタヴァナーが尋ねた。

「まったくありません」と娘が答えた。「あたしは自分のいる場所も、行動も完璧に把握しております。なにかなくしたような気分になって、それを見つけるまで落ち着かないんです。それで歩きまわってさがしてるんですけど―なにをさがしてるのか、わかりません。馬鹿みたいだって、自分でもわかってるんです。でも、ものすごく強い衝動なんで、思わず負けてしまいます」

「お部屋にいた“存在”というものに、なにか恐怖を抱きましたか？」

「最初は怖かったです。なにか変で、不気味だったので。でもいまは、なんていうですか、じらされてるみたいな感じです。思い出せない名前を思い出そうとしてるような気分、そう言えばおわかりになられます？」

「うちの療養院でお嬢さんをお預かりしたいですな」とタヴァナーが母親に言った。この点から見ても、博士がこの件をありふれた狂気と考えていなかったのは確かだった。

ほどなくミス・ティンドールがハインドヘッド療養院に落ち着いた。ここがタヴァナーの本部であり、ハーレー街の部屋は診察用なのである。私はこの娘が気にいった。とりたてて美人というわけではないが、品が良かったのである。

しばらくのあいだ、われわれの患者はごく普通の娘の生活を送っていた。しかしある晩、彼女は私のもとにやってきた。

「ローズ先生」と彼女。「夜の散歩がしたいんです。いけないでしょうか？　決して悪いことはしません。あたしは自分がなにをしてるのか、知ってます。けど、落ち着かないんです。動きまわって、とにかく野外に出なきゃいけない気がするんです」

私はタヴァナーに相談した。できるだけ患者の好きにさせるようにという博士の方針は私もわかっていた。

「なんとしても行かせてやってください」とタヴァナーは言った。「先生も一緒に行って、彼女の行動を見届けていただきたい。妙齢の女性ををひとりきりで荒野にさまよわせるわけにはいきませんからな。まあ、ほとんど危険はないと思っておりますけど」

ミス・ティンドールと私は暖かい春の宵のなかに出ていった。彼女は足取りも軽くどんどん進んでいくので、すぐに私たちは荒野のなかに分けいった。ハインドヘッドの丘陵に向かってのぼっていくのだが、歩調が早いためにかなりしんどい。松の木陰で私たちは休息した。

「耳をすましてごらんなさいな」と娘が言った。「なんて静かなんでしょう。先生は小鳥にお詳しいほうでらっしゃいます？　うちの近所には三音階で鳴くフクロウがいるんですよ。どこにいるかはまったくわかりませんでしたけど。日没からちょっとたつと鳴くのが聞こえるんです」

私たちは昔の馬車道と近代的な舗装道路が立体交差する地点を通過していた。眼下には殺害された水兵の記念碑があり、上のほうには絞首刑に処せられた人間の魂をなぐさめる巨大なケルト十字架が立っていた。はるかかなた、夜の静寂を破るように、フルスロットルの車がサースリー方面から接近していた。それが私たちの横を通過したが、ヘッドライトの眩光に続く影としか見えなかった。私はあの晩の海岸線のむちゃくちゃなドライブを思い出した。内なる地獄からスピードという手段で逃れようとしている苦悶の魂がほかにもいるのだろうか。

突如、よこにいた娘が私の腕をつかんできた。

「魂が体から引き離されそう」彼女はあえいだ。「渦に巻き込まれそうです。なんなの？　どうしたというの？」

私は一生懸命娘をなだめ、帰路についた。ミス・ティンドールはまったく困憊し、藪を見るたびにびくついていた。

突如彼女は立ち止まり、耳をすました。

「来るわ」と彼女は言った。

彼女も私もなにも見なかったが、私たちがふたりっきりでないことは私も実感した。　「このあたりにはジプシーが多いんだ」と私は言った。

「ジプシーじゃありません」と彼女が答えた。「あれは《存在》です。よく知ってるんです。警戒する必要はありません。まったく害はないのです。けれど、奇妙な感じじゃありませんか？」

彼女は口をつぐみ、私を見た。月の出の先駆けとなる光を浴びた彼女の顔は緊張していた。「あたしのほしいものがいます、ローズ先生。それがなにかわからないけど、あたしはあれがほしいんです。死ぬほどほしい、ほかになにもいりません。あれが手に入らなければ、あたしの一生はむだに決まってます」

帰宅してみると、タヴァナーが外出していた。ハインドヘッドの十字路で交通事故があったという。土地の医者が不在だったため、タヴァナーが電話で呼ばれたのである。博士はこの近隣の医療には手を出さないのであるが、救急治療となれば話は別であった。ミス・ティンドールはおやすみなさいを言って寝室にさがった。私は寝ようかどうか逡巡していたが、そのとき電話が鳴った。

「ローズ先生？」とタヴァナーの声がした。「そちらに男をひとり連れていきますから。外科治療用のベッドを準備しておいてください」

ほどなく家の外で車の音が聞こえた。私は急ごしらえの担架を降ろす手伝いをした。「またまた奇妙な偶然ですぞ」とタヴァナーが言ったが、片頬に懐疑的な微笑を浮かべていた。私は気づいた。私たちが担架で運んでいる男はアーノルド・ブラックであった。

「するとポーツマス街道で聞いた車は彼のものだったんだな」と私は叫んだ。

「まず間違いないでしょう」とタヴァナー。「彼はいつもの調子で突っ走っていて、十字路で運転をあやまり、土手に乗り上げ、薮に突っ込んだのですわ」

「操舵系がいかれちまったでしょうね」と私。

「あるいは、この男の頭も」とタヴァナー。

私たちは患者をベッドに乗せ、その晩のための準備をしていたが、そのとき看護婦が入ってきた。ミス・ティンドールが非常な興奮状態にあるという。私たちはブラックを看護婦にまかせ、娘の寝室に向かった。

ついてみると、彼女は寝台に身を起こしていた—看護婦の証言通り、確かに興奮していたが、まだ自分を見失ってはいなかった。

「あの《存在》です」と彼女が言った。「ものすごく強く感じるのです。目に見えるくらいに」

タヴァナーは部屋の光量を落とした。「それが見えるかどうか、試してみましょう」というのが博士の発言であった。

神秘家というものは一緒にいるだけで周囲の人間の心霊能力を刺激するものであり、そしてタヴァナーはなみの神秘家ではなかった。私個人はおよそ神秘家タイプではないのだが、星幽的存在が近くにいるとなれば、なんというか、鳥肌がたつのである。こういった感覚的な存在が出現すると、タヴァナーは修行を積んだ両眼を用いてその姿を私に語ってくれたものである。私も少し訓練をしてからは、目にこそ見えないが、その振動が発せられる方向ぐらいはわかるようになった。

暗くした部屋で待っていると、私はこの感覚を意識した。するとタヴァナーが叫んだ。

「ごらんなさい。ローズ先生でも、これは見えるでしょうが。物理的肉体から出たエーテル体ですぞ」

寝台上の娘のそばに、棺桶のような恰好をした灰色の霧のようなものが広がりつつあった。見る間にそれは形を取りはじめ、私の眼前で人間の姿の輪郭が生じた。徐々に特徴も明らかになった。それはアーノルド・ブラックの容貌を持つ銅色人種であった。

娘は肘をついて起き上がり、そばに立つ霊体に驚愕していた。それから彼女は一声叫び、灰色の霧を腕に抱こうと必死になった。

「来たわ—来てくれんだわ！」と彼女は叫んだ。「見て！　あたしには見える！　本物なのよ！」

しかし霊体はとらえどころがなかった。彼女の手は霧をつかむようにそれを通過してしまった。彼女は悲嘆の叫びをあげ、つかまえられない姿に追いすがろうとした。

「これはどういうことですか？」私はタヴァナーに尋ねた。

「つまり、こいつをもとに戻せなかったら、死亡診断書ものということですわ」と博士が言った。「あれはブラックのエーテル体です。まあ幽霊と呼んでも差し支えないですぞ。彼の生命力を乗せている精妙な体なのです。感情によって触発され、一時的に自由となり、欲していた目標のもとに現れたのですよ。つまり、前世で愛していた女の転生した魂のもとに。彼は星幽体という形で以前にもこ

こに来ていたようですな。彼女が《存在》と呼んでおったのがこれでしょう。しかしこれほど明確な形をとったことはなかったのです。これはつまり、ブラックが死に瀕しているということです。この灰色の姿をもう一度肉の宿に押し戻せるかどうか、やってみなければ」

タヴァナーは娘の肩に手を置き、注意をうながした。

「ついてきなさい」と博士は言った。

「これをほってはおけません」と彼女は答え、寝台上の灰色の姿をかきあつめようとしていた。

「これはあなたについてきますよ」とタヴァナーが言った。

娘はおどおどしながら立ち上がった。私は彼女の肩にガウンをかけてやり、タヴァナーは扉を開けてやった。彼女が先に行くと、灰色の霧はゆらゆらと漂いつつも、彼女のそばに漂っていた。霧はもはや水平に広がっておらず、直立しており、隅をつまんでぶらさげたシーツのようであった。娘は先頭にたって通路を進んでいった。ブラックが寝ている部屋の扉に手をかけると、ためらい、それから室内に入った。

わずかな明かりに照らされたベッド上の男を目にして、彼女は当惑し、思わず数歩さがった。

「あ、あの—失礼ですけど」彼女はくちごもり、部屋から出ようとしたが、タヴァナーの手で前に押しやられた。博士は扉を閉めた。

タヴァナーは娘をやさしくベッドのほうに連れていった。「この男性と以前にお会いになったことは？」博士は尋ねた。

「ありません」と彼女は答えながらも、枕上の強張った顔を眺めていた。なにか奇妙な魅力を感じているようだった。

「胸に手をあてて、自分に正直になりなさい。ご自分の魂と向かいあってごらん。さあ、この男性はあなたにとって、どういう存在ですか？」

タヴァナーの意志力が娘に対して強権を発動した。現在のうわべの人格が彼女から剥離した。幾つもの時代をへてきた大いなる自己がうごめき、目覚め、一時的に彼女の小さな人格をオーヴァーライドした。

男の生命と二つの魂が天秤にかけられている。そしてタヴァナーは娘にその解決を強制していた。

「心の深いところを覗きこみなさい。さあ、この男性はあなたにとってどういう存在ですか？」

「すべてです」

娘は男を直視した。呼吸は徒競走を終えたばかりのように乱れていた。

「彼に対してなにをしてあげるつもりですか？」

「すべてです」

「誓いを立てるまえに、よくお考えなさい。あの魂を肉体に戻しても、あなたが義務を果たさないのであれば、あなたは大変重い罪を犯したことになるのですぞ」

「果たすも果たさないもありません」と娘が答えた。「あたしよりずっと強いなにかが無理にでも果たさせるのです」

「では、魂に命じて肉体に戻らせ、もう一度生きるように言いなさい」

「彼は死んでいるのですか？」

「まだです。しかし彼の生命は糸一本でつながれているに等しい。ごらんなさい、見えるでしょう」

私たちは見た。銀の紐のようなものが灰色の霊体とベッド上の肉体をつないでいるのがわかった。

「どうやったら肉体に戻せるのですか？」

「肉体に精神を集中しなさい。そうすれば彼は肉体に引き付けられ、帰還する」

ゆっくりと、ためらいつつも、彼女は無意識の男に身をさしのべ、打撲・骨折した肉体を腕に抱いた。すると見る間に灰色の漂う霧が接近し、徐々に肉体に吸収されていったのである。

六週間後、ブラックとエレイン・ティンドールは療養院から教会に向かい、それからハネムーンへと旅立っていった。空き缶を引きずっていく車は、薮から引きずり出したあのレーシング・カーである。操舵系には異常がなかった。

二人の旅立ちを見送って帰宅したあと、私はタヴァナーに言った。「こういってはなんですが、先生、大方の連中は言いますよ。先生はたまたま妄想が一致した狂人二人を結婚させたと」

「そして大方の連中なら二人を癲狂院送りにしただけだっただろう」とタヴァナーが返答した。「わたしがやったことは、単に二つの大いなる自然の法則の作用を認識したにすぎない。そして先生はその結果をごらんになったでしょうが」

「どうやってこの話をつなぎあわせたのですか？」私は質問した。

「結構単純でして」とタヴァナー。「人間性と同じくらい単純なんですな。わたしの手法はご存じでしょう。われわれは多数の生を送り、思考を通して互いに影響しあう。これがわたしの信念ですわ。一般常識ではかたがつかないとき、この信念がしばしば解決の光明を与えてくれるものですぞ。

「さてブラックの件を例にとりましょう。普通の医者なら、彼の潜在意識がいたずらをしていると診断するでしょう。まあ、そうかもしれません。そこでわたしは手間をかけて、彼の前世をいわゆる

《アカシア記録》から読み取るわけです。ここにはあらゆる思考が記録されておるのです。わたしの発見しところでは、ブラックは過去何回かの転生に於いて、とある異性と関係を持っておりました。そして最近の転生に於いて、ちょっと悪乗りしてしまったのですわ。なにせ彼女が王家の王女様で、彼は傭兵にすぎなかったというのに、愛を得ようとちょっかいを出したわけです。

「身の程知らずの報いというわけで、彼は王宮のてっぺんから放りだされ、中庭の敷石に激突してあの世いきさせられました。これでおわかりでしょう。きりもみ垂直降下のために古い記憶が目覚めてしまったわけですな—彼は以前にも墜落死したことがあったのですよ。エジプトの絵を見たとき、彼は“はらわたがおっこちそうだ”と言ったのも理解できるでしょう。この事件が起きたのはエジプトで生きていたときのことだったわけです。現在、エジプトでの過去世を有しておる人々が非常に多く生活しておりますわ。おそらくわれわれはある種の回遊周期に行きあわせておるのでしょう。

「また、ブラックがあれほどスピードを愛したのも納得がいきます。彼が求める魂と最後に接触したときの記憶がうっすらと蘇っていたのですわ。空中に放りだされた時点まで後戻りできれば、求める女の手掛かりが見つかると思っておったのです。最後に彼女にあったときの環境というか状態というかを究極まで再現しようとしておったのですな。

「以前にお話ししたように、記憶が蘇り、ブラックは前世で契った女を探す旅に出たのですわ。そしてわたしは神秘玄妙なる記録を調べた結果、二人が再会するのは時間の問題だとわかったのです。となれば、彼女もまた過去を思い出し、彼と結婚できるようになればよい。わたしは心底願っており

ましたよ。そうでなかったら、それはもう厄介なことになると前に申し上げたでしょうが。こういった霊的な絆は地獄ですからね。

「さてさて、先生はいかなる偶然でエレイン・ティンドールがわたしのもとに連れてこられたのか、怪訝に思っておいでですな。お話しした通り、二人の行く道がいずれ交わることを、わたしは知っておったのです。まあどういうか、わたしは彼らの交差点に自分を精神的に配置した、とでもいいますか。結局のところ彼らはわたしに乗り上げたようなものです。となれば、彼らを港に向かって舵をきらせるのは、わたしの特権といえましょう」

「しかし、ミス・ティンドールとその妄想は一体どうなるんです？」と私は質問した。

「先生には、あれが行かず後家にありがちの狂気と思われたのでしょう。いかがですか？」とタヴァナー。「しかし、あの娘の自覚と恐怖心のなさを見て、これはなにかちがうとわたしは睨んだのですわ。自分の妄想に対して、彼女は実に毅然かつ非個人的態度をとっておりましたからね。そこでわたしは彼女にハインドヘッドに来てもらうよう手配をし、彼女が見たものがわたしにも見えるかどうか、試しておったのです。

「なにが見えたのかは、先生もご存じでしょう。あれは事故のショックで体から、いわば遠心分離されたブラックです。それが強力な欲求のために彼女のもとへ引き寄せられたわけです。それほど珍しい現象じゃありませんぞ。わたしはしばしば見ております」

「どうやってブラックに肉体に戻らせたのですか？　いや、その、肉体から出ていた、とすればの話ですが」

「エレインが彼の肉体に触れたとき、ブラックの魂にもわかったんですよ。肉体のなかにいれば彼女に会えると。そこで彼は肉体に帰還しようとしたのですが、生命力自体がかなり弱っておりましたから、うまくいかなかった。あの娘が彼を腕に抱かなかったら、おそらく死んでおったでしょうな。しかしあのとき、ブラックは彼女の生命力を借りて、自分の生命力をある程度まで回復させられたのですわ」

「なるほど心理学的な結末はぼくにもわかりました」と私。「しかし、あの二人が出会った偶然というものを、どう説明されるのですかはてなどうしてミス・ティンドールは落ち着きをなくしてポーツマス街道のほうに向かう必要があったのでしょうか、しかも、ブラックの通過とぴったり時間を合わせるように？」

タヴァナーは暗い空にちょうど姿を現しはじめた星々を見上げた。

「星に聞いてきただきたい」と博士は言った。「古代人はホロスコープを作成する際、なにをやっているのか、よく知っておったのですよ」

第五話　牧神の娘

持ち込まれた名刺を目にすると、タヴァナーはこう言った。「ローズ先生、もし州当局がわたしを召喚するというのなら、わたしはこの店をたたんでシャッターに“イカボデ”と張り紙しますよ。もはや栄光は去りけりというところですからね。一体全体、この女性はわたしになんの用があるというのですかね？」

タヴァナーはその治療法と療養院もろとも、この近辺の上流階級から白眼視されていたし、博士のほうもハシカや流感を診察する気がなかったから、私たちは隣人たちとほとんど接触がなかったのである。博士が深い学識と洗練された国際性を持ち合わせていることなど、田舎の茶会ではなんの役にもたたない。こういった場所では、いかに他人に不快感を与えないかが人物判断の基準である。

細い腰をした、くちびるの薄い女性が部屋に通されてきた。整然と波打つ黄金の髪、完璧ともいえる白磁の顔色は、女中の優秀さと化粧に費やされた心配りを物語っていた。体型にあった服のためではなく、むしろ服に合わせた体型というべきで、実に流麗な曲線を誇示している女性であった。

「ご相談申し上げたいのは」と彼女が言った。「うちの末娘のことでございます。わたくしどもにとりまして、あの子はそれはもう悩みの種でございます。精神がきちんと育っていないように思いまして」

「症状はどのようなものですか？」とタヴァナーがきわめて職業的な口調で言った。

「いつも難しい子供だったでございます」と母親が言った。「大変面倒をかけてくれました。他の子供とはまったくちがうのです。結局わたくしどもはあの子を普通に育てるのはあきらめまして、特別の家庭教師をつけ、お医者さまの監督下におきました」

「無論、厳格な躾をなさったわけですね」とタヴァナー。

「もちろんでございます」と客が言った。「それはもう、気をつけております。してやれることはすべてしてやりました。失礼ながら、費用もばかにはなりません。おかげさまで、ある点まではなんとかうまく運べたように思っております。発作というんですか、ひどい癇癪を起こすことは事実上なくなりました。この一年ほど、それはございません。しかし、成長がとまってしまったように思われるのでございます」

「意見を申し上げる前に、お嬢さんとお会いする必要があります」とタヴァナー。

「車で待たせてございます」と母親。「連れてまいりましょう」

娘は家庭教師に連れられて入室してきた。家庭教師というのが、見るからに優秀な躾専門の教官というこわもての女性である。どちらかといえば、旧プロシア帝国の訓練担当軍曹にでもなったほうが向いていただろう。娘のほうは実に不思議な研究対象といえた。異常なまでに母親に似ているのである。同じような細身の姿であるが、母親のほうが角張った体型を人工的に詰め物しているのに対し、娘はかかしが風呂敷かぶったような感じであり、まるで服のなかで眠っているかのように見える。ぼさぼさの、鼠のような色の髪は側頭部で油ぎったとぐろを巻いている。顔は土気色で、目は魚のようであった。どこかおどおどした様子と、だらしなく広がった手足のために、なんとも見苦しい姿であった。

母親と家庭教師のあいだに這いあがり、ソファにちょこんとすわった彼女は、どうみても重度の知恵遅れであった。その彼女の面前で、あたかも彼女が物体であるかのように話しあっている二名の女性は、別の種類の生物に見える。

さて私は、知恵遅れの人間に接しても、かわいそうだとは思わない。かわいそうなのは家族のほうである。しかし、今回に限っては、眼前の娘のほうがかわいそうだと思った。彼女はみすぼらしいペットショップの店先で篭に閉じ込めているヒバリを思わせた。羽毛は泥にまみれ、檻にぶつけて折れていて、無気力、不健康、惨め、飛べないゆえに歌わないといった風情である。この娘が元来どういうふうに育とうとしていたのか、もはやそれはわからない。二名の熱心な躾の鬼に完璧に虐げられ、挟み撃ちにあってしまったため、もともとの素材はなにひとつ残っていない状態であった。彼女の性格が気にいらないので、鬼たちはそれを効果的に制圧してしまったのだが、悲しいかな、かわりに押

し込む性格があるはずもなく、残ったものは魂が宿っていない自動人形だけだったのだ。そこで鬼たちは人形を精神科医から精神科医へ引きずり回し、なんとか修理をしようとむだな努力を重ねているのである。損傷の原因となった環境はそのままにして。

こんなことを考えていると、私は母親の声でわれに返った。どうやら母親は、みにくいアヒルの子に関しては倹約の精神を重んじているらしく、タヴァナー相手に抜け目なく報酬交渉をしているのである。そして博士も、自分の仕事の経済面よりも人道面により興味を引かれる性格のため、母親の値切りに大幅に譲歩していた。

「タヴァナー先生」私は連中が去るやいなや、ねじこんだ。「あんな金額じゃ、患者の食費も出ませんよ。まして診察料どころの騒ぎじゃない。あいつらは貧乏人じゃないですよ。あの車を見たでしょう。あたまにくるなあ！　しこたま前払いさせたらどうです」

「やれやれ先生」とタヴァナーが苦笑しながら言った。「わたしたちはあの家庭教師よりも高い料金を取るわけにはいかなかったのですよ。さもないと仕事が貰えない」

「あんな値段で引き受けるほど価値がある仕事なんですか？」と私はかみついた。タヴァナーのような好人物が買い叩かれるのは見てられなかったのだ。

「それはなんとも言いかねますね」と博士が答えた。「あの連中は丸い穴に四角い杭を本気で打ち込んでしまって、おかげで杭を割ってしまったのですな。しかしどの程度割れたのかは、穴から抜い

てみないとわからないのです。ところで、先生、われらの新しい患者にどういう印象をお持ちになられましたかな？　第一印象というやつが、おおむね一番真実に近いのです。彼女を見て、先生の心中にはどういう反応が生じましたか？　心理的な症例の場合、そういったところが最良の手掛かりとなるのです」

「あの娘は人生をあきらめているみたいですね。つまらない仕事だと、投げているみたいです」と私が答えた。「彼女はみっともない代物ですけど、嫌悪は感じないです。かわいそうだというんじゃなくて、うん、わかるわかるという気分になりました。憐憫じゃなくて、共感ですか、うまくいえないけれど、少しちがうんです。うまい言葉が見つからないですね」

「いや、うまいうまい、見事な描写ですぞ」とタヴァナー。「憐憫と共感の差異というやつが、今回の場合の試金石でしょう。わたしたちは、自分とちがうものには憐憫を覚えます。しかし、ひとつ間違えば、自分もああなったかも知れないと思うとき、共感を覚えるのですよ。先生はあの魂に親近感を覚えられた。それは、外見こそあのざまですが、彼女は《われらのひとり》だからです。成長過程で阻害されたのです」

「しかも、かなりきつくやられたようですね」と私が言葉をついだ。「あの連中が貧乏人だったら、これは児童虐待防止協会ものですよ」

「それは違います」とタヴァナー。「動物虐待防止協会のほうでしょう」謎のコメントを残すと、博士は去っていった。

翌日、ダイアナという不似合いな名前をつけられた新しい患者が現れた。見たところ十五歳程度であるが、実はもうすぐ十八歳である。痩せて、薄汚く、見苦しく、暗い雰囲気の彼女は、早い話、手荒い取り扱いを受けたために、人目を盗んででたらめをやる犬のようであった。彼女がうちの療養院の社交的雰囲気にとってプラスの存在でないことはたしかであったから、タヴァナーが彼女を隔離したとしても、不思議ではなかった。しかし博士はその気がないらしく、彼女に監督すらつけずに、完全な自由を与えたのであった。束縛の不在に慣れていないため、彼女はどうしてよいかわからないらしく、こそこそ逃げまわっていた。なにか間違ったことをすれば、すぐに怒りの鉄拳が飛んでくるとでも思っていたのであろう。

私たちの新しい患者は事実上、放置されたに等しかった。この件に関してはいろいろおっしゃりたい向きもあろう。また彼女が療養院の評判を上げる存在ではないことも確実であったが、私はタヴァナーの狙いを理解しはじめていた。まったく自由意志で行動していいようになったため、彼女は自分のレヴェルというものを発見しはじめたのである。食物が欲しいなら、食事時前後に食堂に行かなければならなかったし、手が不快なまでにべとつきはじめたら、洗うしかないとわかったのである（彼女が手を洗っている現場を見たことはなかったが、タオルに残った痕跡からそれを察知できた。手を見ただけでは洗ったかどうか判別できないのである）。これに加えて、彼女は自分の周囲で起きていることに注意を払い、その意味を考えるようになった。

「彼女はもうすぐ自我に目覚めますぞ」とタヴァナーは言った。「そうすれば、わたしたちは原始的な野獣が自らを文明社会に適応させていくさまを目撃できるでしょう」

ある日、私たちは怒り心頭に発した婦長に呼び出され、ダイアナの巣に向かった（彼女が二十四時間占拠した空間はとうてい部屋とは呼べない状態になるのである）。廊下をわたっていくと、強烈な焼け焦げの匂いが鼻をついた。いざ目的地に到着してみると、私たちが目にしたものは、問題の若い女性が暖炉のよこでシーツにくるまりあぐらをかいていた。そして彼女の私物がすべて暖炉内で炎と化していたのである。

「どうして服を燃やしてしまったのかね」とタヴァナーが尋ねた。まるでこの興味ある無害な奇行が日常茶飯事であるかのような口ぶりだった。

「きらいなんだ」

「なにがいけなかったのかな？」

「これは“あたい”じゃない」

「遊戯室までついてきなさい。舞台衣装をひっくりかえして、きみが好きそうなものをさがしてみよう」

私たちは遊戯室へ向かった。ダイアナはシーツに身を包んだまま、長身のタヴァナーの後ろから裸足でペタペタついてきており、ぷりぷり怒った婦長がこの滑稽な行列のしんがりをつとめていた。私はミス・ダイアナのお遊戯相手をつとめる気がさらさらなかったので、一同はほっといて、テナント

という男性患者を見にいった。彼は世にもおぞましい存在なのだ。普通のときはいいやつなのだが、これまで何度も自殺未遂を引き起こしており、家族の手でうちに送り込まれたのである。彼らにしてみれば、精神病認定をして癲狂院送りにするかわり、彼に自主入院という形を選ばせたのであろう。普通の意味では狂人とは呼べない患者であったが、極めて希有な厭世病の症例といえるだろう。ようするに生きる気力がなくなっているのである。背後にどういう悲劇があったのか、私たちは知らなかった。精神分析医とはちがい、タヴァナーはまったく質問をしなかったからである。博士は得たい情報を調べる独自の方法を有しており、精神分析なる不細工な方法論を心から軽蔑していた。

さて部屋についてみると、驚いたことに、テナントは楽譜の山をひっくりかえしていた。私は二、三質問をして、彼が音楽愛好家であるばかりでなく、音楽で身をたてるべく本気で勉強していたことを聞き出した。これは私たちにとっても初耳であった。彼の入院に際して、家族はこの方面のことをなにも教えてくれなかったのだ。彼らの説明では、テナントは食うには困らなかったが、人生を楽しめるほど金がなく、結局は運命を甘受しているうちに憂鬱症になったのだとのこと。

タヴァナーと私は毎晩夕食後、事務室で葉巻をふかしながら報告半分おしゃべり半分の会話に興じることにしている。私はこのとき博士にテナントの件を話した。「そうですか」博士は言うと、立ち上がってテナントの部屋にいき、彼を連れてきて、ピアノの前にすわらせ、なにか弾くように命じた。テナントは背中をぽんと押されて弾きはじめたが、まるでゼンマイ仕掛けの自動人形みたいな感じで、一定時間だけなめらかに、しかしなんの感情もこめずにポロポロと弾くのである。私には音楽的セン

スはないが、それでも彼の手風琴のような演奏にはがっくりさせられた。その場にいた患者数名は自室に逃げ込んでしまった。

一曲弾きおわると、彼はもう弾くそぶりもみせず、ただ身じろぎもせずすわっていた。タヴァナーもまた黙ったまますわっていて、患者が次になにをする気か観察していた。これが博士のやり口なのである。テナントはゆっくりと回転椅子をまわして鍵盤に背を向け、私たちと顔を合わせた。両手は力なく膝のあいだに挟まれ、ただじっと足元を見ていた。彼は三十五才かそこらの老けた男であった。髪は鉄灰色で、顔には深い皺があった。額は狭いが横幅があり、くちびるは太く、口自体も大きい。かなり離れた両眼は、たまに大きく見開かれるとき、非常にきらきらと輝くのである。しかし、私の興味を引いたのは、彼の耳であった。それまで気づかなかったのだが、婦長が電動バリカンを手に彼を襲ったらしく、両耳が見事に外気にさらされていた。彼の耳は、肉渦の配置の結果であろうが、頂点が少し尖っていたのである。それを見ると、私は、ホーソーンが書いた大理石の牧神とその小さなとさかのある耳の話を思い出した。

私がこの発見をしているとき、テナントはゆっくりと視線を上げて私たちを見た。彼の両眼は奇妙に輝く動物的なものであった。光の反射の具合だろうが、緑色に輝いているのである。まるで夜の犬の目であった。

「部屋にヴァイオリンがある」と彼は抑揚のない声で言った。

それは彼が見せた最初の自発的行動の兆候であった。そこで私はすぐに彼の楽器を取ってきてやった。タヴァナーが音合わせのためにピアノから一音与えてやったが、テナントはそれを無視して、自分の好きにチューニングしていた。どうやら、彼しか知らない音程のようである。演奏がはじまると、ひどく単調な音のように思えたが、数分たつと私たちの耳も奇妙な音程に慣れてしまった。そして、少なくとも私にとっては、その音程が異常なまでの魅力を及ぼしはじめたのである。

その魅力は別の人間にも及んだらしい。いつ忍び込んだのか知らないが、部屋の隅の暗がりから、ダイアナが這い出してきたのである。一瞬だれだか、私にはわからなかった。今朝以来、彼女は大変身を遂げていたからである。舞台衣装をひっくりかえした結果、彼女は短い緑色のチュニックを選び出していた。『真夏の夜の夢』のパックのための衣装である。何者かが（後日タヴァナーと知れた）彼女の髪をボブカットにしていた。ぎざぎざ縁のチュニックから伸びる緑色のタイツが、彼女のすらりとした長い足をあらわにしていた。どういうむちゃくちゃな想像力のなせる業であったか、私は小学生時代を思い出してしまった。ヴァイオリンの音色がかもしだす鴎や雷鳥の鳴き声、風すさぶ荒野に生きる生物たちが互いに交わす呼び声に聴き入っているうちに、いつの間にか子供のころの兎狩りを思い出してしまったのだ。雨風に追われながら体をほてらせ、風呂に飛び込み、更衣室で大騒ぎをしながら着替えする。瞬間、音楽の魔法にかけられて、あの頃の力感と権威がふたたび私の五体を満たした。私は学校のガキ大将だったからだ（現在医者としてはただの一兵卒である）。私はふたたび兎狩りの大将となり、見込みのありそうな新入生を目ざとくさがしている。すると一瞬で、私の心を遠い過去に引き戻した連想のもとが見つかったのである—緑の長靴下に包まれた長い脚は、ランナー

の脚だったのだ。筋肉の付き具合といい、すねの長さといい、すべては速力と跳躍を意味しているではないか。彼女は縁談好きのおせっかいババアにとっては前途有望な存在ではないであろうが、兎狩りの大将にとっては、もう垂涎の存在であった。

婦長が復讐の女神ネメシスのごとき形相でドアのところに出現した。消灯時間はとっくに過ぎていることを、私たちが音楽に夢中になって忘れていたからである。彼女は私を非難の目で睨んだ。彼女と私は普段、共同戦線を張って規則の順守にあいつとめていたのだが、今夜の私は反抗的な悪ガキのような気分であり、テナントやダイアナと一緒になって法と秩序に対する大胆不敵な脱線行為をやってみたかった。

この妨害のために部屋の雰囲気が一変した。一瞬ダイアナの目が光ったので、私たちは、噂には聞いていたがいまだお目にかかったことのない彼女の癇癪を拝めるのではと思った。しかし彼女の眼光はすぐに普段の死んだ魚の目の色になってしまった。みっともない女浮浪児としてのダイアナは、権威筋の命令にしたがって、よろよろその場を去っていった。

しかしテナントはしばらくその場で抵抗していた。どこか丘の上にある、心の牧場で自由を満喫していたのに、突然呼び返させて、頭に来ていたのである。しかし私が腕をとり、婦長が耳元で命令を出すと、テナントはすぐに普段に戻った。そして彼もまた、婦長が巻き起こした引き波にさらわれていったのである。

「あの女、くたばっちまえ！」とタヴァナーが窓を閉めながら言った。「この仕事には百害あって一利なしだ」

私は雨戸を閉めるべく外に一歩でたが、敷居のところでたじろいでしまった。

「やれやれ、タヴァナー先生！」と私は叫んだ。「この匂いを嗅いでくださいよ！」

博士もテラスに出てきた。私たちは一緒に花咲く庭の芳香を胸一杯に吸い込んだ。芝生は霜が降りていて、三月の夜風は鋭く吹いているというのに、大気は花の香りに満ちており、陽光を浴びた松の香りまでがしのばれるのである。蔓草の影でなにかが動いたかと思うと、大きな野兎が飛び出してきて、私たちのよこを砂利を跳ね上げながら突っ切って、向かいの潅木に身を隠した。

「なんなんだ」と私は叫んだ。「なんでまた兎がこんなところに来たんだろう？」

「いや、実際なんででしょうか？」とタヴァナーが言った。「それがわかれば、もっと重要なこともわかりますぞ」

私は自室に入るか入らないうちに、ドンドンというノック音で呼び出された。扉を開けてみると患者の一人がパジャマ姿で立っている。

「テナントの部屋の様子がおかしいですよ」と患者が言った。「首でも吊ろうとしてるんじゃないですか」

われらの患者は正しかった。テナントは自分のガウンのベルトをカーテンレールに掛けて、首を吊っていたのだ。私たちはベルトを切って彼を降ろし、一生懸命人工呼吸を施してなんとか蘇生させた。このため、タヴァナーでさえ、彼に対しては二十四時間監視体制をもって望むしかないと確信したのであった。

翌日、看護士を呼ぶことが許可されたが、彼を連れてきた列車は帰りに婦長を連れていくことになった。彼女はずいぶんと傷ついており、タヴァナーが与えた気前のいい小切手も、素晴らしい紹介状も、突然理由も告げられずに即日解雇された彼女を慰めるものではなかった。

こういった出来事は精神病院では三日もたつと忘れられてしまう。私たちは翌朝には通常の日課に落ち着いてしまった。しかし、私の脳裏からは鴎の鳴き声のようなヴァイオリンの調べと花々の不思議な香りがどうしても離れなかった。この二つは一緒になって現れ、なんとも微妙な手口で私をそわそわさせ、邪魔するのである。春はまだ遠かったが、春先のうきうきした気分が私につきまとっているのである。私は事務室の蒸し暑さに耐えきれず、フランス窓を大きく開け放ち、冷たい風が顔にあたるようにした。そうして私は午後の集配に間に合うように、通信事務と格闘したのである。

こういう状態のときにタヴァナーに見つかってしまった。博士は私をしげしげと眺めていた。

「とすると、先生もお聞きになったのですな」と博士は尋ねてきた。

「なにをですか？」と私はいらつきながら返事をした。どういう理由でかわからないが、私の癇癪は破裂寸前だったのである。

「牧神の呼び声をですよ」と博士は言うと、外の風を締め出した。

「外出してきます」と私は宣言し、最後の郵便物をかきあつめた。ありがたいことに、タヴァナーはなにも言わずに頷いてくれた。

どういう魔がさしたのか知らないが、私はラウンジのソファで丸まっているダイアナを見つけると、まるで犬でも呼ぶかのように声をかけたのである。「おいで、ダイアナ、走りに行こう」。すると彼女は犬のように身を起こし、ついてきた。彼女が心は子供でも年令からいえば十分に女性であることも忘れていたし、彼女がコートも着ていなければ、帽子も長靴も着用していないことも忘れていた。もっとも私も着ていなかったのである。とにかく私は彼女を連れて露をしたたらせる潅木を抜け、庭の門に向かった。

砂だらけの道は郵便ポストのところで途切れ、その先はヒースの茂る荒野であった。ダイアナはおずおずと芝生の外れまで進み、そこで私を振り返った。それは走ろうとねだる犬の行動そのものだったため、私もそういう錯覚を起こしてしまった。「おいで、ダイアナ」と私は叫んだ。「ひとっ走りするぞ」

私は彼女について道を駆けおりた。彼女はジャンプ一番、荒野を疾走していった。私たちはこれ以上ないというほど必死に走り、湿った黒土を蹴ってゆらめく霧のなかへ入っていった。私は目の前の姿を見失わずにいるだけで精一杯だった。彼女は鹿のように走り、私があくせく苦闘する場所もひとっ跳びしていくからだ。

私たちはかつて湖底だったと思われる平坦な草原を一直線に駆け抜け、デヴィルズ・ジャンプスを目指した。私が呼吸ペースの調整に手間取っているあいだも、前をゆく彼女は跳びはねながら速度を落とさなかった。彼女は小丘陵を上りはじめたところで若干スピードダウンし、私もなんとか追いつくことができた。彼女は上りきったところにある小さな松の根っこに足をすべらせ、子犬のように転がりながら落ちてきた。私はじたばたする緑色の脚につまずき、やはり転落してしまったが、なにせ体が重いため、ついに息切れしてしまった。

私たちは身を起こして喘いでいた。それから互いを見つめあい、声を合わせて大笑いした。ダイアナが笑うのを聞いたのはこれが最初だった。彼女の瞳は猫のそれのような緑色であり、白い歯並びとかわいいピンクの舌を見せていた。人間的ではないが、とても魅力的だった。

私たちは立ち上がり、荒野を越えて帰路についた。それから女中たちがお茶を飲んでいるあいだに、皿洗い部屋の扉からこっそりなかに入った。この件に関しては、なにかいけないことをしてしまったような気分だったので、誰にも見られていなければよいがと心底願い、またダイアナがしゃべらないことを神に祈った。

幸いしゃべるなどということは彼女の習慣ではなかったが、彼女は無意識のジェスチュアという言語の達人であったため、あっという間に療養院の津々浦々に、私とダイアナのあいだに理解が生まれたと知れ渡ったのであった。私が現れると彼女の緑の目が光り、鋭い白い歯とピンクの舌を見せるのである。もし彼女にしっぽがあれば、それを振っていたであろう。私はこれすべてにかなり狼狽させられた。

翌日、タヴァナーと一緒に気分転換を兼ねて郵便物を取りにいったとき、ダイアナがすぐ後ろからついてきた。

「おやおや、先生の愛玩犬じゃないですか」とタヴァナーが言った。私はなにやらリビドー転位と性的成熟の早期停止についてつぶやいた。

タヴァナーは笑った。「いやいや先生」と博士。「彼女は先生と恋に落ちるほど人間になりきっておりませんよ。ご心配には及びますまい」

道はずれまで来ると、ダイアナは前日の戦術を繰り返した。

「彼女はなにを要求しておるのですか？」とタヴァナーが質問してきた。自分がまごついて赤面しているのがわかった。するとタヴァナーが興味深そうに私を見るのである。

「ぼくと一緒に走りたがっているんですよ」と私は言った。この場合、真相を話すしかないと思われたし、タヴァナーなら理解してくれるだろうと思ったのだ。

タヴァナーは理解してくれた。しかし博士の返事は質問よりも狼狽させられるものだった。

「ふむ、いいじゃないですか」と博士。「一緒に走っておやりなさい。二人にとっても、良いことですよ」

私はためらった。しかし、いやだと言っても博士は受けつけないに決まっているから、私は博士の御意を承り、ドスドスと走りはじめた。しかしダイアナには違いがわかったようである。前日は深いところで呼び掛け合ったから走ったのであるが、今日の私は自分の心を偽っている。だから彼女は一緒に走ろうとしないのである。かわりに彼女は私の周囲を小走りに動き、困ったような目で私を見るのである。ピンクの舌は悲しそうな口元に隠れていた。私の心はタヴァナーと自分とすべてのものに対して怒り狂った。なにもかもがいやになり、私はフェンスを飛び越え、潅木を走り抜け、自室に避難して、夕食時まで一歩も出てこなかった。

食事時、ダイアナは奇妙な緑の瞳で私を見つめ、まるでこう言っているようであった。

（これであたいがずっとどんな気持ちだったか、わかったでしょ）

そして私もテレパシーを送り返した。

（わかったとも。どいつもこいつもくたばっちまえ）

タヴァナーは賢明にも一件に触れることがなく、私としては感謝感激雨あられであった。一週間が経過し、もう忘れてもらったかなと思っていたら、突然タヴァナーが蒸し返してくれた。

「ダイアナをひとりで走らせるわけにはいかんですよ」と博士は言った。私はもじもじしたが、答えようとはしなかった。

博士は窓辺に行き、ブラインドを上げた。満月の光が室内に差し込み、電灯と覇を競った。

「春分の夜です」とタヴァナーがなんの前置きもなしに言った。

「ローズ先生」と博士。「私は非常に危険な実験をやろうとしております。失敗すれば面倒が起きるでしょうし、成功すれば一騒ぎ起きるでしょう。そういうわけですから、コートを着て、わたしとともに来てください」

応接室に行くとダイアナがいた。彼女は周囲で編み物をする婦人たちなど目もくれず、窓辺にすわりこみ、窓ガラスに鼻をペッタリくっつけていた。タヴァナーが窓を開いてやると、彼女は猫よろしく音もなく抜け出していった。私たちは窓をまたいで外に出て、彼女のあとを追った。

彼女は進むのを恐れるように家の影のなかで待っていた。長年叩きこまれた躾はしっかりと痕跡を残していたのである。ちょうど篭のなかの小鳥のようなもので、扉があきっぱなしになったとき、自

由を求めていながら、飛び方を忘れてしまっていたのだ。タヴァナーは手にしていた分厚いツィードのケープで彼女をくるんだ。彼女をあいだに挟むと、私たちは荒野を目指した。私たちはあの晩の狂乱の疾走と同じコースを歩み、低い丘陵の上に生える松林に向かった。

樹冠がすかすかになったモミの林は、十分な闇を生まないが、大地にグロテスクな小鬼の如き影を投げていた。荒野の窪地から、せせらぎの音が聞こえてくるが、小川は視界には入らなかった。

タヴァナーはダイアナの肩からケープを取り、彼女を月光のなかに突き出した。彼女はためらい、おびえて私たちのもとに逃げてきたが、タヴァナーは腕時計をちらりと見ると、ふたたび彼女を突き出した。私は昔読んだ野生生物の物語を思い出した。子狼が集会場に連れてこられ、一団の狼たちによって仲間を認められる情景の話だった。ダイアナは彼女の仲間のもとへ手渡されようとしているのだ。

私たちが待っているあいだ、満月が黄金の雲の光輪のなかをすべっていった。タヴァナーは腕時計を時折見ていた。風はおさまっており、静寂のなか、せせらぎがひどく耳につく。私はなにも見なかったし、聞きもしなかったが、しかし森影のなかをなにかが私たちのほうへ接近しつつあるとわかった。ふと気づくと、私の手足は震えていたが、それは恐怖からではなく、興奮からであった。なにかが私たちのよこを通過した。なにか、巨大でずっしりしたものである。その後ろから、同じ種類の、もっと小さなものが多数続いた。私の肉体の全神経が歌いはじめた。私の意志とは無関係に、足が一歩前に出た。しかしタヴァナーの腕が私を制止した。

「先生のためのものじゃありませんよ」と博士は言った。「先生はここで相手を見つけるには、あまりに知力が多すぎます」

いやいやながら、私は博士の押さえる手をそのままにしておいた。狂気の発作が過ぎ去り、目の曇りが取れはじめると、月光に浮かぶ少女が見えた。彼女もまた《彼ら》の到来を感じていたのだとわかった。

彼女は《彼ら》のほうを向いた。半分恐れ、半分魅惑されていた。

《彼ら》は彼女を誘っていたが、彼女は応答する勇気がなかった。《彼ら》が彼女を取り囲んだ――私はそう感じた。すると彼女が屈したのである。彼女は《彼ら》に両手を差しのべた。不可視の手がそれをつかんだのはまちがいない。それから彼女は両手を空に向かって上げた。すると月の光が、彼女の包みこむ掌を通して胸に直接光条を投射したように思われた。それから彼女は掌を大地に向かって降ろし、両膝をつくと、掌を大地に押し当て、さらに身を低くし、全身を大地に押し当て、ついにはもろい土壌に型を残すほどになった。

しばらく彼女は静かによこたわっていたが、突然跳ね起き、水に飛び込むように両手を降ると、風を裂く矢のように走り出した。

「急げ！　あとを追え！」とタヴァナーが叫び、私の肩をどんと押した。私も閃光のように荒野の道を駆け出した。

しかし、この前走ったときとはなんとちがうんだろう。ダイアナはいまも鹿のように走っているが、私の手足は鉛のようであった。人生は味気無く、なんの楽しみもないように思えた。義務感だけで手足を動かしているし、それすらすぐに効果がなくなった。私はどんどん引き離されてしまい、息が切れるだけで、ランニングのペースすらつかめなかった。前を走る人影は風の足を持っているように跳躍していき、荒野のなかに消えていった。

私は喘ぎながら地面に倒れ込んだ。最初のスパートでばててしまったのだ。どうしようもなくヒースのあいだに横たわっていると、心臓が喉から飛び出しそうだった。

そのとき、統制のとれていない軍隊のような行列が、すごい勢いで空を渡っていくのを見たような気がした。ぼろぼろの旗がなびき、荒っぽい不協和音だらけの気の狂いそうな音楽が雑然とした一党のあちこちから聞こえてきた。毛むくじゃらの人間の顔面、人間の腕から伸びる鈎爪のついた前足、緑の葡萄の蔓のような髪から覗く緑色に光る瞳、それにあちこちに見られる半分おびえて半分魅惑されたような人々の顔、ある者は誘惑に引きずられ、ある者は魅惑にわれを投げ出し、戦慄している。

私は目覚めた。タヴァナーが身をかがめて私の顔を覗きこんでいた。

「助かった！」と博士。「目はまだ人間のものだ」

翌日、ダイアナは姿を見せなかった。そしてタヴァナーは心配しているのかいないのか、ともあれ顔には出さなかった。

「食べに帰ってきますよ」というのが博士の唯一の安請け合いだった。

次の日になっても彼女が戻る気配はなかった。私はだんだん心配になってきた。日中は温暖でも、夜は冷え込むのである。そして消灯後、私たちが事務所で座談していると、かすかに窓を引っ掻く音が聞こえた。タヴァナーがすぐに立ち上がり、窓を開けると、ダイアナがすべりこんできて、私の足元、暖炉のわきにどさっとすわった。しかし彼女が顔を向けたのは私ではなかった（期待していたのだから恥ずかしい話である）。タヴァナーと私は彼女にとってなんの意味もなかったのである。

タヴァナーは椅子に戻り、私たちは無言で彼女を観察していた。パックのチュニックはぐしょぐしょのぼろぼろの泥だらけであったが、私たちの足元にいる不思議かつむちゃくちゃな非人間的姿には、これしかないというくらいに似合った衣装といえた。ほどなく彼女は身を起こし、いまや熱のために湯気を立てているぺちゃんこの髪を指でとかすと、しだれた前髪のあいだから私を見て、白い歯とピンクの舌を見せて妖精のように笑った。それから小鳥のように素早く動くと、私の膝に頭をこすりつけた。この確認作業を終えたあと、彼女はふたたび火にあたりはじめた。

タヴァナーは立ち上がり、すっと部屋を出ていった。私はほとんど息もつけなかった。なにか行動を起こせば、この訪問者をおとなしくさせている魔法が破れるような気がしたのだ。そうなれば、彼女がなにをやらかすかわかったものではない。およそ当惑させられるような真似すら考えられたのである。しかし私は悩む必要などなかったのだ。彼女にとって、私は家具も同然の存在だったのである。

タヴァナーは料理を盛った盆を手に戻ってきた。するとダイアナの目が輝いた。ナイフとフォークを使って食事をする彼女は、ずっと人間的に見えた。私は彼女が食物を歯で食いちぎるものと思っていたのだが、体に叩きこまれた躾が残っていたのである。

彼女が食事を終えるとタヴァナーが言った。

「ダイアナ」

彼女はほほ笑んだ。

「お礼を言うのを忘れているよ」

彼女はふたたびほほ笑み、小鳥のように素早く動くと、わたしにしたように博士の膝に頭をこすりつけた。しかし彼女は一言も発さなかった。博士は手を伸ばし、こんがらがった彼女を髪をやさしく撫でてやっていた。彼女は博士の足元にすりより、愛撫と暖かさを楽しんでいた。ほどなく満足しきったような鼻音があがった。喉を鳴らす猫も同然だった。

「今度はうまくいきましたぞ！」とタヴァナーが言った。

しかし、しばらくたってから、ダイアナは目覚めたようであった。動物的欲求が満たされたので、彼女の人間的部分がふたたび頭をもたげた。

彼女は体をねじり、タヴァナーの膝に肘をつくと、博士の顔を見上げた。
「おなかがすいたからかえってきた」と彼女が言った。
タヴァナーはほほ笑み、彼女の髪を撫でつづけた。
「でも、またいく」と少し逆らうようにつけくわえた。
「好きなときに出入りしていいよ」とタヴァナー。「欲しいときに食べ物があるし、ドアにはけっして鍵をかけない」
この言葉はダイアナを喜ばせたようである。彼女はさらに心を開くようになり、彼女が経験したことを話して、私たちの驚愕と共感を得たくてならないようだった。これは彼女の人間的側面であった。
「《かれら》を見た」と彼女は言った。
「わたしたちは感じたよ」とタヴァナー。「しかし、見なかった」
「そう」とダイアナが答えた。「あなたには見えない。でも《かれら》があたいの仲間だとわかっただろ。あたしはいつだって《かれら》のなかまだったけど、それがわからなかった。でもいまは、《かれら》のほうからあたいをみつけてくれた。もどらなくちゃ」彼女は再度確信をもって繰り返した。

「寒くなかったかい？」とタヴァナーが尋ねた。

「ちっとも。おなかがすいただけ」と彼女が答えた。

タヴァナーは彼女の私物を一階の部屋に移した。この部屋の窓は潅木に面しているので、彼女は人目につかず自由に出入りできるのである。しかし彼女はけっしてこの部屋では眠らなかったが、毎晩、消灯時間後になると、事務室の窓のところへやってきた。私たちは彼女を入れてやり、食事を与える。しばらく暖炉の火を楽しんだあと、彼女はふたたび夜の闇へと消えていくのであった。天気など彼女には関係なかったらしい。どんな強風が吹き荒れるときでも、彼女は平気で飛び出していき、怪我ひとつせずに戻ってきた。時々彼女はぶつぎりの子供しゃべりで私たちに話しかけ、なんとか見たものを伝えようとすることもあったが、大部分は沈黙を守っていた。

しかし次の満月の夜、彼女はやまほど情報を抱えて戻ってきた。《彼ら》が素晴らしい踊りを舞い、彼女も加わることを許されたという。（ちなみに、料理番の女中が一人、宵の散歩のあいだにヒステリー症状に陥り、帰宅してから広間で発作としかいいようのない狂態を演じていたが、これで理由がわかった）。《彼ら》はあまりに素晴らしかったので、ダイアナはしゃべらずにはいられなかったのである。そして《彼ら》のことを語るとき、彼女は限られた語彙のなかから、女中も用いていた言い回しを用いていた。《彼ら》は《気高き者》だったという。彼女はそれ以上のことを教えてくれなかった。言葉が見つからないのである。そして彼女は手をあれこれ動かし、まるで見えない粘土をこね

ているようであった。タヴァナーが素早く悟って、彼女に紙と鉛筆を与えた。すると電光石火の早業で、私たちの眼前に、驚くほど正確で生き生きとした、翼を持つ裸の人物像が描き出された。

これまでダイアナは厳格な躾を受けてはきたが、ただの一度も絵を描くことなど習ったことはなかった—人並みになれれば大成功と考えられていて、なにか特技を身につけるなど誰も期待していなかったのである。また彼女は人体解剖図など学ぶ機会もなかったはずであるが、彼女が描いてみせた玄人はだしの絵は、実物を詳細に観察することによってのみ可能な細部描写を有していた。

私たち同様、ダイアナは大いに喜び、また興味を持っていた。これはまさに発見、彼女の屈折した魂のはけ口が見つかったのである。半時間とたたぬうちに、事務室は絵で散乱していた—水の上を歩んでいるとおぼしき旋回する雪の霊、幹や枝と一体化した人間の胴体を持つ樹霊、妖精、魔霊、風雅で愛嬌のある動物のスケッチなどが、驚くほど次々と描かれていった。ついに緊張と興奮のために疲れ果て、ダイアナは寝室で眠ることに同意した。あの不思議な春分の夜以来、はじめての人間的就寝であった。

紙の供給の必要性がダイアナを家にとどめていたといえる。また、観客の必要性が彼女に人間関係を求めさせていた。芸術家は創作の喜びだけで創作するのではない。賛美される喜びも必要なのである。そしてダイアナは、森へ行くとしても、仲間のもとに戻ってきて、獲物を見せびらかす必要があったのである。

この新発見のおかげで、ダイアナの心と体は協調するようになった。長い手足はだらしなく広がることがなくなり、鹿の優雅さを備えるようになった。かつては陰鬱だった彼女も、いまや子犬のように友好的であった。しかし悲しいかな、精神病院という屈折した世界では、率直な反応を見せるといろいろ障害にぶつかるものである。しばらく彼女は落ち込んでいた。以前の状態に戻らなければよいがと、私たちは心配していた。しかし彼女は鉛筆のなかに表現手段のみならず、報復手段をも見いだしたのである。この発見が彼女を救った。彼女は自分をいじめた人間の似顔絵を描いたのである。解剖学的にも正確な丸裸（彼女は絶対に服を描かない）で、表情もそっくりに描写しつつ、しかも体のあらゆる線でモデルの内なる魂を表現してやった。こういった似顔絵が、魔法のように忽然と、目立つ場所に張り出されたのであるから、その効果は申すまでもないだろう。

ダイアナは人生を謳歌できる場所を見つけていた。彼女はもはや除け者ではなく、粗野でもなければ、人見知りでもなかった。彼女が自発的に見せる、森から持ち帰った妖精のような陽気さは、それ自体魅力であった。ネズミのような色の髪は黄金の艶ときらめきを備え、土気色の顔はくるみ色と薔薇色に変わっていた。しかし彼女の跳びはねるような動き、驚くべき活力は、いまだ彼女の主要特徴であった。

彼女は異常なまでに活気に満ちていたからである。彼女は太陽と風と大地から生命を引き出しており、それらと接触を許されているかぎり、体の内側から光を放っている。決して燃え尽きることのない灼熱の霊で輝いている。これほど活気に満ちたものを、私は見たことがなかった。頭髪は帯電して

いるので、薄い雲のような光輪に見える。肌のしたでは血潮がほてり、彼女に手を触れられようものなら、こちらの素肌に鋭い電気が走るほどであった。

しかもこの不思議な活気は彼女自身に限定されておらず、近くにいる全員に伝染するのである。周囲の人間はその気性に応じて反応する。ある者は焚火にあたるように彼女のそばに行ってすわる。ある者は錯乱に近い状態になる。私にとって、彼女は詩であり、生命のワインであった。彼女には、なにか酩酊性の薬物のような作用があった。私は彼女に中毒してしまい、阿片の夢を見るようになった。一言も発することなく、彼女は私を誘いだす。私は仕事を忘れ、義務を忘れ、人間的なものも文明的なものも忘れ、彼女を追って荒野に出ていってしまう。そして私は、あの運命の春分の夜、彼女が軌道を合わせてしまった存在たちと、ともに交わるのであった。

タヴァナーが心配しているのは私もわかっていた。彼は非難の言葉を一切口にせず、黙って私が放り出した仕事を引き受けていた。博士がかなりの約束をキャンセルして、家にとどまっていたのもわかっていた。私は信用されておらず、博士としても療養院の差配を任せるわけにいかなかったのだ。私は自己嫌悪に陥ったが、モルヒネにとことん染まった中毒患者のようになもので、わかっちゃいるけどやめられないのである。

一種の霊視のようなものが、急速に私のなかで発達していた。タヴァナーが有する鋭敏な心霊的知覚能力とは違っていた。博士は人間や事物の内的魂を直視するのであるが、私に生じていた力は、事物のより精妙な側面を知覚する力であった。私はあらゆる生物を取り巻く磁場を明確に見ることがで

きた。それが変化するさまも見てとれたのである。ほどなく私は、ダイアナが崇拝する不可視の神々の往来を意識するようになった。強風、暖かい太陽、鍬を知らぬ大地などが、神々を私のもとに近づけてくれるような気がする。また私は樹木の大いなる生命も感知した。こういったことが私の魂を満たし、私に力を与えてくれた。《大地母神》の子供たちは、大地に触れるといつでも力を増すのである。

夏至が近づきつつあった。ダイアナが自らの場所に戻って以来、ほどなく三カ月になろうとしている。タヴァナーは完治した患者をいつまでここに置いておくつもりなのか、私は怪訝に思いはじめた。しかし博士は一向にその気を見せなかった。もっとも、私はダイアナがもはや患者ではなく、私が患者になってしまったような気がしていた。そして私は切迫した危機を迎えて、しっかり観察されているのであろう。魂の腫れ物が頭を出したら切開しようという算段で、タヴァナーはじっと待っていたのであった。

ダイアナと結婚しようかという考えが、徐々に私の心中に生じつつあった。結婚という言葉は、私が確立したい関係を表現してはいないが、他に道が見つからないのである。彼女を所有したいわけではなく、ただ今の関係を続けたかった。他人の目を気にせずに自由に彼女と行動したかったのである。私の感ずるところ、タヴァナーはぴんときていたらしく、これを阻止せんと策動していた。私には理由がわからなかった。私がダイアナを弄ぶことに反対するのなら理解できる。しかし結婚に反対するのは納得がいかなかった。しかし、私の頭脳はこの時期、ほぼ判断停止状態であり、考えることは一

連の走馬灯のごとき夢幻であった。あとから教えてもらったことだが、しゃべる言葉は幼児なみの素朴さに舞い戻っていたという。

しかしタヴァナーは、時を睨んでいまだ待機していた。

危機は唐突に訪れた。夏至の宵、日が沈みかけたころ、ダイアナが事務室の窓の石段に現れて、私に合図した。夕焼けを背景にした彼女は、素晴らしく美しかった。髪は水平光をとらえて霞みのように輝き、光輪と化していた。彼女は黄昏の逆光のなかにたたずみ、もの言わぬ雄弁な腕をさしのべ、私を宵闇のなかに誘うのである。私にはわかっていた。彼女についていけば、かつてなかったほどの荒野の疾走の果てに、彼女が崇める《諸力》と対面してしまう。顔を合わせたあと、私の肉体はこの家に戻ってくるだろうが、魂は二度とふたたび人の世に入ることはなく、野にとどまったまま、ダイアナとその一族の一員になってしまうのだ。それがわかっていた。そして私は心の目を通して、こうしている間も、一族が集合しつつある様子を見た。

ダイアナの手が私を招く。魔法にかかったように、私はゆっくりデスクを離れる。風のようなダイアナがともに走ろうと私を招く。しかし私は風ではない。私は肉と血を持つ人間である。瞬間の悟りが生じた。ダイアナは美しい女であり、私のための女ではないのだ。彼女は私の一部を招いているのであって、すべてを招いているのではない。ここでダイアナと一緒になってしまえば、私のなかの最良の部分が一生独り身になってしまう。

《自然》に帰還したところで、ダイアナには害はない。彼女にはそれくらいしかできないからである。しかし私には本能以上のものがあるのだ。私は高次の自己を捨てなければ帰還できない。室内には書物が並べられていて、実験室に続く扉が開け放されている。調合した薬剤が放つ独特の臭気が私の鼻をとらえた。「嗅覚は視覚よりも聴覚よりも確実に心に訴える」と物の本にも書いてある。もし風向きが逆で、窓から松の香りが流れてきていたら、私はダイアナに誘われ、ゆきてかえらぬ人となっていただろう。しかし私をとらえたのは実験室の臭気であった。それとともに私は生きているうちに実現したいと希望していた物事を思いだしてしまった。私は椅子にどさりと腰を落とし、腕のなかにつっ伏した。

ふたたび頭をもたげたとき、日没の残光すらすでになく、ダイアナもいなかった。

その晩の眠りは重く、夢すら見なかった。これは大いなる安息というべきで、なにせそのころ毎晩のように奇妙な夢に襲われていたのである。昼間の幻想が夜間の現実になったと言おうか、ほとんど物理的とさえいえる夢だったのである。しかしダイアナを拒んだことで、魔法も解けたらしく、翌朝目覚めたときは、長らく忘れていた正常に復帰したのであった。療養院の組織的運営も掌握できるようになったし、なんというか、長らく異国に島流しされたあとで祖国に這い戻った人間のような気分だった。

ダイアナは荒野に出ていたから、数日顔を見なかった。そして実に抜け目ないジプシーが、近隣の畑や鶏小屋を荒らしているとの噂が伝わってきたので、彼女が食事にすら戻ってこない理由も判明した。

ここのところの怠惰ぶりのため、私の良心はちくちく痛んでおり、ゆえに余分な仕事も進んで引き受けるようになっていた。私はテナントを連れて散歩に出るという、かなり大変な作業にも手を出した。自殺未遂以来、彼を単独行動させるのは危険すぎると思われていた。また、テナントは話しかけられないかぎり、一切口を開かないし、しゃべるにしても最小必要限のことしか言わないから、同伴者は気が重いのである。療養院に来てからの数カ月、彼はまったく回復の兆しもなかったから、タヴァナーが彼を置いているのが不思議であった。通常なら、博士は見込みなしと見た患者は預からないのである。ゆえに私は、博士がテナントに希望を抱いているのだと結論を出した。しかし、どういう方向に希望があるのか、博士は私に教えてくれなかったのである。

テナントと私はフレンシャム方面に向けて、荒野の道をぶらぶら歩いていった。突如、しまったと思った。私たちはダイアナの好む道を歩んでいるのだ。このまま進めば、行き着く果ては魔法と不吉の森である。できることならこの道を避けたかった。わが心の平安のために、忘れてしまったほうがよい事件を、思い出したくはなかったのだ。しかし他の道に出ようと思えば、膝まで沈む泥炭地を数マイル近く強行軍しなければならない。ほんのり暗い木陰で私たちは立ちどまった。テナントはひょろながい木の幹を眺め、視線を上に移していった。黒い樹冠が空に浮かぶ小さな島のようであった。

「木のてっぺんのウェンディーのおうちだ！」と彼が独り言をいうのが聞こえた。私のことなど忘れているようであった。彼の疲れた魂は、あの枝の揺り篭のなかで永遠に眠っていたいのだろう。太陽に焼かれたモミの木は芳香を放っており、空は荒れ地の上空によく見られる抜けるような深い青であった。暖かいそよ風がヒースの荒野を渡り、無数の蜜蜂の羽音やかなたの羊の鳴き声を運んでいる。私たちはお日様に暖められた地面に身を投げ出した。テナントですら、はじめて幸福そうに見えた。私のほうはといえば、暖かい大気を胸一杯に吸い込むたびに、わが霊に平安と癒しが訪れるようであった。

テナントは木にもたれかかり、帽子をとり、シャツをはだけ、頭を赤いブナの樹皮に預けて、遠い青空を見つめながら、歯のあいだで静かに口笛を吹いていた。私は松葉のあいだで大の字になり、このまま眠るかなと思っていた。眠っていたのであろう。頭を上げてダイアナの姿を見るまでは、足音も聞かなかったし、いることもわからなかったからだ。彼女はテナントの足元に横たわり、動物のようにまばたきもせず、ただ彼の顔を見つめていた。彼は前と変わらず静かに口笛を吹いていたが、その音色は絶妙なフルートの如き不思議な歌になっていた。思えばこれこそが私のトラブルの元凶だったのである。私はケンタウロスと巨人族が闊歩する前ギリシャ神話の世界に思いを馳せた。ゼウスとその宮殿が、天上を人間的なものする以前、地を治めていたのが彼らである。テナントは原始的ですらなく、前アダム的であった。ダイアナのほうは、イブの娘ではなく、イブに先立つ《暗いリリス》の娘である。私は悟った。この二人は同じ世界に属し、お互いに属しあっているのだ。こう悟るや、私の古傷が痛んだ。それは羨望の痛みでもあった。二人を結んでいる絆は、私たちの文明的束縛より

もずっとずっと幸福なものだったからだ。しかし私はただその場に寝転がり、彼らの牧歌劇を眺めていた。

モミの木の木陰がヒースの荒野に長く伸びだす前に、私はテナントを立たせて地面を踏み締めさせた。それから私たちは黄金の夕焼けのなかを帰っていったのだが、ダイアナもついてきた。

いつもの食後の喫煙時、報告半分おしゃべり半分の時間に、この件をタヴァナーに告げてみた。博士が全然驚いていないことがわかった。

「こうなることを望んでおったのですよ」と博士が言った。「この場合、これしか解決法を思いつかなかったのですわ。しかし彼女の家族はなんと言いますかね？」

「おそらく“ばんざい”と言ってから、嫁入り道具の値引き交渉に入るでしょう」と私が答えた。この予言は当たっていた。

あれほど奇妙な結婚式は見たことがなかった。なんとも居心地が悪そうな牧師は、しかし儀式遂行を拒否するほどの度胸はなかった。詰め物装飾の母親とその友人たちは、なんとか式をちゃんとやろうと努力していた。新郎の親戚たちは、新郎を禁治産者にする試みを土壇場でタヴァナーに邪魔されて、怒り心頭に発しつつ、何万ポンドもの信託金が手元から消えていくさまを眺めていた。捕獲されたばかりの野生動物にしか見えない新婦は、今にも教会から脱走しかねない雰囲気であったが、そこはそれ、タヴァナーが油断なく見張っていたために、彼女も逃げられる見込みはないと理解させられた

のであった。そして新郎は自分だけの天国に浸りきっている様子であり、その顔は海陸を決して照らさぬ栄光に輝いていた。

新婚さんがハネムーンに旅立つさまは、神々のための光景であった（きっと出席なさっていたと愚考つかまつる）。礼装に身をかためた出席者一同は正面玄関に整列させられ、そこへパックのチュニックをまとったダイアナが現れるや、脱兎の如く花道を駆け抜けていったのである。彼女の伴侶はロバを引き連れ、もっと落ち着いた歩調で進んでいった。ロバの背中にはテントがくくりつけられ、脇では炊飯道具一式ががちゃがちゃ音を立てていた。

白タイ姿の男たち、絹に包まれた女たち、きちんと刈り込まれた潅木の生け垣に囲まれていると、新郎新婦はなんとも場違い、気違い、筋違い（これらは親戚たちのコメントである）に見えた。しかし二人が門を出て、荒野の黒土の上に一歩足を踏み出した瞬間、変化が生じた。《大いなる存在》が二人を出迎えに現れたのだ。そして《彼ら》の存在を意識したのかしないのか、ともあれ結婚式の出席者は一様に沈黙したのであった。

十秒とたたずに荒野は二人を連れ去った。男と少女とロバは緑と茶色のなかに溶けていった。まるで存在するのをやめたかのような、驚くべき消え方だった。彼らは自らの場所に行ったのであり、彼ら自身の場所が彼らを歓迎したのである。彼らとは縁もゆかりもなかった文明社会は、二度とふたたび彼らを苦しめることはないだろう。ほかとは違うというだけの理由で、彼らを閉じ込めることはも

うないのだ。黙りこくったまま、出席者一同は婚礼のごちそうを食べにかかった。誰一人として乾杯を言い出す者はいなかった。

それっきり、私たちは二人の消息を聞かなかったのだが、翌年の春のある夜、消灯後に事務室の窓をたたく音がした。私はすぐにダイアナだと思った。しかし、彼女ではなく、彼女の夫だったのである。タヴァナーは不在だったが、私は呼び出されるままついていった。たいして遠くに行く必要はなかった。小さな茶色のテントが木陰に設営されていた。私は呼び出されたわけがすぐにわかったが、実のところ、私を呼ぶ必要はほとんどなかったのである。《自然の神々》は自分の世話は自分でできるのであり、首根っこつかまれてこの世に引きずり出されるのはわれわれ高等動物だけである。生命の扉は簡単に開いてしまい、数分後、牧神の孫娘が私の手のなかにいた。ちっぽけな、しかし新たなる完璧―ただ、尖った耳を除けばの話である。われわれの面倒だらけの旧世界に、どういう新人類がもたらされ、われわれの文明にどういう騒ぎを起こそうとしているのか？

「やれやれ、タヴァナー先生」と私は考えた。「先生は将来なにをやらかした男といわれるんでしょうか？　オーストラリアに兎を持ち込んだ男と同列に論じられるのか・・・・それとも、プロメテウス？」

第六話　家主の話

“おお我が魂よ、汝より壮麗なる宿を造り給へ―”

療養院から出される郵便物は、午後六時に去る庭師の手で村まで運ばれる。ゆえに、それより遅い時間に手紙を書いてしまった人間は、手ずから十字路の郵便ポストまで歩いていかなければならない。私は日中ほとんど私用の手紙を書くひまがないため、黄昏時になると、片手に葉巻、片手に手紙という姿で食後の散歩がてら、ポストのほうに向かうのが日課であった。

この散歩に患者を連れていくなど、私の習慣ではなかった。超過勤務手当もなしに、勤務時間後も彼らの相手をする気など、さらさらなかったからである。しかしウィニングトンは普通の患者ではなかった。彼はタヴァナーの個人的友人であり、また私の睨んだところ、博士の結社の下級団員でもあった。この結社に関しては、タヴァナーとの付き合いでいろいろ見聞きさせてもらった。私は団員になる気はなかったのだが、大いに興味を抱いていたのである。結社に対する関心と、ウィニングトンの愉快で奇怪な性格もあいまって、私たちはお互い個人的友情を感じあうようになっていた。

そういうわけで、彼は私とともに、潅木を抜け、療養院の庭のはるか彼方にある小さな門を通過し、郵便ポストがある十字路まで長いこと散歩していた。

手紙を投函して、いまきた道を振り返ったとき、自動車の警笛が聞こえた。私たちはびっくりして道の端にどいた。自動車が私たちに襲いかかるごとくコーナーを曲がってきたからである。自動車のなかに、男女の姿がちらりと見えた。屋根にはかなりの量の荷物がくくりつけてあった。

自動車は十字路に面した門に入り、大きな屋敷の敷地内に消えていった。この家の所有者であるヒルシュマン氏が抑留を終えて、ふたたびここに住む気なのだろう。とある猜疑心に富む国家が、国家機密が悪用されると思いこみ、この抜け目ないドイツ人を手元で監視しようと考えて以来、この家はずっと家具什器つきの空き家であったのだ。そんなことを私はウィンニングトンに話していた。

療養院に戻ったとき、私たちはタヴァナーに会ったので、ヒルシュマン家の人々が帰還したことを話した。しかし博士は首を横に振った。

「先生がご覧になったのはヒルシュマン夫妻ではなくて」と博士、「夫妻があの家を貸した相手ですわ。ベラミ夫妻というのだそうですよ。どちらか一人は病人だと思いますね」

一週間後、ふたたび私が郵便ポストまで散歩しようとしていたとき、タヴァナーが一緒に行くと言い出した。私たちは精力的に煙草をふかして羽虫を追い払いながら、十字路までぶらぶら歩いていった。郵便ポストにたどりついたとき、金属の軋むかすかな音が私たちの注意を引いた。そこで見回し

てみると、ヒルシュマン邸の巨大な鉄製門扉がわずかに押し開かれ、小さな隙間から女性が静かに抜け出してくるのが見えた。彼女も明らかにポストを目指していたのだが、私たちを見ると、ためらった。私たちが一歩下がって道をあけてやると、彼女は砂利をそっと踏みながら手紙を投函し、私たちの好意に軽く会釈をすると、現れたときと同様、音もなく消えていった。

「あの家では悲劇が進行中ですな」とタヴァナーが発言した。

私は思わず身を乗り出してしまった。うちの親分の霊能が発揮されるとき、私はいつでも大いに興味を持ってしまうのである。しかし博士はただ笑うだけだった。

「今回は霊視なんぞじゃありませんよ、ローズ先生。単なる常識です。女性の顔が体つきより若い場合は幸福な結婚、逆ならば悲劇ということです」

「顔は見なかったんですよ」と私。「でも、あの体つきは若い女性のものですね」

「わたしは顔を見ました」とタヴァナー。「ずいぶんと老けていましたよ」

しかし、タヴァナーの酷評は全部が全部正しいわけではなかった。数日後、ウィニングトンと私はふたたびポストに向かう彼女を目撃したのである。深い皺が刻まれた蒼白の顔ではあるが、彼女は驚くべき美貌の持ち主であったのだ。豊かな赤褐色の髪は、白皙ゆえによりあでやかであった。タヴァナーの推論の根拠を観察しようとして、私はじろじろ眺めすぎたのではないかと思う。彼女はかすか

に開いた門扉から、すっと滑りでて、人目をはばかるように素早く動き、長い睫のしたから私たちを横目で眺めると、ふたたび音もなく戻っていった。

ふと気がつくと、私の横にいるウィニングトンが石にでもなったかのように動かない。それで彼のことを思い出したといえる。彼はその場に根が生えたごとく突っ立ち、彼女が消えていった薄暗い庭園の小道を見つめているのである。自分の魂を送りこんで、その闇を照らそうとでもいう雰囲気だった。私は彼の腕をつついた。彼は振り向き、なにか言おうとしたが、息がつまった。言葉は咳のなかで失われていった。喀血であった。彼は私の肩に腕をまわしてもたれかかった。彼のほうが背が高かったからである。私は彼を支え、その間彼は咳きこみながら真っ赤な血を吐き出していた。それがなにを意味するのか、火を見るより明らかだった。

私は彼を家まで連れ帰り、ベッドに寝かせた。発作のあと、彼は悪寒に苦しむからである。それから私はタヴァナーになにが起きたのか報告した。

「彼は長くないと思いますよ」と私は言った。

わが同僚は驚いたようだった。「元気じゃないですか」と博士が言った。

「肺がもう残ってないんです」と私は答えた。「エンジンなしじゃ車は走りませんよ」

しかしウィニングトンは寝たきりにはならなかった。そして床を離れた初日、彼は私についてポストまで行きたいと言い出した。私は異議を唱えた。往復するとかなりの距離だからである。しかし彼は私の腕をつかんでこう言った。

「いいですか、ローズ先生、あたしゃ行かなきゃならないんだ」

どうしてそれほど必死になるのか、理由を聞いてみた。彼は口ごもったが、すぐに勢いよく口走りはじめた。

「あの女をもう一度見たいんだよ」

「あれはベラミ夫人」と私。「ほっといたほうがいい。きみのためだよ。女といちゃつきたいんなら、この療養院にもかわい子ちゃんはたくさんいるんだから、とにかく人妻はやめてくれ。亭主が乗り込んできて一騒ぎ起こすだけだよ。療養院の評判にもかかわる」

しかしウィニングトンはまったく方向を変えなかった。

「だれの妻だろうと知っちゃいないよ。あれは、あれは—会えるとは思ってもいなかった女なんだ・・・」彼はぎこちなく語った。「ご心配には及びませんよ。あたしゃ見るだけ。話しかけもしないし、馬鹿なまねはやらかさない。とにかく一目でいいから見たいんだ。どのみち、あたしなんざ数のうちじゃない。この罪深い肉体もほとんど一巻の終わりだってんだから」

彼は黄昏のなか、私の前をふらふら歩いていった。長身で骸骨のように痩せている。紅潮した頬は、他の患者ならば瑞兆であるが、彼にとっては危険信号でしかなかった。

私が同意しようとしまいと、彼は行くであろうから、私も一緒に行くのが最善と判断した。このため、手紙があろうとあるまいと、私たちは集配時刻にポストまで散歩するのが日課となってしまった。時折、ベラミ夫人が静かにポストに歩む現場に行きあわせたが、はずれることも多かった。二日以上夫人に会いそこなうと、ウィニングトンは発熱し、五日連続会いそこなおうものなら、激高して喀血してしまい、ベッド送りにされてしまった。衰弱していたので、抗議すらしなかった。

あの電話が鳴ったのは、タヴァナーにこの件を話していたときのことであった。私のほうが電話に近かったので、手を伸ばした。

「タヴァナー先生でらっしゃいますか？」と女の声が聞こえた。

「こちらはタヴァナーの療養院です」私は答えた。

「ヘディングトン館のベラミの家内でございます。タヴァナー先生に主人を診察していただけたら有り難いのですが。急に容体が悪化いたしまして」

私はタヴァナーに話を伝えようと振り向いたが、すでに博士は部屋から消えていた。突然、ある衝動が私に生じた。

「タヴァナーは現在外しております」と私。「よろしければ私がまいります。私はタヴァナーの助手で、ローズと申します。ドクター・ローズです」

「ありがとうございます」と電話の相手が答えた。「すぐいらしていただけますか。わたくし、もう不安で！」

私は帽子を手に、ウィニングトンとともにさんざん歩いたあの道を駆けていった。かわいそうに、あいつもしばらくは私と散歩できないだろう。しばらくではすまないかも知れないが。十字路で私は一旦立ち止まった。社会規範という見えざる障壁がついに崩れ、ウィンニングトンと一緒にさんざん眺めたあの女性と会うことになったのである。彼女がよくしていたように、大きな門扉を少し押し開き、こんもり茂った並木小路を歩いて、呼び鈴を鳴らした。

私は居間の一種と思われる部屋に通された。すぐにベラミ夫人が現れた。

「主人を診ていただくまえに、ご説明申し上げたいことがございます」と夫人は言った。「女中に手伝わせてはおりますが、知られたくはないのです。問題は、その、麻薬だと存じております」

なるほどタヴァナーはいつものように正しかったわけである。彼女は悲劇に取り組んでいたのである。

「主人は丸一日人事不省でございます。おそらく薬を打ち過ぎたのでしょう。以前にもございましたから、症状は存じております。でも、誰かをお呼びしなければ、今夜はとうてい切り抜けられないように思いまして」

夫人に案内され、患者のもとに行き、診察してみた。脈は弱く、呼吸困難であり、顔色は悪かった。しかし、この人物くらいに麻薬に慣れてしまった男というものは、殺しても死なないものであり、まして同情を感じさせるものではなかった。

私は夫人に適切な処置を教え、危険はないと思うがなにかあれば電話してくれと言った。

私を見送りにきたとき、夫人はほほ笑み、こう言った。「ローズ先生のことは、以前よりお見かけしておりました。郵便ポストのところでよくお目にかかっておりました」

「宵の散歩が日課でして」と私は答えた。「配達のときに持っていってもらえなかった手紙は、私が運んでいるのです」

ウィニングトンにこの会見の話をするかしないか、私は迷っていた。話して興奮させることと、話さずにやきもきさせることの、どちらのほうが体に悪いか考えていたのである。結論は前者有利と出たから、私は帰るとすぐに彼の部屋にいき、前置きなしで話をはじめた。

「ウィニングトン」と私。「きみの女神様の拝謁の栄に浴してきたよ」

彼はすぐさま興奮そのものとなった。私は会見の模様を話してやったが、亭主の病気の正体は隠していた。このあたりは医者の心得、職業的義務というやつである。しかし、ウィニングトンはこの点を特に知りたがったのである。私が話すわけにはいかないことを当然知っているはずであった。私の不承知を見てとると、彼はやにわにベッドから身を起こし、私の手をつかむや、それを自分の額に押し当てた。

「こら、だめだ！」私は叫んで手をひっこめた。タヴァナーの思考読み取りの術を目にしていたからである。しかし手の引き方が遅かったようだ。ウィニングトンは枕のないベッドにどさりと沈みこみ、くすくす笑った。

「麻薬か！」と彼は言い、急な運動のために息が切れ、それ以上はなにも言わなかった。しかし彼の目に宿る勝利の光から察するに、決定的に重要ななにかを知ってしまったようであった。

私は翌朝ベラミを診察していった。彼は意識を回復しており、私をうさんくさそうに睨んでいた。お前なんぞには用はないといわんばかりの目つきであったから、この家との付き合いももはやこれまで、郵便ポストまでと思わされた。

数日たった夕刻、ベラミ夫人と私はふたたび十字路で出会った。私が挨拶すると、笑顔の挨拶が返ってきた。あきらかに、粗野な夫以外の人間と話ができて嬉しい風情であった。ベラミ夫妻はこの近辺の誰とも付き合いがなかったからである。

夫人は私がひとりきりであることに意見を述べた。「よくご一緒でらした、あの背の高い方はどうなさったのですか？」と夫人は質問してきた。

私は哀れなウィニングトンの病状を話した。

すると夫人は奇妙なことを言い出した。少なくとも、私とそれほど付き合いがあるわけでなく、ましてウィニングトンにとっては赤の他人に等しい人間が口にするには、奇妙な台詞であった。

「あの方はお亡くなりになりそうですか？」夫人は不思議な目付きで私の顔をまっすぐ見ながら、こう質問してきた。

夫人の台詞に驚かされ、私は真実を口にしてしまった。

「わたくしもそう思いました」と夫人。「わたくしはスコットランド人でございまして、うちの家系は霊視に恵まれております。わたくし、昨夜、あの方の生霊を見ました」

「生霊？」私はなんのことかわからず、叫んでしまった。

夫人は赤褐色の頭をたてに振った。「いまの先生のお姿同様に、はっきりと見たのです」と夫人は答えた。「実のところ、あまりにもはっきりでしたので、先生のかわりに療養院からいらしたほかのお医者様にちがいないと思いました。

「わたくし、ランプの明かりを落としてベッドの横にすわっておりました。そのとき、なにか動くものが目のはしにはいりました。それで顔をあげると、先生のお友だちが、わたくしと明かりのあいだに立ってらしたのです。声をかけようといたしましたとき、あの方がなんとも不思議な表情をしてらっしゃることに気づきました。あまりに不思議な表情なので、言葉もなくじっと眺めておりました。なんと申しますか、あの方はせせら笑ってらっしゃるようでした。わたくしか、主人か、それはわかりませんが。

「あの方は、背筋をぴんと伸ばして立ってらっしゃいました。いつもの猫背じゃないんです」（“すると、なにか、あんたもやつを眺めてたというの？”と私は思った）「それで、ほんとうに勝ち誇ったようなお顔でらして、まるで長らく待ち望んだものが手に入ったみたいな表情でした。それからあの方はわたくしにおっしゃいました。ゆっくりと、でもはっきりと。“次はこっちの番だ”と。それで、この異常な真似はどういうおつもりなのか、わたくしが口を開いて尋ねようとしましたとき、突然気がついたのです。ランプがあの方を透かして見えました。気を取りなおしているうちに、あの方は消えてしまわれました。きっと、主人は助かるけれど、あの方はお亡くなりになるのだと、そういう意味に受け取りましたのですが」

両方の患者を知っている私としては、その解釈はかなりの線で当たるだろうと夫人に告げてしまった。それから私たちはしばらく怪談の話をし、夫人は鉄門のなかに消えていった。

ウィニングトンはゆっくりと発作から回復しつつあったが、床を離れるのは無理な相談であった。ベラミ夫人に関する彼の態度は奇妙な変化を遂げていた。相変わらず私にポストのところで夫人に会ったかどうか、夫人がなにをしゃべったか聞きたがるのだが、自分の体調が悪くて一緒にいけず、夫人と知りあえないとこを悔やんでいるふうではなかったのだ。そのかわり、彼の態度は、まるで彼と夫人がなにか私の知らない秘密を分かち合っているかのような印象を与えた。

彼の病状は最悪を脱してはいたが、先般の発作で体力を消耗してしまったため、疾病側が優勢となっていた。おそらく二度と床を離れられるとは思えなかった。それで私もベラミ夫人に関する彼のわがままを大目に見てしまった。どのみち害はないと確信していたのである。夫人の郵便ポスト参り、夫人がなにを語ったか、私がなんと答えたか、すべては病人の福祉を考慮して逐一報告され、病人の目はひそかな喜びに輝くといった寸法であった。彼がなにも打ち明けてくれなかったから、私は推測するしかなかったのだが、どうやら彼はベラミが再度薬の打ち過ぎをやらかす時を心待ちにしていたようである。私としては、ウィニングトンの意図に関してかなりの不安を抱くべきだったのであろうが、彼は介護なしでは部屋すら横切れない容体にあった。そういうわけで私は、彼がなにを夢に見ようと実害はないと判断して、幻想に冷や水浴びせようという気を起こさなかったのであった。

ある晩、私はノックで起こされた。夜勤の看護婦がウィニングトンの部屋まで来てほしいと言う。彼が無意識になっていたから、心配だとのこと。一緒に行ってみると、看護婦の言う通り、彼は昏睡状態にあり、脈は感じられず、呼吸は無に等しかった。一瞬私は病状の急転回かと思ったが、彼を見ていると、喉の奥からカチリという音が聞こえてきた。続いて、どこかで聞いたような、シュウシュ

ウと長い音が発せられる。これはタヴァナーが肉体を離れて不思議な心霊遠足に出るときに出す音である。ウィニングトンも同じ遊びをやっているなと私は推測した。彼がタヴァナーの結社に所属していることは知っていたし、おそらく多数の術を学んでいるにちがいないからだ。

私は看護婦を追い払い、患者のよこで待機することにした。タヴァナーのときも、よくこうしていたのである。不安がないわけではなかった。博士は休暇で遠くに行っており、療養院の管理責任は私の双肩にずしりとかかっていたからである。通常ならばそれが不安だというのではないが、オカルト絡みは私の手に負えるものではない。それにタヴァナーがよく言っていた。この手の心霊遠足は、危険が伴わないというものではないと。

しかし私はそれほど寝ずの番をしなくてすんだ。二十分もたつと、トランス状態が自然睡眠に変わるのがわかった。心臓が動きはじめ、すべて問題ないことを確かめると、私は患者を起こすことなくその場を去り、自室に戻って寝た。

翌朝、ウィニングトンがこの件に触れなかったので、私も触れなかった。しかし彼が無理に平静を装っているところから察するに、深夜の旅でなにか大いに楽しいことがあったらしい。

その晩、私が郵便ポストに行くと、ベラミ夫人が私を待っていた。夫人はなんの前置きもなしに話しはじめた。

「ローズ先生、背の高いお友だちが昨夜のうちにお亡くなりになったようなことは？」

「いいえ」私は鋭い視線を飛ばした。「実のところ、今朝はずっとよくなっています」

「それはようございました」と夫人が言った。「昨夜、また生霊を見ましたもので、あの方の身になにか起きたのではと思っておりました」

「何時ごろに見ましたか？」突然ある疑問が涌いたので、私は質問した。

「さあ」と夫人。「時計は見なかったのです。でも、真夜中過ぎでした。なにか頬に触れるものがありましたので、目を覚ましました。うちの猫が部屋に入り込んでベッドに乗ってきたのだと思いまして、追い出そうと起きましたところ、なにか影のようなものが見えました。ベッドと窓の中間のところです。それがベッドの足元に動いてきて、わたくしの足に乗るんです。猫よりもずっと重くて、大きめのテリヤくらいの重さでした。それから、わたくし、先生のお友だちをはっきり見ましたんですよ。ベッドの端に腰掛けて、わたくしを眺めてらっしゃいました。でも、もしかしたら錯覚かも、と思っております。ベッドの羽目板にガウンをかけておりましたから、そのひだひだが人間に見えたのかもしれません。ですから、わたくし、先生にお聞きしたくて—その、裏付けというんでしょうか、なにかお心当たりがあれば、と」

「ウィニングトンは死んではいませんよ」と私は言った。これ以上突っ込まれたくなかったので、私はそそくさと挨拶をしてその場を離れようとしたが、後ろから声がかかった。

「ローズ先生」と夫人。「主人は今朝からあのひどい昏睡状態なのです。なにか打つ手はございましょうか？」

「よろしければ、診察いたしましょう」と私は答えた。夫人は頭を下げたが、いよいよとなるまで私に来てもらいたくない様子であった。亭主は邪魔されると派手に荒れるのである。

「おたくには執事か下男がいらっしゃいますか？　それともご亭主と奥様と女中だけでらっしゃる？」わたしは質問した。ベラミほど麻薬をやる男はおよそ人畜無害とは言いがたいし、まして三、四名の女性にとって愉快な仲間ではないと思われたからである。

ベラミ夫人は私の考えを見抜いて、悲しげにほほ笑んだ。「慣れておりますから」と夫人は言った。「いつも一人きりでこなしてまいりました」

「いつごろから薬をやっておられるのですか？」私は尋ねた。

「結婚以来ずっと」と夫人が答えた。「それ以前のことはわかりません」

これ以上無理強いもできなかった。夫人の顔は悲劇を物語っていたからである。私はこういうだけで引き下がることにした。

「助けが必要なときは、いつでもそうおっしゃってください。タヴァナーと私はこの界隈では医療に携わっておりませんが、緊急時は喜んでお役に立たせていただきます」

潅木の小道を抜けながら、夫人が話してくれたことを考えてみた。ウィニングトンが二時から二時半までトランス状態にあったことを考慮に入れれば、夫人の見たものが錯覚の産物でないことは確実であろう。私はどうしてよいやらわからなかった。ウィニングトンが危ない火遊びをやっていると思える。彼自身にとっても危ないし、なにも知らない女性にとっても危ない話であろう。しかし彼にその話をすれば、おそらく笑いとばすか、ほっとけと言うだけに決まっている。だからといって夫人に警告すれば、私は狂人扱いされるだろう。世間というものは、オカルトの術の存在を否定することで、術者に大いなる利点を与えているのである。

私はタヴァナーが帰ってくるまで一件に手をつけないことにした。かくして危ない橋を渡ることなく、私はウィニングトンのもとに宵の表敬訪問をしたのである。いつものように彼はベラミ夫人関係のニュースを要求してきた。そこで私は夫人に会ったことを話し、ついでに夫人の亭主がふたたび悪化したことを口にしてしまった。すぐにしまったと思った。この情報をウィニングトンに与えたのは間違いだったのだ。しかし言ってしまったことは取り消せない。どうやら彼がなにかやる気じゃないかという不安を胸に抱いたまま、私はその場を去るしかなかった。タヴァナーがさっさと帰ってきて、この重責から解放してくれたらと願わずにはいられなかった。しかし博士はスコットランドまで行っていたし、せっかくの休暇の邪魔してよいほどの根拠を、私は持っていなかった。

およそ一時間後、巡回を終えて寝ようかと思っていたとき、電話が鳴った。出てみると、ベラミ夫人の声が聞こえてきた。

「ローズ先生、来ていただきたいのです」と夫人。「なんとも不安でしょうがありません」

数分で私は夫人のもとに馳せ参じ、夫人とともにベッドに横たわる無意識の男性を見下ろしていた。男は三十五歳ほどの頑強な体格の持ち主で、薬でぼろぼろになる前は、なかなかの男前だったにちがいない。状態そのものは以前と大差ないようなので、なにがそんなに不安なのか、夫人に聞いてみた。電話のときの声から察するに、夫人はおびえていたからである。

夫人はしばらくあれこれ言い訳をしていたが、ようやく真相が判明した。

「わたくし、神経がまいりそうなんです」と夫人。「部屋になにものかがいるような気がして、もう我慢できそうにありませんでした。先生をお呼びするしかなかったんです。夜のこんな時間に馬鹿を申しまして、まことにお詫びの申し上げようもございません」

夫人の気持ちは十分理解できた。こんな寂しい場所で、手伝う友人もなしに、薬物中毒の男の相手をする緊張感—しかも数年に及んでいたと思われる—どんな図太い神経でも擦り減ってしまうだろう。

「お気遣いにはおよびません」と私は言ってやった。「お手伝いできて光栄の至りです。心中お察しします」

ともあれ、亭主の体調が不安のもとでなかったのであるから、私もしばらく落ち着いてすわりこみ、この途方もない重荷からくる夫人の緊張感の緩和法はないかと思案していた。

薄闇のなか、静かにすわっていると、ほどなく私も奇妙な感覚に襲われた。夫人が言った通り、この部屋にだれかいるのである。私があちこち気にしている様子を見てとると、夫人がほほ笑んだ。

「先生もお感じですか？」と夫人。「なにかごらんになられました？」

「いや」と私は答えた。「ぼくは霊能者じゃないんで。そうだったらいいんですが。でも、見ることができるやつを知ってます。まあ、なにかいれば見るでしょうね、やつなら。うちの犬なんですよ。実はぼくについてきてたんです。帰ってないのなら、まだおたくのポーチで寝っころがっているはずですよ。許可を戴けるなら、やつを連れてきて、どういう反応を示すか見てみましょう」

階段をおりてみると、大きなエアデールはマットの上で辛抱強く待っていた。こいつの本来の職務は療養院の警護であるが、この場合は役立っていただこうと、寝室まで連れ込んで、ベラミ夫人に紹介してやった。犬の方も夫人を気にいった様子であった。それからやつの好きなようにさせておき、こちらは腰を降ろして模様眺めを決め込んだ。まず、やつはベッドに赴き、無意識の男をくんくん嗅ぎ回ると、初めての場所に来た犬がよくするように、あちこちうろついていた。最終的に、やつは暖炉の前、私たちの足元に落ち着いてしまった。私たちを不安にさせているものがなんであれ、それは取るに足らないものであると見なしていたようである。

やつは平和に眠りこけていたが、ベラミ夫人が紅茶とビスケットを持ってくると、自分の分もよこせと起き上がった。最初は私のもとに来て、配給を受けると、次に空っぽの肱掛け椅子のもとへ静かに歩み、なにか貰おうとじっと待っていた。私たちは驚いた。犬は受け入れてもらえるものと決め込

んでいる様子で、椅子に前足をかけて、おねだりしている様子であった。ベラミ夫人と私は顔を見合わせた。

「わたくしの聞いておりましたところでは」と夫人。「幽霊を好むのは猫であって、犬は幽霊を怖がるという話でしたけど」

「ぼくもそう聞いてましたが」と私は答えた。「しかし、ジャックのやつはこの幽霊と友好関係にあるようですね」

そう言ったとき、私の心にある解釈がひらめいた。この不可視の存在がウィニングトンだとすれば？すでに夫人はこの部屋で彼を二度も見ているのだから、それは大いに有り得る話である。そうであれば、犬の行動にも説明がつく。やつとウィニングトンは仲良しであった。このお化けは、私たちには無気味な存在でも、犬にとっては顔見知りの友人なのだ。

私は立ち上がった。「ちょっと失礼します。療養院に戻って二、三片付けることがあるのです。それが終わりしだい、この件をはっきりさせましょう」

私は潅木を抜けて療養院に駆け戻り、三段またぎで階段を上がり、ウィニングトンの部屋に飛び込んだ。思った通り、彼は深いトランス状態に入っていた。

「この野郎！」と私はベッド上の無意識の男に向かって叫んだ。「なにをたくらんでいるんだ？　この場にタヴァナーがいれば、しっかり言い付けてやるところだぞ」

私は急いでベラミ夫人のもとに戻ったが、驚いたことに、部屋に再入室してみると、複数の人間が話し合っている。亭主のベラミが完全に意識を取り戻し、ベッドに身を起こして、紅茶を飲んでいるではないか。彼は目が眩んでいるらしく、ぶるぶる震えてもいたが、明らかに薬の影響からは脱していたようであった。私は当惑した。こちらとしては、彼が意識を取り戻す以前に辞去する予定でいたのだ。この前彼に会ったとき、およそ友好的とはいえない挨拶を受けたからである。しかしいまとなっては、逃げることもできなかった。

「回復なさいましたね、実に結構です、ミスター・ベラミ」と私は言った。「私どもは心配しておりましたよ」

「ローズ先生、あたしのことなら心配ご無用ですよ」と返事があった。「もう帰っておねんねなさい。あたしゃ体があったまれば、もう大丈夫だから」

私は引き下がった。もうここにいる口実もなかったからである。療養院に戻ってから、もう一度ウィニングトンを見ることにした。彼はまだ昏睡状態であったから、私はそばで見張ることにした。何時間も椅子にすわってうたた寝していると、ついに灰色の夜明けとなった。しかし彼の容体は変わっていなかった。タヴァナーの場合、これほど長時間体の外に出ていたことはない。私はウィニングト

ンの状態にかなり不安を覚えた。問題ないのかもしれないが、問題ある場合も考えられた。私はこの種のトランスに関する臨床経験が不足していたし、タヴァナーを鴨猟休暇から呼び戻す術もなかった。

その日はなんとなく過ごしてしまったが、夜になってもウィニングトンの状態は変わらなかった。そこで私はなんらかの処置を講ずるときがきたと思い、ストリキーネを求めて薬局に行った。これを彼に注射して、効果があるかどうか、確かめたかったのである。

薬局の扉を開けた瞬間、誰かが室内にいると感じた。しかし電灯を点けてみると、室内は空っぽだった。それでも、私が戸棚をがさごそやっていると、しょっちゅう肘をつつくものがある。皮下注射器をさがして器具戸棚の引き出しを覗きこんでいると、私の首筋に息を吹きかけるものがある。

「くそ！」と私は大声で言った。「タヴァナー、さっさと帰って、お化けをなんとかしてくれ。おい、この野郎、誰だか知らないが、でてけ！　いっちまえ！　うせろ！　てめえには用がねえんだよ！」私は必要な道具を急いでまとめて、さっと出ていき、そいつを薬局に置き去りにした。

よせばいいのに私は通路を進みながら背後をちらりと見てしまった。すると、私の後ろから、高さ七フィートばかりの紡錘形の灰色の霧がついてくるではないか。恥ずかしながら、私は逃げた。私はなにを見ようと気安く驚きはしないが、別の存在次元から漂ってくるものが半分見えるのはいただけなかった。およそ背筋が凍るほどの恐怖であった。

私はウィニングトンの部屋に飛び込み、ドアを叩きつけるように閉め、鍵をかけた。ようやく息を整えることができた。しかし、そうしている間にも、灰色の霧が床に漂いはじめた。ドアのひび割れからお化けが滲み出してきて、戸棚の影のなかで姿を再形成しようとしている。

この場にタヴァナーさえいてくれたら、なんにもいらない。私はどうしようもなく、注射器を手にその場に立ちつくしたまま、脅えた馬のように冷や汗をかきながら、ただ眺めるだけだった。瞬間、私の脳裏に光明がひらめいた。私はなんという馬鹿だったのだろう。これは肉体に戻ってきたウィニングトンなのだ！

「ああ、くそ！」と私は言った。「驚かしやがって！　頼むから体に戻って、離れないでくれ。そしたらこの件は、水に流そうじゃないか」

しかしお化けは私の嘆願を無視した。どうやら皮下注射器が気になってしかたがないようである。肉体に入らずに、私につきまとうのであった。

「そうかい」と私は言った。「ストリキーネが欲しいんだな？　いいだろう、肉体に戻ればくれてやろうじゃないか。ほら、いまから体のほうに注射するぞ。ストリキーネが欲しいのなら、肉体に戻れ」

灰色の生霊はしばらくベッドの無意識の肉体の上で漂っていたが、すっとそのなかに消えていった。私としては、安堵、安堵、安堵の溜め息である。ベッド上の肉体のほうは、心臓が鼓動をはじめ、呼吸も回復していった。

私は死んだような足取りで自室に戻った。この四十八時間、懸念だらけでろくに眠っていなかったのである。私はドアに午前中は起こすなとのメモを張りつけた。惰眠に値するだけの仕事はしたと思っていた。厄介な患者二名をなんとか処置したし、わずかばかりのオカルティズムの知識を実地に応用して、うまくやってのけたと思っていた。

しかし、起こすなと表示していたにもかかわらず、午前七時に婦長が私を叩きおこしてくれた。

「先生、ぜひともミスター・ウィニングトンを診てください。頭がおかしくなられたようなんです」

私はぐったりしながら服をひっかけ、重い頭を洗面器につっこんでから、ウィニングトンを診察しにいった。いつもはにっこり笑って迎えてくれた彼が、今朝は悪意に満ちた挨拶をどなってくれた。

「おい貴様、教えろ」と彼は言った。「いったいおれはどこにいるんだ」

「どこって、きみの部屋にいるんだよ」と私。「きみは少し具合が悪かったんだが、もう大丈夫だ」

「まったく」と彼。「そんな話ははじめて聞いたぞ。それで貴様はなにものだ？」

「ローズだよ」と私は答えた。「ぼくを知らないのか？」

「知ってるとも。貴様はあの療養院のタヴァナーとかいう医者の手下だろう。どうやら、どっかのおせっかいがおれをここに押し込んで、なんとかしようと思ったらしいな。いいか、これだけは言っておく。おれはこんな場所にいるわけにはいかん。おれの服はどこだ？　おれは起きるぞ」

「服はきみがしまった場所にあるはずだ」と私は答えた。「どこにも持っていってはいない。しかし、起きるといわれても、それは無理な相談だ。ここにいろと無理強いはできないし、どこかよそに転院したいのなら、そのように手配もしよう。しかし、それなら救急車を呼ばなければ。きみはかなり悪い状態にあるからね」患者が落ち着くまで、私は適当にあしらうつもりであった。しかし彼は私の手口を見抜いた。

「救急車なぞくそくらえだ」と彼は言った。「自分の足があるんだ」。そういうと彼はベッドに身を起こし、足を振って降りようとした。しかし、わずかこれだけの運動でも、彼にはしんどかったのである。私が支えなかったら、床に転落していただろう。私は看護婦を呼び、二人で彼をベッドに寝かせた。彼も当面、面倒をかけようとしてもかけられない状態となっていた。

ウィニングトンの口からこれほどの悪罵が聞けようとは思ってもいなかったので、かなり驚かされた。彼はいつも穏やかで、人当たりもよかったのだ。無論、突然憂鬱になりがちだったのは、彼の病

状を考えれば、納得のいくものである。愉快になれといっても、その材料がなかったのである。タヴァナーの仲介がなければ、彼は最後の日々を慈善病院で送ったことであろう。

その宵、郵便ポストまで散歩したとき、ベラミ夫人に会ったが、驚いたことに、亭主も一緒だったのである。夫人はどこかしらぎこちない挨拶をしてきた。亭主がどう受け取るか不安だったのであろう。しかし彼の挨拶は温厚などというものではなく、私が十年来の友人であるかのように心のこもったものであった。自分が厄介をかけたと感謝し、また妻が大変お世話になりましたと礼を言うのである。このところ家内はつらい日々を過ごさせましたからね、反省しておりますよとまで言ったのである。

「しかし、あたしはね、ちょっと彼女を気分転換に連れていくつもりなんですよ。二度目のハネムーンというやつでね。帰ってきた暁には、また懇意にお願いしますよ、先生。タヴァナー先生にもよろしくお伝えください。あたしゃあの先生とぜひともお近づきになりたいんでね」

私はこの態度の変わりように驚きつつも、頭を下げた。そしてこの状態が奥方のためにも長続きするよう祈るだけだった。薬物中毒患者はあてにならないこと折れた葦も同然であるから、夫人がぬか喜びにおわらなければよいがと思わずにはいられなかった。

療養院に帰ってみると、タヴァナーがいるので驚いた。

「あれま、先生、どうして休暇からお戻りになったんですか？」私は質問した。

「先生が呼び返したのですぞ」と博士は答えた。「あれだけテレパシーでＳＯＳを出されれば、何事ならんと帰宅せざるを得んでしょうが」

「それはどうも申し訳ありません」と私。「ちょっと問題があったんですが、すべてはもう大丈夫です」

「なにがあったんですか？」博士は尋ねた。私はじろりと睨まれたので、いたずらをした小学生のように赤面してしまった。ベラミ夫人のことや、ウィニングトンが夫人に夢中になった話を伝えたくなかったのである。

「ウィニングトンが先生の潜在意識旅行を真似したらしいんです」と私はようやく口を開いた。「ずいぶん深いレヴェルにまで達してしまい、ずっと体から離れていたんです。それで心配になりました。ぼくはこの方面がよくわからないんですよ。まあ、そうしているうちに、彼が戻ってきたんです。で、彼を見まして、幽霊と間違えまして、ぎょっとしまして」

「彼を見たとおっしゃいましたな」タヴァナーが叫んだ。「どうして見えたんですか。先生には霊視力はないはずだ」

「灰色の、紡錘形をした霧を見ましたよ。ほら、あの飛行機乗りのブラックが死にかけたときに見たのと同じやつです」

「あれを見たわけですか」とタヴァナーが驚いていた。「つまりウィニングトンがエーテル体を外に出したとおっしゃる？　彼が潜在意識に行っていたのはどれくらいの時間でしたか？」

「およそ二十四時間くらいです」

「やれやれ！」とタヴァナーが叫んだ。「それじゃ、死んだな！」

「そんなことはありませんよ」と私が答えた。「生きてますし、ちゃんと足がありますよ。足で元気に蹴ってるくらいです」私は今朝の光景を思い出し、付け加えた。

「わたしにはわかりませんな」とタヴァナー。「生命力の乗り物たるエーテル体が、それほど長期間体外に出ていれば、肉体の分解がはじまってよさそうなものだ。彼はどこにいました？　なにをしてましたか？　もっとも、単に苦痛から逃れるために体外に出て、ベッドのすぐ近くにいただけかもしれませんが」

「最初に見たとき、彼は薬局にいましたよ」と私は答えたが、これ以上タヴァナーがウィニングトンの所在を詮索しないことを切に望んでいた。「彼は私について自分の部屋まできました。それで私がなだめすかして体に戻らせたのです」

タヴァナーは妙な目つきで私を見た。「先生が出くわされたものが、ウィニングトンであるかどうか、もちろん身元確認をなさったんでしょうね」

「いや、先生、まさか、そんなことが―」

「一緒に来てください。とにかく会ってみればわかることでしょう」

ウィニングトンは夜間照明灯だけがついた部屋で横になっていた。私たちが入ったとき、彼は頭をこちらに向けたが、口をきこうとしなかった。タヴァナーがベッドのところまで行き、サイドテーブルの読書灯をつけた。ウィニングトンは突然の輝光に顔をよがめ、なにやら唸り声を発した。しかしタヴァナーは光を彼の瞳にもろに投射して、じっと観察していた。すると私は驚かされた。瞳孔が収縮しないのである。

「そんなことだろうと思った」とタヴァナー。

「なにかまずいのですか？」私は不安に駆られて質問した。「大丈夫のように見えますけど」

「なにもかもまずいですぞ、先生」とタヴァナーが答えた。「無論先生は知る限りで最善の手を尽くされたのでしょうが、知り方が足りなかったのですよ。この方面のことには生兵法は禁物ですぞ。知らないのなら、ほっておくのが一番です」

「でも―でも―彼は生きてるじゃないですか」私は驚愕しつつ叫んだ。

「こいつは生きておりますよ」とタヴァナーが主語にケチをつけた。「これはウィニングトンじゃないのです」

「それじゃ一体全体だれだというんです？　彼にしか見えませんが」
「それは調べてみしょう。きみはだれだ？」博士は声を高くして、寝ている男に話しかけた。
「知ってるだろう、この野郎」とかすれた声が返ってきた。
「だれって、これはウィ―」私の口はタヴァナーの手でふさがれてしまった。
「静かにしてなさい、このトンマ！　もうむちゃくちゃにしてしまったんですぞ。本当の名前を教えちゃいかん」
それから博士は病人のほうを向くと、ふたたび質問を繰り返した。
「ジョン・ベラミだ」とすねたような声が返ってきた。
タヴァナーは頷き、私を室外に連れ出した。
「ベラミだって？」と博士が言った。「それはヒルシュマンの家を借りた男の名前でしょう。そいつとウィニングトンはなにか関係があるのですか？」
「いいですか、先生」と私。「正直なところをお話ししますから。言いたくなかったんですけどね。実はウィニングトンがベラミの細君に一目惚れしちゃいまして、ずっとそのことを考えっぱなしなん

です。もう、あれこれ想像を逞しくしているもんですから、いつのまにやら無意識のうちに自分がベラミだと思い込んでしまったんですよ」

「そりゃ有り得る話ですな、よくある精神病の一例かもしれません。そこらへんはじっくり調べてみましょう。しかし、現在の問題はですよ、なぜベラミとウィニングトンが交替しなけりゃならんのです」

「願望成就でしょう」と私は答えた。「ウィニングトンはベラミの細君に恋をしてました。それで自分がベラミになれば、彼女を所有できるのにと思いはじめたんです。そういうわけで、彼の譫妄が潜在意識的願望を現実として表明しているのです。よくあるフロイト的メカニズムですよ、ご存じでしょう—願望成就としての夢というやつです」

「あえて言わせてもらえば」とタヴァナーが言った。「フロイト派は自分たちの理解していないことにもっともらしく説明をつけておるのですわ。ところで、ベラミのほうはどうしてます？　あちらもトランス状態ですか？」

「一見するとまったく大丈夫のようですよ。まあ、三十分前までは。細君を連れてポストのところに来たとき、会いました。まったく元気という感じで、実のところいつになく礼儀正しかったです」

「なるほど」とタヴァナーが皮肉っぽく言った。「先生とウィニングトンは仲がよろしかったですな。さていいですか、ローズ先生、まだ隠しておられることがありますね。わたしはこの件をとことん知る必要があるおです。全部話していただきたい」

そこで私もすべてを吐いた。冷静に話してみると、すべてはたあいない幻想のように聞こえる話であった。話し終えたとき、タヴァナーは腹をかかえて笑った。

「いやローズ先生、今度という今度はやってくれたものですな！　ほかでもない、先生ともあろうまじめな方が！」

「先生はどう説明をおつけになるというのですか？」私は笑われて、いささかむっとしながら質問した。「ぼくだってウィニングトンの魂が体外に出て、ベラミ夫人の部屋に現れたということは理解できますよ。その手はいままでにもありましたからね。それにウィニングトンの願望成就も簡単に理解できます。この一件のなかじゃ、これが一番わかりやすいですよ。ぼくにぴんとこないのは、二人の男の性格が入れ代わった点だけです。ともかくベラミは、いまのところは性格が良くなった。ウィニングトンはなぜか不機嫌で、すこしうわごとを口走っている」

「そこにすべての問題の鍵があるのですぞ。この二名のあいだでなにが起きたとお思いか？」

「わかりませんね」と私は答えた。

「わたしはわかりますぞ」とタヴァナー。「麻薬は、過量に用いると、人間を体外に押し出す効果があるのですわ。しかし過量と致死量の範囲が狭いのですな。後者の場合はゆきてかえらぬ人になってしまうわけです。ウィニングトンは先生の話からベラミの弱点を発見したのです。彼とて修行を積んだ魔術師ですから自由に体を離れることができる。そこでベラミがパイプの夢を見て体を離れるのを待ち構え、入れ代わったのですよ。おかげでベラミは宿無しでうろつくはめになった。さて薬が欲しいベラミは、それを物理的に入手することができないものだから、うちの薬局の在庫の匂いを遠くから嗅ぎつけて、やってきたわけです。そこで彼は皮下注射器を手にした先生を目撃した―魂を宿したエーテル体には視力があるのです―彼は本能的に先生のあとを追った。先生はなにも知らずに彼をウィニングトンの体に押し込んで、話をぐちゃぐちゃにしてしまったという次第」

タヴァナーが話しているあいだに、これが真相だなと私にもわかった。要所要所が自分の目撃したことにきれいに合致するのである。

「なんとか事態を修復する手段はないものでしょうか？」私はひたすら恥じ入りながら尋ねた。

「やれることは二、三ありますが、なにをもって正しいとするかが問題でしょうな」

「その点には問題がないのでは？―二人を元来あるべき場所に戻せばいいわけで」

「それが正しいとお考えですか？」タヴァナーが言った。「わたしはそれほど確信を持てませんな。そうなれば、不幸な人間が三人できあがってしまう。現在の状況では、とても幸せな人間が二名、かなり頭にきている人間が一名ですから、大局的に見ればこっちのほうがめでたいのでは」

「でも、それじゃベラミ夫人はどうなります？」私は言ってしまった。「彼女は結婚してない男と暮らしてるんですよ」

「法律上の判断では、彼女は彼と結婚しておるのです」とタヴァナーが答えた。「英国の結婚に関する法律は肉体の罪に関してのみ峻厳なのであって、魂の姦通など知ったことではないのです。肉体が貞節を誓っておるかぎり、問題なしと見なすのです。性格が悪いほうに変化したからといって、それでは離婚の根拠にはならんです。たとえそれが薬物、アルコール、狂気の影響で生じたとしてもですわ。これぞわれらの崇高なる倫理規範でありますぞ。そういうわけで、心霊的影響のために性格が良いほうに変わったというのも、離婚の根拠になりませんな。役所じゃ受け付けてもらえませんぞ」

「いずれにせよ」と私は答えた。「ぼくには道徳的じゃないように思えますが」

「道徳をどう定義なさいますかな？」とタヴァナー。

「つまり国の法律と―」私ははじめた。

「そうなりますと、人間が天国に入れるかどうかは議会で決まることになりますぞ。新しい婚姻法が施行される前日に、とある女性と正式に婚姻届けを出してしまうと、重婚罪で刑務所行き、そのの ち地獄行きですか。しかし施行後に同じ女性と結婚すれば、めでたしめでたし聖霊に栄えあれかし、ゆくゆくは天国行き。やれやれ、ローズ先生、もう少し深く考えてみようじゃないですか」

「では」と私。「先生は不道徳をどう定義なさるのですか？」

「それに関していえば」とタヴァナー。「不道徳とは、自分が所属する社会の集団的魂の進化を退行させるものを言うのです。法を破ることこそ最高の倫理的行為となる場合もあるものですぞ。歴史を見ればそんなのはごろごろしておりましょうが。カトリックにもプロテスタントにもある、順応主義というやつが良い例ですわ。殉教者というのは時の政権から見れば犯罪者でしかないが、後世では聖人様と崇められるわけです」

「現実的な話に戻りましょうよ、先生。ウィニングトンをどうなさるおつもりですか？」

「精神病認定をします」とタヴァナー。「それから救急車を予約して、すぐさま州の癲狂院ににほうりこんでしまいましょう」

「それは先生のご自由ですが」と私は答えた。「その認定書に署名すれば、ぼくは地獄落ちですよ」

「ご自分の信念を貫く勇気はないが、わたしの邪魔をする気もないと受け取ってよろしいか？」

「邪魔しろって、どこに話をもっていきゃいいんですか？　下手なこと言えば、こっちが精神病認定されますよ」

「この邪悪な世界では、正しいことをいえば悪者扱いされること請け合いですな」とタヴァナーが言い返した。このぶんでは私たちがやらかす最初の喧嘩になるかと思われたとき、ドアが突然あいて、看護婦が顔を出した。

「先生」と彼女は言った。「ミスター・ウィニングトンが亡くなられました」

「助かった！」と私。

「やれやれ！」とタヴァナー。

私たちは二階にあがってベッド上の遺骸のよこに立った。物理的形態のみが人間ではないのだと、これほど思い知らされたことはなかった。ここにはかつて二人の人間を宿した家がある。三十六時間ほど空き家だったこともあるが、いまは完全に空き家なのだ。すぐに壁は崩れ、屋根は落ちるだろう。どうしてこれが自分の友人だなどと考えることができたのだろうか？　四分の一マイルほど離れた場所では、この住居を建築した魂が懐手をして呵々大笑しているだろうし、どこかで（恐らくは薬局で）先程までここに幽閉されていた霊体が、もはや入手できない薬物の栓に鼻をぶつけながら怒り狂っているにちがいない。私は膝から崩れ落ちそうになり、椅子に腰を降ろした。最初の手術以来、失神しかけたのは久し振りであった。

「まあ、とにかくこれで一件落着だ」と私は言ったが、耳に響く声は別人のもののようであった。
「そう思われますかな？　わたしに言わせれば、面倒ははじまったばかりですよ」とタヴァナーが言った。「ベラミがこの肉体に閉じ込められているうちは、少なくとも居場所はわかってるし、押さえておくこともできたのですぞ。しかし彼は今、不可視の世界に放たれてしまった。つかまえるのは骨ですよ」
「するとなんですか、彼は細君とその―亭主に干渉しようとすると？」
「先生が彼の立場だったら、どうします？」とタヴァナー。
「それでも、先生はこの一件を不道徳とは見なさないのですか？」
「見なさないですな。集団的魂に害があるわけじゃない。社会的風紀に影響がないと言ったほうがわかりやすいですか。一方、ウィニングトンは途方もない危険を冒しておるのです。ベラミが体を離れたいま、どうやって彼を遠ざけておけますか？　遠ざけておけなかったら、なにが起きますか？　よろしいか、ベラミの寿命はまだ尽きていなかったのですから、彼は自殺者同様、地縛霊となってさまようのです。それに、結核が生命力を蝕む病だとすればですぞ、いまや魂を宿した病気持ちの生命力が、ベラミの体に憑依して、昔の病を引き起こすのは時間の問題でしょうが。そしてベラミ二世が星幽界に出たとき―死んだときと言ったほうがわかりやすいですか―ベラミ一世になにを言われると思

いますか？　この二人はベラミ夫人にどういうことをするでしょうか？　夫人のそばで血で血を洗う決戦ですか？

「いやいやローズ先生、禁じられた知識を弄ぶ者たち専用の地獄なんぞないのですよ。必要ないのですわ」

第七話　ルネサンスの女

慣習に反してタヴァナーが患者とひとりきりで会おうとしない。これははなはだ希有のことであるが、この場合には十分すぎるほど理由があった。患者（女性）からなんの情報も引き出せないのである。そこで私たちが話を聞く相手は患者の母親ミセス・ケイリーとなった。そして母親ときたら、おろおろするばかりで、わずかな情報しかくれないから、赤の他人から聞く程度の詳細しか判明しない。しかし、患者自身の見解や感覚となると、私たちは五里霧中だった。およそなにもわからないのである。

患者である女性は私たちの前にいる。巨大な肱掛け椅子に座っているその肉体は、王女の魂が宿ってもよいくらいの代物であったが、なんということか、その肉体は空き家なのであった。素晴らしい黒い瞳にはなんの表情も浮かんでおらず、ただ虚空を見つめていた。その間、私たちは彼女がまるで無機質の物体であるかのように論じていた。実際、そうとしか思えなかったのである。

「この子は生まれたときから普通の子供じゃございませんでした」と母親が語った。「出産いたしまして、この子を腕に抱かせてもらったとき、なんとも普通でない目つきでわたくしを見上げましたんですよ。それが赤子の目じゃないんです、先生。女の目、しかも経験を積んだ女の目つきだったんです。この子は泣きませんでした。物音ひとつ立てなかったんです。そのかわり、まるで世界中の苦

しみを一手に引き受けたような顔をしていました。あのときの表情は悲劇そのものでした。きっと、こうなることを知っていたんでございましょう」

「恐らくそうでしょうな」とタヴァナーが言った。

「でも、数時間たちますと」と母親が続けた。「まったく普通の赤子のようになりました。でも、それ以来この子は変わっていないんです。なりばかり大きくなりまして」

私たちは椅子に座る娘を見た。彼女が私たちを見返す様子は、幼児に見られるまばたきもしない硬直性そのものであった。

「わたくしどもは知る限りのお医者さまのもとへまいりました。でも、おっしゃることは一緒で—これは救いようのない知能欠落であると。しかし、わたくしどもは先生のことをお聞きしました。なにかちがうことをおっしゃっていただけるかも、と思いました。先生のご治療法はほかの先生がたとはちがうと承っております。この子になにもしてやれないなんて、おかしいと思います。わたくしども、こちらに車でまいります際に、道端で遊んでいる子供たちを目にいたしました。かわいらしくて、元気一杯—でも、ぼろを着て、どろだらけで。あんな、母親がなにもしてやれないような子供たちがあんなに素晴らしくて、どうして、どうして、どうしてうちのモナは、あたくしどもがなんでもしてやれるモナは—こんなふうに？」

かわいそうに母親の目は涙に溢れていた。タヴァナーも私も返す言葉がなかった。

「よろしければ、お嬢さんをうちの療養院にお連れして、しばらく様子を見させていただきましょう」とタヴァナーが言った。「もし脳の欠陥であれば、わたしには手の打ちようがありません。しかし精神自体の発達の問題であれば、治療を試みてみましょう。こういった欠落症例は意思疎通が難しいのです—ちょうど電話をかけているのに、相手が出ないようなもので。なんとか彼女の注意を引くことができれば、手の打ちようもあります。最大の問題は意思疎通の確立です」

彼女たちが去ったあと、私はタヴァナーに向かってこう言った。「あんな患者を治療なさるとおっしゃいますけど、どういう希望があるんですか？」

「いまのところはなんとも言えませんが」と博士。「わたしは彼女の前世を調べてみるつもりですわ。今までの経験からいって、先天的障害は前世に原因があることが多いのです。それから彼女のホロスコープを調べ、前世で作った負債を償還する環境が熟しているかどうか、判断しますな。いまだにわたしをけったいな山師とお考えですかな、ローズ先生、それともわたしのやり口に慣れはじめられましたかな？」

「驚くことはとうの昔にやめてますよ」と私が返した。「先生が処方を書くとおっしゃるなら、悪魔でもトリケラトプスでも受け入れましょう」

タヴァナーはくすくす笑った。

「さっきの症例に関していえば、われわれが調べるべきは輪廻転生の法則でしょう。さてローズ先生、正直おっしゃっていただきましょうか—もし転生が事実でないとして、人生が人間の始まりにして終わりであり、死んでしまえば現世での所業に応じて業火なり竪琴なりに進むとした場合、モナ・ケイリーの状態にどう説明をおつけになりますかな？　彼女がいったい生後数時間になにをして、あんな審判を下されたというんですか？　そして死ぬとなれば、彼女は天国に行けるほど善行を積んだでしょうか、地獄に落ちるほど悪行を犯したでしょうか？」

「わかりませんね」と私は言った。

「しかし、わたしの理論が正しいとします。そして、彼女の過去の記録を発見できれば、彼女の現状の原因もわかろうというものでしょう。原因がわかれば、治療も可能ですわ。ともあれ、やってみましょう。

「記録を点検する方法をお知りになりたいようですね？　わたしは多くの方法を用います。ときには患者に催眠術をかける場合もあるし、水晶球を使うときもあります。またあるときは《自然》の潜在意識から読みとることもあるのです。ご存じのように、この世のあらゆる思考や衝動が《アカシヤ記録》に記録されている—これがわれわれの信念です。まあ、図書館で索引を調べるようなものですわ。今回の場合、最後の手口でまいりましょう」

数分後、博士のみが知る方法で、タヴァナーは精神からすべての外的印象を遮断し、内的幻視へ集中していった。

あきらかに混乱した精神画像が博士の眼前を踊っているらしい。それから博士は焦点を合わせて、見たものを語りはじめる。それを私が書きおろすのである。

エジプトやギリシャの転生は数語で片付けられた。これは博士が探しているものではなかった。博士は時代をどんどん下っていったが、私の感じるところ、われわれが相手にしている魂は、大変な血統を有しており、また大いなる機会に恵まれてきた魂であった。転生するたびに王家に生まれたり司祭になったりする話が続いたが、しかし現世の娘の魂は、その肉の乗り物からあらゆる情報伝達を遮断されているのである。いったいどういう真似をやれば、こんな肉体独房禁固刑を食らうのだろうか。

それからわれわれはようやく目的のレヴェルに到達した。十五世紀のイタリーである。「大公の娘―」私は公国の名前を聞き漏らした。「彼女の妹がジョヴァンニ・シグムンディに愛されていた。彼女は妹の恋人の心を奪うべく策謀した。しかしずっと裕福な求婚者が現れたため、束縛から自由の身になるべく、シグムンディを敵の手に売り渡した」

「まさにルネサンスの娘ですな」これが通常意識に回復して私のメモを読んだタヴァナーのコメントであった。博士自身は自分の潜在意識でなにが起きたのか、その記憶を保持したまま回復することはめったにないのである。

「さて、これで問題の原因が推測できるでしょう。ローズ先生、誕生以前にいかなる精神過程が生じるか、ご存じですか？　誕生直前、魂は未来の、いわば映画を見るのですわ。むろん詳細なものではなく、運命によって決定された大筋だけですがね。魂はこの大筋を変更することはできないのです。

むしろ大筋に対する魂の反応次第で、未来の生が計画されるのですな。かくしてわれわれは現世の運命を変えることはできないが、未来は完全にわれわれの手の中にあるのですよ。

「さて、わたしたちは記録を手にいれた。となれば、この娘にどういう運命が待ち構えているか、推測できます。彼女はある男と女に一生涯かかるほどの負債を負っている。自分が引き起こした苦しみが、彼女に反撥してくるのです。専門化した地獄なんぞ必要ないのですわ。魂はそれぞれ自分用の地獄をつくるのですから」

「しかし彼女は苦しんでいませんよ」と私は言ってみた。「単に受け身でいるだけじゃないですか。苦しんでいるといえば、母親くらいですよ」

「おっと」とタヴァナーが言った。「そこに今回のすべての鍵があるのですわ。彼女は自分を待ち受けている運命をちらりと見たとき、それに反発し、負債を無効にしようと試みたのです。ようするに、彼女の魂は重荷を背負うことを拒否したのですわ。赤子らしくない奇妙な目つきなので、母親が驚いたと言っておったでしょう。それはこの瞬間的覚悟のために生じたひらめきだったのですな」

「どんな人にでも、その予備知識があるものですか？」私は尋ねた。

「誰でもちらりと見ますよ。しかし、すぐにその記憶は活性を失ってしまうのです。しかし、一部の人間は曖昧な予感を持ち合わせていて、魔術の修行を積みますと、こういった失われた記憶を回復しがちです。おまけに前世の記憶もです」

「ミス・ケイリーの問題の原因がわかったのなら、どうやって治療します？」

「たいしてやれることはないのですよ」とタヴァナー。「待機観察くらいですか。負債償還の機が熟せば、過去の悲劇の舞台に立った他の役者がやってきて、無意識に負債を払えと要求するでしょう。彼女は賠償の機会を与えられ、運命のくびきから解放され、自由の身になれるわけです。もしそれができないとなれば、彼女はただちに現世から連れ出され、すぐさまもう一度試みるように生まれ変わらせられるという次第。しかし、わたしのもとに連れてこられたところを見ると、彼女の魂はもう一度肉体に戻るよう機会を与えられることになるでしょう。まあ、見てみますか」

モナ・ケイリーがハインドヘッド療養院に落ち着いて以来、私は彼女をしばしば観察した。その仮面のような表情のなさにもかかわらず、彼女の顔には品格があった。くっきりとした目鼻立ち、引き締まった口元、そして素晴らしい瞳は、尋常ならざる器量を持つ魂の住居にふさわしいといえた—ただ、その魂が不在なのである。

タヴァナーの願いは、この劇のほかの役者がほどなく登場することであった。生命の潮流のすぐ下を永遠に流れていく不思議な力によって、彼女の近くに引き寄せられてもいいはずである。療養院に新しい患者が到来するたびに、私はモナ・ケイリーを詳細に観察して、新来者が彼女に対していにしえの負債の賠償を要求するかどうか見ていた。

春は夏へと変わったが、なにも起きなかった。他の症例に気をとられたこともあり、私はモナの件をほぼ忘れかけていたが、タヴァナーが思い出させてくれた。

「そろそろミス・ケイリーを見張りはじめたほうがいいですぞ」と博士は言った。「彼女のホロスコープを計算しておったのですが、惑星間の座相が形成されつつあります。今月末にかけて、彼女の運命を清算する機会が訪れるでしょう—もっとも、われわれの手で彼女にやらせることができれば、の話ですが」

「彼女がやらなかったら？」

「そうなれば、彼女は長くは持たないでしょう。今回の転生でなすべき目標に失敗したわけですから」

「彼女がやったとしたら？」

「苦しむでしょうな、しかし自由になれます。彼女はほどなく以前に得ていた高い地位へとふたたび上るでしょう」

「現世の彼女が王家に関係があるとはとうてい思えませんが」

「彼女は王族以上の存在だったのですよ。彼女は《秘儀参入者》だったのです」とタヴァナーが返答した。その口ぶりから判断するに、博士がこの世のものでない王権を語っているのは明らかだった。

私たちの会話は階上の一部屋から聞こえてきた悲鳴のために突如中断した。それは混沌と禁断の恐怖を垣間見てしまった魂が発する、究極の恐怖の叫びであった。実のところ、悪夢を見た子供が発するようなこの悲鳴は、成人男子の喉から発せられたものであり、その分だけ怖いのである。

私たちは二階へ急いだ。悲鳴の出所を人に聞く必要はなかった。あれを叫ぶ患者は一人しかいない—戦争神経症を患い、もっか静養中の哀れな男である。

ついてみると、彼は床の中央に突っ立ち、頭からつま先までぶるぶる震えていた。私たちを見るや、彼は走ってきてタヴァナーの腕にすがりついた。見るもあわれな幼児的行動であったが、しましまのパジャマ姿の大男が行うために、見ているこちらも異常なまでに暗澹たる気持ちにさせられた。

タヴァナーが母親のようになだめてやり、寝台に連れもどすと、落ち着くまでそばに座ってやった。

「これ以上寝せておくわけにもいかんようんですな」と博士が部屋を出がけに言った。「活動しないといよいよ陰鬱になりますし、塹壕の光景を思い出すだけのようだ」

翌日ハウソンは到着以来はじめて一般患者のあいだに姿を現した。この気分転換は良好のようであった。

しかし良好状態は長く続かなかった。一旦新味がうせてしまうと、彼はふたたび物思いに耽るようになった。自分が経験した地獄の光景を暗鬱な気分で思い出し、そのたびにパニックに襲われ、手近な人間に保護を求めてすがりつくのである。

大柄な六フィートの男が予告もなく腕のなかに飛び込んでくるというのは、他の患者にとってもかなり気が重いこととなった。そこで私たちはハウソンを庭園の一角に隔離することにした。ここは他の患者と交わらせないほうが良いと判断した場合のための一角であるが、モナ・ケイリーもここの住人であった。しかし私たちは彼女を勘定に入れていなかった。なにせ私たちが座らせるデッキチェアに身じろぎもせず座ったままで、食事時に連れてくるまではぴくりとも動かないからである。

ある晩、タヴァナーとともにこの一角を散歩していると、いまや耳慣れたハウソンの悪夢の叫びが聞こえてきた。彼は別荘から飛び出してきて、芝生のところで突っ立っていた。どうしてよいかわからない風であった。視界にある人間は私たちと、椅子のなかで動きもしないモナ・ケイリーだけであった。彼は中間地点にいた。人間というものは、神経が破綻すると、気性に応じて子供と化すか幼児と化すかのどちらかである。そして現在のところハウソンは四歳児であった。タヴァナーが慌てて芝生の上を駆けていったが、男が幼児と化したとき、求めるものは母親である。そういうわけで、ハウソンは接近してくる大人を無視して、芝生を横切りモナ・ケイリーのもとへ走り、彼女のスカートに顔を埋めたのであった。

大男があられもなくすがりついてくる衝撃のため、彼女は椅子もろとも後方にひっくりかえりそうになった。このため、彼女のぼんやりした精神も驚愕し、ある程度の反応に追い込まれたようである。私は走り寄って彼女の不格好な姿勢をなんとかしてやろうとしたが、タヴァナーに腕をつかまれ、制止された。

「行ってはいけませんぞ、とにかく見てみましょう」と博士は言った。「彼女がなにをするか、それを見ましょう。これが運命の転機かもしれませんからね」

ハウソンの行動にはなんら攻撃的なところがなかった。なにせ現在の彼はまったくの子供であり、男ではないのである。彼を見ていると、いつも私の脳裏に浮かぶのは、間違った躾を受けて自分がポメラニアンだと思い込んだマスティフである。体重二百ポンドの図体で人の膝に乗ろうとするのだ。

永遠に続くように思われた数分間、私たちはぼんやりした頭脳が機能しようと試みる様子を観察していた。すると形の良い白い手、心を病んだ者だけが持ち得る萎えたような脆弱な手が、泣きじゃくる男の肩に置かれたのである。これこそはモナ・ケイリーが自発思考的になした最初の行動であった。

私としては、タヴァナーが喜びのあまり今にも芝生の上で小躍りするのではないかと思った。

「ごらんなさい！」と博士は言った。「彼女の精神が機能しようと努力しておりますぞ」

私は見た。それはむしろ、錆びた機械がいやいや手で回されているような感じだった。娘の皺ひとつない額が緊張し、思考の流れが開かれていない回路を無理にでもこじあけようとしていた。うっすらながらどんな母性本能が目覚めたのか、私にはわからない。しかし彼女は明らかに巨大な子供を足元に置き、保護していたのである。

数分でハウソンは自分を取り戻し、襲撃の犠牲者に対して恥ずかしそうに詫びていた。素晴らしい黒い瞳がなんの表情も見せずに彼を見つめていた。そこでハウソンも状況を悟り、謝罪を中途でやめ、彼女を見つめかえした。

「ああ、なるほど」と彼は独り言のようにつぶやいた。「気にしてないんなら、こちらも有り難いです」そう言うと彼は娘の足元に座ったまま、震える手で煙草に火をつけた。

そのとき以来、このカップルは起きている間はずっと一緒にいるようになった。ハウソンにとって、なにも言わない相手はまさに必要としていた仲間だった。彼女のそばにいると、人間に保護されているという感覚が得られるし、彼女の目を見れば、自分が馬鹿にされているという雰囲気もなかったのである。頭が空っぽの娘と非常警報みたいな知的男性という組み合わせは、療養院の他の住人にとって、大いなる娯楽のもとになった。私自身も二人の関係をなんとも不似合いな友情の発露と見ていたのであるが、それもある晩の散歩中にタヴァナーが私の肩に手を置いたときまでであった。

「モナ・ケイリーと一緒にいるのは誰でしょうな？」博士は尋ねた。

「ハウソンですよ、もちろん」と私は返答した。なんでそんな明々白々な質問をするのか、不思議であった。

「まあ、今はそう呼んでおりますが」とタヴァナーがカップルをじっと眺めながら言った。「しかし、彼がジョバンニ・シグムンディという名前だったときもあるように思うのですよ」

「すると―？」私は叫んだ。

「その通り」とタヴァナー。「輪廻の輪が一回り終えたのですよ。敵の手に売り渡されたとき、彼は拷問を受け、苦悶しながら最後まで彼女の名を呼んでいた。いうまでもなく、彼女は現れなかった。さて現在、彼はふたたび苦悶しておりますが、なんらかの不思議な精神作用の法則によって、助けを求める叫びが過去の回路を通じて伝わっていき、彼女はそれに応じてしまったわけです。つまり負債の支払いを始めたわけですな。すべてがうまく運べば、わたしたちは魂が肉体に戻る様子を見ることができますぞ。それも、ただごとでない大きさの魂が」

私としては、再び結ばれる恋人たちというロマンスを目撃するのだろうと思っていたが、ほどなく少なくとも一方にとっては悲劇になりそうだと意識させられることになった。

翌日、ハウソンの婚約者が面会にやってきた。私はその女性をハウソンがいる隔離区画へ案内してやった。するとここでなんとも哀愁に満ちた小悲喜劇が演じられることになったのである。いつものようにハウソンはモナ・ケイリーのそばで煙草を間断なく吸っていた。婚約者の姿を見ると、彼は飛

び上がるように立ち上がった。モナ・ケイリーも立ち上がった。婚約者の目には恐怖と不審の念が浮かんでいた。おそらく精神の病に接したことがないためだろう。はじめて見ると、それは気がめいるものなのだ。一方、私たちのモナの目には、軽蔑としか形容のしようがない色があった。それは十五世紀イタリア人が持つ狡猾な無慈悲の眼光であった。私は婚約者が何者であるか、ある程度推測した。

ハウソンはかたわらの娘の存在も忘れて、いそいそと婚約者のもとに行き、キスをした。そのときモナ・ケイリーに唐突な変化が生じた。私は一瞬、彼女が厄介な悪意の爆発をやらかすのではないかと思ったが、そうではなかった。私が目にしたものは、世にも素晴らしいものだったのだ。魂が肉体に入り込み、所有したのである。

眼前に繰り広げられる光景を霞んだ眼で眺めているとき、知性が徐々に彼女のなかで目覚めつつあった。一瞬、事態は天秤にかけられていたといえよう。彼女が突進してきて二人を引き離すか、それともこの場を離れるか？　私ははた目を気にしていない恋人たちの背後に立ち、いつでも飛び出してモナを押さえる用意をしていた。機能を忘れていた頭脳がいやいや不慣れな努力をしているあいだ、私はじっと待っていた。数分が数時代に思えたほどであった。

すると娘はゆっくりと背を向けた。恋人たちが気づかぬうちに、彼女は草むらのほうへ静かに移動していき、傷ついた獣が身を隠すように潅木の陰に避難した。しかし彼女の動きはもはや不案内な手足の勝手な移動ではなかった。彼女の身のこなしは王侯の前を歩んだ女のそれであったが、また心破れた女のそれでもあった。

私は木陰を行くモナのあとをついていき、彼女の腕に手を通して本能的に慰めの言葉をかけてやった。無論、返事などは期待していなかった。彼女は涙に溢れた黒い瞳を私に向けた。それは恐るべき将来を見越した者だけが持つ輝きを放っていた。

「あれでいいのです」と彼女は明確に言った。彼女がはじめてしゃべった言葉であった。そして彼女は私の手をふりほどき、一人で歩いていった。

その日以来、私たちは魂が肉体に出入りする様子を目撃することになった。あるときは精神が空白な人間が存在し、またあるときは歴史を作った女性たちの一人がいた。意志伝達手段が発展途上中であることを除けば、彼女は完全に能力を回復していた。そして、なんという能力であろうか！　私はルネサンス期の素晴らしい女性たちの話を本で読んでいた―そして今、この目で見たのである。

また、ときどき自分の置かれた立場がつらくなりすぎると、彼女の魂はしばらく体外にすべりでて、私たちの知らない不思議なエリシウスの野で休息していた。こういう場合、精神を失った肉体の世話は私たちに任されることになるが、意識を取り戻すたびに魂は生気を増進させていった。誰と語らっていたのか、どういう援助が差し延べられたのか、私たちにはわからない。しかし、転生の苦悶に直面するたびに、魂は新たなる勇気と知識をもって重荷を背負っていったのである。

モナのぼんやりとした、しかし新たに目覚めた精神は、ハウソンの置かれた状況をどんどん理解していった。彼女はハウソンの心の動きを顕在意識・潜在意識にかぎらず逐一読むことができたため、およそ最高の乳母になれたのである。彼のパニックに襲われやすい心は、もはや暗闇と恐怖のなかに

放り出されることはなかった。彼女は本能的に悪夢の到来を感知し、手を差し延べては彷徨するハウソンの魂を安全地帯に引き戻していた。

かくして恐ろしい発作の疲労と涙から保護されたため、ハウソンの精神は快方に向かいはじめた。日に日に彼が療養院を出て婚約している女性と結婚する時期が近づきつつあった。無論、モナ・ケイリーが本能的な技量と注意深い看護を通じて、その時期の到来を早めていたのである。

私は、彼が婚約している女性と結婚すると述べたのであり、愛している女性と結婚するとは言っていない。この時期、モナ・ケイリーは指一本動かすだけで、ハウソンの意識内に前世の記憶を蘇生させて自分のもとに引き寄せることができたはずである。彼女もそのことを十分承知していた—彼女の観察者であった私はそう確信している。無知な女であれば、彼女ほど慎重に落とし穴を回避できるはずもなかった。

ハウソンが退院する前夜、彼女はひどく困憊して以前の状態に戻ってしまった。何時間もタヴァナーと私で彼女のそばについてやった。彼女は息すらろくにしていないようであったが、それほど完全に魂が肉体から離れていたのである。

「彼女は自分の潜在意識のなかに閉じこもって、前世の記憶のなかを動いているのですぞ」とタヴァナーが私にささやいた。そのとき、わずかな痙攣が寝台上の肉体を駆け抜けていった。

すると、ある変化が生じた。

「おっと」とタヴァナー、「彼女は外に出ましたよ！」

ゆっくりと白く長い手があげられた―かつては気持ち悪いほど萎えていた手が、いまやしっかりとした強さと美しさを備えている。そして寝台脇の壁に一連のノックをするのである。普通の手なら拳をすりむくほどの強さであった。

「彼女は《ロッジ》への入場を要求しておるのです」タヴァナーがささやいた。「ノックが認められれば、彼女は《言葉》を発しますぞ」

天井付近のどこかで一連のノックが繰り返された。するとタヴァナーが娘の口元を手で覆った。博士の指のあいだから、なにかこもった音が聞こえたが、私には判別できなかった。

「彼女はかつて求めていたものを獲得するでしょう」とタヴァナー。「彼女が認可を要求しているものは、ある高い《位階》なのです」

肉体を離れて参集するこの不思議な《ロッジ》で、なにが行われていたのか、私には知る術もなかった。しかしタヴァナーはテレパシー能力を用いて儀式に参加できるらしく、あれこれ返事をしたり敬礼をしたりしていた。

この不可思議な儀式が終幕に近づいたとき、モナ・ケイリーとして知られている魂が仲間のもとを離れて、徐々に通常意識に戻ってくる様子を見ることができた。彼女の顔にはかつていかなる生者に

も見られたことがない安息の表情が浮かんでいた。これは《光》にまっすぐ向かっていった死者の顔にのみ見られるものであった。

「彼女は試練に立ち向かう力を集めおえたのですな」とタヴァナー。「実際、試練ですぞ。なにせハウソンの婚約者が車で彼を連れにくるのですから」

「ミス・ケイリーを立ち会わせるのは賢明なことでしょうか？」私は尋ねた。

「耐えてもらいましょう」とタヴァナー。「機会というものは、逸するくらいなら台なしにしたほうがいいのですわ」

博士は運命が働くときには決して患者を容赦しないタイプの人物であった。博士にとって、死は一般人にとっての移住程度でしかないのである。実際、彼は死をまったくそういう視点で考えていたようであった。

「いかにぼんやりしたものであっても、なんらかの過去の記憶がちらりとでも見えれば、未来はわかったも同然ですわ。そうなれば人生を怖がることもなくなるのです。今日の実験に失敗したとしても、ごたごたを片付けて、寝て、翌朝気分がすっきりすれば、また始めるだけのことですよ。輪廻転生を確信してしまえば、人生に対しても同じことです。魂の不滅性を個人的事実として認識していない連中だけが、人生を台なしにしたとか、二度とない機会を逸したなどと語るのですよ」

婚約者がハウソンを引き取りにきたとき、モナ・ケイリーとタヴァナーと私は、さよならを言うために玄関に立っていた。彼は私たちにおかげさまでと感謝の言葉を述べていたが、タヴァナーはよこにいた娘のほうに手を振った。

「わたしは寝床と食事を世話しただけでして」とタヴァナー。「きみを治した心理学者はこのお嬢さんですぞ」

ハウソンはモナの手を両手で握った。彼女はまったく受動的状態で立っていたが、いつもの萎縮状態とはちがっていた。それは極端な緊張に起因する無活動であった。「かわいそうに、かわいいモナ！」とハウソン。「前よりずっとよくなったよ。もっとよくなれば、そのうちにちゃんとした女性になって、楽しいこともあるだろう」そう言うと、彼は子供にキスするように軽く彼女にキスをした。

そのキスがどんな記憶を覚醒したのか、私にはわからない。しかし、見る見るうちに彼の顔色が変わり、彼女を鋭く睨んだのである。モナの黒い瞳に応答するきらめきがちらりとでも光っていたなら、いにしえの恋が蘇生したであろう。しかし彼女の仮面のような容貌にはなんの変化もなかった。彼女は負債を支払っているのである。彼は身震いした。おそらく拷問部屋の冷気が首筋に触れたのであろう。彼は車に乗り込み、結婚することになっていう女の横にすわった。そして彼女が車を発進させた。

「ああいう結婚はどんなふうになるんでしょうね？」私はエンジン音が遠くで聞こえなくなったとき、尋ねた。

「それはもう、感情だけで結ばれた多数の連中の結婚と同様、結構なものでしょう。一年ほどの愛が続き、それから幻滅、続いてがたごと危機を乗り越え、世間様の手前もあり一緒に暮らし、つまるところ相互寛容に落ち着くわけで、一般的に言えば、これぞうまくいった結婚ですわ。しかし、死ぬときになれば、彼はこのモナ・ケイリーを思い出し、彼女を呼ぶでしょう。そして彼が川を越えれば、彼女のほうが彼を求めるのです。二人は賠償を終えたわけですから、道はひらけておるのですよ」

第八話　赤い花

1

「グレゴリー・ポルソン氏か」とタヴァナーが届けられた名刺を見ながら言った。「あきらかに、会社の下級社員だな。リンカーンズ・インに社屋があるところをみると、法律関係だろう。会ってみましょう」

一般に職業というものはその従事者を特徴づけるものである。私たちの客は若輩ながら、すでに法律家の風貌を呈していた。

「先生にご相談申し上げたいことがありまして」と彼は語りはじめた。「その、大変に奇妙な事件についてです—あれは症例とはいえないと思います。しかし、あれを扱えるのは先生だけではないかと存じまして、それで、完全に先生の筋とは言いがたい部分もあるのですが、ご相談に乗っていただければ、実にもって有り難く思います」

タヴァナーは同意するように頷いた。それで客も一件を苦労しながら説明しはじめた。

「こういってはなんですが、先生もベンジャミン・バーミスターのことはお聞き及びかと思います。先の大戦で大儲けした成り金です。うちは―つまり、父の会社ですが―うちはバーミスターの顧問弁護士をつとめておりまして、またバーミスター家の人々とも個人的親交があります。いや、正確にいえば、バーミスター老人の兄弟の家です。老人は結婚したことがないのです。ぼくと妹は二系列のバーミスター一族と一家同然に育ちました。実のところ、妹は現在デイヴィッド・バーミスターの息子の一人と婚約しております―こいつがなかなか良いやつでして、ぼくの親友でもあります。この婚約でみんな喜んでいたのです。こちらのバーミスター家は好人物揃いです。ただ、他の二人の息子たちは裕福ではありませんけど。まあ、早い話、エディスとティムが半年前に婚約しまして、うちの家族もみんな喜んでいたわけですよ。なにせベンジャミン・バーミスター老人が新しい遺言状を作成して、金をティムに残すと決めたからです。しかし、ぼくはなんとも気にいらない次第でして」

「そのことが不利な条件であるとお考えになる理由は？」

「そりゃ、老人が金を残すといった相手が、みんな不幸な自殺をやらかしたからです」

「本当ですか？」

「ええ」と客が言った。「すでに三度もです。ぼくが作成にかかわったティムに有利な遺言状というのが四番目のものです。ティムの長兄はマーレイといいました。バーミスター翁が相続人に指定した最近の人物ですが、一月前にブライトンの崖から飛びおりてます」

「すると、なんですか、バーミスター翁が遺言状を作成するたびに、第一受取人が自殺するのですか？」タヴァナーが言った「遺言状の条項をお教え願えますか？」

「ぼくの見るところ、かなり不公平なものです」とグレゴリー・ポルソン。「甥や姪のあいだに均等分配するんじゃないんですよ。みんな、それほど裕福でもないのに。バーミスター翁は全財産を一人の甥に残そうとしているんです。どうやら、王朝の類いでも創設しようという算段じゃないですか—すでに田舎に大邸宅を購入済みですし。それで一ダースほどいる親戚に楽をさせるかわりに、一人のバーミスターを有力者にしようというんでしょう」

「なるほど」とタヴァナー、「それで、遺言状が作成されるとすぐに、第一受取人が自殺する」

「そうなんです」とポルソン。「この二年間で三人自殺しました」

「ちっちっ」とタヴァナーが舌を鳴らした。「そんなに？　どうみても偶然の産物ではないようですね。さて、その自殺で利益を被るのは誰でしたか？」

「次の相続人ですが、すぐに自殺しています」

「一体どういう基準で相続人を選んでおられるのですか、その翁は？」

「自分の評判を良くしてくれそうだと思った甥を選んでいます」

「つまり、出生順にはこだわっていないと」

「ぜんぜん無視してますよ。自分の眼鏡にかなったのを選ぶんです。おおむね気の強そうなのを第一にしてます。ティムは他のいとこたちに較べると、ずっと穏やかで一歩さがるタイプなんです。だから、やつがバーミスター翁に選ばれたときは、ぼくもかなり驚きましたね。しかし、もう選択の余地も少ないんです。なにせこのおぞましい悲劇のあとでは、三人しか男子が残ってないですから」

「となれば、この先も自殺があれば、最終的に利益を得るのはその三人のなかの一人ということですな」

「そうです。しかし、ぼくにはちょっと想像がつかない。自分が最後に選ばれるという確率のために一族を皆殺しにしようなんて冷血漢がこの世にいるもんでしょうか？」

「残ったいとこたちはどんな人物ですか？」

「ヘンリーは技師でして、仕事も出来るし、現在婚約中です。世間をあっと言わせるようなことはないでしょうが、まともな人間ですよ。彼はティムの弟にあたります。ティムのいとこにあたるボブは、まあその、ろくでなしです。うちの社は、彼のやらかした契約不履行とか、いろいろと尻拭いをさせられましたからね。でも、彼はそれなりに気の良いやつでして、無責任が玉に疵という、まあ自分で自分をだめにしているタイプです。最後はアーヴィングです。ボブの弟で、他愛ないやつですが、

まっとうな仕事が嫌いです。ジョゼフ・バーミスターの息子たちは、デイヴィッドの息子ほど出来がよくないのです。あいつらは実業よりは芸術向きで、まあ金には縁がないタイプですね。

「しかし、ジョゼフの奥方は結構持ってますし、子供たちは年百五十ポンドほどの不労所得があります。贅沢はできないでしょうが、乞食にはなる必要はない。ボブは暮らしの足しにあれこれやっています。今はカントリー・クラブの秘書です。アーヴィングのほうは一家の花形でして、芸術家になるとほざいていますが、ぼくの見るところ、いままでなんの作品も発表しちゃいませんよ。唯一の職といえば、ぼくの知る限りでは、月間美術批評を新聞に書いているだけで、その新聞だって、載せてやるだけ有り難いと思えくらいの考えじゃないですか」

「その分ではあまり儲かりそうもないですね」とタヴァナーが言った。「アーヴィング氏はその百五十ポンドでどうやって生存できるのでしょうか？」

「スタジオ一室に住んで、フライパンから直接食べるような生活をしています。しかし、それほど魅力がない暮らしぶりでもないんですよ。彼は非常に良いセンスをしていて、あの穴ぐらをなかなか素敵な場所に改装しているんです」

「となると、この先の遺言状で利益をこうむりそうな人間は—実直な技師、気の良いトンマ、それに芸術乞食ですな」

「バーミスター翁がご自分の方針に固執した場合、元来は七名も可能的受益者がいたんですけどね。三人は自殺してしまったし、一人は現在死刑宣告を受けたも同然で―」

「それはどういう意味ですか？」タヴァナーが素早く言葉を差し挟んだ。

「それなんですよ！」とポルソンが叫んだ。「実にいやなことがありまして、それで先生のもとに参った次第です。死んだ三人はみんな高いところから飛び降り自殺しています。昨日、ティムがうちのオフィスに来ました。うちはビルの最上階にありまして、かなり高い場所なんです。彼が長いこと窓から身を乗り出していたので、なにを見ているのかぼくが尋ねたところ、こう言うんですよ。“あの敷石に頭からおっこちたらどんな気分だろうか”と。馬鹿なこと言ってないでこっちに来いと叱りましたけどね、なんともいやな感じでした。もう一件自殺が起きないうちにと思って、こちらにうかがった次第なんです」

「どうしてわたしのもとへ？」とタヴァナーが尋ねた。

「ぼくはオカルティズムや心理学を少しかじっておりまして、先生がこの二つを結合されているという話を耳にいたしました」とポルソン、「それで、これは先生向きの事件だと思ったのです」

「お話を聞きますに、まだまだありそうですな」とタヴァナーが言った。「なにを疑ってらっしゃるのでしょうか？」

「証拠はなにもないんですよ。本当のところ、証拠がないから、普通でない説明をさがしているようなものです。きわめて健康な平均的人間が、なんの理由もなしに自殺するもんでしょうか？　世間一般に認められた理論ではとうてい説明がつかないですよ。しかし、思念投射の可能性を認めれば—実際、最近認めるやつも多いじゃないですか—そうすれば暗示をかけて自殺させるのも可能じゃないか、と思えるんです」

「それは可能というだけではありませんぞ」とタヴァナー。「これほど極端な例ではないが、この秘密の精神的圧力の行使というものは、結構ありふれておるのです。この方面に関しては、先の大戦でもいろいろと面白い話がありますよ。スパイになった連中のみんながみんな、金で転んだわけではないのです。潜在意識の回路を通して接近された者も多かったのですわ。少し脱線しましたね。話を続けましょう。あなたが潜在意識的に警戒しておられる人物がいますでしょう？　まあ、意識的にでもいいですが」

「ぼくとしては、証拠となりうるような事実はすべてお話ししたつもりです。しかし、猫を縛り首にできるほどの手掛かりもないんですが、実はアーヴィングを疑ってます」

「どういう根拠で？」

「なんの根拠もないんです。もっぱら“お前がきらいだ、ドクター・フェル”といったところですよ」

「その男について忌憚ないところをお聞かせ願えますか？」

「あいつはまともじゃないですよ、先生。現場を押さえたってわけじゃないですが、あいつだけは信用できませんね。それに、顔も見たくないような連中とつきあってるんです。あいつらは大麻やコカインや互いの女房で遊んでるんです。どうにも不健全なやつらですよ。アーヴィングの長髪仲間に較べれば、ボブがつきあってるインチキ投機屋たちのほうがどれだけましか。

「それに、アーヴィングはベンジャミン翁が最後まで金を残しそうにない男だからです。そりゃまあ、赤の他人にくれてやるくらいなら、財産はアーヴィングにくれてやるでしょうよ。翁だって、バーミスターという家名にそれは誇りを持っていますからね。しかし、翁は彼がまったく気にいってないんです。あの二人は絶対にそりがあわないですよ。ベンジャミン翁は荒っぽい地に足ついた老人ですし、アーヴィングのほうはなよなよした行かず後家みたいなもんですから。

「また、ボブとヘンリーにお会いになれば、きっとおわかりになるでしょうが、彼らがあんな真似をするはずがないんです。問題外ですよ。しかし、アーヴィングなら—だいたい、クスリでいかれた男はなにをするかわかったもんじゃない。それに、あいつはぼくと同じ線の読書をしてますよ。実のところ、この方面を最初に教えてくれたのがあいつなんです」

「アーヴィングが修行を積んだオカルティストであると、信ずるに足る理由がありますか？」

「オカルトに興味を持ってはいますが、あんなやつにきちんと修行なんかできるわけがないと思います。ただのマニアですよ」

「となると、その御仁には精神的殺人などやれそうもないですな。思念投射というものは、金づちを振り回す以上の努力を必要とするのです。オカルティストになるか、鍛冶屋になるか、選択を迫られたら、楽な仕事を選んだほうがいいですぞ。《ロッジ》に入るよりは、冶金工場に入ったほうがいい。

「さて、アーヴィングを疑ってらっしゃるわけですな？　おっしゃるように、その程度の証拠では猫すら吊せないでしょう。しかし、彼をふるいにかけて、なにが出てくるか、見てみましょう。遺言状の件が公表されたあと、彼がバーミスター老人の相続人と特に親しくなったようなことは？」

「いつもと変わりがなかったです。大体が連帯の強い一族ですし、いつも顔を合わせてますからね。アーヴィングがやった特別のことといえば、彼らのために部屋を改装してやったことくらいですか。やつは色彩に関しては良い趣味をしているんです。今までにもいとこの部屋を改装してやったり、女の子たちのドレスをデザインしています。ああいったことを趣味にしてるんだから、異常な男です。奇妙なコーヒーや煙草を扱っている穴場をやまほど知ってるし、げてもの料理店も顔らしい。ああいったことに興味を持つのは男というよりは女だと思うんですけどね」

「なるほど！」とタヴァナー。「彼がみんなの部屋をデザインしたわけですな。これは親しければこその行為でしょう―住む場所をデザインするとなれば、そこの住人に大いなる影響力をふるえるも

のですぞ。やり方を知っていればの話ですが。しかし、現場検証に出るまえに、死者に共通している事項で、生者が持ち合わせていないものがあるかどうか、じっくり考えてみましょう。生活様式とか、所持品とか、癖とか—なんでもいいのです。とにかくほかとちがった点はありませんか？」

ポルソンは数分間頭を掻きむしっていた。

「思いつくことといえば」と彼はようやく口を開いた。「アーヴィングがどっかから手にいれてた特製の香ですね。特別な友人たちにくれてやってました。その香については、なにやら秘密めかしてましたが、あいつはたいしたことでなくても秘密めかすのが好きなんです。自分がえらくなったと感じるんでしょう」

「さてさて」とタヴァナー。「われわれはついに温かい足跡にぶつかったようですな。香の心理的効果は大変なものがあるのです。われらの友人はその秘密の香でなにをして遊んでいたのですか？」

「知りません」とポルソンが言った。「デパートで買ったもんじゃないですか。いつかラサ直輸入だという紅茶を自慢していましたが、あとで調べたらリヨン・レストランのラベルが貼ってありました。そういう男ですよ」

「しかし、その香はどうなんです？　それを自殺者には与えて、他には与えていないのですか？」

「特別の好意という形で、気にいった友人に与えていたようです。あいつがよくやる面白い細工があるんです。薬局で売ってる湿布用の大きなケシの頭を手にいれて、前衛派風の色で塗ったくって、弾性の竹に取り付けるんですよ。花瓶に差すと本物そっくりに見えるんですね、大輪の派手な花そっくり。いつだったか、ぼくにも一本くれましたよ。でも、あの聖なる香を拝受する栄誉には浴さずじまいでして。しかしパーシーも—死んだ連中の一人ですが—彼も持ってました。ティムも貰いました。彼らが贈られたのが匂いつきかどうか、それはわかりません」

「となればです、あなたにやれる最善の行動は、ティム氏のところへ行ってそのケシの頭を手にいれ、ここに持ってくることです。少し調べてみたいのです」

ポルソンはすぐさま出撃していった。扉が閉まるとすぐ、タヴァナーが私のほうを向いた。

「ごらんになったでしょう」と博士。「直感の有利性というやつですよ。ポルソンにはなんの手掛かりもなかったのですが、本能的にアーヴィングを信用していなかったのですわ。そこでなにか怪しいと思いはじめたとき、まず自分の直感を観察でチェックしたわけです。これは実に効果的な作業方法ですぞ。直感を用いれば観察すべき線も明らかになり、主観というなんとも微妙な手掛かりという手段を通じて、確固たる足場に出るわけですな。しかし、まずケシの頭がどういう証拠を生んでくれるか、それを見なければなりますまい。理論構築はそれからです。先入観ほどあぶないものはないですぞ。人は事実をねじまげて先入観に合致させがちですからね」

私たちは他の患者の診察を続け、最後の予約が終わったとき、執事が入ってきた。ミスター・ポルソンがふたたび現れ、もう一度会いたいと言っているという。彼は長い包みを手にして入ってきた。両眼は興奮に輝いていた。

「ティムは特製の香を貰ってましたよ」と彼は室内に入るなり叫んだ。

「どうやってそのケシの頭を入手なさったのですか？　持っていく理由をお告げになられましたかな？」

「友人に見せてやりたいからと言いました。きちんとした証拠がない以上、下手なことをしゃべって心配させてもしょうがないですからね。単なる自己暗示だけで自殺されちゃたまりません」

「賢明なり！」とタヴァナー。「だてに読書をなされておられないようだ」

ポルソンは包みを開き、半ダースほどの豪華な彩色を施されたケシ頭をデスク上に広げた。それは素晴らしい南洋の果物のようであり、確かに贈答品にもってこいといえた。タヴァナーはケシを一本一本調べていった。五本を調べた時点で、出てきたものは単なる微細な種子だけであったが、六本目は奇妙な強い香りを放っていた。振ってみると、カラカラと音がする。

「このケシの頭には」とタヴァナー「事故にあってもらいましょう」。そう言うと博士は文鎮を振りおろした。吸取紙の上に干葡萄のような物体が三、四個転がった。そして実に奇妙なことに、かなりの大きさの月長石もあったのだ。

これを見ると私たちは声を揃えて叫んだ。どうして数ポンドはする宝石をケシ頭の内部に配置する人間がいるのだろうか。タヴァナーは黒い物体を鉛筆の先でひっくりかえした。「ある種の匂いを放つ種子のようだ」と博士は発言し、私にそれを手渡した。「匂いを嗅いでごらんなさい、ローズ先生」

私はそれを掌に受け、慎重に嗅いだ。

「どう思われますか？」とタヴァナー。

「悪くない」と私は言った。「しかし、ちょっと粘膜を刺激しますよ。くしゃみをするような気になるんだが、実際にくしゃみをするんじゃなくて、刺激が頭に上がっていって、妙な感覚を生じさせる。額に冷たい風が吹いているみたいな感じだ」

「つまり、松果腺を刺激している。そうですな？」とタヴァナー。「われわれは、問題の御仁の狂気にも、なんらかの方法論が発見できるようですぞ。さあ、次は月長石を手にしてごらんなさい。種子の匂いを嗅ぎながら、石を見つめるのです。そしてどんな想念が頭に浮かぶか、おっしゃっていただきたい。精神分析を受けているときの要領で」

私は指示通りにした。

「石鹸水みたいだ」と私ははじめた。「洗うと手がきれいになる。母の首飾りを思い出す。この石は絨毯に落としたら見つけにくいだろう。窓から放りだしたら、もっと見つけにくいだろうな。窓から放りだされる感覚とはどんなものだろう？　高い所から落ちたらどんな気分だろうか？　きっと――」

「そこまで！」とタヴァナーが叫び、私の手から月長石を奪い取った。私は驚いて顔を上げた。するとポルソンが両手に顔を埋めている姿が目に入った。

「なんてこった！」とポルソン。「あいつとは子供のころ、一緒に遊んだこともあったのに！」

私は驚愕してタヴァナーのほうを向いた。

「これはどういうことです？」私は尋ねた。

「つまりこういうことですよ」と博士が言った。「誰かが実に巧妙な心霊瓶詰の方法を思いついたわけです。また、修行が足りないゆえに自分自身では霊的作業ができない人間が、オカルティズムをオンス幾らで買う方法を見つけたともいえます。おそらくこの貴重な代物を生産する工場があるのでしょう。そしてアーヴィングのような破廉恥漢がそこに行き、二ペニー分を買って、紙袋に入れて持ちかえるんでしょうな」

オカルトの術というものは、尋常ならざる天分に恵まれた人間が、長らく修行してはじめて使えるものである—私はいつもそう理解していたため、店頭に行けば秘められた力を飴玉みたいに購入できると聞いて、大いに想像力をくすぐられるものがあった。笑いださずにすんだのは、ポルソンがあまりに深刻な表情をしていたからである。しかし私にも、タヴァナーが実にえげつなく描写した計画のなかに、恐るべき可能性が潜んでいることくらいはわかった。

「このアイデア自体に新しいところはないと言えましょう」とタヴァナー。「オカルティストだけが知っている、ある種の自然法則の商業利用に過ぎないのですわ。ローズ先生、いつもわたしが言っておるように、オカルト科学にはなんら超自然的なところはないのです。一般に取り上げられていない知識体系というだけですわ。この手の応用法もありますから、研究者たちは研究結果を急いで発表しようとはせんのです。この月長石と匂いつき種子という、実に巧妙なトリックは、ある種のオカルト知識の犯罪利用にすぎないのです」

「つまり」とポルソンが言った。「このケシの頭のなかにはある種の精神的毒物が封じ込められていたということですか？　種子の匂いが脳に影響を与えるのは理解できますが、月長石はどんな役割を果たしているのでしょう？」

「月長石はある主調にチューニングしてある、とでもいいますか。その主調とは、自殺なんですよ」とタヴァナー。「どこかの誰かが—アーヴィングじゃないでしょう、これほどの知恵はないはず—とにかく誰かが、高所からの投身自殺という非常に明確な精神画像を作りだし、その画像を月長石にイ

ンプリントしたのです（方法はお教えできませんな）。そのため、この石に接近する人間は誰であれ、同じ映像が心に浮かぶという仕組みなのですわ。ちょうど、憂鬱な人間が一言も発さずに他人を憂鬱にしてしまうのと一緒です」

「しかし、生命を持たない物体がどうして感情を放つことが可能なんですか？」私は質問した。

「そりゃ、生命がなければ出来ない相談ですぞ」とタヴァナー。「しかし、生命を持たない物体なんぞ、存在しますかな？　オカルト科学では、そんなものはないと教えておるのです。われわれの世界ではこういう格言があります。“精神は鉱物に於いて昏睡し、植物に於いて睡眠し、動物に於いて夢見、人間に於いて覚醒している”。スイートピーの蔓が支柱を求めて伸びていく様子を見るだけでも、植物の行動にも意図があるとわかりますぞ。また金属疲労というものもよく知られておりますな。床屋に行って、剃刀がなまったらどうするか、聞いてみられるがよろしい。床屋どのは剃刀を定期的に休息させると言いますぞ。疲労した鋼鉄には繊細な刃をつけることができないのですわ」

「了解」と私は行った。「しかし、なんですか、この石ころのなかに意識が存在して、ある観念を記憶して他人の潜在意識に影響を与える。こうおっしゃりたいわけですか」

「その通り」とタヴァナー。「結晶というものは鉱物王国のなかの至高的発達ですぞ。そしてこのテーブル上の石には、強力な影響力を与えれば十分にある種の性格を帯びるだけの心があるのです。ホープ・ダイヤや、その他の有名な宝石の話は、蒐集家のあいだでは有名でしょうが。持ち主に不幸をもたらす宝石というやつです。この種の結晶が持つ精神発達を利用して、護符や魔よけを作るわけ

でして、一に宝石、二に貴金属、こういったところがはるか昔から好まれておるのです。ようするに、この月長石は厄寄せなんですよ」

「タヴァナー先生」と私、「おまもりを信じてらっしゃるんじゃないでしょうね」

「信じますとも！　先生は？」

「冗談じゃない！　ここまで文明開化したご時勢に！」

「やれやれ、先生はお若くてらっしゃる。まったく交渉のない民族間で時代を通じて支持されてきた世界的信仰ですぞ。なにかあると考えるのが筋ですわ」

「つまり、おおざっぱに言えば」とそれまで黙ってタヴァナーの顔を見ていたポルソンが口を開いた。「誰かがこの月長石に催眠暗示の術を教え込んだと信じていらっしゃるんですね」

「おおざっぱにいえば、そうです」とタヴァナーが返答した。「ピアノの中央Cをたたけば、別のピアノのC弦が共鳴するようなものですよ」

「しかし、その月長石はどうやって催眠術をかけるんですかね」と私はしつこく質問してしまった。悪気がなかったとはいえない。

「たしかに、補助手段が必要ではなります」とタヴァナー。「そこでこの匂いつき種子が登場するわけですよ。これほどえげつない巧妙な仕掛けはちょっとありますまい。

「誰もがみんな霊能者というわけでもありませんから、即物的なバーミスターたちの感受性を、少なくとも一時的に増進させる仕掛けが必要だったのです。ローズ先生といえども、ある種の薬物が意識状態を変化させうることはお認めになるでしょう—例えばアルコール、あるいはクロロホルムとか。

「東洋では、この種の知識は西洋よりもずっと発展しているのです。意識変化を引き起こすさまざまな薬物の研究が慎重に行われた結果、東洋人は大英薬学事典にすら載っていない多数の物質を知っておるのですな。かなりの数の薬物が、一時的とはいえ、霊視能力を誘発させる効能を有していると判明しています。この黒い種子もそのひとつでしょう。こいつの正体はわたしにもわかりません—見たことがない—しかしなんとか突き止めてみましょう。そこらにある代物じゃありませんから、出所が判明すれば、悪魔の製造工場も閉鎖させられるでしょう」

「しつこいようですが」とポルソンが言った。「先生のお考えでは、誰かが月長石の心にある観念を植えつけたため、感受性の高い人間はその影響を受けてしまうと。そしてこの悪魔のポプリに種子を加えることで、普通の人に異常な感受性を帯びさせ、月長石の影響力を受けやすくした。これでいいですか？」

「正解！」

「そしてどこかの悪魔がこういったものを製造していて、アーヴィングのような危ない馬鹿に販売しているのですか？」

「わたしの意見では」

「そんなやつは絞首刑だ！」

「それには同意しかねます」

「こんな冷血な獣を野放しにしておくんですか？」

「いや、そうはさせません。しかし、わたしは犯罪にふさわしい処罰を考えておるのです。オカルト犯罪はいつだってオカルト的処分をされるものですよ。猫を殺すにはクリームに沈める以外に、いろいろ方法がありますぞ」

2

「この事件はたいして手間がかからないんじゃないですか」ポルソンが頭下げ下げ退出してから、私はタヴァナーに言った。

「これでけりがついたとお考えなら」とタヴァナー、「大間違いですぞ。アーヴィングはまたぞろやらかすに決まってますから、わたしもやるしかないですよ」

「警察署に届けたら、こけにされるだけですよ」と私は言った。「陪審席には英国が誇る野菜小売商が十二名並びますからね、そいつらがアーヴィングに死刑判決を出すとお考えなら、先生も大間違いです。そいつらが考えることといえば、先生の家族に連絡して、外に出すなと命令するくらいでしょう」

「それはわかっておりますよ」とタヴァナー。「オカルト攻撃の場合、司法に訴えるのはまったく無意味です。しかし、心霊警察とでもいうものがちゃんとありましてね。まともな線で組織された《ロッジ》のメンバーは全員、ある種の義務を負っております。精神的犯罪事件が彼らの知るところとなれば、自分たちで処理するか、上層部に報告するという誓いを立てているのです。それに、われらは独自の司法体系を有しております」

「アーヴィングに対抗暗示の薬でも盛ってやりますか？」

「いや、それはやりません。かなりあやしいとはいえ、彼が完璧に有罪と証明されたわけじゃありませんから。他の方法でやるつもりです。もし彼が無実であれば、無傷のままですみ、有罪なら実にふさわしい処罰になるというやつですよ。しかし、まず第一歩は、疑われることなくこの御仁に接触することでしょう。ローズ先生なら、どうされますかな？」

「ポルソンに紹介してもらいます」

「ポルソンとアーヴィングは折り合いが悪いのですぞ。それに、わたしは不運にしてある程度名前が売れておりますから、この事件に顔を突っ込めば、たちまち警戒されてしまうでしょう。ほかにありませんか？」

私は口から出まかせに言ってみた。ケシの頭の製作を注文してみるとか、アーヴィングが部屋から出てきたところを行き倒れのふりをして倒れてみるとか。どれもこれもタヴァナーの意見では、あまりに危険が多すぎるし、疑惑をもたれて二の手を打つのが難しくなるという。

「彼が興味を持ちそうな線を攻めるしかないでしょう。そうすれば、やつは熟れた梨の実のように、こっちの手に落ちるでしょうな。心理学の勉強をなさっておられるのなら、使わない手はありませんぞ。賭けてもよろしいが、一週間とたたないうちに、アーヴィングのやつに、お願いだからちゃんと裁いてくれと言わせてみせましょう」

「どういう方法で行くおつもりですか？」私は尋ねた。

タヴァナーは思慮深そうに鉛筆で種子をころがしていた。「こんなものがそこらで見つかるわけがない。まず正体を確かめましょう。それから彼がどこから入手したのかもです。ボンド・ストリートにご一緒願えますか。あそこの香料店に男がひとりおりまして、彼ならこちらが知りたい情報を教えてくれるでしょう」

ほどなく私たちは目的地に到着した。そして私は、タヴァナーが援助を必要とする際にしばしば目撃させられた、あの奇妙な劇中劇をふたたび目にすることになったのである。薄汚い白衣を着た男が店の奥から呼び出されきた。明らかにタヴァナーに見覚えがなかったらしいが、博士が左手である合図をした。それは予備知識がなければ見落としたにちがいないほど微妙な手つきであったのだが、男の態度は直ちに変化したのである。私たちはカウンター奥の小部屋に通された。そこは実験室兼倉庫のような代物で、実験器具や包装紙や薬草や食べ残しなどが散乱していた。そういった状況のなかで、神秘の種子が鑑定のために広げられた。

「ディプテリクス属の一種です」と白衣の男が言った。「トンキン豆と同じ科です。学名はディプテリクス・イリタンス。しばしば粉末状で輸入された本物のトンキン豆に混合されます。もちろん、少量なら化学試験では検出されません。しかしこれをつめた匂い袋をハンカチのあいだに忍ばせてはいけませんよ。枯草熱に似た症状を催し、視力にも影響しますから」

「我が国に大量に輸入されているのかね？」

「いえ、まったく。混合用としてだけです。しかも粉末状で。市場価値はないんです—このあたりで購入しようとしてもむだですし、原産地のマダガスカルでも購入できないでしょう。香料商はなにがあってもこの種をストックなどしませんから。自分の手で蔓から採取するより手はないでしょう」

「香料商のための業界紙を教えてほしい」

「そんなものはないのです。しかし、たいがいの香料の取引は、薬局の業界紙を通じて行います」

タヴァナーは情報を貰って礼をいった。私たちがハーレー街に戻ると、タヴァナーは「ディプテリクス・イリタンス種一ケース有り。価格応談。トロッター」という広告を書き上げた。

一週間後、私たちは業界紙の編集部経由で、チェルシー在住のミンスキー氏なる人物から連絡を貰った。サンプルを見せて、最低取引価格を言ってくれれば、取引に応ずる準備があるという。タヴァナーはこの書簡を受け取って、くすくす笑った。

「魚が食いつきましたぞ、ローズ先生」と博士。「それではミンスキー邸訪問とまいりますかな」

私は頷いて、帽子に手を伸ばした。

「この服ではまずいですな」と博士。「ミンスキー氏はトップ・ハットが近づくのを見ただけで、シャッターを降ろしてしまうでしょう。わたしの化粧道具入れをひっくりかえしてみましょう」

博士の“化粧道具入れ”とは、変装用のぼろ服などを入れている古びた旅行鞄のことを指す。行き先でハーレー街の医者があまり歓迎されないとなれば、博士は変装するのである。数分とたたないうちに、私はいつもの一張羅をはぎとられ、かび臭い茶色の安物上下を与えられ、かつては茶色だった黒ブーツとトリルビ帽を着用するはめになった。タヴァナーは緑がかったてかてかのフロックコートと虫食いだらけのトップ・ハットに身をやつしていた。そんなやくざな恰好をしていながら、タヴァ

ナーはこうほざくのである。「いや、ローズ先生、そのルビーのタイピンをしてらっしゃらなかったら、一緒に歩いているところを他人に見られたくないですな」（ちなみにルビーはお菓子のおまけであった）

私たちはヴィクトリア駅までバスに乗り、そこからキングズ・ロード経由であやしげな裏通りにある目的地に向かった。ミンスキー氏の店はちょっとした驚きであった—私たちは古着屋タイプの人間に会うものと思っていたのだが、探しあてた店はなかなかの格式であったのだ。ラスキン陶器コレクションや未来派のカーテンがショウウィンドウを飾っていて、なかなか結構な値段とおぼしき宝飾類が扉横のガラスケース内に納まっている。そして茶色のベルベット上着と細いタイに身を包んだミンスキー氏は、タヴァナーを掃除人夫かなんかのような目で眺めていた！

わが同僚は店主のベルベットの袖を、慎重にも診察室の暖炉で黒ずませてきた指で引いた。「おたくが、トンキン豆を欲しがってる旦那ですかい？」と博士は尋ねた。

「トンキン豆なんぞに用はないんだよ、きみ」と偉いさんがいらつきながら答えた。「きみの広告は、ディプテリクス・イリタンスを一包み売却したいというものだったと理解している。トンキン豆は別の属、ディプテリクス・オドラタだ。そんなものはどこででも手に入る。しかしきみがイリタンス豆をわたしに分けてくれるというのであれば、取引も可能だ」

タヴァナーはむっとしたように片目を閉じた。「おたく、話がわかってんね」と博士はベルベット男に告げた。「さて、おたく、自分用にこの豆を買うってえの、それとも仲買ですかい？」

「それがおまえになんの関係があるのだ」とミンスキー氏は居丈高に質問した。

「いや、べつに」とタヴァナーがいよいよ卑屈な調子で言った。「ただよ、おれは本人と取引するのが好みでよ、紹介者には一割バックすることにしてんだ」

ミンスキーはこの言葉で目を丸くした。どうやらタヴァナーの推測が正解であったらしい。ミンスキーは誰かのかわりに買い付けをやっているのである—それがアーヴィングかどうかはわからないが。また私が見るところ、ミンスキーは両者からコミッションを取ることなど平気らしい。しかし顧客の身元を隠すように命令されていたのは明らかで、自分の裁量の範囲をあれこれ考えているようだった。ようやく彼は口を開いた。「わたしと取引をしないという以上、こちらとしては顧客に問い合わせて、直接取引をする意志があるかないか、聞くしかない。水曜のこの時間に来てほしい。そのとき教えよう」

私たちは文明社会に帰還し、約束の期日が来るまで屈辱の衣をまとわずにすんだ。水曜日、ふたたびぼろぼろ紳士といういでたちに着替えると、私たちはミンスキーの店に行った。入ってみると、隅の長椅子に男が一人座っていて、香料入りの紙巻きを吸っていた。私の見るところ、この男は三十一かそこらの年令で、不健康な土気色の顔と不自然なまでに開いた瞳孔を有していた。クッションに身を沈めた姿勢から判断するに、生気が足りず、また微かに震えるニコチン染みの指がその原因を物語っていた。

タヴァナーはぼろを下げていても堂々たる押し出しの人物であったから、長椅子の男はびっくりしたように見つめていた。「あなたがトンキン豆のイリタンスをお買いになろうというのですか？」と私の連れが言った。

長椅子の男は頷いたが、唇の煙草を外しもせずに、タヴァナーをじっと見ていた。博士はミンスキー相手のときとはまったく異なる口調を採用していた。

「一般的にいって、イリタンス豆は商業目的に使われることはない」とタヴァナーが続けた。「いかなる目的に必要でらっしゃるのか、お聞かせねがえますか？」

「そちらには関係のないことだろう」とくわえ煙草の男が答えた。

「失礼ながら」とタヴァナー。「この豆は東洋以外では一般に知られていないある特質を有しています。この特質を正当に評価しているのは東洋人だけです。ですから、あなたがこの特質をご自身で利用なさるおつもりなのかと思っていたのです。わたしはほかにも、その目的を念頭に置いて処理された豆を所持しておりますよ」

「それは興味がある！」男が躍起になると、不自然に輝く瞳がさらに輝きを増した。

「ところで、あなたはもしかしたら《われらのひとり》でらっしゃる？」タヴァナーが声を落として策謀家のようにささやいた。

輝く目がランプのように燃え上がった。「その手には大いに興味があるんだ」

「確かに興味に値するものでしょう」とタヴァナー。「しかし、これなどは、鍛練法としては児戯に等しいですな」そう言いながら博士は無頓着に掌を開いて黒い種子を見せた。無論、あのケシの頭から取り出したもので、サンプル代わりに持ってきたのである。

だらしない口元から煙草が落ちた。「つまり、そちらはクンダリニーについてなにか知ってるのか？」

「《聖なる蛇の炎》ですか？」とタヴァナー。「もちろん、その特質はよく知っておりますよ。しかしわたし自身は使いませんね。ちょっと刺激が強すぎると思うのです。準備が足りないと、精神のたがを外しがちですよ。わたし自身は儀式という手段をいつも用いています」

「その—あなたは弟子をとるのか？」とわれらの新しい知己は熱意のあまり我を忘れて叫んだ。

「ときにはとります。適した人材を見つけた場合」とタヴァナーが、上の空といった体で黒い豆をもてあそびながら言った。

「この手のことには大いに興味があるんだ」と長椅子の男が言った。「ぼくを適材と見なしてくれないか？　自分に霊能があることは確信している。よくすごいものを見るぞ」

タヴァナーはしばらく彼をじっと見ていた。彼はその間判決を待っていた。

「あなたに星幽幻視の力を授けるのは簡単でしょう」

われらの新しい知己はぴょんと立ち上がった。「ぼくのスタジオまで来てほしい」と彼は叫んだ。「あそこなら邪魔されずにじっくり話しあえる。ところで、謝礼がいるんだろう？　ぼくは金持ちじゃないが、悪いようにはしない。それだけのことはさせてもらうつもりだ」

「謝礼は五ギニー」とタヴァナーが小悪党そのものといった顔つきで答えた。

香料入り煙草をくわえた男は小さな安堵の溜め息をもらした。おそらくタヴァナーが０をもうひとつ加えていたとしても、彼はいそいそと支払ったであろう。私たちは彼のスタジオに歩いていった――広く明るい部屋であり、なんとも奇怪な配色を施されている。夜間は寝台に早変わりするとおぼしき長椅子が、暖炉の前に置いてある。部屋の向こう側からは、食物貯蔵につきものの、いわくいいがたい――ベーコンとコーヒーの混じりあった匂いが漂ってくる。またどこからか聞こえる水道の蛇口のポタポタ音が、洗面所くらいはあるぞと主張していた。

タヴァナーは彼に長椅子に横たわるよう命じた。それからポケットから黒い粉末の入った袋を取り出すと、内容物をマントルピース上の真鍮製の香炉に少量くべた。濃密な香煙がスタジオ内に漂い、台所臭を圧倒した。あっという間に部屋の雰囲気が変化してしまい、中国の霊廟で奇怪な神々を奇怪な儀式でなだめているような気がしてきた。

この香を別にすれば、タヴァナーは通常の催眠治療の手順を踏んでいた。私とて、臨床経験を積んでいるから、そのくらいはわかるのだ。長椅子に横たわる男は急速に深度催眠状態におちいり、生命機能がほぼ完璧に停滞するほどの弛緩状態に入った。このレヴェルまで被験者を追い込める催眠術士はめったにいない。するとタヴァナーが、人体の神経中枢のひとつになにやら作業をはじめた。こちらに背中を向けていたため、博士の手法はいまひとつわからなかった。しかしそれはたいして時間がかからなかった。博士は一連の手際よい催眠按手を行い、被験者を通常意識に戻してやった。　なかば酩酊したような面持ちで、男は長椅子から身を起こした。電灯に目をぱちくりさせている。全過程はおよそ二十分くらいであった。彼は金額分の値打ちはなかったといわんばかりの様子で、しぶしぶタヴァナーに紙幣を渡していた。

しかしタヴァナーはその場を去るそぶりも見せず、あれこれしゃべりながら時間を稼いでいた。どうやら男をじっと観察していたらしい。男のほうは落ち着かない様子であり、われわれが出ていかないのを見てとると、ついにこう言った。「失礼、だれか来客のようだ」そしてスタジオを横切り、急いでドアを開けると外を見た。誰もいない通路しか目に映らなかった。彼は戻ってきて、タヴァナー相手に会話を再開したが、注意力は散漫になっており、ちょくちょく不安そうに肩越しに背後を振り返るのである。

それから唐突にわが同僚の言葉を中途でさえぎるや、「だれかが部屋にいるのは間違いない、なんとも妙な気分だ、見張られているような」と言い、押し入れにかかっていた分厚いカーテンを手荒く引いた。しかし、箒とブラシしか見当たらなかった。彼は別の隅に行くと、戸棚を開け、ベッドの下

を覗き、ついにはスタジオの系統的検査をはじめた。子供すら隠れられないような場所すら覗きこみだしたのである。結局彼は私たちのもとに戻ってきたのだが、それまでの捜索に我を忘れ、私たちの存在も忘れていたようである。

「なんとも妙な気がする」と彼は言った。「見張られている気がしてならない。なにか邪悪な存在が部屋に潜んでいて、しかしこっちが振り返ると消えてしまうみたいだ」

突如彼は上方を見て、叫んだ。「ありゃなんだ！　天井を動いている！　あの妙な光球はなんなんだ！」

タヴァナーは私の袖口をつかんだ。「行きましょう」と博士。「もう失礼する時間です。アーヴィングのちっちゃなお友だちは愉快な仲間ではありませんからね」

私たちは部屋の中央で立ちつくすアーヴィングのもとを去った。彼はゆっくりと壁をつたっておりてくる不可視の存在を目で追っていた。それが床に到達したとき、なにが起きるのか、私は博士に質問する気すら起きなかった。

外の通りにでると、私は大きな安堵の溜め息をついた。あのスタジオにはなにか顕著に不快なものがあったのだ。「一体全体、あの男になにをなさったのですか？」私は連れに尋ねた。

「約束通りのことですよ—霊視力をくれてやったのです」とタヴァナーが返答した。

「彼がやらかした非道を処罰する話はどうなったんです？」

「実際にやらかしたのかどうか、われわれにはわからないですからね」とタヴァナーがあっさり言った。

「では、先生はなにをなさってらっしゃるのか？」

「こういうことです。霊視力を得たとき、人が最初に目にするもののひとつが、自分の裸の魂なんですわ。さて、あの男がわれわれが睨んでいる通りの男であったとすれば、自分の魂はなにがあろうと見たくないでしょうな。ああいった冷血な殺人者の魂は、見るに耐えない代物ですからね。一方、もし彼がただの人間で、善人でもなければ悪人でもなかったとすれば、まあそこそこ面白い経験をして益するところも多いでしょう」

突如、私たちの頭上のどこかで、血も凍るような悲鳴が夕闇を引き裂いた。それを耳にする者すべてに恐慌に巻き込むような悲鳴であった。私たちのみならず、通行人たちも思わず立ちつくしてしまった。私たちが出てきたばかりの大きなビルで、扉を手荒く閉める音が響きわたり、足音がテムズ川のほうに向かって道路を駆け抜けていった。

「たいへんだ！」と私。「あいつは河岸のほうに向かうぞ！」そして追い掛けようとする私の腕を、タヴァナーが押さえ込んだ。

「それはあいつの勝手でしょう。われわれには関係ない」と博士。「それに、いよいよとなればあいつに死ぬ度胸がありますかね。死というものも、異常なまでにいやらしい場合があるものですぞ」

博士は正しかった。駆け抜ける足音は道を戻ってきた。そして男は私たちのすぐそばを通過していき、フルハム・ロードの雑踏のなかへ後先構わず突き進んでいった。

「あいつはなにを見たんでしょう？」私はタヴァナーに質問した。私の背骨を冷たいものが走りまわっていた。私は少々のものを見てもたやすくおびえはしないが、正直言って見えないものは怖いのだ。

「彼は《扉口の守護者》に会ってしまったのですよ」とタヴァナーが言い、それっきり口を閉じてしまった。しかし私もそれ以上質問する気はなかった。走りさるアーヴィングの顔を見ただけで、暗闇に住むというその不思議な《住人》の正体に関して、知りたいことはわかってしまった。

タヴァナーは立ち止まり、手にしていた札束をガン病院募金箱に押し込んだ。

「ローズ先生」と博士が言った。「死んでそれっきりになるほうがいいですか、それとも死の恐怖におびえながら一生過ごすほうがいいですか？」

「即死したほうが十倍いいですよ」と私は返答した。

「わたしもです」とタヴァナー。「終身刑は死刑より怖いですね」

第九話　誘惑の海

「聖痕についてなにか知ってるかい？」私の対面にすわる男が言った。

こんな質問が現在の状況下で放たれようとは予想だにしていなかった。私は学友から一緒にめしを食おうと誘われ、断りきれなかったのである。彼は戦争以来ぱっとしない医務官としてぱっとしない施設に勤務していた。彼にはぴったりのポストといえる。そして私はいま、これまたぱっとしない食卓で彼と向かいあっている。場所は赤煉瓦造りの薄汚い軍要塞の一角の彼の事務室、窓から見える風景は南ロンドンという延々数マイルに亙る灰色の大茫漠であった。

私はあまりに不意を突かれて、返す言葉がなかった。彼はもう一度質問を繰り返した。

「聖痕についてなにか知ってるかい？　ヒステリー性の聖痕なんだが」

「疑似腫瘍なら数例見たことがあるけど」と私。「あれは結構ありふれてる。だが、実際に傷口が開いたのは見たことがないな。きみがいう聖痕とは、ようするに、聖人がやるというあれだろう」

「原因はなんだと思う？」私の連れが聞いてきた。

「自己暗示」と私は答えた。「あまりに強烈な想像力のため、人体組織が現実に影響を受けるというやつ」

「うちの病棟にひとりいるんだよ。きみに診てもらいたいんだ」と彼は言った。「実に興味ある患者だ。ヒステリー性聖痕だろうと思われる。ほかに説明しようがなくってね。数日前、娘がひとりここに連れてこられたんだが、肩に銃創を負っていた。弾丸を除去するためにうちに来たんだが、どうして撃たれたのか、理由を言わない。まあとにかくほってはおけないから、うちで引き受けたけどね、弾丸が見つからないんだよ。おかしいだろう。彼女は半昏睡状態に陥った。当然、出血多量が原因だとこっちは思って、そこで入院させてある。もっとも、考えてみれば、そう妙な話でもないんだな。ただ、弾丸が発見できないのを別にすれば。もっとも、最新の器具を使っても、そういうことは有りがちだし、ここにある器具ときた日にゃ、最新とは程遠い代物だ。だが、妙な話はこれからなんだ。昨夜ぼくが夜勤でここにいたとき、十一時から十二時のあいだぐらいか、悲鳴が聞こえた。もちろんそれ自体は妙なことじゃない。このあたりじゃよくある話だ。しかし数分後、室内電話で呼び出しがかかってね、すぐに病棟に来てくれという。そこでいってみると、問題の娘がまた銃創を負っていたんだ。誰も銃声なんか聞いちゃいないし、窓ガラスはすべて無傷だし、十フィートも離れてない場所に看護婦がいたんだよ。レントゲンかけてみたんだが、これまた弾丸が発見されない。それでも彼女の肩にはきれいに穴があいてる。おまけにこいつが一番不思議なんだが、一滴の出血もなかったんだ。こいつをどう思う？」

「外的作用がないことが確実ならば、唯一成り立つ仮説は内的なものだろうね。その娘はヒステリータイプかい？」

「そりゃもう。バーンズ・ジョーンズの絵から抜け出してきたような姿だよ。それに、毎晩一時間ほど昏睡に陥るんだ。この状態のときに二番目の銃創を作り出したんだよ。よければ一緒に来て、見てくれないか。きみの意見を聞きたいんだ。きみは心理分析とかその手をいっぱいやっただろう。そちらはぼくの手に負えなくてね」

私は彼とともに病棟に赴いた。ずらっと並んだ粗末なベッドのひとつに、問題の娘がいた。ざらざらした枕に横たわる顔を見ると、目は閉じられ、くちびるは半開き、まさにロゼッティ描くところの『ベアタ・ベアトリス』そのものといった風情だが、蜂蜜色の髪が海草のように枕に広がっているところは別である。私たちに気づいて彼女は目を開いたが、それは岩場から覗きこむ海のような緑色をしていた。

病棟は静まりかえっていた。雑居病棟の患者たちの就寝時間は早いのである。わが友人は看護婦に合図をして、娘のベッドの周囲にカーテンを引かせた。これで他の患者の邪魔をせずに診察できる。彼が言ったように、明らかに銃創とおぼしきものが新旧二つあった。傷の位置と並び具合から判断するに、殺すつもりではなく、動きを止める意図でつけられた傷といえた。実際、彼女は優秀な射撃手によって見事に“羽根撃ち”されたに等しかったのである。第二の銃創がなければ、これはむしろ犯罪捜査の対象といえたであろう。

私はベッド脇の椅子に腰をおろし、彼女の信頼を得ようと話しかけた。彼女は夢見る不思議な海緑色の瞳で私をじっと見返し、質問にはかなりはきはき答えていた。彼女は不思議なほど無関心と言おうか、浮世離れと言おうか、私たちが彼女のことをどう思っているか、まったく興味を示していなかった。まるで自分自身の遠い国に住んでいるかのようであり、その国の話に興味を持つ人間には、よろこんで話をするようであった。

「夢はよく見るほうですか？」私がいつもの切り出し方で言った。

これは彼女にとって興味ある話題のようであった。

「ええ、よく見ます」と答えが返ってきた。「それはたくさん見るのです。物心ついたころから、ずっと夢を見ています。夢はあたしの人生で一番現実味がある部分のように思います――一番いい部分でもありますけど」彼女はほほ笑みながら付け加えた。「だから、夢を見てもいいでしょう？」

「その夢のおかげで最近危ない目に遭われたようですね」私は手ぐすね引きながら言ってみた。

彼女は私がどれだけ知っているか危ぶむように、睨んでいた。それから慎重に答えた。

「ええ、もうあそこに行ってはいけないのでしょう。でもきっとまた行くと思います」彼女は妖精のようなほほ笑みを浮かべて付け加えた。

「夢のなかでお好きな場所に行けますか？」私は尋ねてみた。

「ときには」と彼女は答え、さらになにか言おうとしたとき、私の連れの驚愕した顔を見てしまった。言葉は彼女のくちびるから出ることはなかった。私にはわかった。彼女はタヴァナーのいう《われらのひとり》なのだろう。私は好奇心が涌いてきた。洗練された芸術家タイプの娘が、こんな薄汚い病棟にいるのが気の毒でならない。彼女の輝く瞳は檻のなかに閉じ込められた動物のようであった。そこで私は聞いてみた。「お仕事はなんですか？」

「店員です」と彼女が答えた。口元がほほ笑みによがんでいた。「正確にいえば、生地店の店員」。彼女の言葉と作法はおよそ店員のものとは思えなかったら、私はさらに興味をそそられた。

「ここを退院されたら、どうされます？」私は聞いてみた。

彼女はけだるそうに遠くを見つめていた。口元にはわずかなほほ笑みがまだ浮かんでいた。

「きっと、夢に戻るでしょう」と彼女。「ほかに行く場所は見つからないと思うのです」

困窮した患者に対してタヴァナーは寛大であり、ましてそれが“仲間のひとり”であればなおさらである。私はそれを知っていたから、博士がこの娘の人物と奇妙な負傷に興味をもつだろうと確信した。私はこう言ってやった。

「ここを出たらハインドヘッドにある療養院で養生するというのはどうですか？」

彼女はしばらく黙ったまま私を眺めていた。彼女の両眼は不思議なきらめきを放っていた。

「ハインドヘッド？」彼女は質問した。「それはどんな場所でしょうか？」

「荒野ですよ」と私。「ヒースや松なんかが生い茂る気持ちの良い土地です」

「ああ、海だったらどんなにいいでしょうに！」彼女は願わしげに叫んだ。「岩がごつごつして、あたりにはなにもなくて、大西洋の大波が押し寄せてくるの。海鳥が鳴いていて、潮騒が聞こえてくるような場所。海辺にいれば、あたしはすぐによくなるのに！　荒野はあたしのいる場所じゃない、あたしが欲しいのは海なの。海はあたしの生命なのよ！」

彼女は突然口をつぐんだ。しゃべりすぎを恐れるかのような表情をしていたが、やがて言葉をついだ。「ごめんなさい。せっかくのお申し出なのに。ええ、休息と気分転換はきっと体にいいでしょう。その療養院への紹介状をいただけるなら、ありがたく思います―」彼女は声はしりすぼみになり消えていった。いやます深い海を思わせる両の瞳はどこか遠くをじっと見つめていた。鴎が鳴き、大西洋の大波が西から押し寄せてくる場所を思っていたのだろう。

「また行ってしまったな」と私の学友が言った。「どうやら日課の昏睡がはじまったらしい」

私たちの目の前で彼女は深く息を吸い、やがてすべての呼吸が停止した。脈拍は精力的に打ってはいるが、あんまり長いあいだ息がとまっているので、人工呼吸をやるべきではないかを思いはじめたとき、フーッと息が吐き出され、肺が規則的な深呼吸を開始した。他人の呼吸を一生懸命観察していると、いつの間にかこちらも同じリズムで呼吸しているものである。私もふと気がつくと、実に不思

議なリズムで呼吸していたが、どこか覚えのある呼吸であった。以前にこのリズムで呼吸したことがあったのである。私は潜在意識のなかに手掛かりを求めた。突如、答えがわかった。これは外洋遠泳の際の呼吸法なのである。呼吸停止が潜水を表しているのは間違いない。彼女は自分の海を夢見ているのだ。

私はこの問題に心奪われてしまい、徹夜して謎の襲撃者の手掛かり捜しをしてもいいくらいであったが、学友が私の袖を引いた。

「もう出たほうがいい」と彼は言った。「うるさい婦長がいるんだよ、わかるだろ」そこで私は彼のあとについて消灯病棟を出た。

「どう思う？」通路に出るや彼は熱心に尋ねてきた。

「きみと同意見」私は答えた。「あれは聖痕だよ。でも、本気で検査しなくちゃね。今のじゃお話にならないよ。きみさえよければ、彼女とつきあってもいいぜ」

彼は大乗り気だった。医学雑誌『ランセット』の巻頭を飾る自分の姿でも心に描いていたのだろう。こういった医学ジャーナリズムの世界では、珍病奇病を罹った患者を入手すれば、どこかあやしげな栄光が手に入るのである。単調な日常を送る彼にとってみれば、これこそは天与の気分転換であり、歓迎して当然だったのである。

さて私はここで読者に断りをいれなければならない。これから記すことは恐るべき偶然、あるいはどうしようもないご都合主義と思われるであろう。大体の話、私のタヴァナー博士実見録にはこの手の偶然が多いのであるから、私は信憑性にとぼしい人間であるとの烙印を押されてもしょうがないと思っている。しかしタヴァナーいわく、ある種の偶然というものは、特にそれが天の摂理を成就するためのものであったと考えられる場合、はた目から見るほど偶然的なものではないという。その種の偶然は、高次の存在次元で作用する原因に源を発しており、われわれの物質的世界ではその結末のみが目にされているのである。そしてこういった不可視の世界と接触している人間たちが存在する。タヴァナーがそのひとりであり、また博士の作業に付き合っている私も、及ばずながらそのひとりになってしまった。こういった人間は不可視の世界の見えざる流れに巻き込まれ、同様の探求をしている別の人間と接触するようになる。私はこれまで、タヴァナーが一見いいかげんに人々を選び出したり、一見偶然のごとく心理学的どんぴしゃりのタイミングで登場したりする様子を目にしてきた。おかげで博士が説く法則の存在を疑えなくなってしまった。もちろんその時点では、私はオカルト法則の作用や存在を理解できなかった。《見えざる手》というやつは、全体像を眺めたときにようやく見える代物なのである。

ゆえにハインドヘッドに戻り、タヴァナーからある仕事を頼まれたとき、これで聖痕の件は先送り、当分は無視と私が考えたのも無理はないといえる。

「ローズ先生」とタヴァナーは言った。「ちょっとわたしにかわって引き受けていただきたい仕事があるのですよ。自分で行きたいのはやまやまですが、ここのところ忙しくてどうしようもないので

す。もう先生はわたしのやり口をご存じですし、生来の常識もお加えになれば、事件の報告はおろか、わたしの指示下で処理もおできになると思っておりますよ。先生の常識は他の連中の霊能よりずっと信用できますからね」

博士は私に手紙を見せてくれた。それにはこう記されていた。「尊大兄宛」。続いてなんの前置きもなく本文があった。「以前警告されしこと続発。深みにはまり、わが手に負えず。大兄の援助なくば、われ文字通り溺れること必定。ここを動くことままならず、大兄を訪れることあたわず。乞う来訪」。最後に本文とは無関係のヴェルギリウスの引用で結ばれていた。

冒険の匂いを嗅ぎつけたので、私はよろこんでタヴァナーの要請を受けた。長い旅をしなければならなかった。冬の午後、灰色の薄闇のなか、列車がようやく終点についたときは、西風のなかに強い潮の匂いを嗅ぐことができた。私にとって、海辺はつねになにかしらスリリングなものを感じさせる。私はもうひとりの海を愛する孤独な人間を思い出した。あのロゼッティの絵のような娘は南ロンドンという恐ろしい砂漠の雑居病棟でいまも横たわっているのだろう。

私は彼女のことを鮮烈に思い浮かべつつ、苔の生えた四輪馬車に乗り込んだ。オフ・シーズンとなると、駅で手に入る交通機関はこれくらいしかないのである。馬車は人気のない風すさぶ街路を走り、海岸線に向かった。怒涛が織り成す灰色の波頭の線が薄暮のなかに見える。私たちは簡易宿泊施設が立ち並ぶ舗装街路をはずれて町向こうの塩水湿地帯へはいていった。ほどなく道は岬に向かうにつれ曲がりくねり勾配を増し、馬は坂道に喘いでいた。突如、暗闇から一声かかり、馬車が止まった。イ

ンバネスに身をつつんだ人物が前照灯の光のなかに浮かび上がった。明らかにオクスフォード訛りとわかる声が私を名指しで呼び、馬車から降りるように言った。

およそ人家など目にしない場所ではあったが、私は言われるままに降りた。そして御者は馬車を操りながら強風うなる暗闇に消えていき、私は暗いなか、姿の見えない招待主と残されてしまった。彼は私の鞄を持ってくれた。そのまま私たちは崖の際まで進んだ。強風に負けないように体を前傾させて、ぎりぎりまで進んだのである。下のほうでは大波が岩に砕ける音が聞こえてくる。このままじゃ溺死だと私は思ったものであった。

しかし、ほどなく足の下に道があることがわかった。

「岩にぴったりくっついて進みなさい」と私の案内役が叫んだ（その理由は翌日わかった）。私たちは断崖の先端から足を降ろし、岩壁を下っていった。途方もない長距離を進んだように思えた（後日約四半マイルであるとわかった）。それから驚いたことに、掛け金を外すガチャリという音が聞こえたのである。暗くてなにも見えなかったが、温かい空気が私の顔面を打った。また私はなんらかの屋根の下にいるとわかったのである。私の接待役がマッチの箱をがちゃがちゃやっている音が聞こえてきた。炎があがると、私はかなりの広さの室内にいた。明らかに岩壁をくりぬいて作られたものであり、実に快適な区画であった。壁面には書物が並び、温かい色調のカーテンもかけられ、滑らかな石床はペルシャの絨毯に覆われている。暖炉には流木がくべられていて、私の連れが蹴りを入れると、すぐにパチパチと燃えはじめるのである。陰鬱かつ危険な到着との驚くべき対比に私は息を呑んだ。

私の接待役はほほ笑んだ。「なんですな」と彼は言った。「おそらく殺されると覚悟をしておられたのでしょう。我が家に関して前もってご説明申し上げておけばよかったですな。わたし自身は慣れておりますため、他人の目に奇異に映るとは思わないのですよ。これは昔の密輸業者の隠れ家だったのですが、私が改装したのです。自然石で出来ておりますから、現在私が従事している作業にとって、実に有利な点がありましてね」

私たちはすでに食卓上に並べられていた食事にとりかかった。私はこの家の主人の風貌を子細に眺める機会を得た。若さを保っている老人なのか、年不相応に老けた若者なのか、それはわからなかったが、彼の精神の成熟度から判断して、前者の仮説が優勢であった。世間一般によほど広く通じないと、これほど成熟したものにはならないと思われたからである。

彼の顔にはどこか法律家的なところがあったが、手のほうは芸術家ふうであった。この組み合わせはタヴァナーの友人に多く見られるものであった。神秘傾向を持ち合わせた知識人はおおむねオカルティズムに落ち着いてしまうからである。彼の髪はほぼ白くなっており、風焼けした顔と黒く輝く瞳とは不思議な取り合わせである。痩身、筋肉質、背はかなり高いほうであったが、身のこなしには若さがなく、公の場に出ることに慣れた人間特有の計算された威厳が見てとれた。彼は面白そうな印象的人物であるが、タヴァナーにあてた手紙から期待されるような意気消沈の兆候などかけらもなかった。

食後、パイプをくゆらせると、すぐに私たちはくつろいでしまった。しばらく暖かい暖炉のそばにすわったあと、この家の主人が意を決したらしく、数回不安げに足を組み替えてから、ようやく口を開いた。

「さて、先生、ここまでお越しいただいたのも仕事であってお遊びではないのですから、わたしたちとしても無駄口たたかず本題に入ろうじゃないですか。おそらく現在のわたしは、先生の目にも正常そのものと見えると思いますが？」

私は同意すべく頷いた。

「十一時になると、先生にはわたしの発狂の図をお目にかけられるでしょう」

「どういう経験かお話しいただけますか？」

「先生はわれらのひとりではらっしゃらないが」と彼は答えた（おそらく私はなんらかの合図を見落としたのだろう）「しかしタヴァナーの信頼を得ておられるのでしょう。さもなければ先生をよこすはずがないですからね。すべてを正直にお話ししましょう。もちろん先生もお認めになるにやぶさかではないでしょう。この世界には医学部で教わった以外のことがたくさんあるということを」

「まともに世の中を渡っている人間なら、だれでも認めますよ」と私は答えた。「これでも不可視の世界には敬意を払っているんです。理解しているふりはしませんが」

「結構なことだ」と答えが返ってきた。「先生なら私の役にたっていただけそうだ。下手な団員を呼んでくれば、わたしの幻覚を奨励するだけでしょうからね。わたしが求めているのは事実であって、幻想ではないのです。自分が幻覚に襲われているとはっきりすれば、立ち直りもききます。そこらが不確定だから困っておるのです」

彼は腕時計を見た。それから口をつぐみ、やがて勇気を奮いおこして話の核心に触れた。

「わたしはこのところ元素的諸力を研究してきた。なんのことかおわかりですかな？　自然の力の背後に潜む準・知的な存在のことですよ。われわれはそれを四分類しています—地、風、火、水の四つです。さて、わたしは地です。大地的なんですな」

私はいぶかしむように眉を上げた。彼の外見とは裏腹のようにに思えたからである。

彼はほほ笑んだ。「わたしは肉体のことを言ってるわけではありませんぞ。まったく別の話です。わたしの出生天宮図では、五つの惑星が地の宮に入っています。そのためわたしの性格は事物の固体的、形式的、正式的な面を主とせざるを得ません。地道なんですわ。この状況を中和すべく、わたしは自然の液体的側面、すなわち元素的水と接触するようにしました。これは成功したんですが」。彼は言葉を切り、神経質な手つきでパイプに煙草を詰めた。「しかし、わたしは水の精霊と接触しただけでなく、水の精霊たちもわたしに接触し、わたしを取り込むようになった。特にある水の精霊がひどい」再びパイプに手をやる。

「それはもう、素晴らしい、天にも上るような経験だった。わたしに欠けていたものすべてが加わったように思えた。わたしは完全無欠となった。かつて結婚に求め、しかし手に入らなかったすべてのものが手に入ったのだ。しかし、ここに齟齬が生じた。わたしを呼ぶ存在は水のなかにいたから、彼女に会おうとすれば水のなかにいくことになる。この岬の周囲は潮流が激しいので、たとえ凪ぎの日でも危ない。どんな水泳の名手でも流されてしまう。しかし、彼女がやってくるのはたいてい夜、しかも嵐の夜なのだ。つきあえば死ぬしかない。しかし彼女はわたしを呼ぶ。わたしに来いと要求してくる。いつか自分が行ってしまうのじゃないか、それが心配なのだ」

彼は口をつぐんだ。しかし顔付きから判断するに、まだ言いたいことがあるなと思われたので、私はそのまま待っていた。

彼は前屈みになり、暖炉脇からある物を取り出すと、私に手渡した。それは小さな坩堝であり、明らかに銀を溶かすのに用いられていた。

「これをなんに使っていたかお話しすれば、お笑いになるだろう。銀の弾丸を作るためだ—銀の弾丸を撃つんだよ」彼は両手に顔を埋めた。「ああ、なんということだろう、私は彼女を殺そうとしたんだ！」感情の堰が切れたようだが、それを押し殺そうと肩に力を込めていた。

「月明かりのなか、彼女が泳いでいるのが見えた。白く丸い肩が暗い波間に浮かびあがったとき、わたしはそれを撃った。すると彼女は消えてしまった。わたしは愛するものを殺してしまったと思った。もう一度彼女に戻ってもらえるなら、なにもいらない。彼女とともに泳いで溺死したってかまわ

ない。天でも地でもくれてやるという気になった。わたしは寝食を忘れて狂人のように何日も渚をさまよった。すると彼女が戻ってきたのだ。しかし、わたしは思った。彼女か自分か、どちらかの生命が失われるしかないと。そしてわたしは大地の存在であり、形式としての生命に固執してしまった。わたしはふたたび彼女を撃った。そしていま、わたしはさいなまれている。彼女を愛している。欲している。不可視の世界に彼女を求めて呼びかけている。しかし彼女が現れたとき、わたしはライフルを手に待ち構えているのだ」

彼は突然沈黙し、体を強張らせたまま消えゆく暖炉の炎を見つめていた。手にしたパイプはすでに燃えつきている。私はこっそりと腕時計を見た。針は十一時を指しつつある。彼の運命の時間が迫りつつあった。

彼は立ち上がり、部屋を横切ると、壁にかかったカーテンを引いて出窓をあらわにした。それを解放すると、窓の敷居に腰掛け、外の暗闇をじっと眺めていた。私はゆっくりと彼の背後に位置を取った。ここならば外でなにが起きているかもわかるし、必要ならば彼を取り押さえることも簡単であった。

しばらく私たちは待っていた。月に叢雲、碧海銀に染まることもあるが、おおむね波打つ音のみが聞こえる闇が周囲を支配していた。

これこそまさに“人知らぬ妖精の国、剣呑の海の泡に臨む魔法の窓”であった。私はこの夜の徹夜を一生忘れないだろう。視界に映るものはうねる海だけであり、岩礁が潜むあたりは月光を受けた波

沫で斑になっている。すべてが眼下で水車のように渦を巻いている。私の連れの彫りの深い横顔は、海を背景にしてローマ皇帝の石像のごとき豪胆と不動をかもしだしていた。

彼は身じろぎひとつせず、石像としか思えないほどであった。しかし五体に戦慄が走るさまが見てとれた。どうやら待望のものが現れたらしい。私は目を細めて彼の注目の対象を判別しようとした。するとたしかに、月光が織り成す道筋のなか、なにかが泳いでいる。岩礁のあいだを抜けて私たちのほうに着実に近づいてくる。彼が言っていたように、腕をかくたびに白い肩があがる。いかなる人間も泳げないような荒い潮流のなかを、どんどん近づいてくる。ついにそれが岬から三十ヤードほどにきたとき、私にも判別できた。それは髪を海草のように漂わせた女性の姿であった。

窓辺の男は両腕を泳ぐ女に向けて投げ出した。彼がバランスを崩したらおおごとである。私はそっと彼の体に腕をまわし、部屋の奥に連れ戻した。彼は私のことをまったく忘れているようであった。眠っているらしく、されるがままであった。私が床に横たえてやると、彼はそのままトランス状態に入っていった。私は脈を取ろうと身を屈めた。ゆっくりした脈拍を数えていたおき、私は妙な音を聞いて息を呑んだのである。まるで海面が上昇して室内に満ちたように思えた。しかもそれが物質的な海ではなく、その幽霊とでもいうべき代物だったのだ。影のような不可触の海水が天井まで波打ち、そして海の生き物が外からなかを覗きこんでいるのである。

そのとき私は女の姿を窓辺に見た。彼女は自ら発光しているため、海底のごとき緑の薄闇のなかでもくっきりと見えた。髪は海草のように漂い、肩は大理石のつややかさ、顔は眠りから覚めた『ベア

タ・ベアトリス』のそれである。両の瞳は磯から見下ろす碧水の色であり、またたしかに銀の弾丸によってつけられた傷痕があった。

私たちは互いの目を覗きこんだ。こちらと同じく彼女のほうも私をはっきり見ていたと断言できる。彼女は私の顔を確認したからだ。以前見たかすかなほほ笑みが彼女の口元に浮かんだ。私は話しかけた。話が通じると思っていたからである。

「こういうふうに彼を連れていくのはいけない」と私。「そんなことをすれば彼は死んでしまう。ぼくを信用してほしい。なんとかしてみよう。すべて説明するから」

彼女はあの不思議な海の緑の目で私を眺めた。魂まで見通されるような感覚だった。どうやら承知したとみえ、彼女はふたたびほほ笑むと、まるで泳いでいるかのようにゆっくりとターンした。彼女が引き下がると、影のごとき海水も流れ出していき、部屋はからになった。

気がついてみると、この家の主人が椅子に腰かけ、パイプをくゆらせながら、こっちを妙な目で見ているではないか。

「医師よ、自らを治せ！」と彼は言った。

私はぎこちなく立ち上がると、椅子にどさりとすわり、痺れた指で煙草に火をつけた。二、三服すると気分も落ち着き、ものを考えられるようになった。

「さて、先生」とどこか冷やかすような声が飛んできた。「診断結果はいかがですかな？」

私はちょっとためらった。これからやろうとしていることのきわどさを認識していたからである。

「ぼくがあそこを泳いでいた女性の病室に昨晩つめていたとします。そして彼女の肩に二つの銃創があったとすれば、どう思われますか？」

彼は身を乗り出した。口は開かれていたが、なんの言葉も出なかった。

私は言葉をついだ。「その銃創が外部からの干渉なしで自発的に生じたものであり、医者の診断ではヒステリー性聖痕とされているとします。どう説明をおつけになりますか」

「驚いたな！」と彼は叫んだ。「それはまさしく反撥の実例のようだ！　わたしは十六世紀の魔女裁判関係のスコットランド公文書を研究したことがあるが、そういった例を二、三読んだことがある。魔女がらみでよく言及される事例なのだ。物理的肉体から星幽体を体外に出して、遠隔地に現れるというやつだ。銀の弾丸をこしらえたとき、きっと私はその種のことをどこかで考えていたのだろう。古い民間伝承によれば、魔女を撃つには銀の弾丸しかないという。鉛の弾丸では効果がないのだ。しかし、なんですか？　先生はさっき水のなかにいた星幽体の持ち主を、実際にご覧になったとおっしゃるのですか？　実物を？　やれやれ、先生、これでわたしは助かりましたよ！　あれが現実だとはこれまで考えたこともなかった。意識状態のひとつにすぎないと思っていたのですよ」

「しかし意識状態も現実ではないですか？」

「そのとおり、もちろんそれも現実でしょうが、それ自身の次元に於いて現実だという意味ですよ。これがオカルト科学の全教義といってもいい。しかしわたしはいつも考えておりました。ああいったことは完全に主観的なもの、想像力の経験にすぎないと。あれを共有できる人間がいようとは、これまで思いつきもしなかった」

「あなたは—ぼくもですが、とにかくわれわれはこの女性の夢を共有していたようですね。彼女は恐ろしい日常から逃避するにあたって、自分が海で泳いでいる姿を想像していましたから」

「その女性に関して教えてください—どんな女性ですか？　どこでお会いになった？」

「その質問に答えるまえに、まずあなたの質問の動機をお教えいただきたい。彼女を追い払うおつもりですか？　それならば、ぼくのほうで説得してあなたをほっておくよう取り計らえると思いますが」

「その女性を知りたいのだ」と不承不承の答えが返ってきた。「わたしは以前、かなり手ひどい目に遭ったため、数年来女性とは一言も言葉を交わしていない。だが、これは—今回はまったく違うようだ。そう、わたしは彼女と知り合いたいのだ。さあ教えてほしい。だれですか？　何者ですか？　名前は？　家族関係は？」

「ご覧になったように、彼女はとても変わった外見の持ち主です。美人と見なす人は少ないでしょうが、一部の人間は強烈な魅力を感じるでしょう。年は二十代。知的で洗練されていて、声は明らかに教養ある女性のものです。名前は知りません。なにせ雑居病棟に入院していたものだから、番号しかわからないのです。家族に関しても同じ。一人もいないんじゃないですか。天涯孤独という印象を受けましたね。職業は店員—正確にいえば、生地屋の店員です」

こう披露しているあいだに、この家の主人の顔がいわくいいがたい表情になっていった。頬はこけ落ち、目は輝きを失って落ち窪み、顔じゅうに皺が縦横無尽に走ったのである。彼は突然くたびれはてた老人になってしまった。人間の燃え滓といった雰囲気である。この急激な変貌に私は当惑してしまったが、彼の言葉が手掛かりを与えてくれた。

「どうやら」と彼はおよそ響きのない声で言った。「この件は忘れてしまったほうがよさそうだ。店員、とおっしゃいましたね。いや、それはまずい。どうにも気にいらない。階級外結婚というものは思いもよらない代物です。わたしは—その—だめですな。もうこの件に触れるのはよしましょう。わたしはしゃっきりする必要がある。状況がわかった今、正常に復帰するだけの意志力はわたしにもあるはずだ。実際、先生のおかげですでにずいぶんよくなったような気がしますよ。もう二度と夢をみることはないでしょう。あれの支配力は破れてしまいました。あと数日先生におつきあいいただければ、わたしの健康も全面的に回復して、問題なしになるでしょう。しかし、この件はもはやお触れにならないようお願いします。頼みますよ、先生。今回の経験すべてを心から一掃したいのですよ」

彼は椅子にへたりこんだ。あれほど素晴らしいと思えた彼の風貌が、いまや生気を失った残骸でしかなかった。病気でいたほうが治るよりよかったのではないかと思えるほどであった。彼は修行を積んだ意志力によって、女性と彼をつないでいた微妙な磁気的共感を断ち切ってしまったのである。その断絶とともに、彼の活力の源もなくなってしまったのだ。

「いや、ちょっと待ってください」と私は抗議した。「それが正しいと本気でお思いなのですか？この女性は生活の糧を得るために働いているだけで、実にちゃんとした女性かもしれないのですよ。彼女の存在がそれほどのものとすれば、無理にでも忘れるなんて、あまりに大きな損失ではないですか」

彼は答えるかわりに立ち上がり、静かに部屋から出ていった。扉が閉まり、私としても議論は無意味だと悟らされた。彼は自分の制約というものにとらわれていて、人生という自由への脱出ができないのである。本人も言っていたように、地的、形式的、地道なのである。

私はタヴァナーにこの経緯の完全な報告書を送った。それからおって指示を待つべく、腰を落着けてしまった。状況はやや緊張気味であった。この家の主人は生気の抜け殻のようになっていて、日に日に、むしろ時間刻みに年をとっているようであった。彼は岩をくりぬいた部屋にすわりこみ、動くことすら拒んでいたから、説得して散歩に連れ出すのも大変な苦労であった。潮が引くと、なめらかな砂浜が何マイルも広がっているから、毎日の散歩にはもってこいであったが、彼は満ち潮のときは近づこうとすらしなかった。どうやら海に恐怖を覚えていたようである。

このようにして二日が過ぎたが、タヴァナーからは一言も伝わってこなかった。しかし次の朝、散歩から戻ってくると、洞窟の扉の下に一片の紙が差し込まれていた。それはありきたりの不在時電報配達通知であり、現物は郵便局留めになっているという。これは恰好の気分転換とばかりに、私は電報を取りにいくべく、町まで三マイルの散歩に出ることにした。無論、患者のことは少々心配ではあったが、このところ私も退屈していたのである。私は岩壁を刻んだ危ない小道をのぼり、岬の上の道を進んだ。砂浜沿いに行くことも可能ではあったが、現在潮が満ちていたから、岬の突端を回りこめるかどうかは海との競争になってしまう。いずれにせよ、よそ者には危険すぎると彼も言っていた。

岬の先端の草地を上っていくと、私の五体に戦慄が走った。すきっ腹にワインをぶちこんだような感触である。大気は黄金のきらめきに満ちていた。草地も岩も海も大いなる生命に活気づいていて、そのゆるやかな息吹が感じられる。すると岩壁の洞窟に残してきた男のことが気になった。大いなる生命を求めてはるか彼方まで到達した彼は、最後の一歩でためらっているのである。

荒涼たる土地の郵便局で、私はすぐに電報を受け取った。

「セイコンカンジャオクル。四ジ一五フンツク。ヤドトデムカエタノム。タヴァナー」

私が口笛を吹いたので、郵便局員一同が窓口のところにやってきた。彼らの話を聞くことで、私はある家を紹介してもらい、ようやく適当な民宿をみつけることができた。どういう結末になるのか私には想像もつかなかったが、どのみちこの件は私の手を離れたのである。

定刻、私は駅に赴き、わずかな降車客のなかから被保護者を拾った。彼女は長旅で疲れ果てているようだった。虚弱、みじめ、ぼろぼろである。タクシーのなかはエンジン臭とかび臭さが充満していたから、彼女を活気づかせる海の匂いなどは届きようもなかった。彼女は宿につくまで一言も発さなかった。しかしガタガタ自動車から降りたとき、一陣のねっとりした潮風が彼女の顔を打った。夕闇のなか、浜砂利をなでる波の音が聞こえてきた。その効果は魔術的とすらいえた。彼女はびっくりした馬のように顔をあげた。生命力が彼女のなかに流れ込んでいた。私は病気療養者用という触れ込みで宿を予約しておいたのだが、彼女を宿の女主人に紹介したとき、およそ半病人の雰囲気などはなかったのである。

岩壁の洞窟に帰還したとき、洞窟の主人は私がどこに行っていたのか尋ねたが、それも礼儀から尋ねたというだけであり、本当のところはどうでもよかったのであろう。彼は完全に落ち込んでいたから、人生を投げているも同然だったからである。町から持ってきてやった夕刊すら、読もうとしないのである。なんとか押しつけてはみたが、新聞は彼の膝に乗ったままである。彼はうつろな目で暖炉を眺めるだけであった。

翌日の朝はまだ潮の引きが浅く、散歩には不向きであった。そこで午後になってから、私たちは日課に取りかかった。洞窟を出たときはすでに遅い時間であったから、冬の早い夕闇のなかの帰り道、私たちは浅い水溜まりを渡らなければならなかった。一月によくあるおだやかな気候の日であったから、私たちは裸足になり、ズボンの裾をまくりあげ、長靴は肩からぶらさげた。迫りくる波打ち際を歩いていたとき、私たちは人影を見た。

「なんてこった！」私の連れは叫んだ。「あそこにいる馬鹿はどこのどいつだ？　あれじゃ潮に挟まれて入り江のほうにはいけないぞ。崖の小道をくるしかないはずだ。注意してやらなければ」そういうと彼はおーいと大声を出した。

しかし逆風だったし、波打ち際にいる人物には聞こえなかった。私の連れはぽつんと立つ人影に向かって砂のうえを歩きはじめた。しかし私は彼より視力がいいおかげで、一緒に行かずにすんだ。海草のようにたなびく長い髪とはためくスカートが見えたからである。

足首まである海水のなかを歩く彼が見えた。平坦な砂浜はすでに波に洗われ、泡立っている。いずれ大波が押し寄せてくるだろう。彼はふたたび人影に呼びかけた。彼女は振り返ったが、こちらに来ようとはせず、かわりに手を差し出して、不思議な仕草で彼を招いていた。その手に魅惑されたように、彼はゆっくりと水のなかに進んでいき、ついに彼女と触れあう近さにまでなった。先触れの波が彼女の膝を打つ。泡立つ波がすっと彼女を通りすぎていく。次の波が彼女の腰を打つ。潮は風を背に受け急速に満ちていく。飛散する波しぶきが彼の顔を打った。それでも彼女は動こうとしない。彼女

の背後には大波がおびやかすように迫っていた。彼は差し延べられた手をつかんで、ようやく彼女を陸に引き戻したのであった。

二人は砂浜を歩んで私のもとにやってきた。まだ手をつないでいる。二人は指をほどくことを忘れていたのである。彼の顔に生気が戻っていることがわかった。彼の目は炎のように輝いていた。私は岩陰に引き下がった。私のことなど眼中にないらしく、二人は岩壁の洞窟に続く急勾配の小道をあがっていった。彼女をなかに入れようと、岩屋の扉が開かれたとき、暖炉の炎が二人を照らし出した。彼女の濡れた髪は海草のように肩を流れており、彼の横顔はローマ皇帝の石像のようであった。

第十話　反魂

“前の恋人と手を切ってから、次の恋人に手を出そう”

「待合い室に何人残っているかね、ベイツ」ハーレー街の診察室で長い一日を終えようとするタヴァナーが執事に尋ねた。

「お二人でございます」と執事が答えた。「ご婦人と紳士です」

「なるほど」とタヴァナー。「ではご婦人のほうを通してくれ」

「ご一緒にいらしたらしいですが」

「なら紳士のほうを通してくれ。男はこんな場所に女房を連れてくることはないんですな」と博士が私に説明してくれた。「女は友だち連れできますがね。男は女房に連れられてやってくるものですよ。なにせ弱き性ですから、精神が問題となると保護者を必要とするのです」

しかしタヴァナーの指示にもかかわらず、二人は一緒に入ってきた。執事の案内によるとユースティス大佐夫妻であるという。男のほうは長身で風采のよい人物であり、熱帯の太陽のために青銅色の肌をしている。女のほうは民族の華と申すべき女性の一人であり、細腰優雅、純血種のみが有する抑制のきいた情熱を持ち合わせ、何世代もかけて蝶よ花よと育てなければ完成しない産物といえた。ご両人はいかにも社交新聞が写真にとりたがる似合いのカップルであり、ともに健康そのものと見えた。

口火を切ったのは細君のほうであった。

「タヴァナー先生、わたくしども、つまり、主人がご相談申し上げたいのでございます。このところ、悩まされて—その、繰り返し悪夢を見るのです」

タヴァナーは頭を下げた。夫君のほうはけっして口を開かなかった。いやいやここに引きずられてきたのだなと私は見た。

「それがはじまるときは、いつもわかります」とユースティス夫人が続けた。「主人は眠っているときにつぶやきはじめるのです。それから声がだんだん大きくなりまして、最後には飛び上がり、部屋を走って家具にぶつかってしまいます。もう止めようもございません。それからひどく苦しげな面持ちで目を覚ますのです。そうでしょう、トニー？」夫人はそばでむっつり黙っている男に相槌を求めた。

なんの反応もないので、夫人はふたたびつらい話をはじめた。

「悪夢が定期的に起きるのだとわかりますと、わたくし、主人がうなされだしたら直ちに揺り起こすことにいたしました。これはかなり効果があったように思います。主人は部屋を走りまわらないようになりました。でも、わたくしども、暗いうちは眠る気にならなくなりました。実を申しますと、先生、わたくしもそれにかかっているようなのです」

「奥様も悪夢をごらんになる？」タヴァナーが尋ねた。

「いえ、悪夢を実際に見るのではないのですが、なんと申しましょうか、言い表せない恐怖感を覚えております。まるで、恐ろしい敵が迫りつつあるみたいな」

「ご主人は睡眠中になにをおっしゃっておられました？」

「いえ、それが申し上げられないのです。主人は現地語のひとつでしゃべっておりましたから。わたくしもあれを学ばねばと思っております。そうでしょう、トニー？　次の軍務であたしたち、インドに赴任するのでしょう？」

「その必要はない」と夫が答えた。「あの地域に戻ることはないからだ」。彼の教養ある快活な声は、容姿に釣り合うものであった。いかにも急速に滅びゆく帝国の行政官といった人物である。こういった男たちは現地の民主主義などに膝を屈することはないであろう。

タヴァナーが突如夫のほうに質問を放った。

「どういう夢をごらんになるのですか？」博士は夫の目をまっすぐ覗きこみながら質問した。一瞬、壁が設けられたような感じがあったが、彼は育ちにふさわしい落ち着いた態度で答えた。

「よくある金縛りというやつだ。動きたいけど動けない。こんなものは子供の頃に卒業しているべきなんだが」

私は霊能者ではないが、彼が嘘をついているとわかった。誰にも真相を打ち明ける気がないのである。タヴァナーのもとにやってきたのは、細君を静かにさせるためであり、助けが欲しいからではないのだ。おそらく彼は自分の病気に関してそれなりに思うところがあるのだろう。敢えて口に出したくないなにかが。

タヴァナーは再び細君のほうを向いた。「先程、悪夢がご自身にうつりつつあるとおっしゃいましたね。どういう感覚をお覚えになられたのか、お話し願えますか？」

ユースティス夫人は夫のほうを見て、ためらっていた。「主人はわたくしのことを夢見がちだと思っておりますので」

「お気になさらずにおっしゃってください」とタヴァナー。

「もちろん、あの悪夢のあと、わたくしははっきりと目覚めております。それで—わたくし、見たように思うんです。その、藍色のサリーをまとった原住民の女性なのです。額には黄金の珠飾りを下

げて、腕にはたくさんの腕輪をしています。その女はとても興奮していて、打ちひしがれた様子で、主人に話しかけようとしているのです。そこでわたくしが介入して、主人を起こしますが、彼女はわたくしを押し退けようとします。主人を起こしてしまうと、わたくしは恨みを買ってしまったような気持ちになるのです。まるで誰かが、隙あらばわたくしに危害を加えようとしているような、そんな感じです」

「どうやら」とユースティス大佐が言った。「わたしは家内を完全に怖じけつかせてしまったようだ」

私たちは思わず驚いて大佐のほうを見た。彼の声の調子がまったく変わっていたからだ。育ちに起因する自己抑制が顔面筋肉を制御していたが、全身の緊張は隠しようもなく、声はうわずって半オクターブ上昇し、音色に金属的な鋭さが加わっていた。

「わたしが思うに」と彼は私たちの注目をそらしたいように続けた。「おそらく空気のよいところでたっぷり運動しろ程度の処方しかないだろう。実際わたしもそうするつもりなのだ。ケントの海岸にゴルフをやりに行こうと思っている。早いほうが良いだろう。ロンドンに意味もなく留どまっていてもしょうがないからな」

「あなた、忘れてらっしゃるわ」と細君が口を開いた。「土曜日にはわたくし主催のインド美術展がありましてよ」

「ああ、そうだった」と彼は慌てて言った。「土曜までいなくてはな。月曜日にしよう」

沈黙が周囲を支配した。面会は袋小路に入ってしまったようだ。ユースティス夫人は助け舟を求めるように夫からタヴァナーに視線を移し、また夫を見た。しかし一方は助けを出せなかったし、他方は助けを出す気がなかった。私の見るところ、夫人はタヴァナー訪問に大いなる期待をかけていたのであるが、失望してしまったのである。もはや夫人には自分を取り巻きつつある運命に対する切り札が残っていなかった。夫人の目には懸念すら浮かんでいたように思われた。

タヴァナーがついに沈黙を破った。

「ユースティス大佐がわたしの診察をお望みであれば」と博士、「喜んでお役に立ちましょう。お役に立てると思っておりますよ」

乗り気でない患者はこの皮肉を受けて立ち上がり、なにか言おうと口を開いたが、タヴァナーは夫人のほうを向いて言葉をついだ。

「また、ユースティス夫人も私の助力を必要とされるようなことがあれば、無論労を惜しむものではありません」

「その見込みはまずないと考える」と夫が言った。「家内はきわめて健康なのだ」

執事がタヴァナーの呼び鈴に応じてドアを開き、私たちはお辞儀をして二人を送り出した。

「気に食わない野郎だ」と私は扉を閉めるなり発言した。

「まだ心の準備ができていないのですよ」とタヴァナーが言った。「彼は進化の過程で学ばねばならないことがいくつかあるのです。わたしの目に間違いがなければ、学習日は迫っておりますな。そうすれば向こうのほうからなにか言ってくるでしょう。未熟な果実と腐った果実を取り違えてはいかんです」

私たちは二人の消息をタヴァナーの予想よりずっと早く知ることになった。数日後、私はタヴァナーに夕刊をぽんと放った。それにはユースティス夫人が急病のためにアストン・ギャラリーで予定されていたインド美術展をキャンセルしたという記事が載っていた。しかし同展は他の社交界の名花によって開かれることになったという。

「もちろん、流感かも」と私。

「あるいは腹痛か」とタヴァナー。

「さもなければ女中膝かも」と博士は付け加えた。懐疑主義者には話をしてくれない性格なのである。

次の動きは私の予想ほど早く到来してこなかった。私は呼び鈴が鳴るたびにユースティス大佐が来たかと思っていた。ともあれ大佐は現れたが、彼の身にいろいろあったらしいことは、誰の目にも明らかだった。

椅子に腰掛けた様子からも、大佐が精神的にも肉体的にもぎりぎりまで追い込まれていることがわかる。タヴァナーは会話を切り出すことで彼の苦痛をいささかなりと和らげていた。

「どうしてわたしのことをお聞きになられたのですか？」博士は尋ねた。「わたしのことは、同じ考えの持ち主以外にはあまり知られていないはずなのですが」

「家内が先生のことを聞いていたのだ」という返答があった。「家内は、その、先生の仕事の線に興味を持っている」

「奥様はオカルトの研究者でらっしゃる？」

「研究者とは呼べない」ユースティスがオカルトという言葉に眉をひそめながら言った。「家内は凝っているだけだ。それで東洋神秘主義の講座などに顔を出していたが、あんなものは本物とはいえ

ない—虎と猫ぐらいにちがう」彼は突然激高し、たまたま敷物の上にいた大家さんのブチ猫を指さした。「あんなことはさっさとやめてほしいものだ」

「お話をうかがいますに」とタヴァナーが静かに言った。「あなたはその種のことを信じておられないのですな」

「一週間前にその質問をされていたら」とユースティス、「わたしは信じないと答えただろう—だが、今日となると、どう答えていいかわからない。ただ言えることがひとつある」彼は押し殺していた炎を燃え上がらせた。「もしオカルティズムが本物でなくて、先生には神通力がないとしたら、イヴリンはもうおしまいだ！」

「わかりました」とタヴァナーが言葉静かに面接をコントロールしながら言った。「つまりなにかが奥様に影響を与えていて、それをオカルト起源のものとお思いですね。だが、その方法はおわかりでない」

「方法は十分承知している」と大佐が憂鬱そうに答えた。「だが、あんな話はまったく信じていなかったのだ」

「詳細をお聞かせ願えますか？」とタヴァナー、「そうすればわたしも見解をまとめることができるでしょう」

「全部お話してもよい」とユースティス大佐が言った。「先生も大人だから、たいしたこととは思わないだろう。しかし家内に聞かせれば大騒ぎになる。夫婦のあいだに完全な信頼がないというのではない。女はこの手のことを理解できんのだ。理解させようとしてもむだだろう。

「覚えておられると思うが、この間こちらにうかがったとき、家内が原住民の女のことや、インド方言のことを言っておったでしょう。家内の話から判断するに、それはわたしがしばらく国境に詰めておったときに囲っていた女なのだ。この女はわたしに追い出されとき、ずいぶんと騒ぎを起こしてくれた。まあ、連中はときどき騒ぐのだ。それまでよく聞かされた話だが、現地の女と、その、関係を持つと、女は異教のまじないで男の魂をつかまえてしまうという。そんな話は信じていなかったし、実際、仲間の一人がその手のことで悩んでいたときも、笑い飛ばしたものだった。だが、おおなんということだろう、それは本当だった。あの女は死んでからずっとわたしの夢につきまとっていた。そしてイヴリンと結婚してからは、復讐の鬼と化したのだ」

「奥様は現在どういう状態ですか」タヴァナーは質問した。

「昏睡している。医者どもは眠り病だとかなんとか言っておるが」大佐は陰惨な笑いを浮かべた。「こちらのほうがよく知っている。家内があの状態になるところを見ていたのだから、よくわかる。二人の女が話し合っているのを聞いたのだ。ハニーファがわたしが教えた片言英語ではっきりとしゃべっていた。それが十日前だ。それからイヴリンは意識を取り戻すことがなく、体力もどんどん減退

していった。医者の言い草では、今夜一杯しかもたないだろうという」大佐の声は途切れた。彼は震えるくちびるを隠すべく手を口に当てた。

「奥様を診察いたしましょうか？」タヴァナーが言った。

「そう思って車を待たせてある。ご一緒いただきたい」

「しかし、この件をお引き受けする前にお願いしなければならないことがひとつあります」とタヴァナーが言った。「つまり、わたしが助言を申し上げて、それに従う決心をなさったら、最後までやりとげていただきたい。オカルト作業をはじめておいて、途中でほうり出すことくらい危ないものはないのです」

「先生に打つ手がないとすれば、もう手はないのだ」とユースティスが悲しげに言った。私たちは彼について車に向かった。

以前、文明的なフォーマル・スーツに身を包んだユースティス夫人に会ったとき、大変な美人だと思った私であったが、白い寝台に白衣をまとってゆったり横たわる夫人は、なにに似てるといって、子供心に思う天使のイメージそのものであった。亭主が賛美するのも無理からぬ話である。

聴診器など使わなくても、生命力が減退しているのは明白であった。手首の脈は感じられず、時折動くわずかな胸元のレースだけが、呼吸の存在を教えていた。今夜一杯しかもたないのは疑問の余地がなかった。実際、いつ逝っても不思議ではない。

タヴァナーは看護婦を室外に出し、私とユースティスを部屋の端っこに追いやった。それから博士は寝台脇に座り、無意識の女性の顔をじっと覗きこんだ。彼が意志集中を行っているさまを見て、博士が彼女の魂と連絡を取ろうとしているのだとわかった。魂がどこにいるかは、まだわからない。博士が彼女の胸に手を置くのが見えた。彼女の魂を肉体に呼び戻しているのだろう。私が眺めていると、呼吸が深まっていき、やがて規則性を帯びはじめた。蝋のような表情が彼女の顔から消えていった。

それから彼女がしゃべった。彼女の声を聞いて押しかけようとする夫を引き留めるのは骨だった。

「あなたに話すよう言われました」とゆっくりと口ごもる声が聞こえてきた。「お金は返したと。あなたのもとには届かなかったかもしれませんが」

ユースティスは一声うなり、顔に手をあて、うなだれた。

「また、こうも言われました」と口ごもる声が続いた。「男の子だったそうです」

タヴァナーは彼女の胸から手をあげた。すると呼吸がふたたびテンポを落とし、顔は死の硬直を帯びた。

「なんのことかおわかりですか？」博士がユースティスに尋ねた。
「ああ」と男が顔を上げて答えた。「わたしが思っていた通りだ。ハニーファのやつだ。彼女の復讐なんだ」
タヴァナーは私たちを連れて部屋を出た。
「詳細をすべてお聞きしたい」と博士は言った。「そうしないとこの件は扱えません」
ユースティスは決まりが悪そうだった。「できる話はなんでもしよう」とついに彼が返事をした。「なにを知りたいのだ？　全部話すと長い話になるのだが」
「このインド人の娘と関係するに至ったきっかけは？　プロの娼婦ですか、それとも金で親から買ったのですか？」
「どちらでもない。出奔してきたので、わたしが面倒を見た」
「恋愛ですか？」
「そう呼びたければ、それでもいい。だがわたしは思い出したくないのだ―あれ以来、恋愛がどういうものか、わかってしまったから」
「別れた原因は？」

「まあ、その、つまり、子供ができた。わたしはそれが耐えられなかったのだ。ハニーファは、それはそれで結構、だがインド人の子供など御免だった。こういった情事はたいていこういうふうに終わるものだと思っている」

「それで、彼女を家族のもとに送りかえしたわけですか？」

「それはなにがあってもできなかった。連中はきっと彼女を殺してしまっただろう。わたしは彼女に大枚与えた。十分ひとりでやっていけるくらいの額だ。あのあたりの生活は実に素朴だから、幸せになるにはたいして必要じゃない」

「つまり、あなたは彼女に十分な資本金を与えて、高級娼婦になれと」

「いや、まあ—そういうことだ。きっと彼女がそうすると期待していたのだ」

「彼女には選択の余地がたいしてなかったでしょうね」

「あのあたりじゃ、たいして問題じゃないのだ」

「ある種のカーストは問題にしますよ」とタヴァナーが静かに言った。「しかし彼女は金を返した」博士はちょっと口をつぐんでから続けた。「それから彼女はどうなりました？」

「召し使いたちが自殺のことをしゃべっていたように思う」

「つまり、彼女はあなたが提供した代替案を受け入れなかったのですね？」

「まあ、その、受け入れなかったのだ。不快な事件だったから、忘れるにしかずと思っていた。無論、非難されてもしょうがないと思っている」ユースティスがつぶやき、立ち上がって、扉のまわりを歩きはじめた。

「いずれにせよ」と彼は立ち直ったようにしゃべり続けた。「われわれはこの件をどう処理しようというのだ？　ハニーファはわたしの想像以上に、その、オカルティズムのことを知っているらしい。また、話をうかがうに、あなたもまたこの種の知識をお持ちのようだ。つまり、東洋対西洋の戦いだ。どちらが勝つ？」

「わたしの思うところ」とタヴァナーがいつもの静かな声で言った。「ハニーファが勝つでしょう。正義は彼女の側にあるのですから」

「だが、ちくちょうめ、たかが土人の娘じゃないか―あのあたりではどうってことないだろうに！」

「彼女にとっては大問題だったのでしょう」

「たしかにあるカーストはそれなりにまともな連中だ。しかし彼女だって十分やれたはずだ。子供を始末してから先も、食うに困らないだけの金をくれてやったのだ」彼は身を堅くしながらしゃべり続けた。「どうしてわたしにこないんだ？　どうしてイヴリンに手を出すのだ？　イヴリンには罪は

ない。イヴリンはなにひとつ悪いことをしておらん。わたしにとりつく分には我慢をするが、これは—これはまったく別問題だろう」

看護婦が突然現れたので、私たちの会話は中断された。

「ミセス・ユースティスが意識を回復なさいました」と看護婦。「おいでになられたほうがよろしいかと」

私たちは病室に行った。私もプロであるから、これが消えゆく炎の最後のきらめきであるとわかっていた。

ユースティス夫人はかたわらにひざまづいた夫の姿を認めた。タヴァナーや私の姿は土くれほどの意味もなかったと思われる。

夫人は奇妙な表情を浮かべながら大佐を見ていた。まるで初対面といった面持ちだった。

「あなたがあんな人とは知りませんでした」と夫人が言った。

大佐はこの言葉に当惑したようであり、どう返答していいかわからなかった。しかし夫人がふたたび沈黙を破った。

「ああ、トニー」と夫人、「彼女はたったの十五歳だったのよ」

それで私たちにも意味がつかめた。

「気にするんじゃない、お前」と夫人のそばで大佐がささやいた。「みんな忘れるんだ。とにかくよくなることだけを考えるんだ。よくなったら、あとで話し合おう」

「わたくし、よくなりそうにありません」と病床から静かな声が聞こえてきた。

「そんなことはない。きっとよくなる。そうでしょう、先生？」タヴァナーに訴える。

タヴァナーは慎重に言葉を選んでから答えた。「見込みはあります」とようやく答えた。

「わたくし、よくなりたくありません」と病床の声が言った。「すべてはもう、わたくしが望んでいたものとはちがってしまいました。あなたがあんな人だとは知りませんでした、トニー。でも男の人はみんな一緒なのでしょう」

「そう深刻に考えちゃいけないよ、お前」とよこにすわる男が悲しげに言った。「あそこじゃ誰でもやってることだ。そうなるんだよ。そういう土地柄なんだ。だれもどうも思わないんだ」

「あたしには大変なことです」とはるか彼方から声が聞こえてきた。「どんな女だって、それを知れば心を痛めます。男の人は利口だから、教えないのです。女には耐えられません」

「だが、あれは所詮は土人じゃないか」

「でも、女でした。そして、あたしも女です。それがあたしを傷つけるのは、女の性を傷つけているからなのです。言葉ではうまくいえません。でも、感じます。あたしの最良の部分を傷つけているように感じます」

「国境に出ている男たちとお前になんの関係があるというんだ？」男は自暴自棄気味に言った。「帝国を維持するためにはしょうがないんだよ」

「それは帝国が背負った呪いです」と遠い声が聞こえてきた。「あの人たちがあたしたちを憎むのも無理ありません。いつも不思議に思っていました。どうしてあの人たちと友人になれないのだろうと。それはあたしたちがあの人たちの女性を蹂躙してきたからです。この世には決して許してもらえないことがあります」

「ああ、そんなことを言うんじゃない、イヴリン」と悲しい男が言った。

「あなたに言ってるんじゃないの、トニー」夫人が答えた。「あなたを愛しています。前と同じように。でもあなたにはこういったことがわからない。それが問題なの。彼女を抱いたことを責めてるわけじゃない。彼女を捨てたことを責めているのよ」

「やれやれ」とユースティスは男性の支持を求めてきた。「一体女をどうすればいいというのだ？」

「また、彼女もあなたを責めていません」と声が続いた。「抱いたことも、捨てたことも。彼女はあなたを愛していましたし、理解もしていました。実のところ、それだけで十分だった。そう彼女が言ってます。彼女が責めているのは彼女自身なのです。あなたに対して怒っているのではないのです。ただ、助けだしてほしいと、行われた不正を正してほしいと願っているだけです」

「なにが願いなんだ？　お前をほっておいてくれるのなら、なんだってしてやる」

「彼女が言うには―」声がきわめて遠くから聞こえてくるようだった。まるで長距離電話を思わせた。「あなたと彼女を通して生を受けるはずだった魂は、実はとても高貴な魂だったと。マハトマ、彼女はそう呼んでいます。マハトマって、なに？」

「面倒を起こすやつらのひとりだ。そんなことは気にするんじゃない。続けてくれ。わたしにどうしてほしいんだ？」

「彼女の話では、過去に修行を積んだおかげで、マハトマを産む役を授かったのだと。マハトマは東洋と西洋を和解させる義務を背負っているから、東洋と西洋が彼のなかで和解しなければならない、また彼は大いなる愛を通じて到来しなければならないと。大いなる愛と知って、嬉しかったわ、トニー。彼女とあなたとのことが、聖なるものに思えますもの。なぜかしらより良いものに思えますもの」

ユースティスは驚愕に見開かれた両眼を私たちに向けた。

「それで、それは大いなる特権だから、大いなる犠牲で贖わなければならなかったの。彼女はマハトマと産む前に愛を諦めなければならなかった。それがいつもの方法みたい。彼女が言うには、選択はあったのだと。自分の民族の男の愛と家庭を得て、幸福になってもよかったの。あるいは、大いなる《和解者》に生を与えるため、西洋の男のつかの間の愛を得てもよいと。彼女は後者を選んでしまった。彼女はそのとき、それがなにを意味するのか、わかっていました。そう言っています。でもそれは彼女が考えていた以上に苛酷なものだった。あなたがあんなに大金を渡したものだから、彼女は自殺してしまったのよ。金さえ渡せば、あなたの良心は和らぐと彼女はわかっていたから。彼女はあなたに落ち着いてほしくなかったのよ」

「落ち着いてなんかいないぞ、くそ！」と男はうなった。「見事に復讐されてるじゃないか。これ以上なにが望みだ、この悪魔め」

「彼女が心悩ませているのはマハトマの魂なのよ」と答えが返ってきた。「それがあるから、彼女は安らげないの」

「わたしにどうしろと言っているんだ？」男が尋ねた。

「あたしたちに引き受けてほしいと言ってるわ」

「なに、しかしそんな。どういう意味だ。お前に混血児を産めと言ってるのか？　黒んぼを？　冗談じゃない。どんでもないぞ。それくらいなら、いまここでお前に死んでもらったほうがいい。マハトマなんぞ、あいつが勝手に産めばいい。どこなりと好きな地獄に行くがいい」

「そういう意味じゃないのよ、トニー。彼女の願いは、あたしたち、あなたとあたしにマハトマを引き取ってくれということよ」

「よし、いいだろう。その子供を見つけられるなら、引き取ってやろう。お前さえよくなってくれるのなら、そいつもイートンでもオクスフォードでもラサでもメッカでも通わせてやる。どこでも好きな場所に行かせてやるぞ、お前さえほっておいてくれたら」

「あたしは、よくなりたくありません」と枕に沈んだ声が聞こえてきた。

「でも、お前―頼むから―わたしをまだ愛していると言ってくれたじゃないか」

「あたしは、よくなりたくありません。でもよくなるしかないようです。彼女がそうしなければならなかったように。《彼》のために、無理にでも生き続けた彼女のように」

「《彼》とは誰だ？」

「生まれるはずだった魂、いまや到来しつつある魂、《和解者》です」

沈黙があった。それから夫人がふたたび口を開いた。彼女の声は一言ずつ強さを増していくようだった。

「とても大変よ、トニー」

「なんとかしてみるさ、お前、二人が一緒なら、なんとかなるさ」

「あなたが思う以上に大変なのよ」

＊　＊　＊

ユースティス夫人は急速に回復した。夫の喜びようはとどまるところをしらなかった。彼はすべてタヴァナーのおかげと思っていたが、実のところ、タヴァナーは生と死のドラマが進展していく様子を傍観していただけだったのである。事物の表面だけを眺めて自分の現実主義を誇る男にありがちなように、ユースティスはすぐに一件の内的局面を忘れてしまった。妻が眠り病に罹ったが、有り難いことにすぐ治ったのだ。それが嬉しいだけでなく、彼には嬉しいことがたくさんあった。まず、彼は昇進し、連隊長から一足飛びに出世して、きわめて重要な行政ポストに抜擢されたのである。また、

いとこが急死したために、彼は名家の第一継承者になっていた。そして最高の喜びと言おうか、その家名は彼一代では終わらないことになったのである。

私たちは夫妻の出立前夜に食事をともにした。ユースティスは第七天に舞い上がっており、食事中も祝電の雨あられが降り注いでいた。細君の顔からは、異次元の小旅行から持ちかえった遠い静寂の面持ちが消えていなかった。彼女の目には喜びの色がなかった。ただ、彼が喜んでいるのが嬉しいというだけであり、どこか悲しげな微笑を浮かべていた。安手のおもちゃに心奪われた愛しい子供を見つめる母親の面影であった。

私たちはそれ以来、夫妻の話を聞かなかったのだが、たまたま噂が伝わってきた。

「ユースティス夫妻の話を聞いたかい？」とクラブである男がしゃべっていた。「いまやユースティス将軍閣下だ。その息子ってのが、石炭みたいに真っ黒でね。ユースティスのやつ、どうするんだろうって、みんな大騒ぎだよ。本来なら辞表もんだろうが、なにせやつは反政府主義的大衆にどえらい影響力を持ってるからね、ほかの人間じゃ手に負えないわけだ。どうしてあれほどやつらとうまくつきあえるのか、わからんな。たいして気転がきくわけじゃなし、それほど理解してるわけでもないんだぜ。それでもやつらはうまがあうらしいんだ。奥さんは気の毒だな。すごくいい人なんだ。ステンドグラスの聖女様みたいな人だよ。まったくわからん」

数年後、ユースティス夫妻はふたたび舞台に現れた。彼はいまやいとこの称号を継承したため、準男爵になっており、インド政府内でもきわめて高い地位にあった。しかし彼はまったく人が変わって

いたのである。髪は雪のように白く、顔には深い皺が刻まれ、目は落ち窪み、年不相応に老け込んでいた。実に不思議なことに、いまやレディー・ユースティスと呼ばれる奥方のほうは、なにひとつ変わっていなかった。ただ、もうこの世の人とは思われぬほど霊化していた点を除けば。おそらく奥方は隠遁に近い生活を送ってらして、本来彼女の地位にある女性に求められる社交活動など一切断ち切っておられるのであろう。

二人のあいだには五歳になる子供がいた。髪は漆黒、皮膚は暗いオリーブ色、細長い手足、そして海のように青い目をした男の子である。私はこんな不思議な目をした子供を見たことがなかった。海の青さのみならず、海の深さをもたたえた瞳なのだ。東洋の顔に西洋の瞳が備わっているのである。西洋の瞳を通して、生まれ育った東洋を見てきたこの魂は、この先なにを目にするのだろうか？

ユースティスが私をわきに引っ張った。どうやら事情を知っている人間に胸のうちを打ち明けたいらしい。母親と一緒にいる子供を指さすと、彼はこう言った。

「あれがわたしたちのような地位にいる人間にとって、なにを意味するか、想像がつくでしょう、ええ？」

「わたし自身は気にしておらん」と彼は続けた。「しかし、家内にとっては、それはつらい。十字架だよ」と彼は付け加えた。

私は母親がタヴァナーに語りかける声を聞いた。

「ご覧になったでしょう？」夫人はやさしく言っていた。「素晴らしいじゃありませんこと？　よりによって、どうしてわたくしが、これほどの幸せを授かったのでしょう？」

それから子供のほうを向くと、夫人は言った。「ぼうや、こちらの紳士がどなたか知ってる？」

「うん」と子供が答えた。「このひとも《ぼくらのひとり》だよ。そう言ったでしょう」

「まったく妙なちびすけだ」と父親が息子の頭を撫でながら言った。「また友だちを見つけたんだな？」

第十一話　魔殿覆滅

私はタヴァナーに連れられ、チャリング・クロス・ロード巡りをつきあわされていた。お目当ての品はある大冊の書物であったが、その書名を出すと、この界隈の本屋は一軒残らず私たちを白眼視したものであった。博士はついに捜索をあきらめ、私をとあるカフェに連れていこうと言った。よく我慢したご褒美というわけである。このカフェは四方の壁にしゃれた悪魔の彫刻が並んでいるというふざけた代物である。私の肉体的欲望はトテナム・コート・ロードの屋台で売っているオイスター・サラダを欲していたのであるが、タヴァナーは紅茶を好むこと行かず後家のごとしであったから、悪魔のカフェに行くと決めこんでいた。私は自分の福祉を犠牲にして彼の欲望につきあったのである。

ニュー・オクスフォード・ストリートはチャリング・クロス・ロードの東端に接すると品を失い、あやしげな貧乏紳士の如き様相を呈するが、ホルボーンに至ればそのあからさまな商業性ゆえに自尊心を回復する。大通りから生え出る脇道小道はどれも狭く、行き着く果ては芸術乞食の巣窟である。狭い峡谷のような小路には不安が潜み、点在するデリカテッセンや小間物屋がオアシスよろしく陸離たる光彩を放っている。岩壁を思わせる建物の窓からは奇妙な顔が外を覗いているし、およそこの区画は英国的でなく、薄汚く、どこか悪の匂いがする。裏の世界がそばにあるような気にさせられるのである。

車がうなりをあげる大通りの真ん中の横断帯で、私たちは停止を余儀なくされた。帽子をかぶっていないつややかな髪の女性が買い物篭を私の背中におしつける。篭から突き出ている一ヤードほどのパンがタヴァナーにつっかえていた。博士のひじの下からは、青白い顔付きの少年マッチ売りが後生大事に商売物を小さな拳で握りしめている。私たちのそばをロンドン経済の濁流がエンジン音も高らかに、凄まじい勢いで通過している。交通という急流のなかから、別の漂流者が横断帯にやってきた。大波に打ち上げられるようであった。その人物の顔を見るや、私は小学生のころ教科書で見たリチャード三世を思い出した。どこかイタチのように狡猾な、しかし知的な顔付きで、小柄な猫背ではあるが、それゆえ胸板は分厚く盛り上がってみえる。灰色の皮膚が物語るものは慢性的不健康、あるいはこの界隈に充満する大気汚染ゆえの不健康な生活である。瞳の色は薄い灰色で、ブーツのボタンを連想させる艶を放っていた。口は大きいが唇は薄く、どこか残忍さを漂わせていた。冷血な官能主義者の口とでもいおうか。感覚はあるが感情がないのである。

ちょっと見ただけなのに、その顔が私の注意を引いた。力感のある顔だったからである。しかし男のその後の行動ゆえに、男のことすべてが私の記憶に長くとどまることになった。男はタヴァナーと目を合わせるや、顔色を変えたのである。すばしっこいコクマルカラスの顔から追い詰められた猫のごとき顔に変わった。男はシャッという音を放つと、すぐさま車の奔流のなかにかけ戻ったのであった。

怒号、衝突音、悲鳴をあげるブレーキ。予想された事態が発生した。私たちの足元に男は気絶して倒れていた。頭を怪我して出血している。敷石にぶつかって切ったのであろう。男をはねた車がバッ

クするかしないかのうちに、タヴァナーと私は膝をついて男を診た。私は男の頭部を調べていたが、驚いたことにタヴァナーは男の懐をさぐっていたのである。博士は古びた分厚い手帳を男の内ポケットから抜いて、急いでページをめくっていた。博士はあの素晴らしい記憶力を用いて内容を暗記しているらしかった。続いてそれをもとあった場所に戻した。顔面蒼白の運転手が現れたころには、博士は実に医者らしい態度で正統的応急処置を行っていた。警官のヘルメットがやじ馬の彼方から近づいてきたとき、タヴァナーが私の袖を引いた。今度は私たちが渋滞した車道に飛び出した。イタチ顔の男よりずっと運がよい私たちは、なんなく舗道にたどりついた。それから脇道に入りこみ、タヴァナーご贔屓の悪魔の住居に向かったのである。負傷者を救急車に担ぎこむことなどは、もの好きにやらせておけばいいのである。やじ馬のなかには往々にして現場を仕切って喜ぶ馬鹿が存在する。

「いや、驚くべき幸運ですぞ、これは」とタヴァナーが言った。「あれが誰だったか、ご存じですかな？　ジョセファスですよ。あれはチュニジアにいると思われていたのですがね。パリですら睨まれていましたから。ところがどうです、あいつはロンドンに戻っておったのですよ。しかも裕福そうだ。となれば、またぞろ悪事を働いているにちがいないのです。そしてわたしはあいつの住所がわかった」

私はジョセファス発見に熱中するタヴァナーについていけなかった。この有名人と知り合う光栄に浴していなかったからである。しかしタヴァナーはすぐに紅茶とトーストを楽しみながら、周囲に飾られている悪魔像のシンボリズムの話に夢中になっていった。一方私は、タイル張りの小さなテーブルの下で足のやり場に苦労していた。こういった場所で飯を食う栄養不良の人種にあわせて設計され

た小さな代物だったのだ。タヴァナーは長い脚を通路に投げ出すことで問題を解決していた。私たちはこの狭苦しい店内で必要以上に空間を占拠していたのではないかと思う。

幸運なことに店内は私たちの貸し切りに等しい状態だった。お茶の時間は過ぎていたし、私たちのごとき俗物の侵入を快く思わない芸術乞食たちもいなかったからである。私たち以外の客は近くの席で居残っている男女だけであり、その二人も会話に没頭していて、周囲など気にしていなかった。

いや、正確を期するなら、男のほうは没頭しているが、女のほうは上の空といった体であり、どこかそわそわしていた。この会話に終止符を打ち、しつこい男から逃げるきっかけを探しているようなのだ。薄暗い照明の店内ではあったが、私は女の顔を見ることができた。表情のない冷静な顔は、躍起になって話しかけている男の顔と奇妙な対比をなしていた。卵型の顔に備わる大きな灰色の瞳は、はるか彼方の地平線でも見ているような風情であり、狭いブルームズベリーの裏通りのことなど忘却しているようだった。

忘却—これが彼女を特徴づける言葉であった。彼女は連れの男のことを忘れ、彼の見解も、欲求も忘れているのである。彼女の目はなにか幻影でも見ているのであり、彼はその幻影を共有できないのである。

私が見ているあいだに、女はその場を去ろうと立ち上がった。奇妙な頭巾付きマントのような服を着込んでいるのがわかった。およそ流行とは縁のない衣装であり、また足元はサンダルであった。男のほうも立ち上がったが、彼女は手振りで彼を制した。彼女の声がこっちのほうまで聞こえてきた。

「あたしのあとをつけないって約束したでしょ、パット」と彼女は言っていた。

男は彼女と出口のあいだに立っていたが、決心がつかぬ風だった。しかし彼は突然激しい口調でしゃべった。

「あいつはきみを台なしにしている」と彼が叫んだ。「身も心もだ。あいつに会ったら、絞め殺してやる。死刑になったたってかまうものか！」

「むだよ」という答えが返ってきた。「あんたなんかになにができるっていうの。どいてよ。なにしたっておんなじよ」

男は両腕を頭の上で組んだ。私たちからは背中しか見えなかったが、全身が激情に震えているのがわかった。

「呪いあれ！」と彼は叫んだ。「あの野郎に呪いあれ！　復讐の大天使ミカエルの黒い呪いがあの野郎にふりかかれ！」

アイルランド訛りの呪詛が激高したくちびるからほとばしった。訛りゆえに一層激しさが加わったように思える。店の隅にいるけばけばしいエプロンをつけたウェイトレスはぽかんと口をあけ、肥満した女店主は玉のれんの奥からよたよた出てくる気配であったが、頭巾付きマントに身を包んだ女は他人の介入を待つまでもなく、身のこなしものびやかにテーブルを回りこみ、ドアから滑りでて外の

夕闇に消えていった。男のほうは慌ててあとを追おうとして、タヴァナーの脚につまづき、私たちのテーブルにのめりこんできた。

彼は激情に身を震わせながら手近の椅子に転がり込んだ。私たちは情けない顔で散乱した食器とこぼれたミルクを眺めていた。

われに返ったのは彼が最初だった。まいったなといわんばかりの表情で額に手をやっていた。悪夢から目覚めたような面持ちだった。

「申し訳ありません」と彼は言った。アイルランド訛りが口調から消えていた。「ほんとうにすみません。ちょっと、お姉さん、こちらのテーブルを片付けて、紅茶をもってきてあげて」

女店主がよたよたと現れ、彼を睨んでいた。彼のほうも女店主に顔を向けた。

「いや、ほんとうにごめんなさい」と彼は言った。「取り乱したんだよ―その、家庭内のごたごたなんだ。ちょっと感情が先に立ってしまって」

彼は完全に困憊した様子で椅子にもたれこんでいた。「ありゃもうだめだな、身も心も」彼はほとんど独り言をつぶやいていた。「“彼女のために聖母に祈りなさい”とオハラ神父がおっしゃるから、そうしてきた。だが、ジョセファスのためなら、大天使ミカエルに祈ってやるぜ、ミカエルの黒い呪いが野郎にふりかかればいいんだ！」

タヴァナーは身を乗り出し、男の腕にやさしく手を置いた。

「その祈りは聞き届けられたようですぞ」と博士は言った。「ほんの三十分前、ジョセファスがひどい頭部外傷で病院送りになったところを見ましたよ。あいつにどのような不平不満をお持ちか存じませんが」と博士が続けた。「わたしもジョセファスのことは知っておりますから、あいつは文句をつけられて当然だと思いますよ」

「ジョセファスを知ってるんですか？」男は私たちをまじまじと眺めた。

「知っています」とタヴァナーが言った。「こう申しあげたほうがいいかも知れませんな。わたしは二、三の理由であいつを追っているし、またあいつに年貢を納めさせる手段も持っておると思っておりますよ。ですから、どうですか、共同戦線を張るというのは？」それから博士は眼前の震える灰色の顔の男の前に名刺を置いた。

「タヴァナー、タヴァナー博士でらっしゃる」と男は慎重に名刺をつまみながら言った。「どこかでお名前をうかがったことがあります。もしかしたら、コーツという人物にお会いになったことは？盗まれた儀式書に関係した不思議な事件がらみのことなんですが」

「わたしです」とタヴァナーが言った。

「あの事件には不思議な裏があるとみんな言っていましたよ」と私たちの新しい知己が言った。「でもぼくはああいうことは信じていなかったな。ジョセファスがやれることを見るまでは」

彼は落ち窪んだ目でタヴァナーをじっと見つめていた。

「この件に役立っていただけそうな人間は、ロンドン広しといえども先生おひとりのようだ」と彼は言った。

「よろこんでお役に立ちましょう」とタヴァナーが答えた。「なにせ今申しましたように、わたしはジョセファスを知っておるのですから」

「ぼくはマクダーモットといいます」私たちの新しい知己が言った。「さっき一緒にいた女は家内でした。“でした”と過去形で言ってるんですよ」彼の目の奥に激情の炎がちらちらしてきた。「もうぼくのもとから消えてしまいましたからね。ジョセファスが連れてったんですよ。いや、普通の意味じゃないんですよ」彼は慌てて付け加えた。彼女のことを妙に勘ぐられたくなかったのであろう。「連れていったといっても、つまり妙な集団に加わったという意味です。ジョセファスと一緒に交霊会をやってる集団なんですよ。そのためぼくにとっては、家内は修道院に入ったも同じなんです。家庭を台なしにした野郎を呪ったって不思議じゃないでしょう？　好きだから連れてったというんなら、まだしも許せますけどね、この件は色恋ざたじゃないんです。なにか自分の目的に必要だってんで彼女を連れてったんですよ。そういったふうで、野郎は多くの女を取り込んできたんです。なんであれ、野郎に連れてかれた女は魂を失ってしまう。これは許せませんよ、どうみたって邪悪です」彼はさら

に興奮の度合いを増しながら続けた。「あの野郎の目的はわかりません。だけど、ろくなもんじゃないことはわかってる。あの野郎の面を見れば、正真正銘の悪人だってわかりそうなもんじゃないですか。だけど、家内はあれを聖人だってぬかすんです。天啓を受けた指導者、達人、新時代の預言者なんだそうですよ」彼は苦々しげに言った。「でもね、まっとうな稼業のちゃんとした男なら、あんな顔になるわけはありませんよ」

「あいつがなにを行っているか、情報をお持ちでしたら教えてください」とタヴァナーが言った。「この前あいつが国外退去してからというもの、糸がふっつり切れておりましてね。しかし相変わらずの商売をしているだろうとは思いますが」

「ぼくの知るかぎり」とマクダーモットが言った。「一年ほど前、どこからともなくふらりと登場してきたんですよ。心霊能力開発講座なんて広告を打ってましてね。それでこの方面に興味を持ってるいろんな連中と接触するようになったんです。ぼくはちがいますよ。教会が許しゃしませんからね。許さないのは当然でしょうけど。メアリーは、失礼、家内のことです。メアリーはコーツがセント・ジョンズ・ウッドでやってた一種のオカルト・クラブに所属してました。コーツのやつはしんから馬鹿ですから、ジョセファスのやつを呼んでしまったんです。それでひどい目に遭い、やつを追い出したんですが、やつは行き掛けの駄賃とばかりにクラブから女を数名引き抜いていきました。家内もその一人です。するとどうでしょう、ジョセファスのやつは足場を得たのか、急に羽振りがよくなったんです。（最初に現れたころは、みすぼらしい山師でしかなかったんですよ）。それでいまは、どこかに家もあるらしい。住所は奥義に達した者にしか教えないんだそうです。その家で多数の女に囲ま

れて作業をしている—まあ、家内の話ではそんなところです。いったいなにをやっているのか、正確にはわかりません。ただ、あの野郎は女たちに途方もない支配力を持っているみたいです。全員あの野郎と恋に落ちているつもりらしいんですが、それでもひとつ屋根の下で平和に暮らしているんですよ。まっとく驚くべき話ですよ。やつは信者たちから金をしこたま巻き上げているようですが、この内部集団では、金を目的とはしていないようです。ぼくにわかるかぎりでは、なにか特殊な体操でもやっているらしい。それで、やつが元気になる一方、女たちは衰えていくようですよ。いずれにせよ、あの野郎は定期的に新しい血を導入する必要があるんです。ジョセファスがくたばりかけると、必死の新人狩りがはじまることもあるらしい。それでぴちぴちしたお気にいりを手に入れると、やつは突然よみがえるんですよ。なんか不自然といおうか、おかしいでしょう。あやしい話ですよ。ぼくの家庭が台なしにされなくても、我慢できた話じゃないですよ」

タヴァナーは頷いた。「あいつはすでに何度も同じことをやってきたのです。面白いお話をお聞かせしましょうか。わたしがまだ医学生だったころ、病棟にやつの犠牲者が次々に担ぎこまれたきたため、わたしたちはジョセファスを飼葉桶にぶちこんでやったものですよ。当時はやつの体系にそって作業をする結社があったのです。もっとも、もう組織としては潰されているでしょう。しかし、どうやらやつは再開したのですな。となれば、つかまえるのは早いほうがいい。あいつが国民の潜在意識に足場をつくってしまわないうちに。その危険性もあるのですよ。おわかりですか」

「ぼくを信用してくださって結構ですよ」とマクダーモットが筋骨たくましい腕を差し出しながら言った。目は戦いを予期して輝いていた。「まずやるべきはやつの家を発見すること。次にそこに忍びこむ。それから女を救い出し、悪魔に鉄槌を―」

「最初の計画に関していえば」とタヴァナーが言った。「それはもう片がついています。次のものが当面の問題ですが、まあなんとかやれるでしょう。しかし第三のものとなると、わたしも強気になれませんな。ジョセファスは女たちを不可視の世界でつなぎとめるでしょう。女たちのほうから進んで協力してくれないかぎり、彼女たちを自由の身にするのはきわめて困難です。しかも協力してくれる見込みはまずないでしょうな。わたしは以前にもこの手のことを手掛けてますから、その難しさは知っています。夢中になった女性というものは扱いが難しいものですが、これが儀式を通じて結社に参入してしまったとなると、まず不可能です。しかし、ともあれまず打つべき手は、なんらかの手段でその家に入り込むことでしょうな」

「それはぼくがやれると思いますよ」と私が言った。「のこのこ出かけていって、事故の証人になってやると持ちかけてから、改宗者のふりをして潜りこみましょう」

「それは見込みのありそうな案だ」とタヴァナー、「しかしどうですかね。いくらジョセファスでも、せっかくのエデンに、わざわざもうひとりアダムを加えますかね。そのへんがちょっと引っ掛かりますが、しかし医者というものはなかなか利用価値がありますからね。特に、危ない仕事をそっとやりたいときなんかに。よし、それでいってみましょう。このあたりには病院がやまほどありますか

ら、どこに担ぎこまれたのか定かではない。片端から電話をかけて所在を突き止めてください。病院には家族関係者と名乗り、家族には病院関係者と名乗り、あとは出たとこ勝負ですか。これはわたしが決めた狩りですよ。けちな小悪党なら滅ぼすほどのこともありませんが、ジョセファスはヘビー級ですぞ。彼の戦いぶりも見物でしょうな」

小さなカフェに早めの夕食客が現れはじめていた。私たちの小パーティーは互いに挨拶を交わしておひらきになり、タヴァナーはハインドヘッドに戻った。マクダーモットと私は電話に向かった。最初にかけた病院で大当たりだった。ジョセファスはミドルセックス病院に担ぎこまれており、頭部裂傷を縫合してもらったあと、帰宅したという。そこで私はマクダーモットをトテナム・コート・ロードのシーフード・レストランに向かわせた。こちらは五十ヤードほど向こうの広場を回りこみ、なかなかの造作の屋敷の呼び鈴を鳴らした。もっともこの家の一階の窓は、悪意に満ちた煉瓦が投げ込まれていたようである。

扉を開けたのはゆったりした頭巾付きマントを着た女性だった。私は用件を告げた。彼女はなんの疑いも抱いていない様子で、私をありきたりの応接間に案内した。数分後、年長の女性が現れた。彼女は背の高い女性であり、かつては見栄えもよかったにちがいないが、いまは頬もこけ、やつれ、薄汚れている。私はマクダーモットの台詞を思い出した。ジョセファスの弟子たちは、師匠の健康が増進するにつれ、痩せ衰えていくのである。

彼女が私の助力を求めていながらも、警戒している様子がわかった。しかし私の話は完全に筋の通ったものであり、内容に関しても真実そのものという利点があった。私はジョセファスが車にはねられたとき、横断帯にいました。私が応急処置をしたのですが、急ぎの用があったので警官に住所氏名を告げることなく立ち去りました。この場を借りて、怠慢の穴埋めをさせていただきたい。私の話には一点の傷もなく、彼女のそれを受け入れてくれた。しかし私がハーレー街の住所を記載した名刺を出したとき、彼女は突如態度があやふやになったのである。

「しばらくお待ちください」と彼女は言い、あわてて部屋から出ていった。

彼女はしばらく以上に待たせてくれた。それで私は計画が失敗したと考えた。揉め事なしにこの家を出られるだろうかと思いはじめたとき、彼女がふたたび現れた。

「申し訳ありませんが」と彼女。「よろしければジョセファス博士の部屋までお越しいただけませんか。少々お話したいことがあるそうです」

「私のほうはかまいませんが、頭部外傷の場合は安静が一番ですよ」と言ってしまった私は、やはり謀略家よりも医者が似合ったところだったのである。幸い、彼女は私の異議を無視してくれた。

「いいえ、お話していただいたほうが有り難いのでございますよ」と彼女は言った。「先生とお話があうようなら、先生についていただくよう取り計らうこともできますから。いろいろとうるさい人

ですのよ。本当に手に負えなくて」彼女はほほ笑みながら言った。いたずらさえもかわいくてしょうがない甘えん坊の我が子を語る母親の口調だった。

彼女についていくと、二階ではなく、地階へ通された。おそらく裏庭に面した皿洗い部屋だったとおぼしき一室にジョセファスはいた。彼同様、部屋そのものも驚異の代物だった。四方の壁も、床も、天井さえも真っ黒であり、暗黒の四角い空洞のなか、ジョセファスのそばのシェードランプだけが光源という演出なのである。彼その人はベッドに寝ておらず、長椅子にクッションを積み重ねて横たわっていた。身につけているものは頭巾付きマントである。どうやらこれが彼の奇怪な結社の制服らしい。彼のマントは燃える緋色であり、それが白い包帯を巻いた不思議な土色の顔とともに長椅子に横になっているのだから、どうみても『アラビアン・ナイト』からそのまま抜け出してきたような恰好だった。

背の高い女はジョセファスのよこにあるスツールに腰掛けた。彼は手招きで私を呼び、長椅子の端にすわらせた。本日午後五時に頭を割ったという事実があるにもかかわらず、彼はまったく元気に見えた。そして、彼の前歴を知っている男性の私でさえ、彼の人物に異常なまでの魅力を感じてしまったのである。

背の高い女が私たちを紹介してくれた。彼女の振る舞いときた日には、愛しいペットを毛ずくろいして、カメラ写りのよい角度を求めてあれこれ抱き抱えているかのような態度である。そして彼も、嫌うふうでもなく、好印象を与えようと乗り気満々といったところであった。目に見えない指が私の

魂のほうに伸びてきて、どう料理してやろうかと思案している図が思い浮かんだ。私の感じでは、私に会いたいという彼の意図は、機を見るに敏な機会主義なのであった。彼の手にかかるのは私なのであって、彼が私の手にかかるのではないのである。私はタヴァナーの言葉を思い出した。危ない仕事をそっとやりたいとき、医者は便利な存在なのだ。

私たちは数分話し合ったが、彼には運転手を告訴する意志がないようであった。おそらくプライヴァシーのほうが慰謝料よりも大事なのであろう。それでも彼は私の証言が欲しいようなそぶりを見せていた。しかし私は立ち上がった。

「いいですか」と私は言った。「あなたはかなりの脳震盪を受けられた身ですから、いま一番必要なことは暗い場所で静養なさることです。数日後にまた参りますから、そのときに詳しく話し合いましょう。いまは無理です。現時点では、私があなたの治療に携わると決定したわけではないのですから、これ以上は申し上げられません」

背の高い女の驚いた顔付きから判断するに、ジョセファスはこういう口をきかれることに慣れていないようであった。しかし彼は愛想よく聞いていた。

「なるほど」と彼は言い、にたりと笑ったが、それを見ると以前の敵意が私の心に甦った。

「わたしは普通のお医者様が夢にもご存じない養生法を多数知っておりましてね」彼は言った。

私たちはお互い敬意を表しつつ別れた。

私はシーフード・ショップでマクダーモットと落ち合った。私は数日ジョセファスの出方を見るために、彼の家に滞在することになった。私たちはその足で彼の家に行ったのだが、これがもはや家とはいえない代物であった。室内の哀れな有り様は、彼の話を裏付けるものであった。雑然とした状況証拠から判断するに、彼は妻を思い出させる品をすべて片付けてから、思い直してふたたび並べたのであろう。

私たちは散らかり放題の室内にすわりこみ、パイプをくゆらした。マクダーモットは耳にたこができるほど同じ話を繰り返してくれた。もう私は暗記してしまったくらいだったが、話をしていると彼は気が楽になるようであった。不可視の世界で遊んでいたら、予想もしない陥穽に落ちてしまい、以来恐ろしくて近寄ることもできないという、まあよくある話であった。

次の日、私はジョセファスを訪問しなかった。妙に慌てているような感じを与えたくなかったからである。しかし、その翌日に電話をかけてみた。電話に出たのはジョセファス御大その人であり、ご機嫌そのものであった。

「連絡先をうかがっておけばよかったと思っていましたよ」と彼は言った。「昨日おいでいただきたかったもので」

私はタクシーを拾って例の家に向かった。どうやら一階のシャッターは常時閉鎖されているようである。ふたたび私は奇怪な地下の聖域に連れていかれた。ジョセファス博士として知られるロココ的人物にとって、これは恰好のセッティングのように思えた。当然彼はまだ頭に包帯を巻いていたが、頭巾付きマントのかわりに普通の背広を着用していた。それでも彼はどこにいても目立つ男であった。私はタヴァナーこそかつて会ったなかの最高の奇人と思っていたが、博士など、ジョセファスに較べれば正常そのものであった。

彼は手ずからトルコ風コーヒーをいれてくれた。続いて珍奇な金紙巻の煙草を御馳走になった。それから彼は腰をすえて私の好奇心を誘い出しにかかった。私は彼の前歴を知っているのだが、それでも思わず取り込まれてしまった。タヴァナー同様、彼の教養は百科全書的であり、世界中のありとあらゆる場所を旅行していたようである。正直いって、私はしっかり楽しんでしまった。話がオカルティズムの周辺に及ぶまで、たいして時間はかからなかった。その方面には私も興味があると言ってやったので、ジョセファスは慎重に手の内を見せはじめた。最初は薄氷を踏むかのようなしゃべりかただったが、私がこの方面に少々知識があり、しかも道徳的ためらいなど余りないとわかるや、打ち解けた態度になった。

「この種のことの問題点は」と私は言った。「理論ばかり豊富で、実証を得るのが実に困難という点でしょう。本を出したり講演したりしてる連中は、実はなにも知らないか、あるいは実践する勇気がないのか、どちらかでしょう」

彼は私のまいた餌に食いついてきた。

「なるほど」と彼は言った。「実にいいところを突いてらっしゃる。オカルティズムを実践するだけの度胸があるのは、貴重な少数者だけですな」そういうと彼は見栄を切った。だがその様子から、彼の弱点がどこにあるのか、私にはわかった。

ジョセファスはしばらく口をつぐんでいた。私を天秤にでもかけていたのだろう。やが慎重に言葉を選びながらしゃべりはじめた。

「ご存じでしょうが」と彼は言った。「ほんの少し開発するだけで、あなたを霊能者にできるのですよ」

これには正直驚かされた。また私は、心ひそかに嬉しく思ったことも認めなければならない。私は常々現実主義の権化と見なされてきたからである。それから私は思い出した。タヴァナーがまさにこの言い回しこそ信用詐欺の定石であると笑いながら引用していたのだ。私は突然身を引き締め、身構えた。怒りと驚きすら感じていた。短い会話のあいだでジョセファスが私の想像力をどれほど支配していたか、思い知らされたからである。しかし私は不安を押し隠し、彼との会話に舞い戻った。

「霊能も、それはそれでいいんでしょうが」と私、「しかし本当に興味があるのは儀式魔術なんです」

私は、出たとこ勝負の言葉を放ってみたのであった。どうやら少し言い過ぎたようであった。オカルティズムに関する会話をやるとき、私はいつもこの手の失敗をしてしまう。たいした知識もないくせに、荷が重いテーマを口にしてしまうのだ。

ジョセファスはなんとも気にいらない様子だった。理由はわからないが、彼は内心、私と一線を画そうとしているようだった。

「儀式魔術に関して、お詳しいほうで？」彼はなにげないそぶりで尋ねてきたが、内心はちがっていたはずである。

私としては、彼の狙いがわからなかったし、下手なことをいって言葉尻をとられたくもなかったから、マーク・トウェインの忠告にしたがって真実に徹することにした。

「いいえ」と私は正直に答えた。「ぜんぜん」。ジョセファスの顔に安堵の色がうかがえたので、私は内心こうつぶやいた。（あんただって詳しくないだろうが）

彼はふたたび口を開き、一語一語ゆっくりとしゃべった。

「あなたに熱意があるとしましょう。またあえて危険もいとわぬというのであれば、わたしはあなたにすごいものをお目にかけることができる。ほとんどの人間が夢にも思わないようなものを。しか

し」と彼は続けた。彼は頭のなかで素早く計略を練り上げていたようである。「まずあなたをテストしなければならない」

そのテストがどんなものか、教えてくれと私は言った。

彼はまだ私をじっと観察しつつ、一歩一歩周到に会話を進めていた。私がほんの少しでも不安を見せれば、すぐさま撤退する準備をしていたのである。

「まずテストすべきは」と彼は言った。「あなたの芽を伸ばしつつある霊能でしょうな。あなたに対するわたしの意図を正確に判断して、黙ってわたしを信頼するに十分な直感をお持ちかどうか、それを見てみなければ」

私はこれほど周到な信用詐欺の段取りにお目にかかったことがなかった。ともあれ私は同意した。

「今晩、八時四十五分にこの屋敷の裏通りにおいでいただきたい。石炭貯蔵庫の扉が開いていますから、そこからお入りいただく。わたしが出迎えます。わたしがあらためて屋敷に入るまで、貯蔵庫でお待ちいただくことになる。それから詠唱が聞こえてきたら、貯蔵庫の別の扉を抜けて、裏庭に出る。あの窓の鉄棒はバネ仕掛けになっていて、下に押しさげれば外れます。あそこからこの部屋に入る。鉄棒をもとに戻すのをお忘れなく。外れているところは誰にも見られたくないのです。ここに来ると、そのクッションの裏に赤い長衣が隠されている。異端審問官が着るような、フードのついた緋色のものです。それを着て、フードで顔をすっぽり隠す。目のところに覗き穴があいているから大丈

夫。そしてずかずかと二階に上がってきて、応接室のドアを五回ノックする。ドアが開かれたらこう言う。“七公会の御名に於いて、汝に平安あらん”。それから室内に入って、まっすぐわたしのもとに歩いてくる。わたしはフードをかぶっているが、わたしの長衣も緋色だからすぐわかるはずだ。わたしは部屋の端の台座にすわっている。あなたが来たら、わたしは立ち上がる。二人で握手する。それからあなたはわたしの席にすわり、わたしは右側にすわる。それからあなたは手を広げて、こう言う。

「“我は《秘密の首領》の名代で来たりし者なり”」

「それからわれわれは用件にとりかかる。あなたは質問に対して、すべてイエス・ノーで答えていただく。それ以外は一切不要。そして、もし失敗すれば―」彼は醜い顔を突き出してきた。「あなたは呼び出した《不可視の諸力》と直面して、清算を余儀なくされるだろう。了解されましたかな？」

「完全に了解」と私は答えた。「ただ自信がないのは、全部覚えていられるか、またどの質問の答えがイエスかノーか、それがわからない」

「目の端っこでわたしをよく観察すればいい。私が右足を動かしたらイエス、左足だったらノー。たいして動かしはしないから、よく注意しておいてもらいたい。それから、わたしが手を広げたときは、あなたは立ち上がって、“終了”と言ってから部屋を出ること。ここに戻って、来た道をたどって外に出ていただく。緋色の長衣をクッションの下に隠しておくことを忘れないように。鉄棒はもとに戻し、石炭貯蔵庫のドアもきちんと閉めておくこと」

話し終えるとジョセファスは私の目をじっと覗きこんできた。私もまたじっと覗き返した。私は返事をする前に一呼吸置いた。あまりにやる気満々と思われてもいけないと思ったからである。

「やりましょう」と私は言った。

ジョセファスの奇妙な瞳に満足の光が宿った。ガラクタをためこんだコクマルカラスといった風情であった。

私たちは親友そのものといった感じで別れた。私がハーレー街に戻ると、タヴァナーがその日の診察を終えて、私を待っていた。

私はジョセファスとの会話を博士に語り直した。博士は大いに興味を持った。

「それで多くのことがわかりますぞ」と博士。「ジョセファスが修行を積んだオカルティストではないと先生はおっしゃる。それは同意できることですが、しかしやつはセックスと麻薬の秘密の局面に関しては、大変な知識を有していますな。また人間性を操ることに関してもじつに巧みな手腕を持っておるし、また策略のための策略が好きなのでしょう。チェス・マニアみたいなものですね。この計画からも、それはうかがえますぞ」

「この計画をどう思われます？」と私は言った。「やつの狙いはなんでしょう？」

「おそらく、やつのグループがごたごたしているのでしょう」とタヴァナー。「信者たちにすべてを明らかにしているわけではないのです。それは窓の鉄棒を見てもわかる。先生の役どころは、あいつが自分の権威づけに呼び出した高次の権力者からの使者といったところですね。ようするにあいつは一人芝居を演じているわけで、また儀式魔術に無知である点から判断するに、やつはまともな結社に参入したことは一度もないのでしょう。いや、これは天祐でしょう。あれほどの天賦の才能を持った悪人が、くわえて《力の名前》でも知ろうものなら、なにをやるかわかったものじゃなかったですぞ！　ローズ先生、魔術結社というものはなかなかガードがかたいものです。裏切り者の数は少ないのですよ。

「さてと、行きますか。今宵の余興の前に食事でもとっておきましょう」

私たちはソーホーのレストランに向かった。タヴァナーと同じ趣味を有する、あの形而上学的給仕頭がいるイタリア料理店である。もちろん私たちはいつものように温かい、しかし敬意もこもった歓迎を受け、店の奥まったテーブルに通された。しかし形而上学者がワイン・リストを手にいそいそと現れたとき、タヴァナーが彼に合図して、そばに引き寄せた。

「ジュゼッペ、わたしたちは今宵ガウワー街近くのマルヴァーン広場七番地の屋敷に行く。その裏道には裏口があって、裏庭に面している窓の鉄棒は下に押しさげると外れる仕掛けになっている。明日の午前十時にハーレー街のほうに電話をくれ。わたしが戻ってなかったら、そのときは頼む。どうすればいいか、知ってるだろう」

私たちが二人きりになると、タヴァナーはポケットから銀色の金属容器と脱脂綿を取り出し、テーブルの下で私に手渡した。

「クロロホルムですよ」と博士は言った。「脱脂綿に染み込ませておいて、やつがドアを開けたら、すぐに顔に押しつけてやってください。わたしの懐中にはロープも準備されてますよ。ジョセファスは、今回の芝居には欠場してもらいましょう」

「では、ぼくはどうすりゃいいんですか。ジョセファスがそばで足をごそごそやってくれないと、質問されたときにこっちは大いなる達人の座についたまま、赤恥をかきますよ」私は不安げに訴えた。

「そこは見てのお楽しみ」とタヴァナーが答えた。そのとき私は、博士のよこの椅子に小さなスーツケースが置いてあることに気がついた。

私たちは時間ぴったりに裏通りに到着した。耳をすますと、ジョセファス御大の登場を示す石炭のジャラジャラした音が聞こえてくる。私はクロロホルムを脱脂綿に染み込ませた。

「いまだ！」とタヴァナーがささやいた。そこで私は薄汚いドアをそっとノックした。

ドアは一寸ほど開いた。

「ローズ？」と暗闇から声がささやいた。「静かに入ってください。あいつらがいるんですよ、くそ！　夕食のことで騒いでやがる。どうして女どもはああもこだわるのか」いささか機嫌の悪そうな声であった。

「おーい、どこですか？」と私は暗闇に手探りしながら言った。私の手がやつの喉に触れた。すぐさま力を入れる。脱脂綿をやつの顔に押しつけ、渾身の力で押さえ込みにかかった。やつは後頭部から石炭に倒れ込んだ。なかなか力の強い野郎で、猫のようにもがきまわったが、私のほうが体格があるし、やつが逃げられるはずもなかった。クロロホルムが効きはじめると、抵抗も弱りだし、タヴァナーが懐中電灯を手に入ってきて、ドアを閉めたころには、やつは私の膝の下で意識のない物体と化していた。

タヴァナーがやつを縛りあげたが、その見事さはなかなかの熟練を示すものであった。博士はやつを隠す場所をあれこれ探していた。

「あんまり早く見つけられても困りますからね。だれか石炭を取りにくる可能性もある」と博士は言った。

「穴を掘って埋めちまえばどうです」と私は提案した。この場所の雰囲気に完全に影響されていたのである。「ほら、シャベルがある。穴をほって首まで埋めて、底の抜けた古バケツをかぶせるんですよ」

タヴァナーはくすくす笑った。二分後、ジョセファスはあとかたもなく消滅していた。やつをいいかげんに埋葬したあと、私たちは慎重に中庭のほうに出ていった。真っ暗闇だったが、私は大体の位置感覚を得ていたので、なんとか窓にたどりつけた。鉄棒はあっという間に外れた。私たちは中に入り、電灯をつけ、内側から扉に鍵をかけた。

「先生の衣装がありますぞ」タヴァナーがそういいながらソファのクッションの下から緋色の長衣を取り出し、私にかぶせてくれた。覗き穴の位置を知っている点から見ても、博士はこの種の作業に慣れていたようであった。

扉をそっとノックする音がしたので、私は息を呑んだ。

「準備はいかが、あなた？　みんな集まっててよ」と女性の声がした。

「はじめてくれ」とタヴァナーがうなった。その声がジョセファスそっくりだったので、私は思わず振り返ってしまった。

通路を去る足音が聞こえた（ジョセファスは手下に文句を言わせない教育を施していたと見える）。数分後、頭上から詠唱の音が響いてきた。

タヴァナーは持参していたスーツケースを開いて、長衣を取り出した。これほど素晴らしい代物を見たのは生まれてはじめてだった。金糸銀糸の刺繍のためにずっしり重い豪奢な長衣は、殺風景な部

屋のなかに突如登場したオフルの金山といったところである。タヴァナーはエメラルド・グリーンの法衣の上からそれをはおった。その間、私は宝石をちりばめた留め金を博士の胸につけてやった。それから私はエジプトの頭飾りを手渡された。博士が手を使えないので、私がかぶせてやるのである。かくして出来上がった扮装たるや、およそお目にかかったことがない素晴らしさであった。タヴァナーの痩身がエジプトの衣装につつまれ、ただでさえ高い身長は法衣のためにいよいよ巨人的となり、手には宝石をちりばめたアンク十字架（嬉しいことに、いざとなれば十分に武器となり得る重量である）―私はこのときの映像を死ぬまで忘れないだろう。博士が動くたびに、衣装のひだから放たれる年期物の儀式の薫り。きぬずれの音。金細工の鈴音。まるで失われたアトランティスの司祭王が、召喚の祈りを聞き入れて、崇拝者の服従を要求すべく現れたかと思うほどであった。

私たちは狭い階段を上がって暗いホールに出た。そこから応接間のある階に向かったが、香の匂いが漂ってきたところを見ると、行き先はこれで正しいのである。タヴァナーはドアを五回ノックした。するとなかから声が聞こえてきた。「扉の守護者よ、入場を求める者を確認せよ」

ドアが開いた。私たちの眼前に現れた黒フード姿の小太りの人物は、タヴァナーの姿を見て卒倒寸前であった。私は緋色の長衣のためにジョセファスと間違えられたらしい。ともあれ私たちは文句もつけられずに入れてもらえた。いざ入ってみると、そこはジョセファスが主宰する奇妙な宗派の儀式場であった。

私は教えられていた通り、真っすぐ台座に進んだ。一同に身長差を気づかれないうちに着席する。連中はいつもの師匠が席についたものと考えていたようである。しかしタヴァナーは祭壇のほうに進むと、一同に向かって黄金のアンク十字架を振り、よく響く声でこう言った。

「すべてのものに平安あれ」

これは明らかに一同が期待していた通りの開式だったらしい。部屋の向こう側にある台座に陣取る人物（身長から察するに、例の背の高い女）がこう答えたからである。「汝、誰よりの祝辞をもたらすや？」

「我、もたらすものにあらず」とタヴァナーが言った。「あたえるものなり」

この返答は明らかにシナリオとはちがっていたらしい。そのためロッジ全体が混乱に陥ってしまったが、タヴァナーは完璧に周囲を圧倒していたため、役割がわかっていないのは連中ということになってしまった。

私のほうにすべての視線が集中してきた。私がジョセファスだと信じているからであったが、私は石像のように座したまま、なんの合図もしなかった。

タヴァナーがふたたび口を開いた。

「《七公会》の御名を召喚せし者あり。ゆえに《七の長》たる我、汝等のもとに来る。我が証はこの合図なり」と言うと博士は手を広げた。人差し指に巨大な指輪が光っていた。おそらく一同はなんのことかさっぱりわからなかっただろう。しかしなにからなにまで知っているとされるロッジの司官たちは、自分の無知を認めるのが恥ずかしかった。そのため有象無象の連中までも、当然ながら上の連中のする通りに振る舞うことになった。

室内は完全に静まり返ってしまった。そのとき突然、私の左手にある台座からきぬずれの音が発せられた。ある人物が立ち上がっている。そして私はメアリー・マクダーモットの声を聞いた。

「わたくしの信仰心の欠如をお許しください」と彼女は言った。「《七公会》を召喚したのはわたくしです。そんなものは存在しないと信じていたからです。しかしわたくしは自分の過ちを悟りました。その御力がわかります。その存在を認めます。御尊顔を拝し奉り、御身の偉大さがわかります。御人柄から放たれる波動から、御身の真と善を教えられます。わたくしは悟り、従う者です」

タヴァナーは彼女のほうを向いた。

「なにゆえに《七公会》が存在せぬと信ずるに至ったか？」博士は朗々たる声で質した。

「わたくしの夫がしつこくせがんだので、わたくしは《団》への義務と夫との板挟みになったからです。夫の祈りと聖人への召喚が雲のように広がり、《師》の栄光を曇らせたからです。それでわた

くしは《師》を俗っぽい官能主義者にして山師であると信ずるようになりました。わたくしたちの信心深さにつけこむろくでなしと思ったのです」

「我が娘よ」とタヴァナーが言った。実に優しい口調だった。「わたしを信ずるか？」

「信じます」と彼女は叫んだ。「信ずるだけでなく、わかるのです。わたくしが夢に見ていたのはあなたさまです。あなたさまこそ、わたくしが求めてきた秘儀伝授者でらっしゃいます。ジョセファス師は約束をお守りになりました。いつかあなたさまに引き合わせると、おっしゃっていました」

「祭壇の前に出なさい」とタヴァナーが命じた。

彼女は前に出て、命令も受けずにひざまづいた。博士は黄金のアンク十字架で彼女の額に触れた。その瞬間、彼女の体が揺れるのが見えた。

「《非現実》から《現実》へと我を導きたまえ。《闇》から《光》へと我を導きたまえ。不浄から我を清めたまえ、我を聖たらしめたまえ」朗々たる声が響いた。それから博士は彼女の手を取って立たせ、私のよこの台座にすわらせた。

タヴァナーは祭壇に戻ると、その前に陣取り、室内を見渡した。続いて法衣の下から奇妙な細工の金属箱を取り出した。一方の蓋を開け、なかから白い粉を掌一杯に広げたかと思うと、その粉を祭壇上に十字状に振り撒いたのである。

「不浄なり」博士は言った。その声は鐘を打つようであった。

博士は別の蓋を開けると、今度は灰を取り出して、やはり祭壇にふりかけた。白いネルの覆いが汚された。

「不浄なり」とふたたび声が響いた。

博士はアンク十字架を差し出し、その頭部で祭壇上で燃えていたランプを消した。

「不浄なり」と三回目の声が響いた。そうする間にも、部屋からすべての力感が消えていくようであった。残されたものは、単なる平凡な、どこにでもあるちらかった部屋でしかなかった。タヴァナーだけが現実であり、他のすべては見せ掛けに思えた。博士はまるで蝋人形だらけの部屋にいるただひとりの生身の人間のようであった。

博士が背を向けた。そこで私も立ち上がった。そしてメアリー・マクダーモットを間に挟んで、私たちは沈黙の部屋をあとにしたのであった。私が静かに後ろ手でドアを閉めた。鍵穴に鍵が刺さったままだったので、念のためにそいつを回しておいた。

換気扇の穴から差し込む街灯の明かりだけが頼りの暗いホールについたとき、タヴァナーが動転している女性を正面から見た。彼女はすでにフードを脱いでおり、明るい色調の乱れた髪が顔にかかっていた。博士は彼女の肩に手を置いた。

「我が娘よ」と博士、「義務の道を歩む以外に上達の法はないのだ。信仰を壊し、責務を放棄しながら、高次の生命に到達できるわけがない。お前に名前と心を預けた男は、お前なしでは家庭を持てない。お前が与えなければ、子供すら持てないのだ。お前は彼から離れて自由の身になれるかもしれないが、彼はお前から離れることはできない。今回の転生に於いて、お前は《炉辺の道》を選んでいる。それ以外の道は開かれていないのだ。さあ、戻れ。戻って、炉に火が入っているか、炉が清められ、磨かれているか、心を配るのだ。さればわたしはふたたびお前のもとに現れ、その《道》にていかなる啓発が得られるか、とくと教えよう。お前は《七公会》を召喚してしまった。ゆえにお前は《七公会》の監督下に入ったのだ。それは同時に保護下に入ることでもある。平安のうちに立ち去るがよい」

そして博士は扉を開けて、彼女を外に押し出した。

私たちは急いで道具をかきあつめ、彼女の後を追った。地下室のほうから派手に響いてくる電気呼び鈴の音から察するに、階上の連中は閉じ込められたことに気づいたのである。

ハインドヘッドに向かう夜のドライブのおかげで、私の頭もどうやら落ち着きを取り戻していた。それまでは奇妙な渦巻きに満ち満ちていたのである。頭飾りと法衣姿のタヴァナーの映像が目に浮かんでいた。およそ日ごろの地味な背広姿の親分とは似ても似つかぬ代物だったのだ。ようやく目的地についた。車を車庫に入れる。寝静まった屋敷に入るまえに、しばらく星空の下にたたずむ。こうし

ていると、今宵の出来事が、まるで夢のように思われる。しかし、突然みぞおちに一発食らったような記憶が蘇ってきた。私はぎょっとして叫んだ。

「先生！　もし石炭が配達されてきて、ジョセファスの頭の上に一山ザザーッと来たら―？」